

エ4R28

氏 獨逸 國 萊 府 大 學 產 婦 科 人 科 授

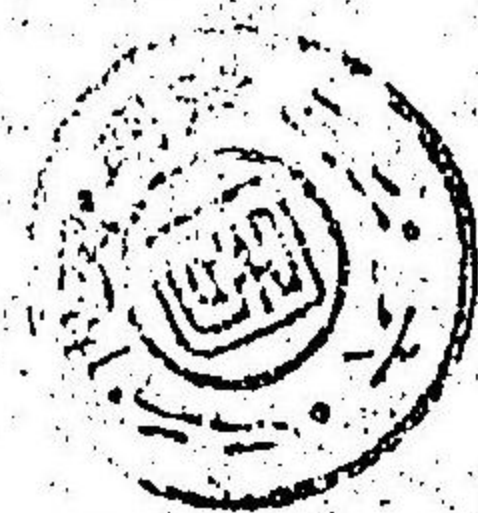
# 產科手術學

獨逸國萊府大學產婦科人科教授

著者 ドクトル デーラ イラ 原

東京產婦科人科櫻井病院長

譯者 ドクトル 新井 古芳 補



發行所 東京 元朝香屋書店



# 産科手術學

## 緒言

本書ハ獨逸國萊府大學教授、ドクトル「デー」ライン氏ノ考案ニシテ圖畫ハフレノー、カリツ氏ノ製作ニ係リ資料ハ原著者豊富ノ實驗ニツイフェル、ウインケル、ワルニー、フッラポー等諸氏ノ斬新ナル原著ヲ採擇取捨シ幾多ノ校訂ヲ經テ成リタル歐洲最近ノ産科學上有益ノ良書ナルヲ以テ獨逸學生ハ勿論僻陬ノ醫師ト雖モ之ヲ購讀セサル者殆ト稀ナリ余ハ明治二十五年以降五年間獨逸兩國ニ遊學シテ常ニ此書ノ好評ヲ聞知シ又嘗テ瑞西國ニ開設セル第二回萬國産科及婦人科學會總會ニ臨ミテ著者及著者ノ夫人其他ゼンゲル、レオポルト、アシマン等諸教授ト旅館ヲ同ウシ氏ノ出入坐臥苟モ斯學ノ爲メニセサルナキヲ觀テ私



ニ其誠意熱心ナルヲ感歎シ本書ノ世ニ歡迎セラレ、亦洵ニ偶然ナラサルヲ諒セリ

本書ハ大別シテ二編トシ第一編ニ於テハ胎兒ノ位置形狀及分娩器械的作用等學理的産科學ノ一部ヲ詳述シ且ツ産科施術者ノ學術ニ緊要ナル圖式ヲ加ヘ第二編ニ於テハ産科模型ニ依リテ習得シ産科實地ニ依リテ經驗スヘキ手術ヲ論シ併セテ其法式ヲ細密ニ圖示セラレタリ本書ノ特色ハ此等許多ノ新案ナル圖畫ニ依リ繙讀一過直ニ其神髓妙況ヲ讀者ノ腦裡ニ印セシムルニ在リ余カ本書ヲ譯シテ世ニ紹介スル所以ノモ亦實ニ此ニ在リ唯恐ル余ノ淺學不材加フルニ業務ノ煩劇ナルヲ以テス故ニ譯文間々粗笨ニ流レテ或ハ原著ノ意ヲ達セサルモノアラシキ幸ニ大方ノ是正ヲ俟ツト云爾

明治三十二年六月

新井古芳誌

# 産科手術學

## 目次

### 第一編

第一章 胎兒ノ體狀及ヒ位置	一
正規及ヒ異常體狀	
胎位ノ分類	
各胎位ノ圖式	
第二章 分娩器械的作用	二〇
骨盤ノ構造	
各産位ニ於ケル器械的作用	
甲 後頭位	二六
乙 前頭位	三五



丙 顏面位

(イ) 良性回轉(腮部前方ニ向フ者) . . . . . 四二

(ロ) 不良回轉(腮部後方ニ向フ者) . . . . . 四八

丁 額位 . . . . . 五一

戊 骨盤端位 . . . . . 五四

尾骶位一名臀位 . . . . . 五四

己 橫位 . . . . . 五八

追加

狹窄骨盤ニ於ケル病的分娩器械的作用 . . . . . 六四

產科手術ノ概要 . . . . . 六八

第二編

第三章 回轉術 . . . . . 七一

頭位回轉術 . . . . . 七四

足位回轉術 . . . . . 七八

足位内回轉術或ハ双合回轉術ノ法式 . . . . . 八二

第四章 鉗子手術 . . . . . 九三

適應症

鉗子ノ構造及ヒ施設 . . . . . 一〇〇

鉗子手術ノ方式

後頭位ニ於ケル方式

前頭位ニ於ケル方式

顏面位ニ於ケル方式

高在兒頭ニ於ケル方式

後進兒頭ニ於ケル方式

第五章 用手的挽出術 . . . . . 一三八

足位ニ於ケル方式

臀位ニ於ケル方式



56-16

兒臍解離法  
兒頭娩出法

第六章 破壞手術……………一六一

穿顱術

碎頭術

「クラニオクラスト」用法

斷頭術、除臟術、截胎術……………一七六

斷離兒頭ノ娩出法

### 產科手術學目次畢

## 產科手術學

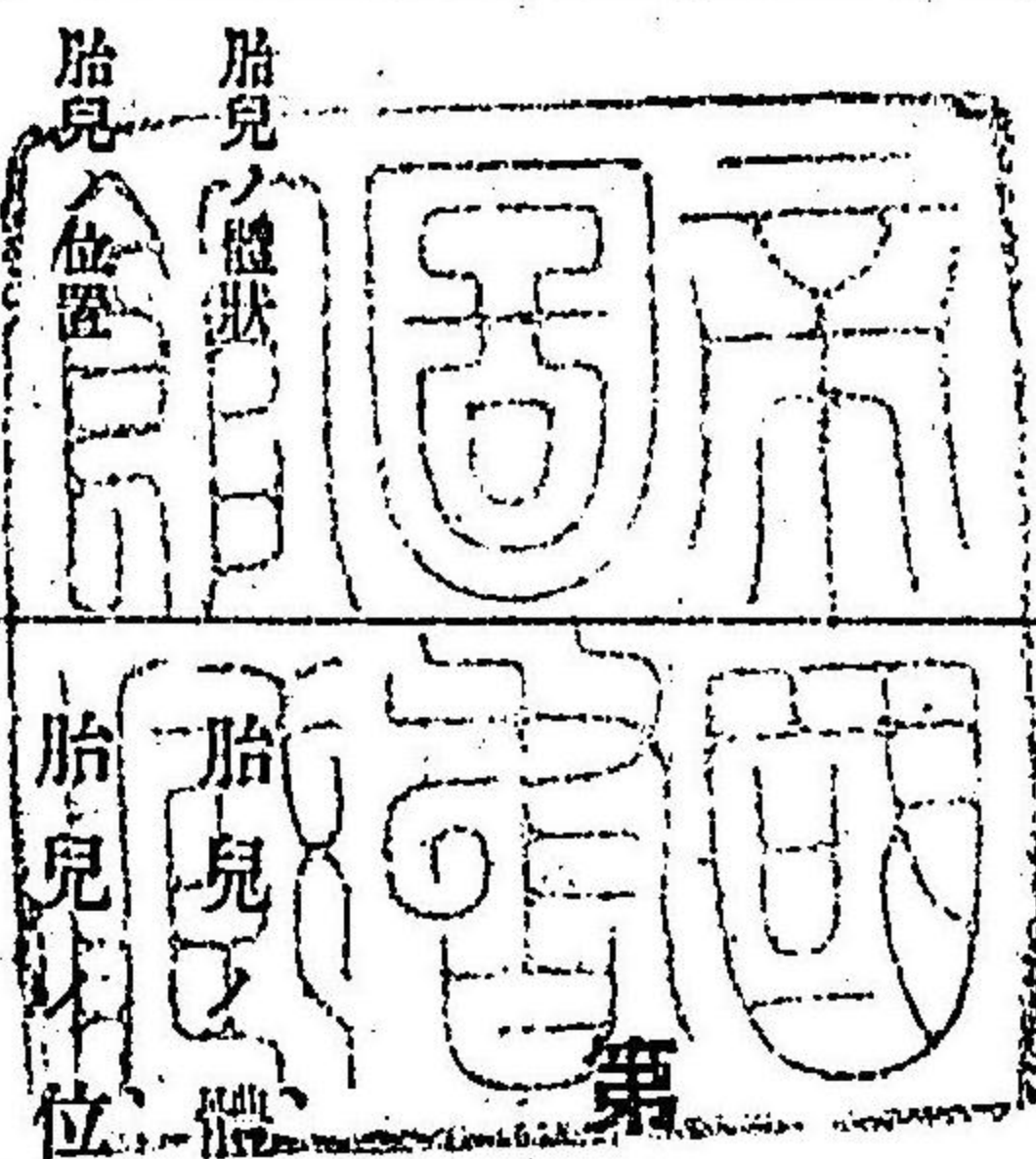
ドクトル デーデライン 原著

ドクトル 新井古芳 補譯

### 第一編

#### 第一章 胎兒ノ體狀及ヒ位置 Haltung und Lage

der Frucht.



謂フ

正規ノ關係ニ於テハ胎兒常ニ一定ノ體狀ヲ取ルモノナリ、  
此體狀ニ於テ變異ヲ生スルトキハ則チ病的トス、抑モ正  
規ノ體狀トハ正規ノ位置ヲ成就セシムル本原ニシテ、分娩ノ

胎兒ノ體狀及位置



純然タル生理的經過ヲ全フセシムル所以ヲ云フ故ニ  
 正規ノ體狀(第一圖ヲ参照スヘシ)ハ子宮腔ニ於ケル胎兒發  
 育ノ法度ト其位置ノ關係ヨリ結果スルモノナリ、正規ノ體  
 狀ニ於テハ胎兒ハ其腹壁ヲ以テ強ク彎曲スルカ故ニ、脊柱  
 ハ後方ニ向ツテ凸弓ヲ畫ク、頭首ハ胸壁上ニ屈曲シ、腮ハ之  
 ニ接著ス、而シテ前額ト骨盤端ノ間ニ生スル空處ニハ乃チ  
 四肢之ニ内折シ、上肢ハ胸壁上ニ交叉シ、下肢ハ正屈シテ腹  
 壁ニ接著ス



第一圖

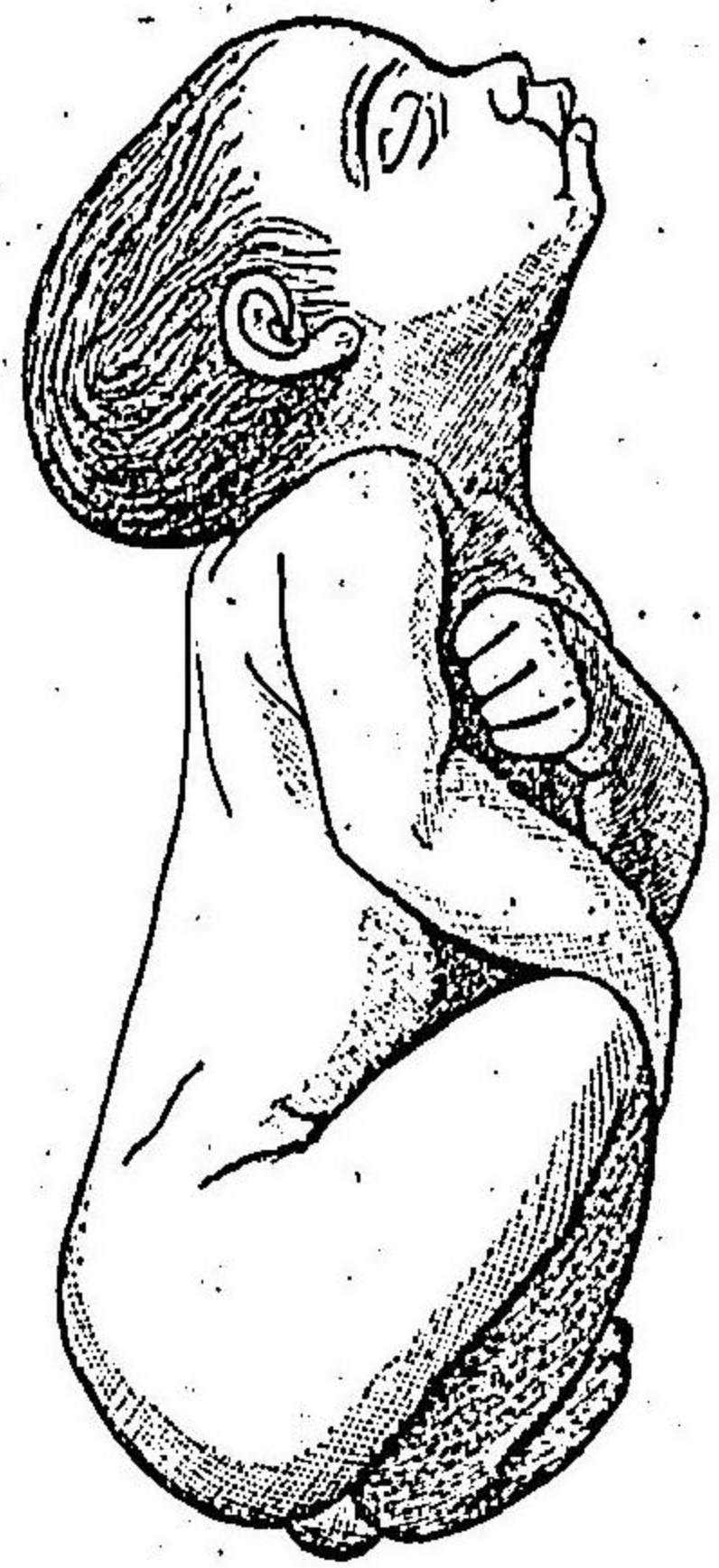
正規ノ體狀ヲ示ス

體狀ノ異常

此正規ノ體狀ニ於テハ胎兒幾ント卵圓ニシテ最小ノ空處  
 ヲ充填シ、四肢ハ軀幹ノ長徑ニ從ツテ毫モ挺出セス、其周徑  
 ヲ増加スルニト僅微ナリ而シテ頭部ノ姿勢ハ之ヲシテ產  
 道ノ通過ニ最モ便宜ヲ得セシムルモノナリ  
 體狀ノ異常例之ハ第二圖ニ示スカ如キ頭首ノ伸張(顔面位)  
 或ハ第三圖ニ示スカ如キ上肢ヲ頭邊又ハ頭上ニ戴ク者(骨  
 盤端位挽出術ノ際ニ然リ)ハ異常位置ノ原因若クハ結果ナ  
 リ  
 胎兒ハ位置ハ極メテ多般ナリ  
 先ツ其主要ナルモノヲ舉クレハ二様アリ、即チ胎兒ノ縱軸、  
 子宮ノ縱軸ト一致スルトキハ之ヲ縱位ト謂ヒ、胎兒ノ縱軸、  
 子宮ノ縱軸ト交叉シテ斜角若クハ直角ヲナストキハ之ヲ  
 斜位若クハ横位ト謂フ  
 又骨盤内ニ先進スル胎兒部ニ從ツテ其位置ニ各名稱ヲ附

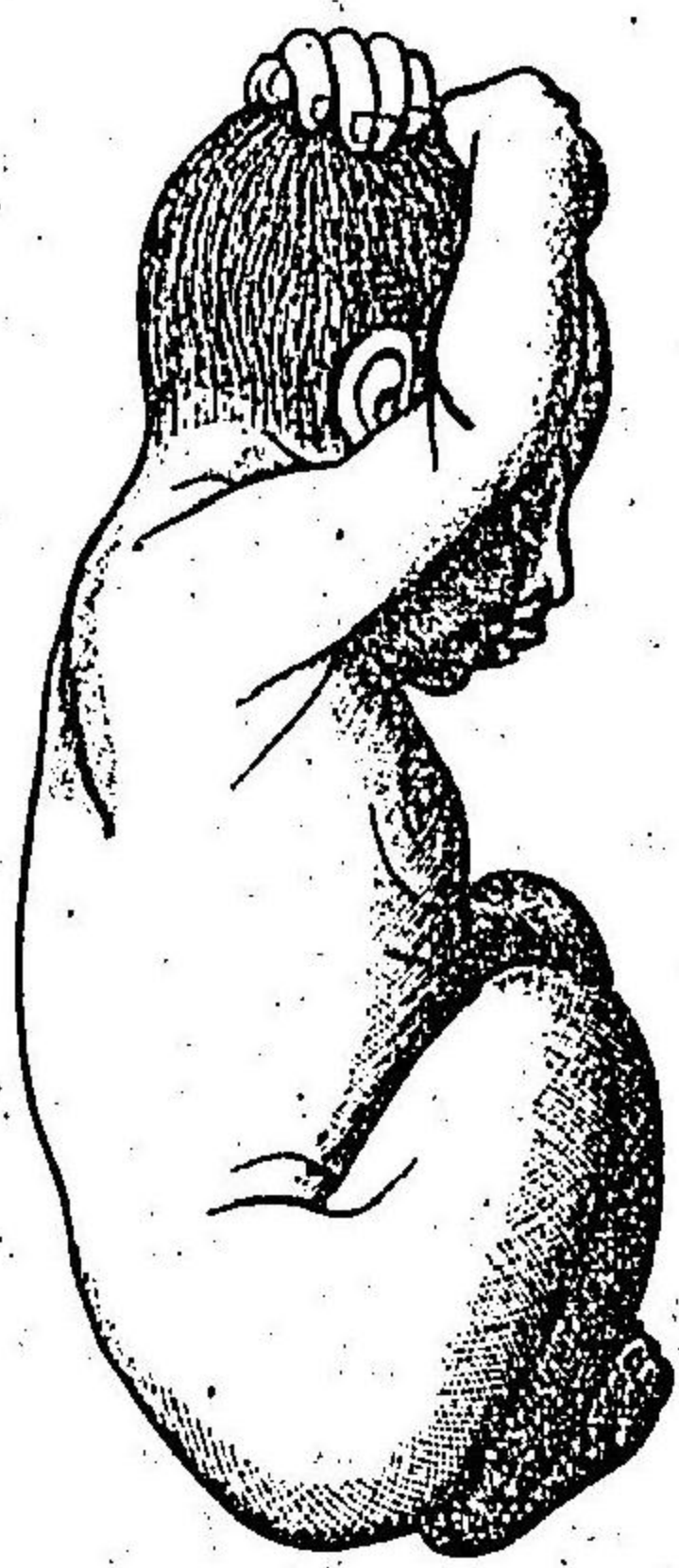
縱位 斜位 横位





圖二第

頭顱ノ異常體狀  
(顏面位ニ於テ)



圖三第

上肢ノ異常體狀  
(骨盤端位ニ於テ)

第一橫位

第二橫位

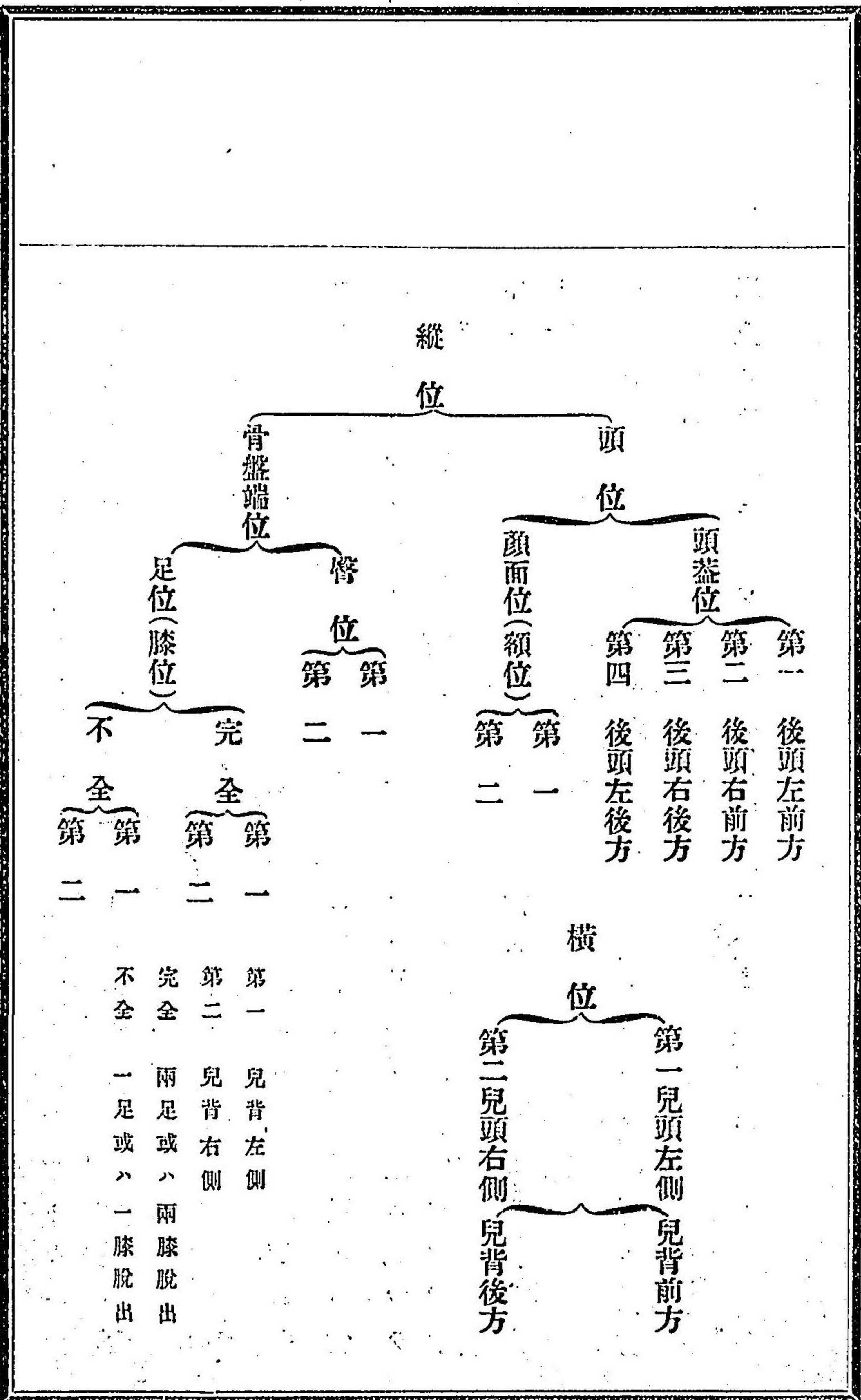
スヘキモノアリ、故ニ縱位ニ於テ兒頭後方ニ在ルトキハ之ヲ頭位ト名ツケ、骨盤端先進スルトキハ之ヲ骨盤端位ト稱ス

兒背ハ此縱位ニ於テ母體ノ左側若クハ右側ニ向フ、而シテ兒背左側ニ向フトキハ之ヲ第一位ト名ツケ、兒背右側ニ向フトキハ之ヲ第二位ト謂フ、橫位ニ於テハ(先進胎兒部ハ常ニ肩胛ナルヲ以テ又肩胛位ト名ツク)兒頭ノ位置ニ從ツテ其稱呼ヲ異ニス、即チ兒頭左側ニ在ルトキハ之ヲ第一橫位呼トヒ、更ニ兒背ノ前方若クハ後方ニ向フニ從ヒ兒背前方若クハ兒背後方ト云フ

兒頭右側ニ在ルトキハ之ヲ第二橫位ト名ツケ、亦更ニ兒背前方或ハ兒背後方ト呼フ

以上ノ法則ニ從ツテ胎兒ノ位置ヲ左ニ表記ス





以下列舉スル圖式ハ胎兒ノ各位置ト母體トノ關係並ニ各胎位ニ恰當スル體狀ヲ示スモノナリ  
 同時ニ骨盤内ニ於ケル先進部ノ體向ヲ描出シタルハ子宮口全ク開大シ卵胞已ニ破裂シタル後ニ於ケル内診ノ方法

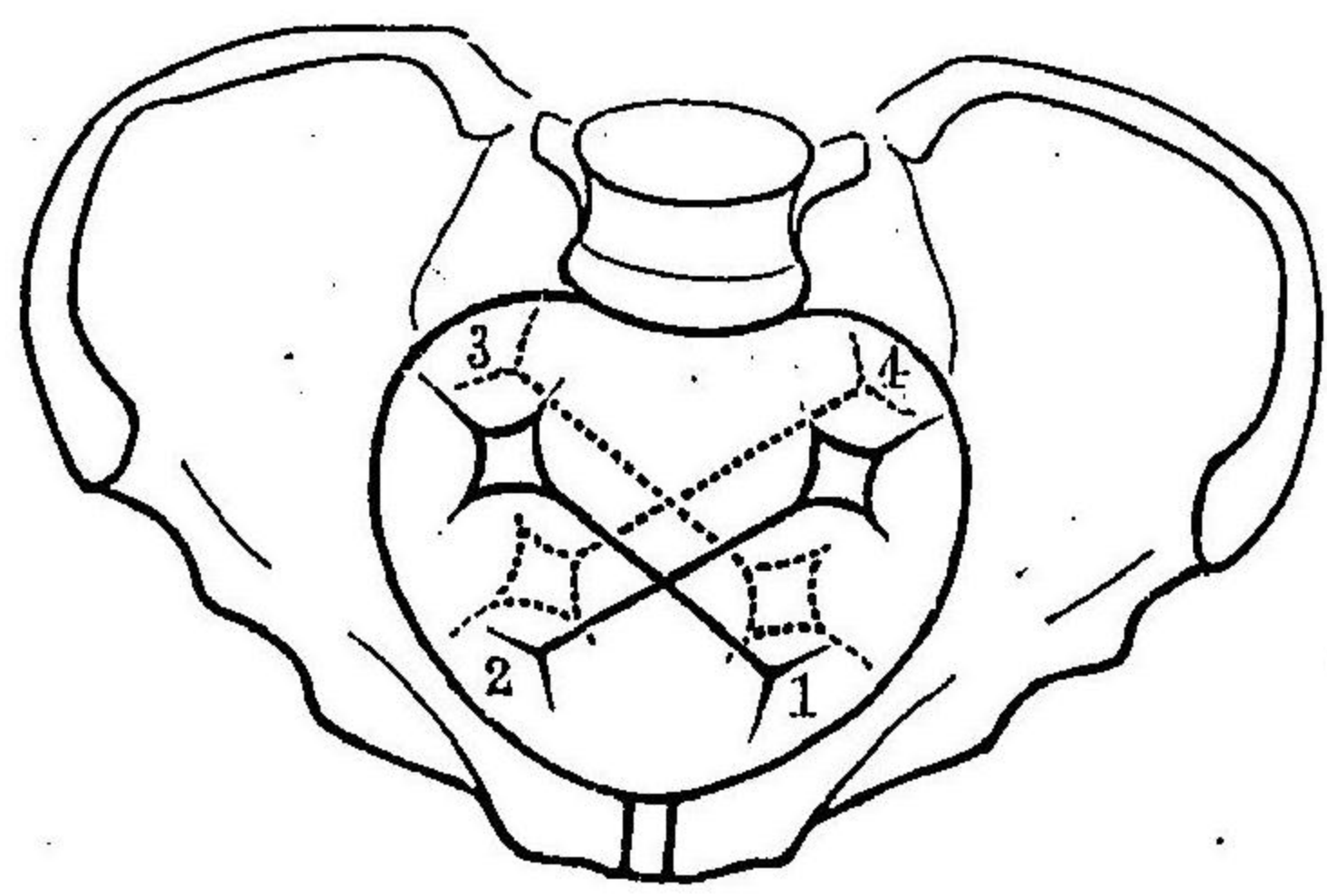
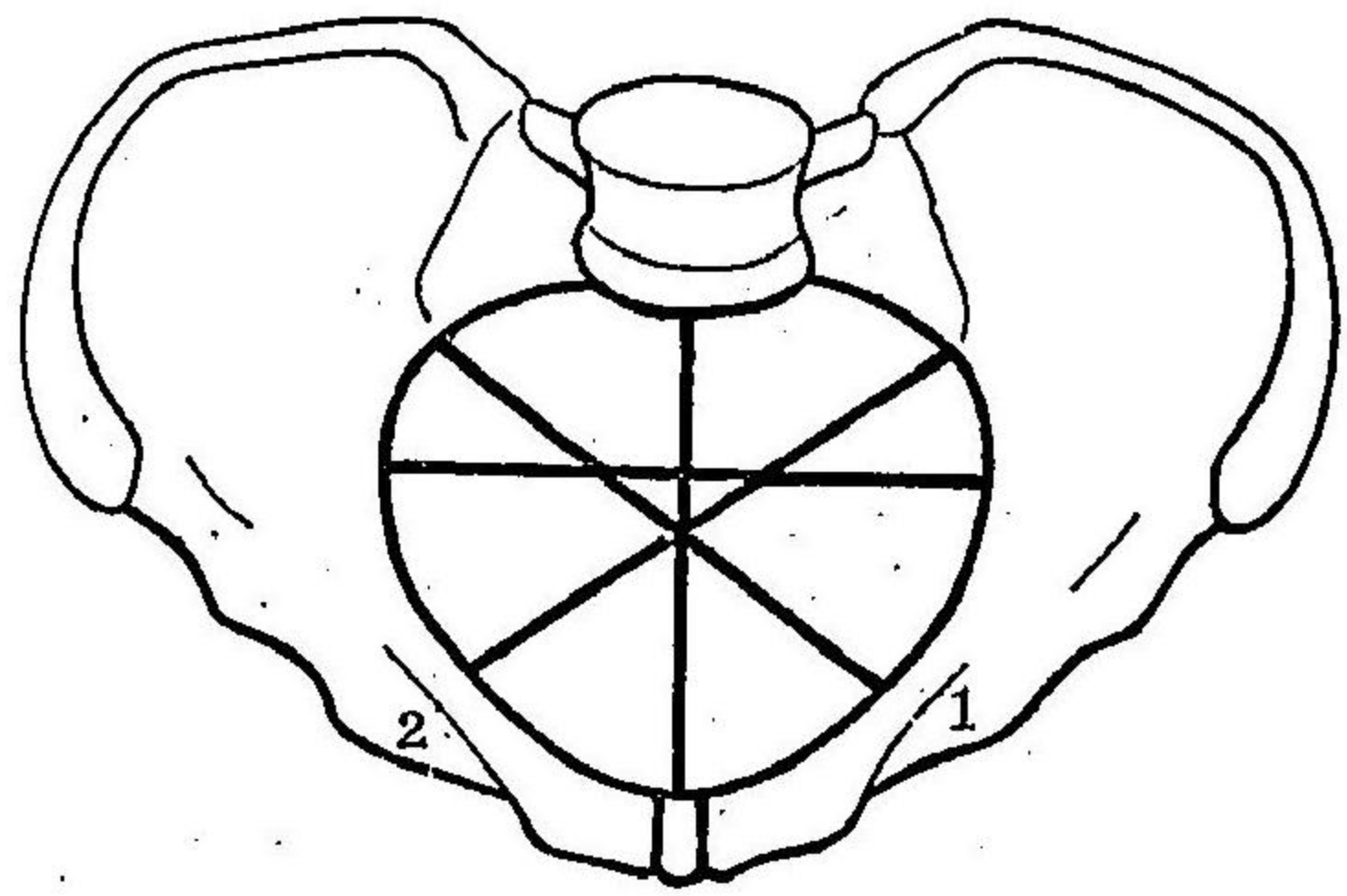


圖 四 第

四種ノ頭蓋位ニ於ケル額門及ヒ矢狀縫合ノ位置ノ想像



ヲ知ルノ便ニ供スルモノナリ  
 此内診所見ノ記載ハ普通ノ理解法ニ從ツテ之ヲ添付セリ  
 骨盤内ニ於ケル先進部ノ體向如何ヲ確定スルニハ須  
 ラク其一定  
 點、例之顙門、  
 腮部ノ如キ  
 ト骨盤ノ前  
 壁或ハ側壁  
 又ハ後壁ト  
 ノ關係、並ニ  
 頭蓋ノ一定  
 線、例之矢狀  
 縫合、顔面線  
 ト骨盤徑ト



第五圖

四種ノ骨  
 盤徑ヲ示  
 ス

ノ關係如何ヲ知ラサル可ラス  
 四種ノ骨盤徑ノ構造及ヒ名稱ハ左ノ如シ(第五圖)  
 (一)前後徑トハ薦骨ノ中央ヨリ恥骨縫際ニ至ルノ直徑  
 ニシテ、即チ解剖家ノ所謂矢狀面ヲ走ル所ノ直徑ヲ謂  
 フ  
 (二)横徑トハ解剖家ノ所謂前額面ヲ右側ヨリ左側ニ走  
 ル直徑ヲ指示ス、其他尙ホ區別スヘキモノハ  
 (三)及ヒ(四)二種ノ斜徑ナリ、右斜徑即チ第一斜徑、ハ右後  
 方ヨリ左前方ニ走ル直徑ヲ指シ、左斜徑即チ第二斜徑  
 ハ左後方ヨリ右前方ニ走ル直徑ヲ示ス  
 故ニ胎兒ノ各位置ハ左ノ圖式ニ明示スルカ如シ

前後徑

横徑

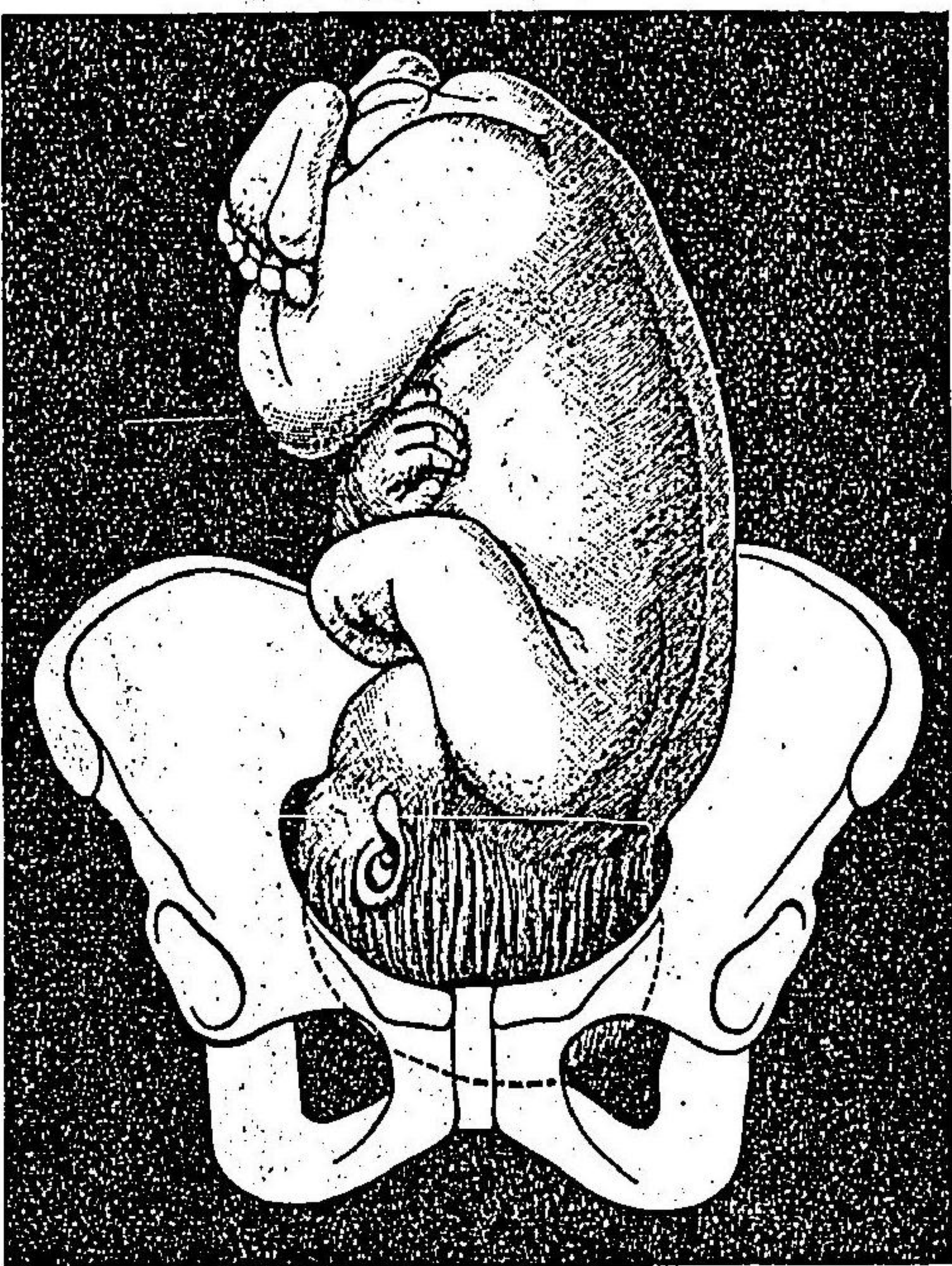
二種ノ斜徑

ノ關係如何ヲ知ラサル可ラス  
 四種ノ骨盤徑ノ構造及ヒ名稱ハ左ノ如シ(第五圖)  
 (一)前後徑トハ薦骨ノ中央ヨリ恥骨縫際ニ至ルノ直徑  
 ニシテ、即チ解剖家ノ所謂矢狀面ヲ走ル所ノ直徑ヲ謂  
 フ  
 (二)横徑トハ解剖家ノ所謂前額面ヲ右側ヨリ左側ニ走  
 ル直徑ヲ指示ス、其他尙ホ區別スヘキモノハ  
 (三)及ヒ(四)二種ノ斜徑ナリ、右斜徑即チ第一斜徑、ハ右後  
 方ヨリ左前方ニ走ル直徑ヲ指シ、左斜徑即チ第二斜徑  
 ハ左後方ヨリ右前方ニ走ル直徑ヲ示ス  
 故ニ胎兒ノ各位置ハ左ノ圖式ニ明示スルカ如シ



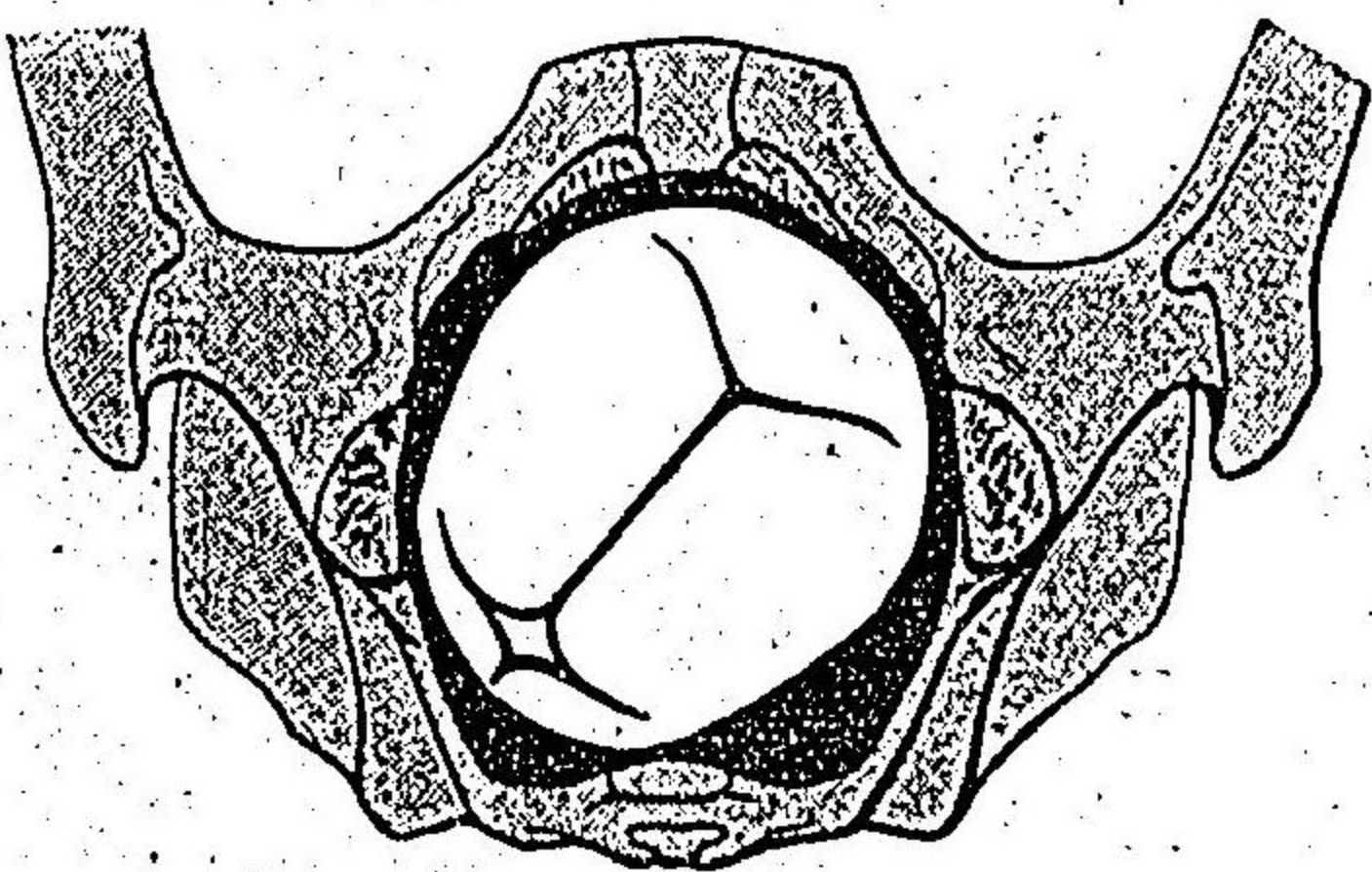
第六圖

第一後頭位ニ於テ  
兒背左側ニ向ヒ  
後頭左前方ニ向フ者



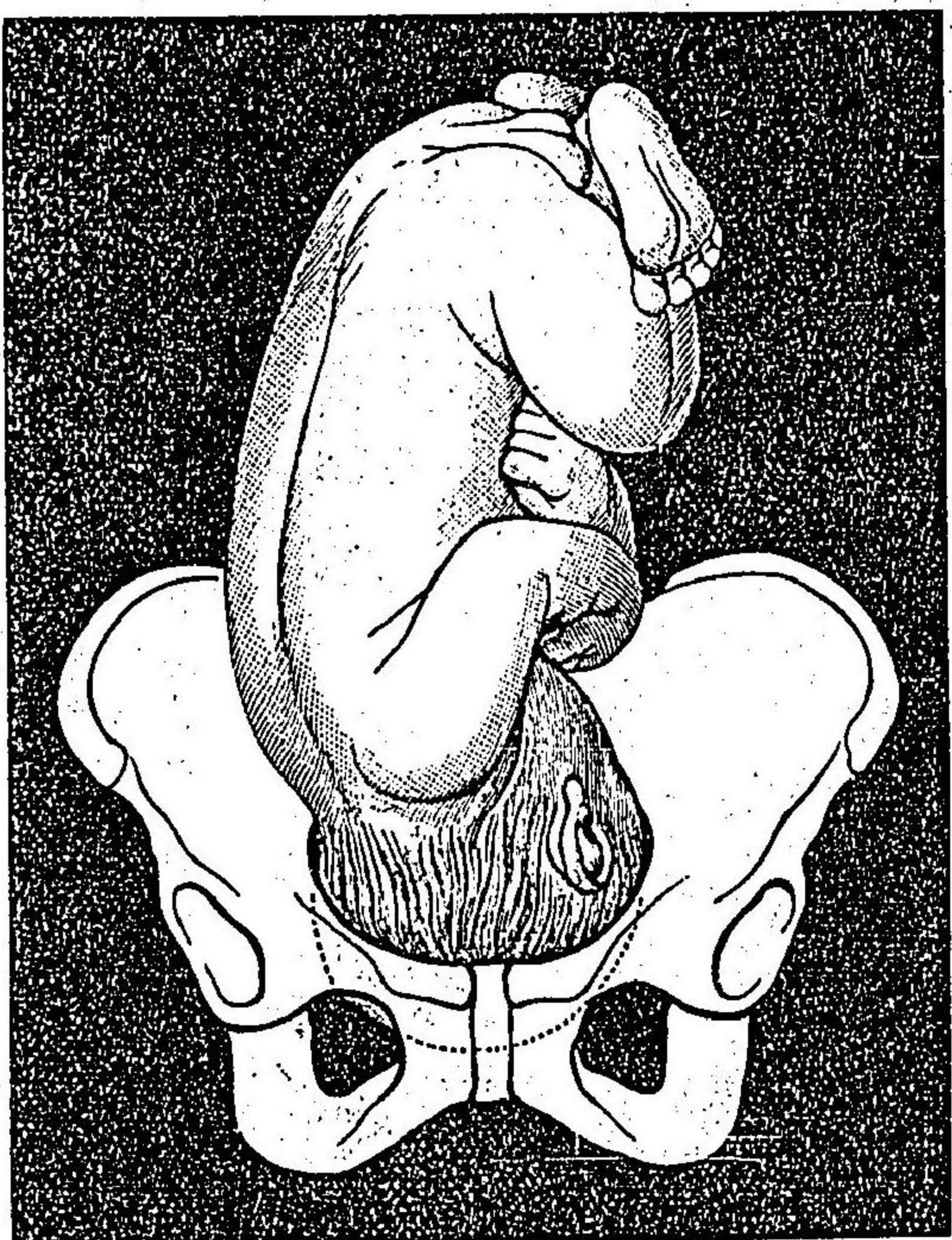
第七圖

第一後頭位ニ於ケル内  
診所見ヲ示ス  
小頭門ハ左前方ニ  
大頭門ハ右後方ニ在リ  
矢狀縫合ハ第一斜徑ニ  
走ル



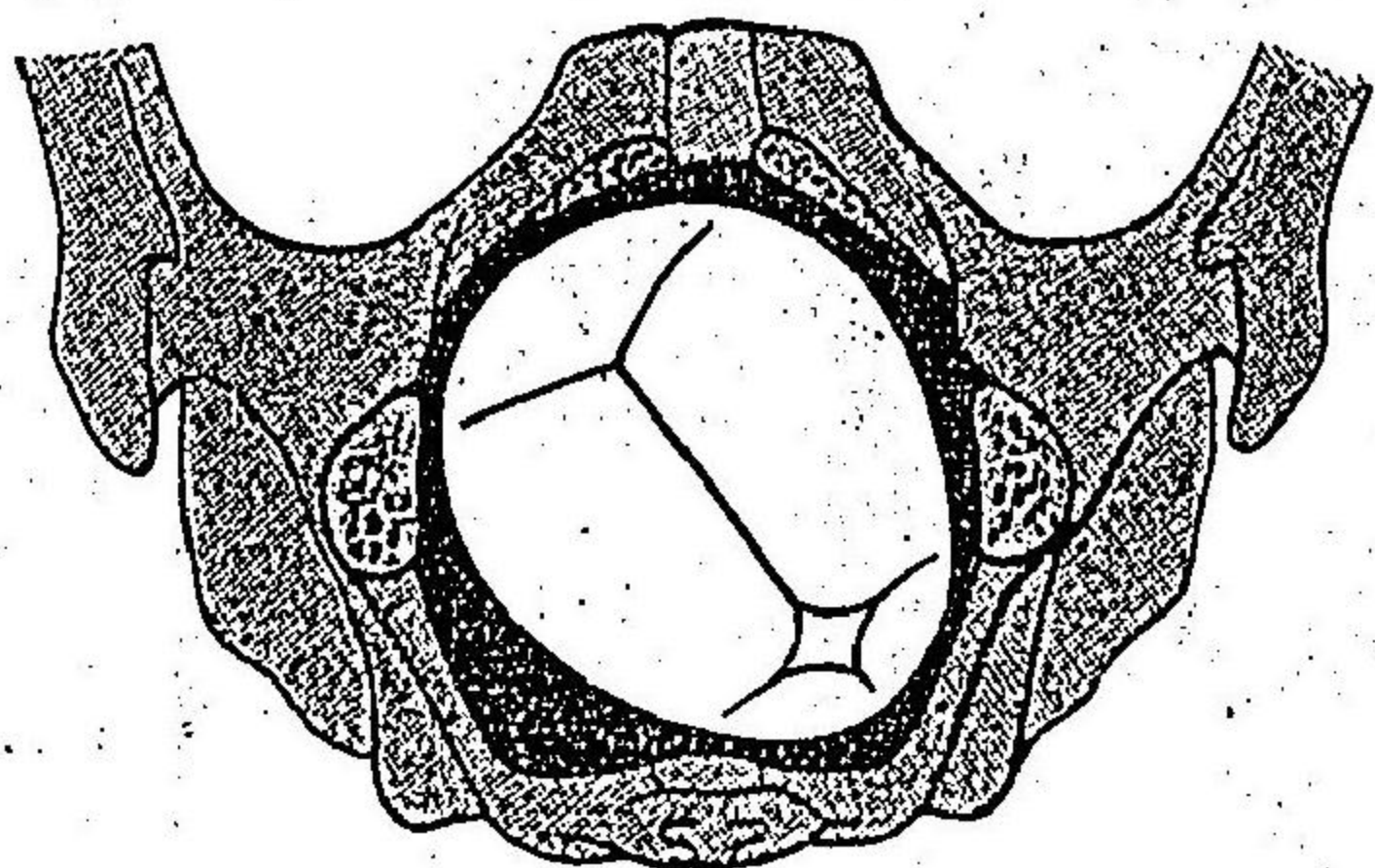
第八圖

第二後頭位ニ於テ  
兒背右側ニ向ヒ  
後頭右前方ニ向フ者



第九圖

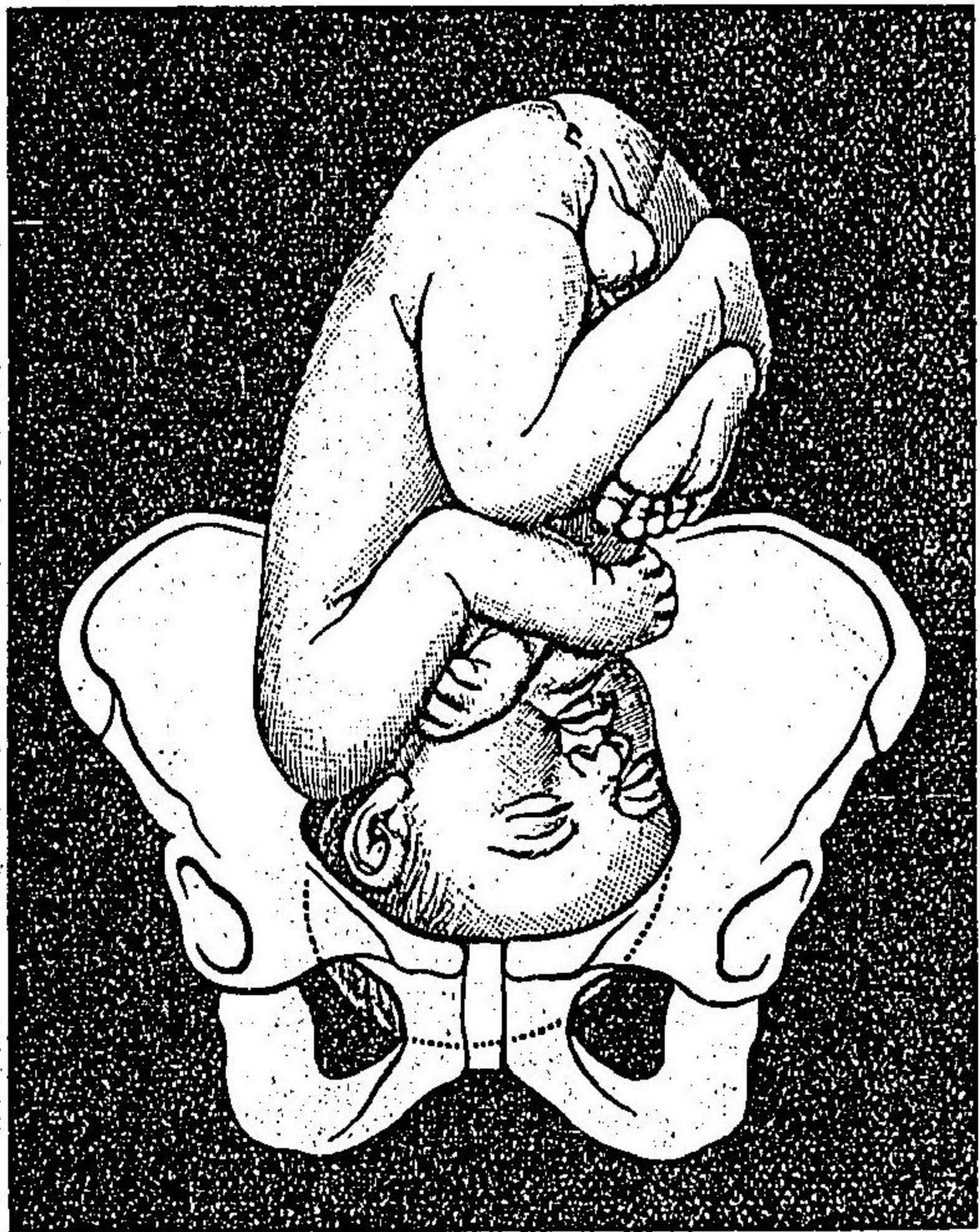
第二後頭位ニ於ケル内  
診所見ヲ示ス  
小頭門ハ右前方ニ  
大頭門ハ左後方ニ在リ  
矢狀縫合ハ第二斜徑ニ  
走ル





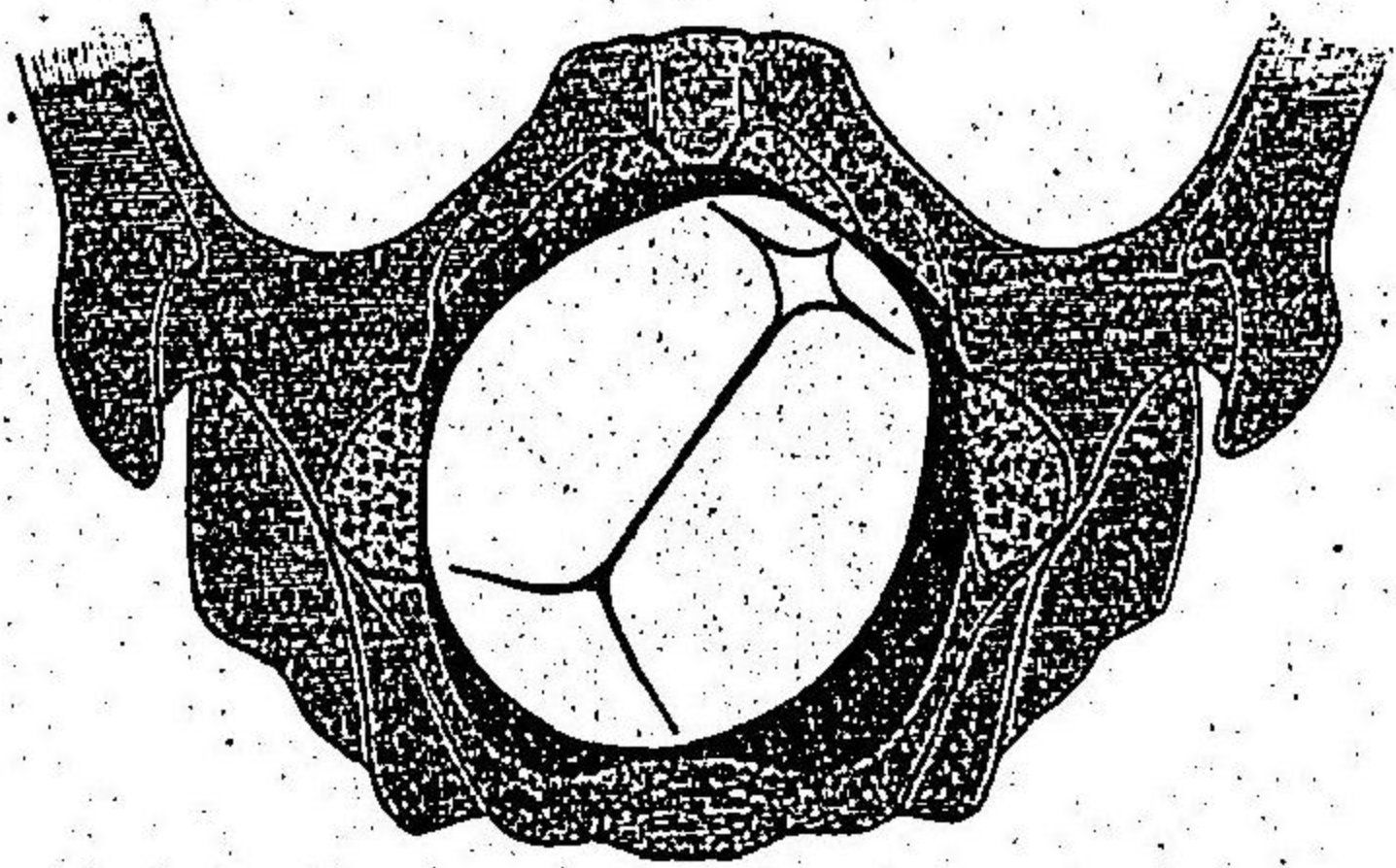
第十圖

第三頭蓋位(第二前頭位)ニ於テ後頭右側ニ向フ者



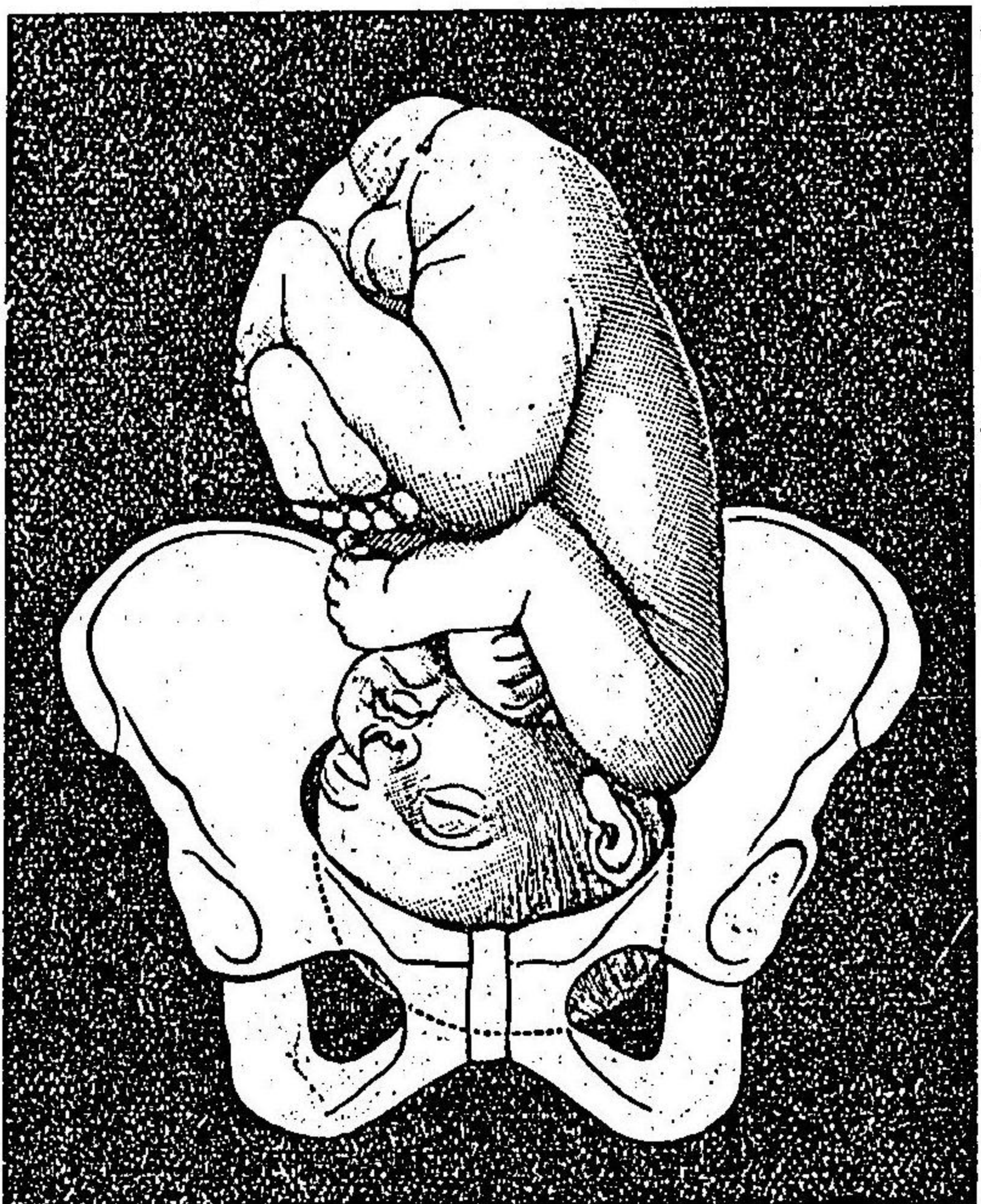
第十一圖

第三頭蓋位ニ於ケル内診所見ヲ示ス  
小顛門ハ右後方ニ  
大顛門ハ左前方ニ在リ  
矢狀縫合ハ第一斜徑ニ走ル



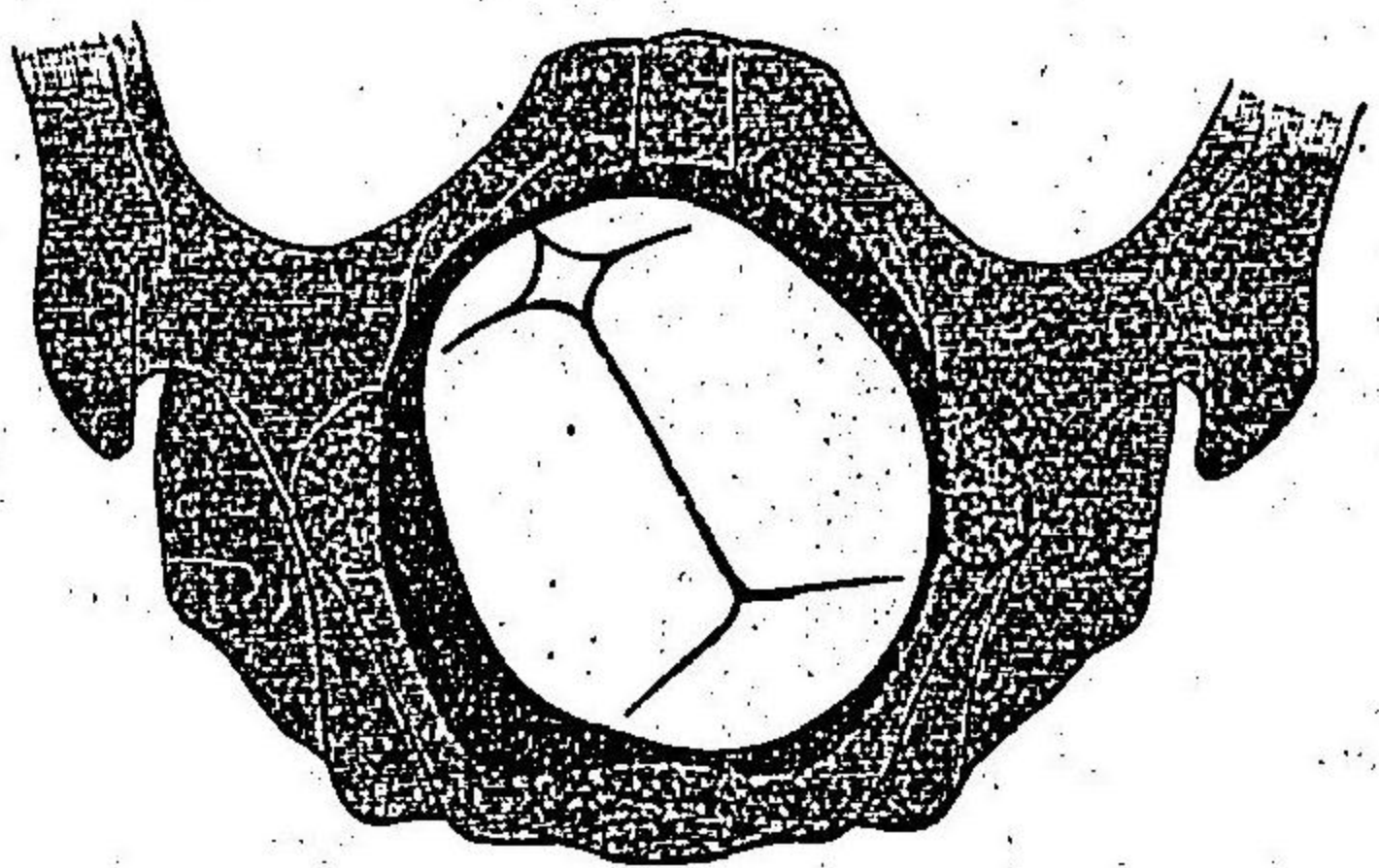
第十二圖

第四頭蓋位(第一前頭位)ニ於テ兒背左側ニ向ヒ後頭左後方ニ向フ者



第十三圖

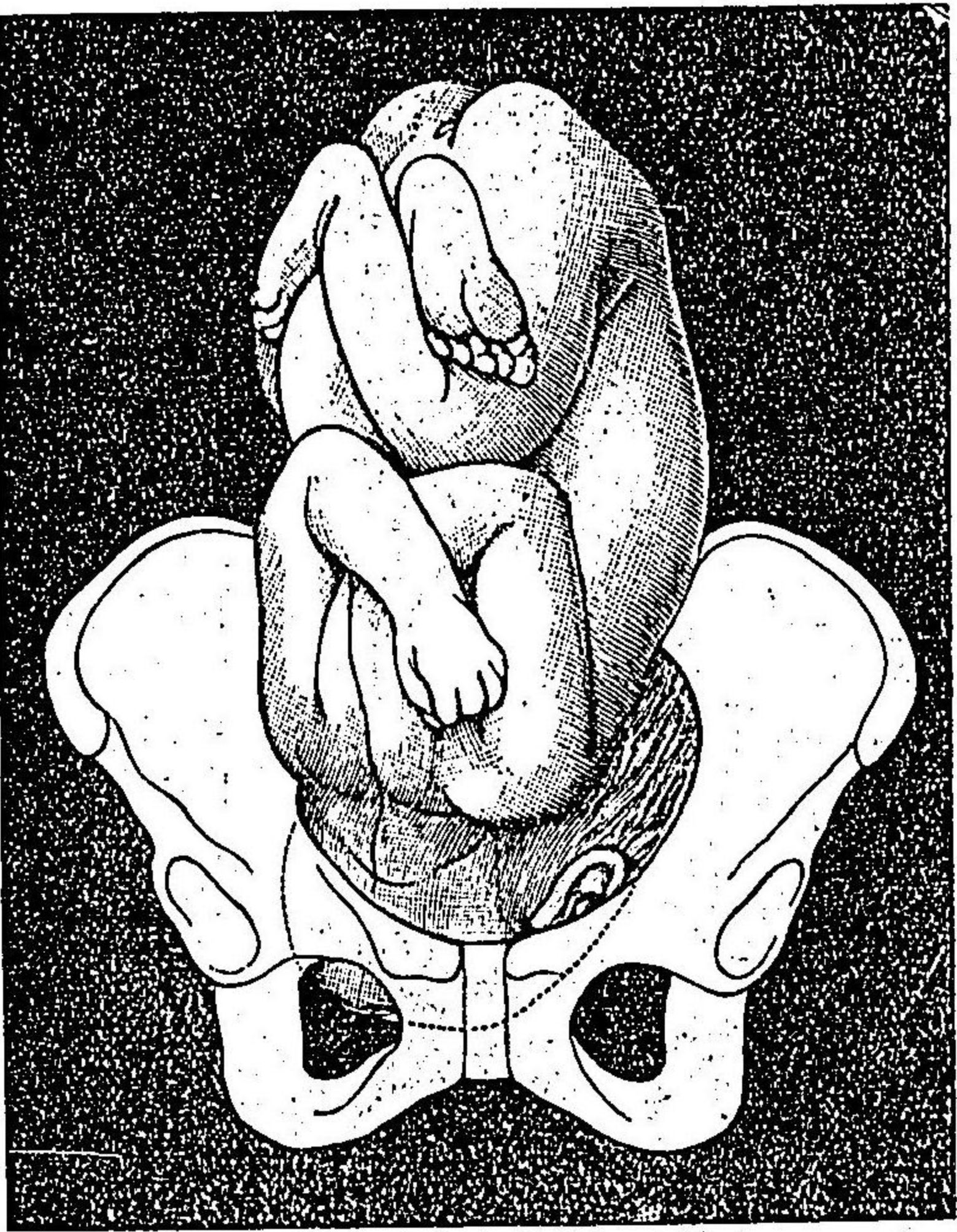
第四頭蓋位ニ於ケル内診所見ヲ示ス  
小顛門ハ左後方ニ  
大顛門ハ右前方ニ在リ  
矢狀縫合ハ第二斜徑ニ走ル





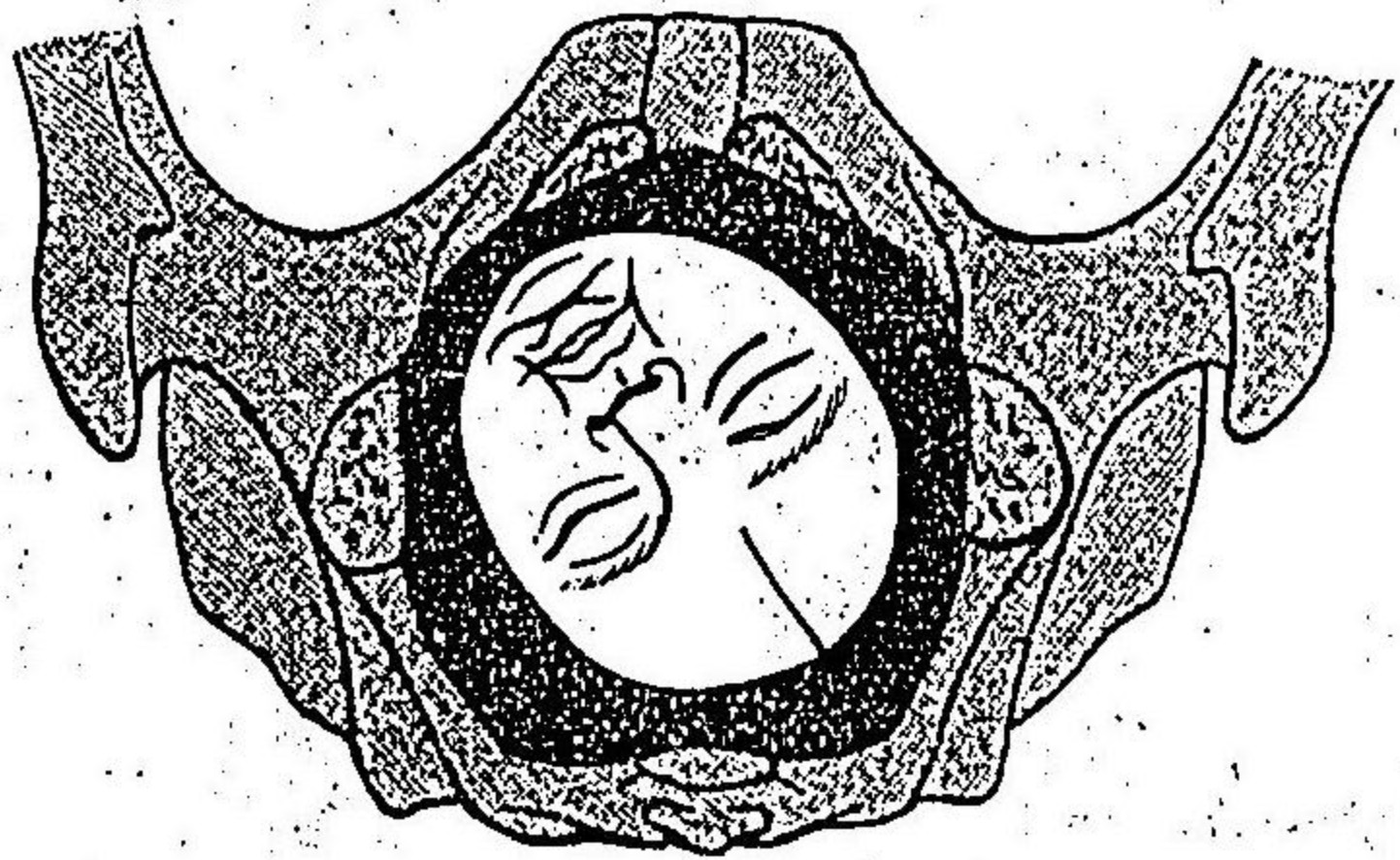
第十四圖

第一顔面位(臍部前方ニ向  
フ)ニ於テ  
兒背左後方ニ向フ者



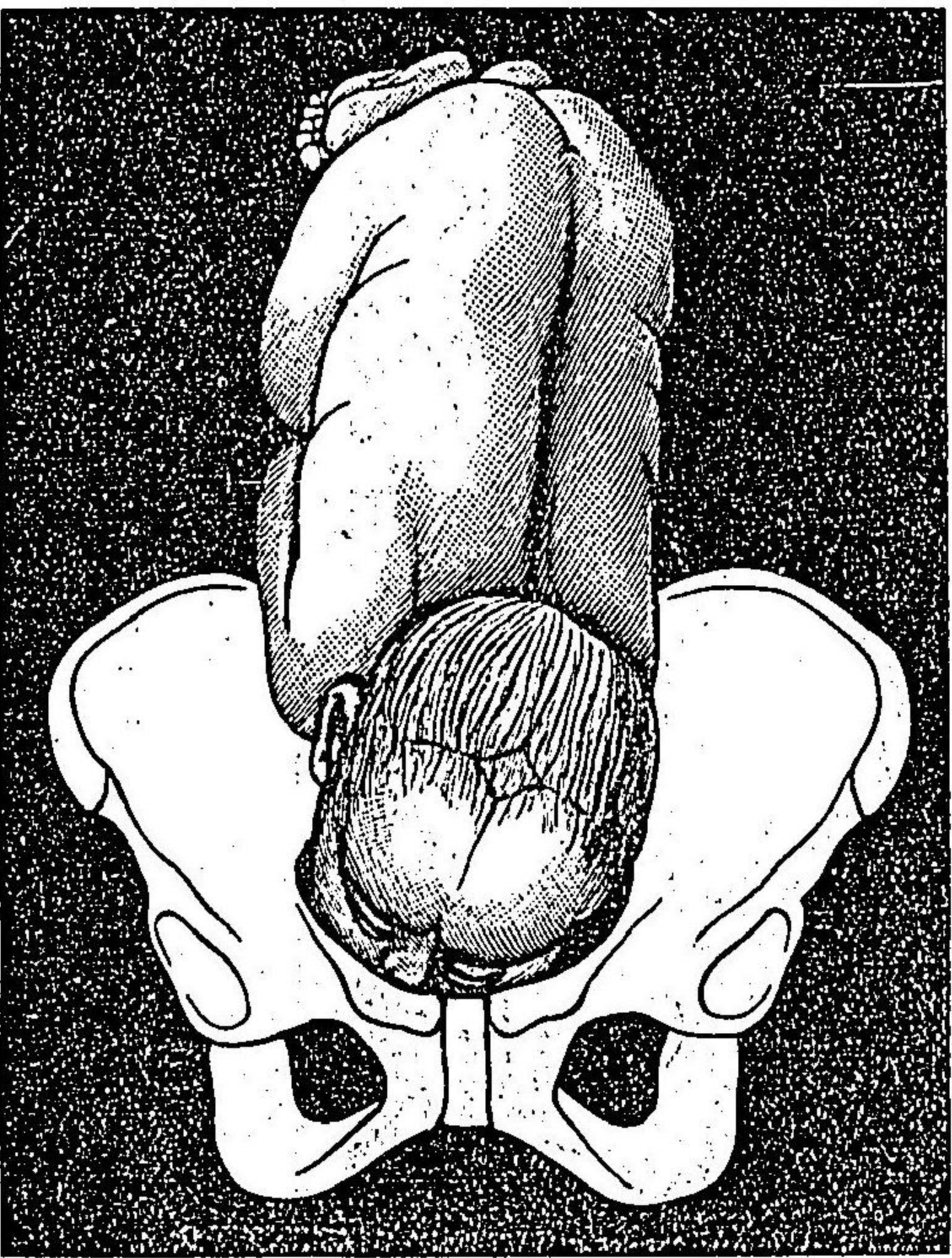
第十五圖

第一顔面位ニ於ケル内  
診所見(臍部前方ニ向  
フ)  
臍ハ前方ニ  
額ハ左後方ニ在リ  
顔面線ハ第二斜徑ニ走  
ル



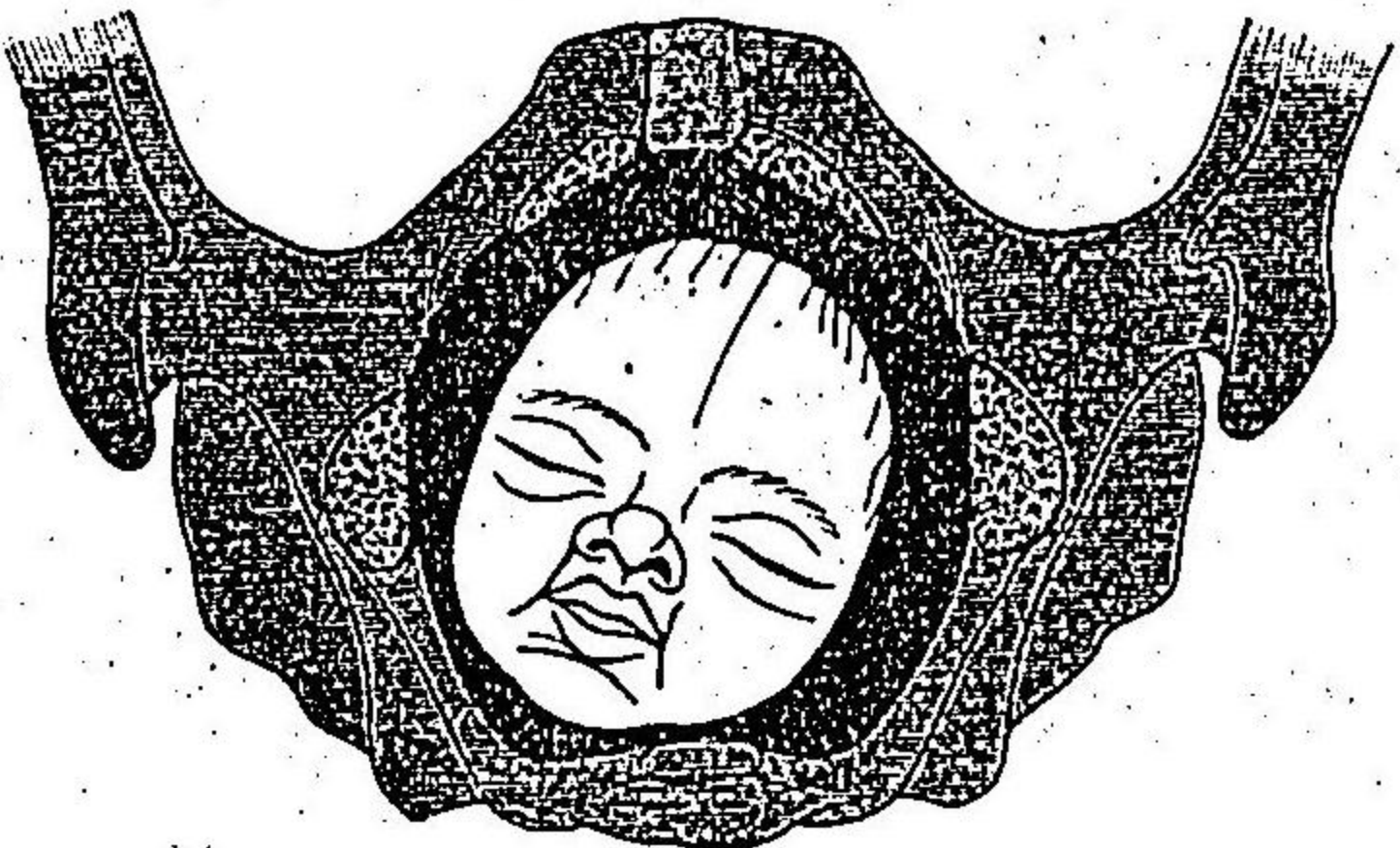
第十六圖

第一顔面位(臍部後方ニ在  
リ)ニ於テ  
兒背左側ニ向フ者



第十七圖

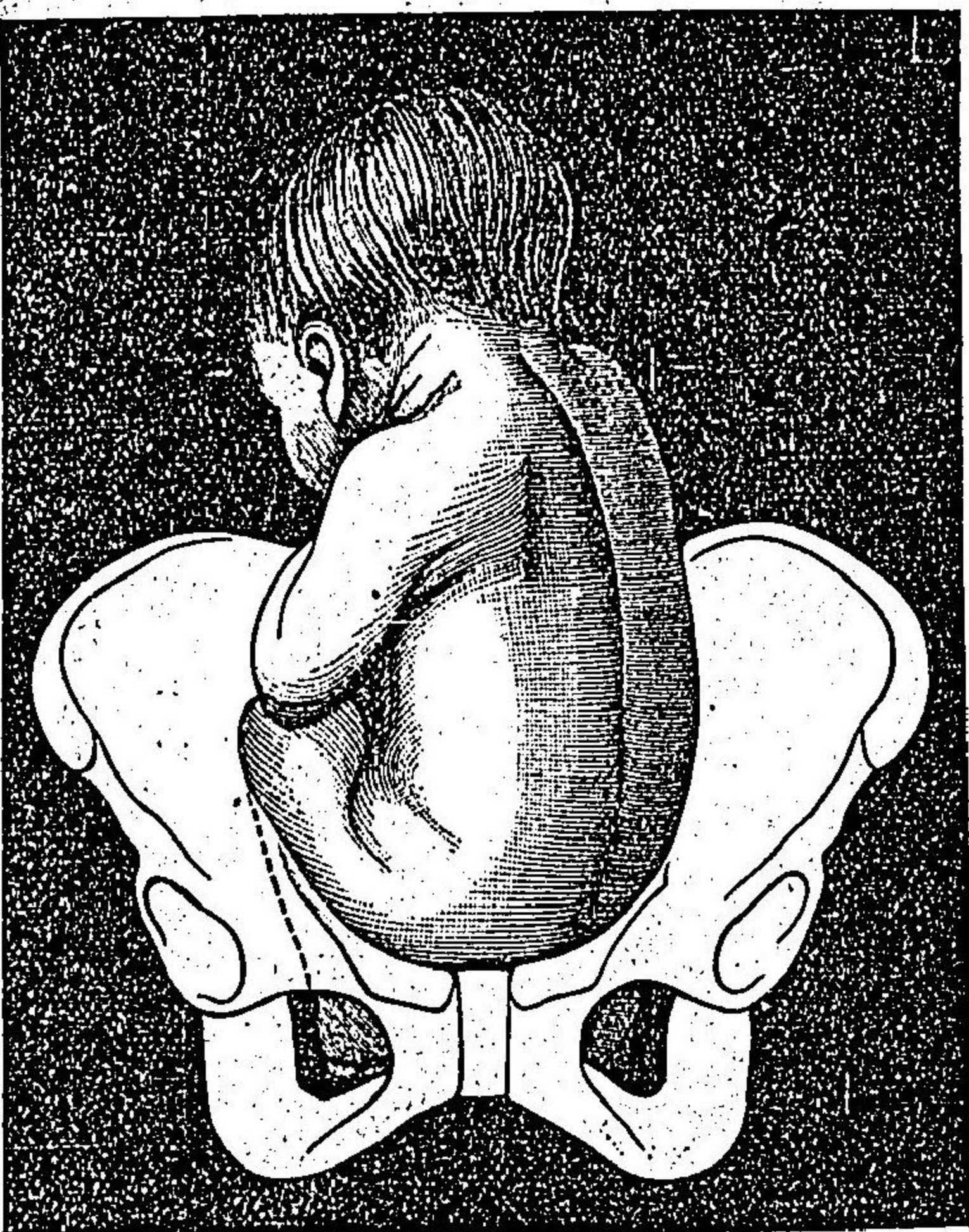
第一顔面位(臍部後方  
ニ在ル者)ニ於ケル内  
診所見ヲ示ス  
臍ハ右後方ニ  
額ハ左前方ニ在リ  
顔面線ハ第一斜徑ニ走  
ル





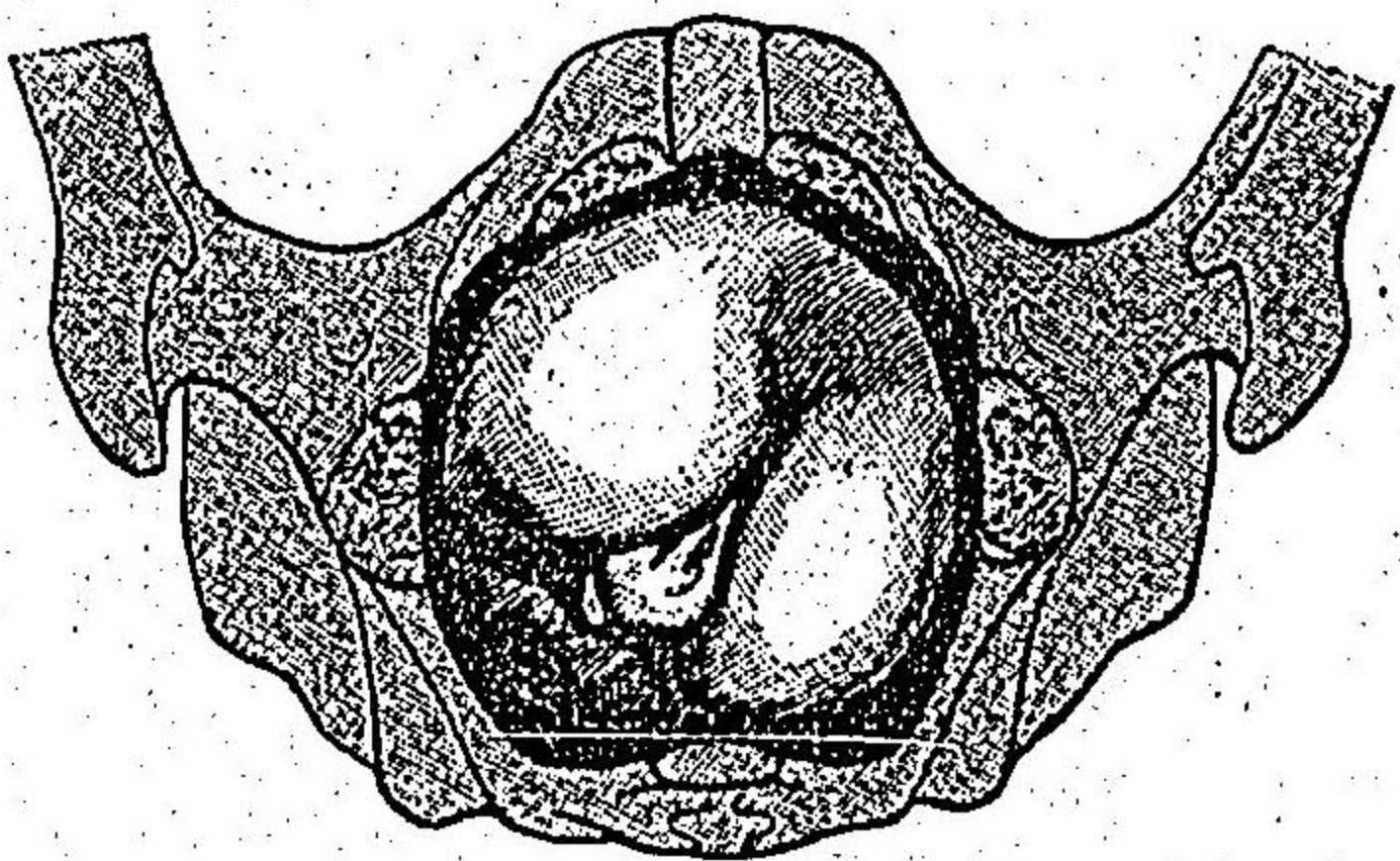
第十八圖

第一尾骶位ニ於テ  
兒背左側ニ向フ者



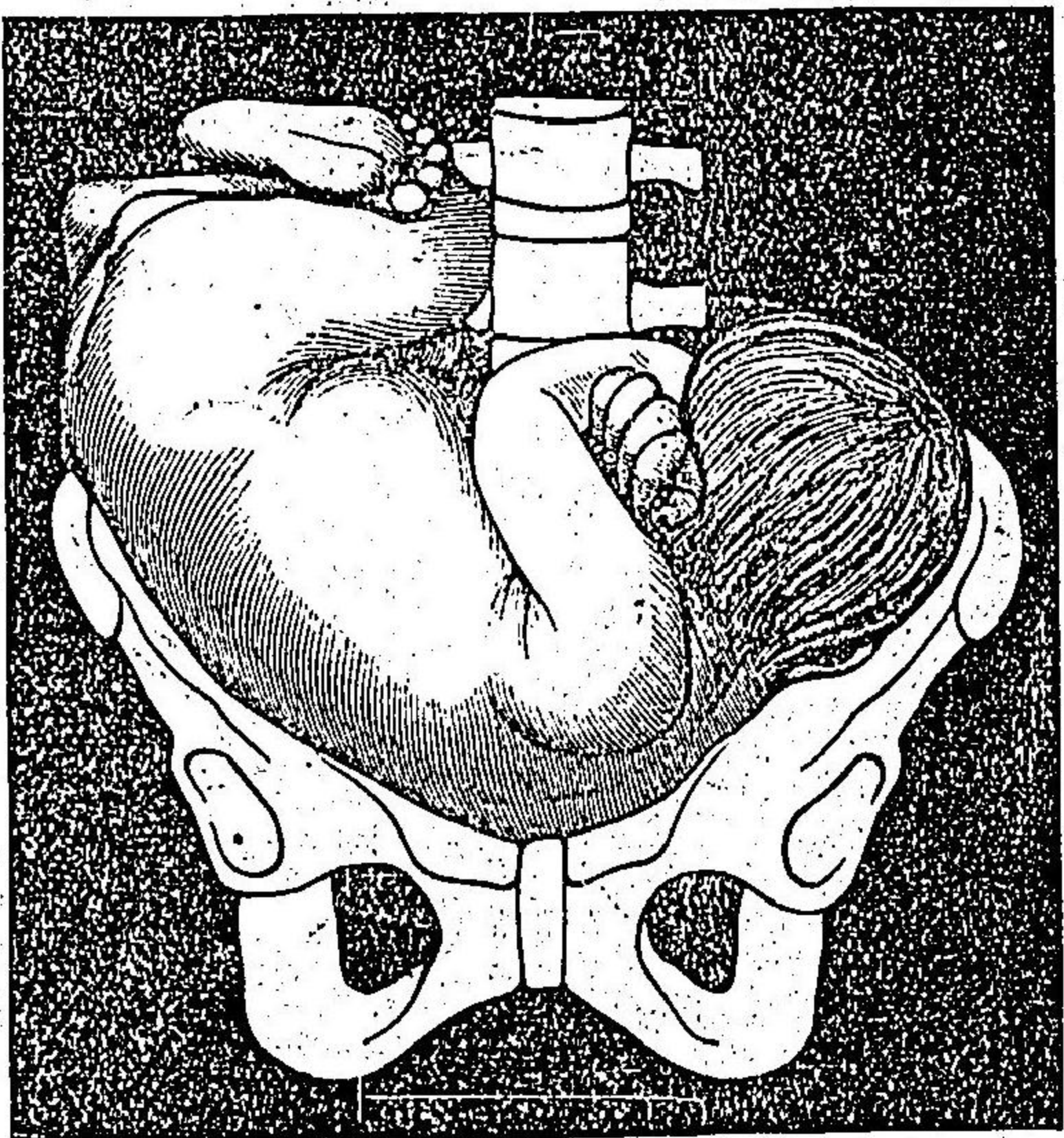
第十九圖

第一尾骶位ニ於ケル内  
診所見ヲ示ス  
薦骨ハ左前方ニ向ヒ  
腹骨廣部ハ第二斜徑ニ  
走ル



第十二圖

第一横位ニ於テ、兒背  
前方ニ向フ者、兒頭ハ  
左側ニ在リ、先進部ハ  
左側ニ向ツテ閉鎖セ  
ル右肩胛ナリ



第二横位ノ兒背前方ニ在ル者ニ於テハ兒頭ハ右側ニ在リ、  
而シテ先進部ハ右側ニ向ツテ閉鎖セル左肩胛之ヲ成ス

フアン、ヘッケル v. Hecker、スピールゲルベルグ Spiegelberg、フアン、



ウケンケル、Winkel 及ヒシヨレーデル、Schroder 諸氏ノ統計表ニ從ツテ胎兒位置ノ比例數ヲ計算スレハ平均左ノ如



圖一十二第

第一横位ニ於テ  
兒背後方ニ向ビ  
左手ノ脱出ヲ兼  
マル者、兒頭ハ左  
側ニ在リ、先進部  
ハ左侧ニ向ツテ  
閉鎖セル左肩胛  
ナリ

頭蓋位：：：：九五、五%

第一頭蓋位ト第二頭蓋位ノ比例ハ二、五六ト一ノ如シ

顔面位：：：：〇、五%

骨盤端位：：：：三、二%

横位：：：：〇、八%

第二横位ノ兒背後方ニ向フ者ニ於テハ兒頭ハ右侧ニ在リ、而シテ先進部ハ右侧ニ向ツテ閉鎖セル右肩胛之ヲ成ス



### 第二章 分娩器械的作用 Geburtsmechanismus.

分娩器械的作用

分娩器械的作用トハ胎兒ノ産道ヲ通過スル方法如何ヲ謂フ

産道ノ廣徑

産道ノ構造ハ先進部ニ一定ノ回轉ヲ要スルモノニシテ、此回轉ハ、常態ニ於テ骨盤内ヲ全ク充填スル最大最硬ノ胎兒部タル、兒頭ノ通過スルトキニ於テ最モ著シトス。産道ノ廣徑ハ主トシテ小骨盤ノ大サニ依リテ之ヲ定メ、産道ノ形狀ハ骨盤ニ依ルノ外、亦骨盤ヲ被覆スル軟部ニ依リテ之ヲ定ム。

分娩器械的作用ヲ會得解明センニハ須ラク骨盤ヲ一定ノ面ニ區分スルヲ可トス。

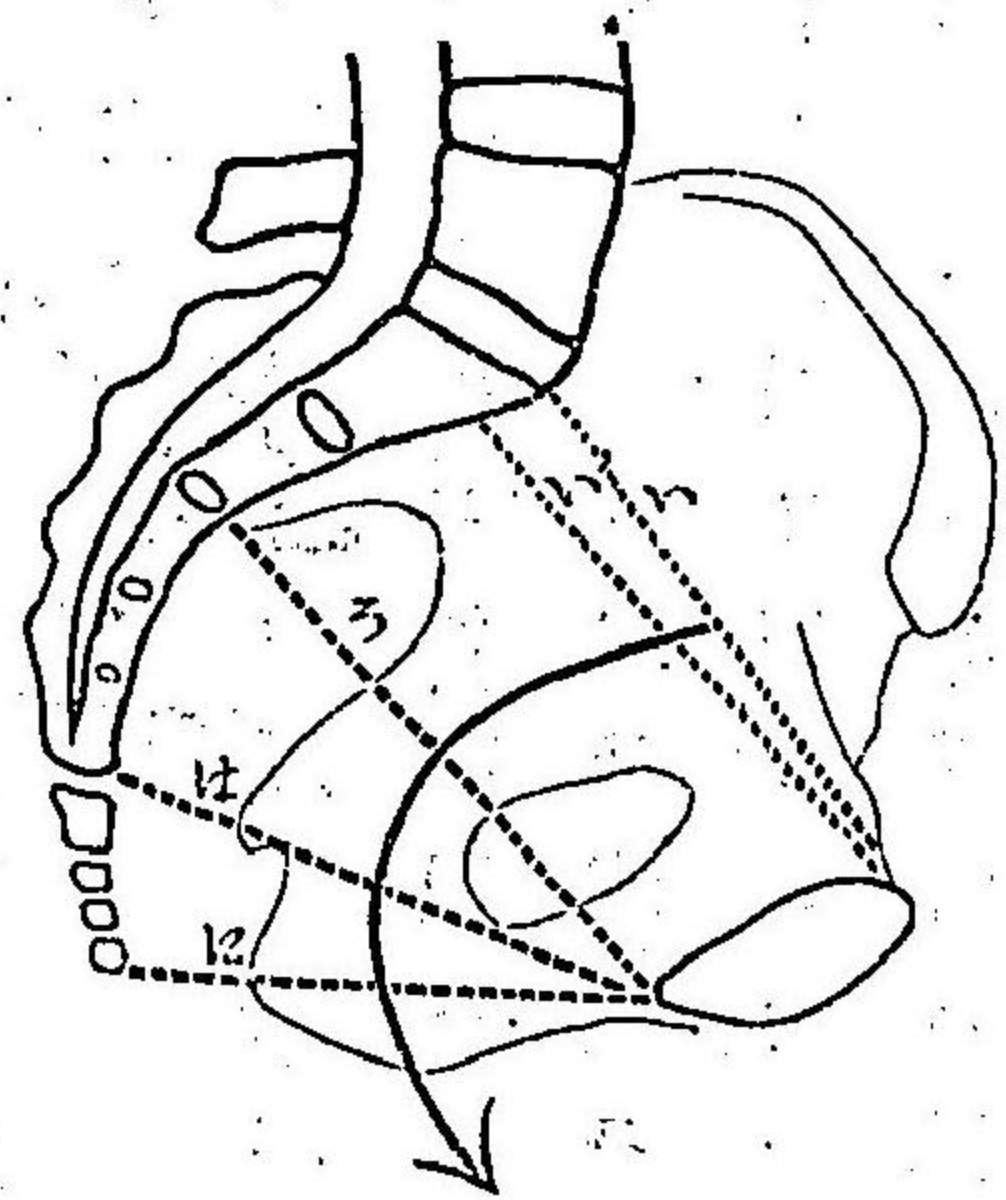
骨盤入口

通例四種ノ骨盤面ヲ區分ス、左ノ如シ。  
(一)骨盤入口(第二十二圖[い]及[ヒ])ハ大骨盤ト小骨盤間ノ

並行骨盤廣部

境界ヲ示スモノニシテ、即チ無名線ニ依リテ形成セラル、而シテ前方ハ恥骨縫際ノ上縁ニ達シ、後方ハ薦骨岬ニ達ス。  
(二)並行骨盤廣部(ホッドゲ Hodge 氏第二十二圖[ろ])ハ骨盤入口ニ並行スル面ニシテ、前方ハ恥骨縫際ノ下縁ニ達シ、後方ハ薦骨ノ中央ニ達ス。

骨盤狹部



圖二十二第

骨盤ノ構造、  
四種ノ骨盤  
面及ヒ骨盤  
軸ヲ示ス

以上ノ兩面間ニ稍廣潤圓柱狀ナル骨盤腔アリ、此部ニ於テハ骨盤ノ内腔ヲ變スル一ノ軟部アルコトナシ、又並行骨盤廣部ノ下際ニ於テ(三)骨盤狹部(第二十二圖[は])アリ、前方ハ恥骨縫際



ノ下縁ニ達シ、側方ハ坐骨棘ニ達シ、後方ハ薦骨尾間骨關節ニ達ス

骨盤狹部ハ産婦ノ臨牀的検査ニ於テ實地上ノ必要ヲ有スルモノニシテ、健體ニ就キテモ坐骨棘ノ銳利ナル隆起ニ依リテ容易ニ之ヲ觸知スルヲ得ヘシ、而シテ先進部ト坐骨棘トノ關係ヲ明カニセハ每常、骨盤ノ孰レノ部分ニ先進部ノ存在スルカヲ精密ニ確定スルコトヲ得ヘキモノナリ

骨盤出口

(四)骨盤出口(第二十二圖に)ハ尾間骨ノ尖端坐骨結節及ヒ恥骨縫際ノ下縁ニ依リテ區劃セラル

産道ノ前壁ト後壁ハ全ク其長徑ヲ異ニス、是ヲ以テ先進部ノ産道ヲ通過スル際ニハ必ス、前方ニ向ツテ凹弓ヲ畫カサルヘカラス、而シテ其凹弓ハ骨盤管ノ中央ヲ標示スル骨盤軸或ハ送入線(第二十二圖矢狀ノ方向)ニ一致ス、此骨盤軸ハ骨盤ノ四直徑ノ折半點ヲ互ニ連結シタルモノナリ

骨盤軸

横軸回轉

分娩器械的作用ニ伴ナフ先進兒頭ノ回轉スルニ三ヶノ原因アリ一ハ胎兒自己ニ存シ(胎兒脊柱壓、シヤッツ Schatz 氏)ニハ産道ノ構造ニ存シ、三ハ分娩力ニ因スル胎兒ノ壓下ニ伴ナフ骨盤底軟部ノ反對壓ニ在リトス  
先進部軀幹ト關係ナク自由ノ回轉ヲ爲シ得ルコト愈、容易ナレハ分娩器械的作用ノ狀況ハ從ツテ好良ニシテ、分娩ノ完成モ亦從ツテ容易ナリトス  
此點ニ就テハ兒頭ハ頸椎トノ關節接合自在ニシテ、充分ニ回轉ノ餘地アルヲ以テ最モ適良ノ状態ニ在ルモノナリ、尙ホ兒頭ノ運動性ハ兒頭ノ回轉ニ關與スヘキ頸椎及ヒ胸椎ノ胎兒ニ於テ甚タ柔軟ナルニ因リテ助成セララル、モノナリ(カルテンバハ Kaltenbach 氏)

兒頭ノ横軸回轉ハ彎曲或ハ伸展トナリテ載域後頭關節ニ於テ行ハレ、其運動ノ大サハ矢狀面ニ於テ頸椎ノ屈曲スル



縱軸回轉

度ニ伴ナフテ増加スルモノトス  
 縱軸回轉ハ載域樞軸關節ニ於テ行ハレ、前額後頭軸回轉ハ  
 載域後頭關節及ヒ頸椎ニ於ケル側方屈曲ニ因リテ行ハル、  
 孰レノ場合ニ於テモ兒頭ノ產道ヲ通過スル際ニハ必ス以  
 上ノ諸運動ヲ合併スルモノニシテ、而シテ各關節ニ於ケル  
 運動ノ大サハ各胎位ニ於テ各種ナル兒頭ノ姿勢ニ從ツテ  
 各差等アリ

內回轉

排出器械的作用

凡ソ分娩器械的作用ノ骨盤内ニ發揮スル部分ヲ內回轉ト  
 名ツケ、骨盤内ヲ脱出シテ陰門ヲ通過スルノ際ニ行ハル、  
 回轉ヲ排出器械的作用ト謂フ  
 內回轉ハ兒頭ノ橫軸回轉ト縱軸回轉ヨリ成ルモノニシテ、  
 甲者ノ場合ニ在リテハ頭蓋ニ於テハ後頭深ク進入シ、乙者  
 ノ場合ニ在リテハ後頭ハ骨盤ノ方面ヨリ前方或ハ後方ニ  
 向ツテ回轉ス

通過面

排出器械的作用ノ起ルヤ、兒頭ノ一定點ハ恥骨縫際ノ下隅  
 ニ支撐セラレテ支點ヲ成シ、兒頭ハ弓狀ニ其周圍ヲ回轉ス  
 ルモノナリ  
 此支點ヨリ兒頭ニ互レル最大徑ヲ通過面ト名ツク而シテ  
 此通過面ノ大サハ各胎位ニ於テ同シカラス  
 通過面愈、狭小ナレハ軟部ハ愈、安全ナルヲ得テ、兒頭ハ會陰  
 上ニ轉動ス  
 最モ便宜ナル通過状態ヲ呈スルモノハ第一及ヒ第二後頭  
 位ニ於ケル兒頭ナリ、是レ此際ニ於テハ最大ナル排出力ト  
 最小ナル通過面トカ互ニ一致スルヲ以テナリ(カルテンバッ  
 ハ Katenbach 氏)

以下各胎位ノ分娩器械的作用ヲ解明スルニ方リ、逐次完成  
 スル回轉ノ主要現象ヲ圖示ス、就中  
 骨盤入口ニ於ケル兒頭ノ進入



骨盤内ニ於ケル回轉  
内回轉完了時ニ於ケル  
兒頭ノ位置及ヒ排出器械的作用是ナリ

甲 後頭位 Hinterhauptlagen.

第一頭蓋位ニ於テハ兒頭ハ後頭ヲ左方ニ向ケテ骨盤入口ニ進入シ、矢狀縫合ハ殆ント横徑或ハ第一斜徑ニ走ル、此際屢、兒頭ハ少シク側方ニ向ツテ彎曲シ、之カ爲メニ矢狀縫合ハ骨盤ノ中央ニ來ラスシテ、少シク薦骨岬ニ接近ス(チーゲル Nagel 氏斜傾)

兒頭骨盤ヲ通過スル際ニハ後頭ハ少シク低降シ、第一回轉即チ横軸運動ヲ爲ス、而シテ骨盤狹部ニ至レハ後頭ハ一層

第一頭蓋位

チーゲル氏斜傾

第一回轉

第二十三圖

第一後頭位ニ於テ骨盤内ニ兒頭ノ進入ヲ示ス、矢狀縫合ハ横徑ニ走ル





第二十四圖

第一後頭位ニ於テ骨盤内ニ兒頭ノ體向ヲ示ス、後頭ハ低降シ、前方ニ向ツテ回轉シ、矢狀縫合ハ第一斜徑ニ走ル



第二十五圖

第一後頭位ニ於テ内回轉ノ完成ヲ示ス、兒頭ハ骨盤出口ニ在テ、極度ノ屈曲ヲ呈シ、後頭ハ恥骨縫際下ニ位シ、矢狀縫合ハ前後徑ニ走ル



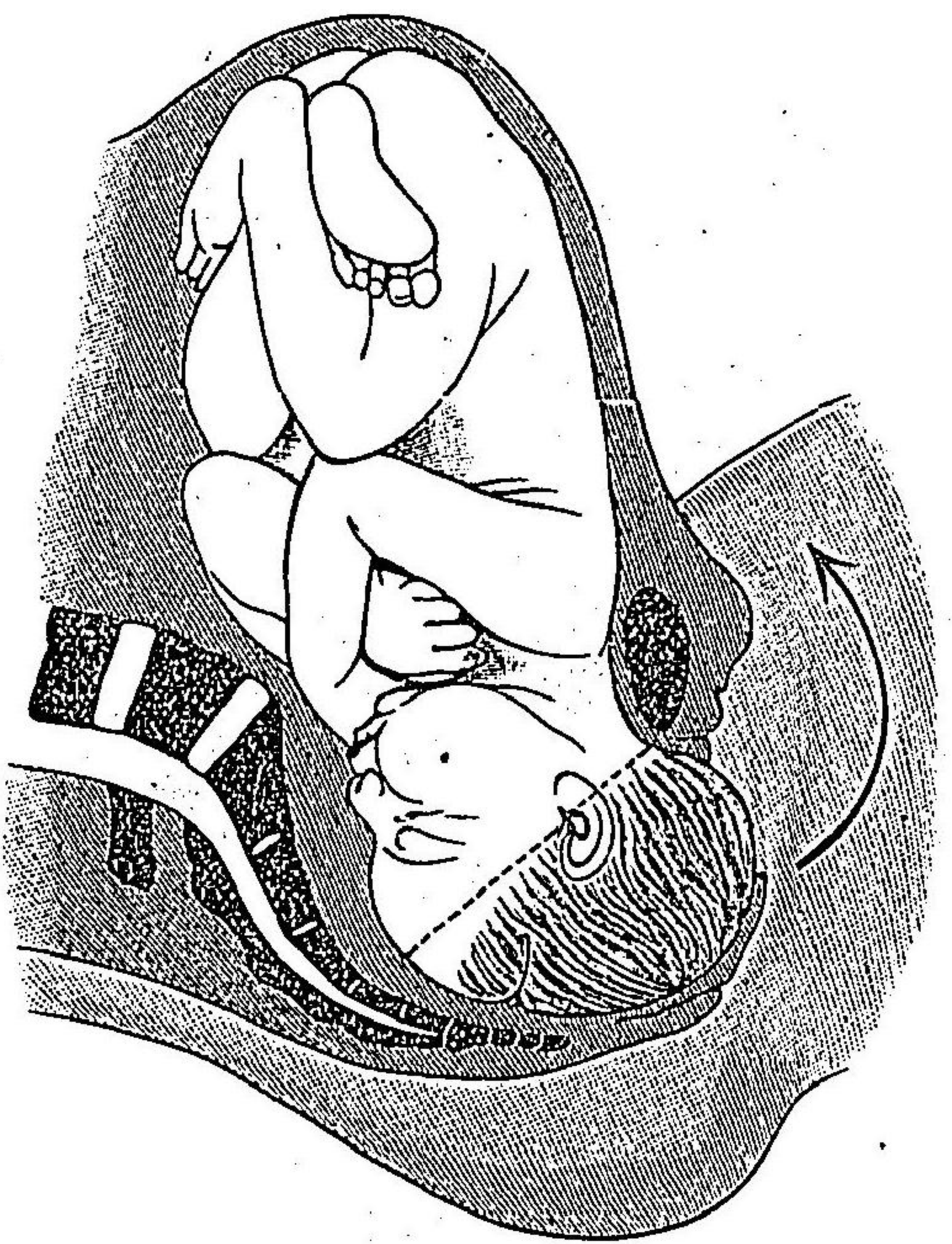


低降スルト同時ニ第二回轉即チ縱軸運動ヲ爲シ、後頭ハ左前方ニ向ツテ回轉シ、矢狀縫合ハ則チ第一斜徑ニ走ル以上ノ兩回轉益續行スルトキハ兒頭ハ骨盤出口ニ達シテ第二十五圖ニ示スカ如キ體向ヲ取ル、後頭ハ全ク低降シ前方ニ向ツテ回轉ス、矢狀縫合ハ殆ント前後徑ニ走ル此ニ至リテ内回轉完了シ、兒頭ハ排出器械的作用ヲ始メ、橫軸回轉ヲ爲ス而シテ兒頭ハ第二十五圖ニ示スカ如キ極度ノ屈曲ヨリ次第ニ極度ノ伸展ヲ爲スニ至ル(第二十六圖及ヒ第二十七圖)

此際項窩ハ回轉點トナリテ恥骨縫際ノ下隅ニ支撐ス、而シテ項窩ヨリ兒頭上ニ達スル最大徑ハ下後頭前額徑ニシテ、第二十六圖ニ示スカ如ク通過面ヲ構成ス

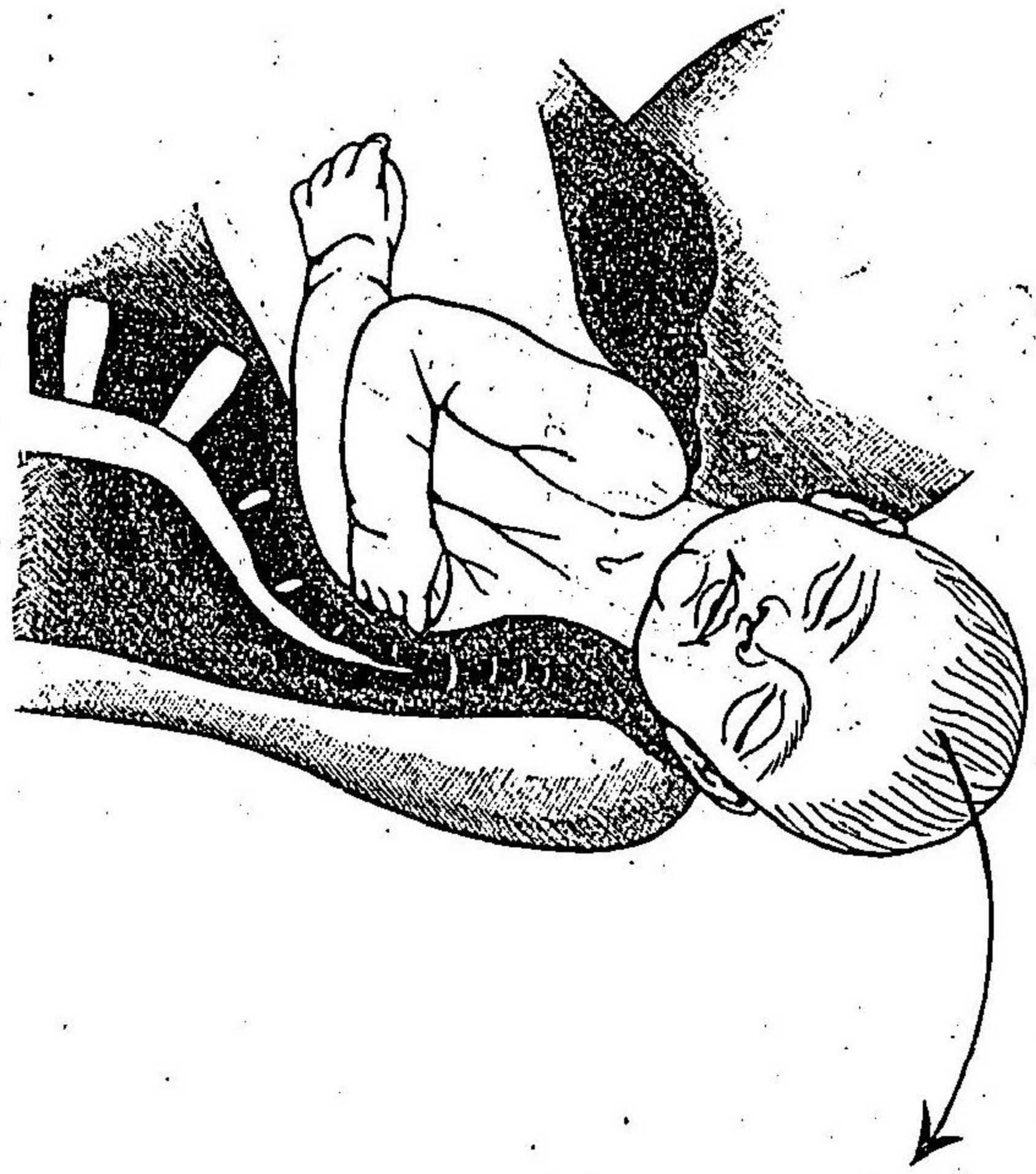
先ツ陰門内ニ後頭ヲ認メ、次テ顛頂、後頭、前頭、額部、顔面ノ諸部逐次會陰上ニ現出ス

第二十六圖



後頭位ニ於ケル排出器械的作用トシテ、兒頭ノ排臨、伸展ノ始起、矢ノ方向ニ於ケル槎起、通過面、下後頭前額徑ヲ示ス





第二十八圖

軀幹ノ排出ニ於ケル第一次トシテ前方ニ位ス  
 ル肩胛ハ恥骨縫際下ニ現出シ、兒頭ハ矢ノ方向  
 ニ低降シ、胸廓ハ甚シク壓迫セラレ、狀ヲ示ス



圖七十二第

後頭位ニ於ケル排出  
 器械的作用トシテ兒  
 頭ノ完全伸展會陰ノ  
 縮退ヲ示ス

軀幹ノ分娩ハ孰レノ頭位ニ於テモ皆ナ同様ニ完成スルモ  
 ノニシテ、先ツ肩胛ハ前方ニ向ツテ恥骨縫際下ニ降り兒頭  
 ハ第二十八圖ニ示スカ如ク矢ノ方向ニ少シク壓下スルニ



第二十九圖

軀幹ノ排出ニ於ケル第  
二次トシテ、後方ニ位ス  
ル肩胛ハ會陰上ニ現出  
シ、兒頭ハ矢ノ方向ニ牽  
引スルノ狀ヲ呈ス



第二頭蓋位

由リテ肩胛ノ脱出ヲ  
助ク、至難ノ場合ニハ  
前方ニ現出スル腋窩  
ニ指示ヲ送入シ、以テ  
下方ニ牽引スルヲ要  
ス  
兒頭ヲ第二十九圖ニ  
示スカ如キ矢ノ方向  
ニ牽引スレハ後方ニ  
位スル肩胛ハ會陰上  
ニ來リ、次テ少シク地  
平ニ牽引スレハ軀幹  
ハ自ラ脱出ス  
第二頭蓋位ノ分娩器

第三第四頭蓋位

機械的作用ハ第一頭蓋位ニ於ケルト同様ニ成就スルモノニ  
シテ、只、第二頭蓋位ニ於テハ後頭右側ニ位シ、矢狀縫合ハ横  
徑ヨリ第二斜徑ヲ通過シテ前後徑ニ回轉スルノ差アルノ  
ミ

乙 前頭位 Vorderhauptslagen.

前頭位、即チ第三及ヒ第四頭蓋位ノ分娩器械的作用ハ内回  
轉ニ關シテハ後頭位ノ分娩器械的作用ニ同シ、只、前頭位ニ  
在リテハ前頭前方ニ向ヒテ回轉スルノ差アルノミ、然レト  
モ排出器械的作用ハ全ク之ニ異ナリ、殊ニ鉗子ヲ以テスル  
人工的分娩ニ於テハ最モ注意ヲ要スヘキモノトス  
骨盤入口ニ於ケル兒頭ノ進入ハ通例後頭位ニ於ケルト同



第三十圖

第四頭蓋位ニ於テ、兒頭ハ骨盤廣部ニ在リ、後頭ハ左後方ニ向ヒ、矢狀縫合ハ第二斜徑ニ走ル者



様ナリ、然レトモ此際屢後頭ノ後方ニ過向スルコトアリ、骨盤ヲ通過スルノ際ニハ、殊ニ第三後頭位ニ於テ、屢尙ホ骨盤

内ニ於テ後頭ノ前方ニ回轉スル爲メ矢狀縫合ハ第一斜徑ヨリ横徑ヲ通過シテ第二斜徑ニ移行シ、而シテ兒頭ハ第二後頭位ニ於テ分娩スルコトアリ

稀ニハ後頭後方ニ停留シ矢狀縫合ハ第三頭蓋位ニ於テハ第一斜徑ニ停留シ第四頭蓋位ニ於テハ兒頭ノ深在スル際ニモ第二斜徑ニ停留スルコトアリ  
各頭蓋位交互ノ比例數ハフオン、ヘッケル、Hecher氏ニ據リテ左ノ如シ

第一後頭位 六八、三%

第二後頭位 二六、八%

第三及ヒ第四後頭位 一、五%

額位 三、四%

内回轉完了スルノ際ニハ兒頭ハ前頭ヲ前方ニ向ケ、屈曲シ



テ殆ト前後徑ニ位シ、額部ハ恥骨縫際ノ後方ニ在リ、就中其  
 下縁ニハ前頭結節上ノ部分アリ、後頭ハ薦骨窩ニ在リ  
 排出運動ハ左ノ回轉ヨリ成ル

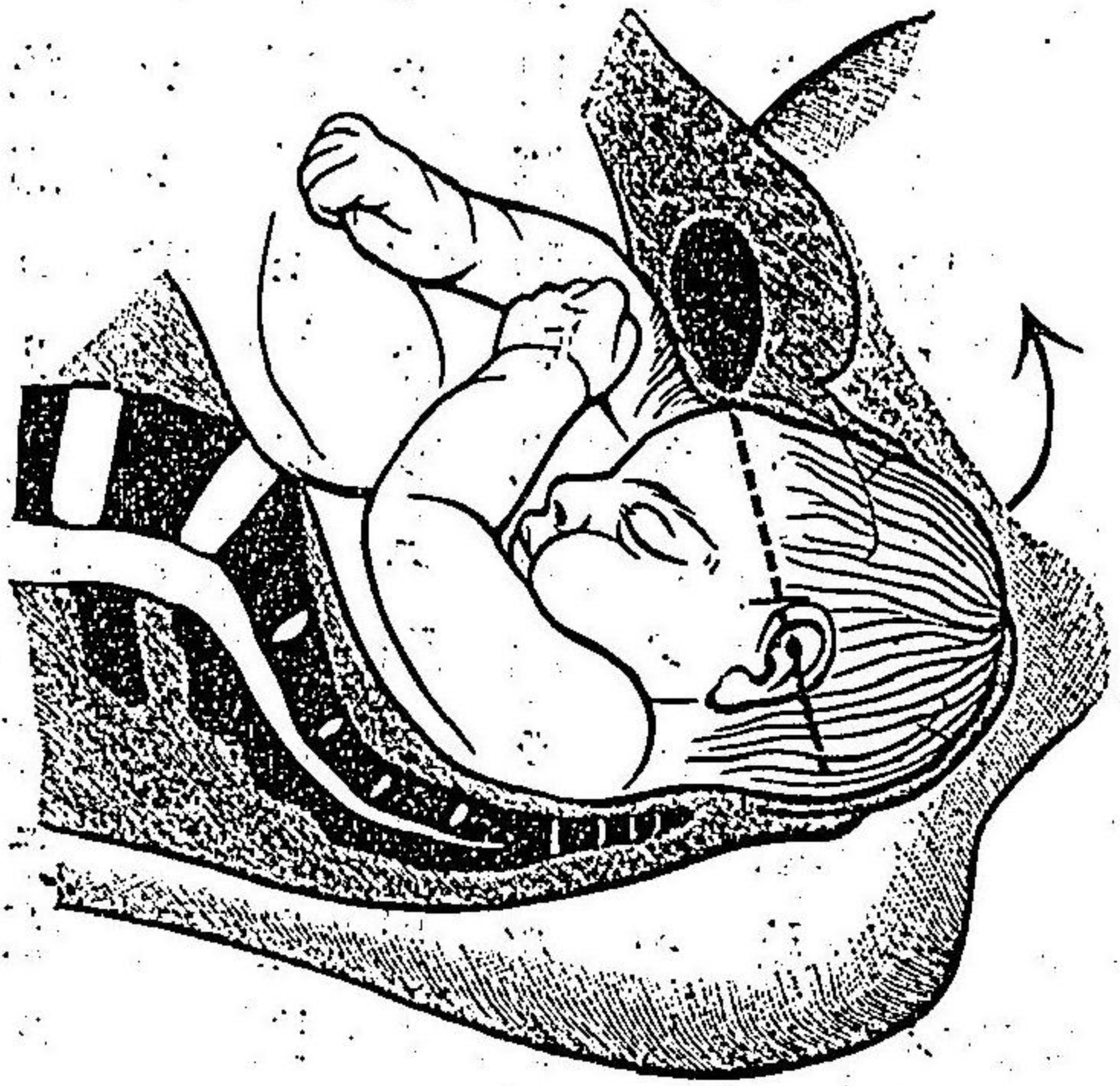


第三十三圖

第四頭蓋位ニ於ケル  
 内回轉ノ完了ヲ示ス  
 前頭ハ前方ニ向ヒ  
 矢狀縫合ハ殆ト  
 前後徑ニ走ル

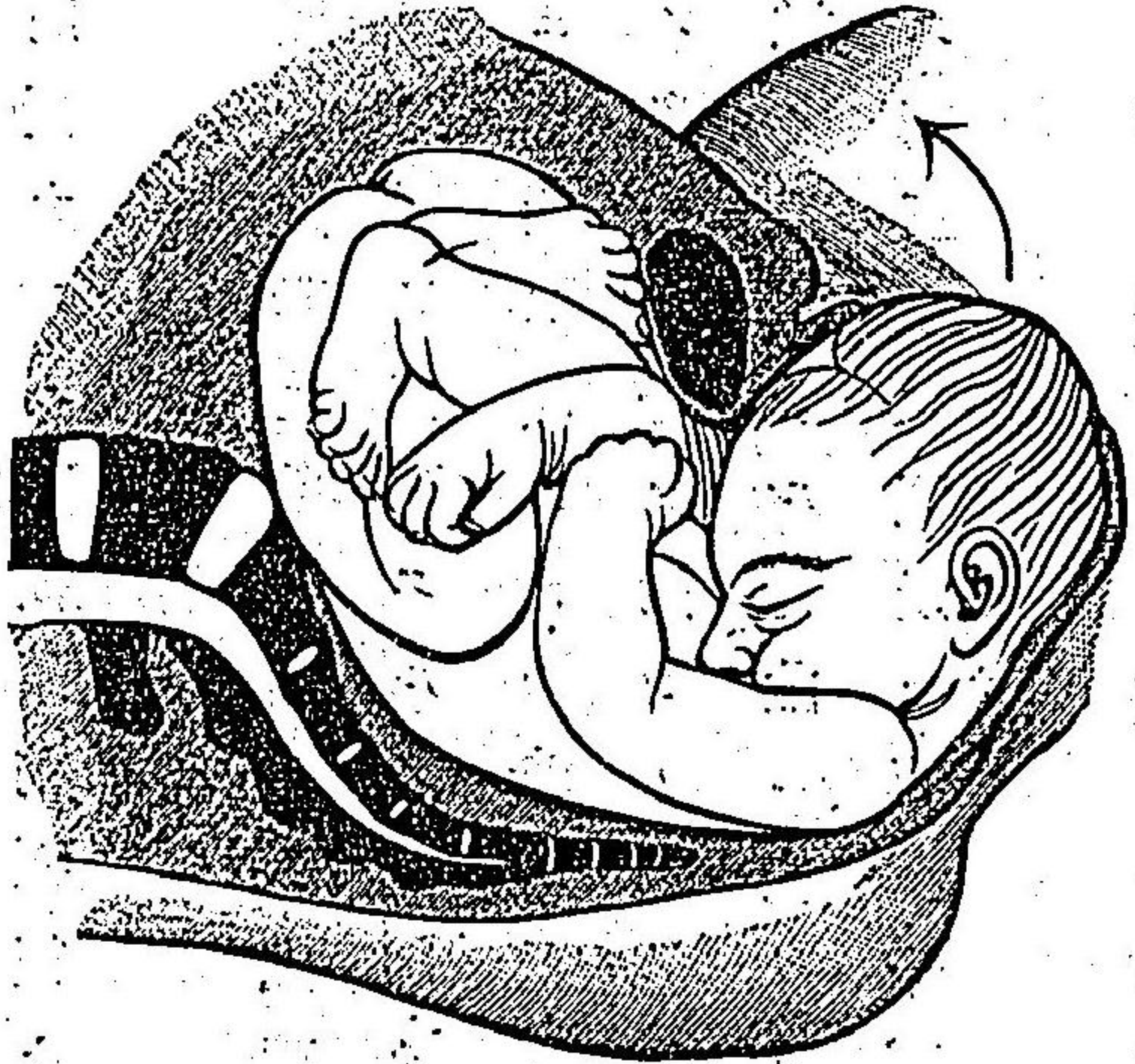
第三十二圖

前頭位ニ於ケル兒頭ノ排出  
 運動第一回轉、屈曲、矢ノ方向  
 ニ於ケル率舉通過面ヲ示ス



第三十三圖

前頭位ニ於ケル兒頭排出運  
 動ハ極度ナル屈曲ヲ示ス





支點ハ前額部ノ上地平面上ニシテ殆ント髮際ニ在リ、通過面ハ此部ヨリ後頭結節ニ互ルノ周徑ナレハ、下後頭前額徑ト殆ント其大サヲ同フス

顛頂及ヒ後頭ノ分娩ハ兒頭ノ屈曲運動繼續ニ由リテ成就セサル可カラス、而シテ兒頭ハ内回轉ヲ完了スルノ際、即チ排出運動ノ未タ起ラサル前、已ニ屈曲ヲ呈スルカ故ニ、載域後頭關節ノ運動ノ大サハ屈曲ノ意義ニ於テ殆ント其極度ニ達シ、後頭ハ獨リ頸椎及ヒ胸椎ノ過強ナル彎曲ニ由リテノミ會陰上ニ先進スルモノトス(第三十二圖及ヒ第三十三圖)

會陰已ニ後頭ヲ超エテ胎兒ノ項部ニ縮退シタルトキハ兒頭伸展スルヲ以テ顔面ハ恥骨縫際下ニ現出ス

故ニ前頭位ニ於テ兒頭ノ陰門ヲ排出スルヤ、先ツ顛頂現出シ亞テ後頭現出シ、而シテ後チ反對運動ニ由リ前額及ヒ顔

巨大兒頭

第三十四圖



前頭位ニ於ケル兒頭ノ排出運動トシテ第一回轉矢ノ方向ニ兒頭ノ伸展ヲ示ス

面ハ恥骨縫際下ニ現出ス」最モ不良ナル稀少ノ場合、即チ巨大兒頭ノ如キニ於テハ帽狀腱膜恥骨縫際下ニ支撐スルヲ以テ後頭前額徑ハ通過面ト爲リ、之ニ伴フ軟部ノ強大ナル擴張ニ由リテ屢其斷裂ヲ來スコトアリ、故ニ兒頭ノ鉗子挽出術ヲ行フニ當リテハ隨意ニ回轉點ヲ選擇スヘシト雖モ特ニ注意ヲ要スヘキモノナリトス

軀幹ノ分娩ニ就キテハ敢



テ特筆スヘキモノアルコトナシ

丙 顔面位 Gesichtslage.

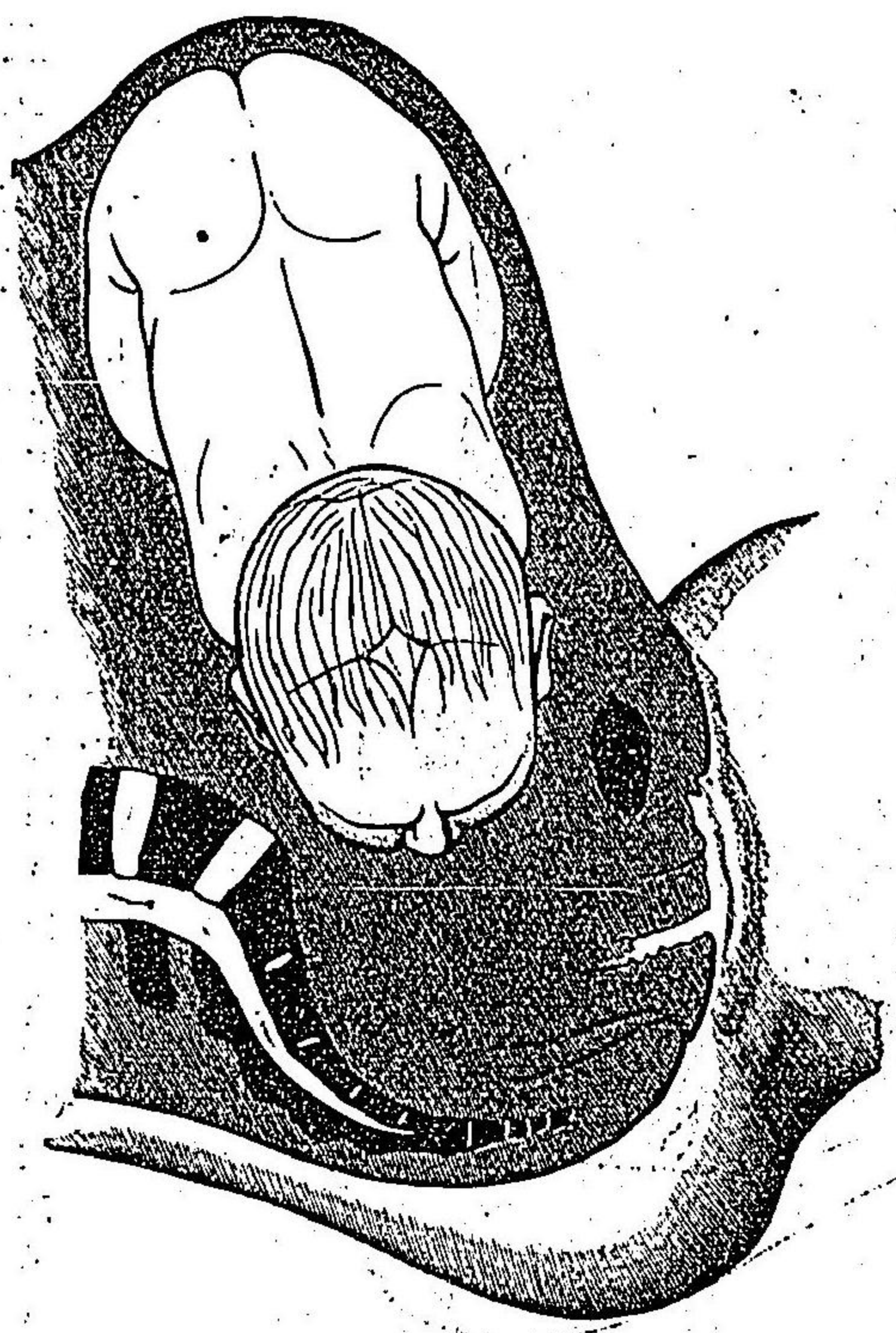
(イ) 良性回轉(腮部前方ニ在ル者)

Günstige Rotation, Kinn vorn.

顔面位ニ於ケル分娩器械的作用

顔面位ニ於ケル分娩器械的作用ハ頭蓋位ニ於ケルト同一ノ機轉ニ隨ヒテ完成スルモノナリ而シテ此場合ニ於テハ矢狀縫合ニ代フルニ顔面線ヲ以テス、反言スレハ前頭縫合ノ連續トシテ鼻ヨリ腮ニ向ツテ走レルニ線ヲ謂フ而シテ小顚門ノ代リニハ腮ヲ以テス、  
兒頭ハ著シキ伸展位ヲ呈シ、即チ頂部ヲ反轉シ、顔面線ヲ横徑ニ一致セシメテ骨盤入口ニ進入ス、  
屢兒頭ノ骨盤内ニ進入スルニ當リ未タ完全ナル顔面位ヲ

第三十五圖

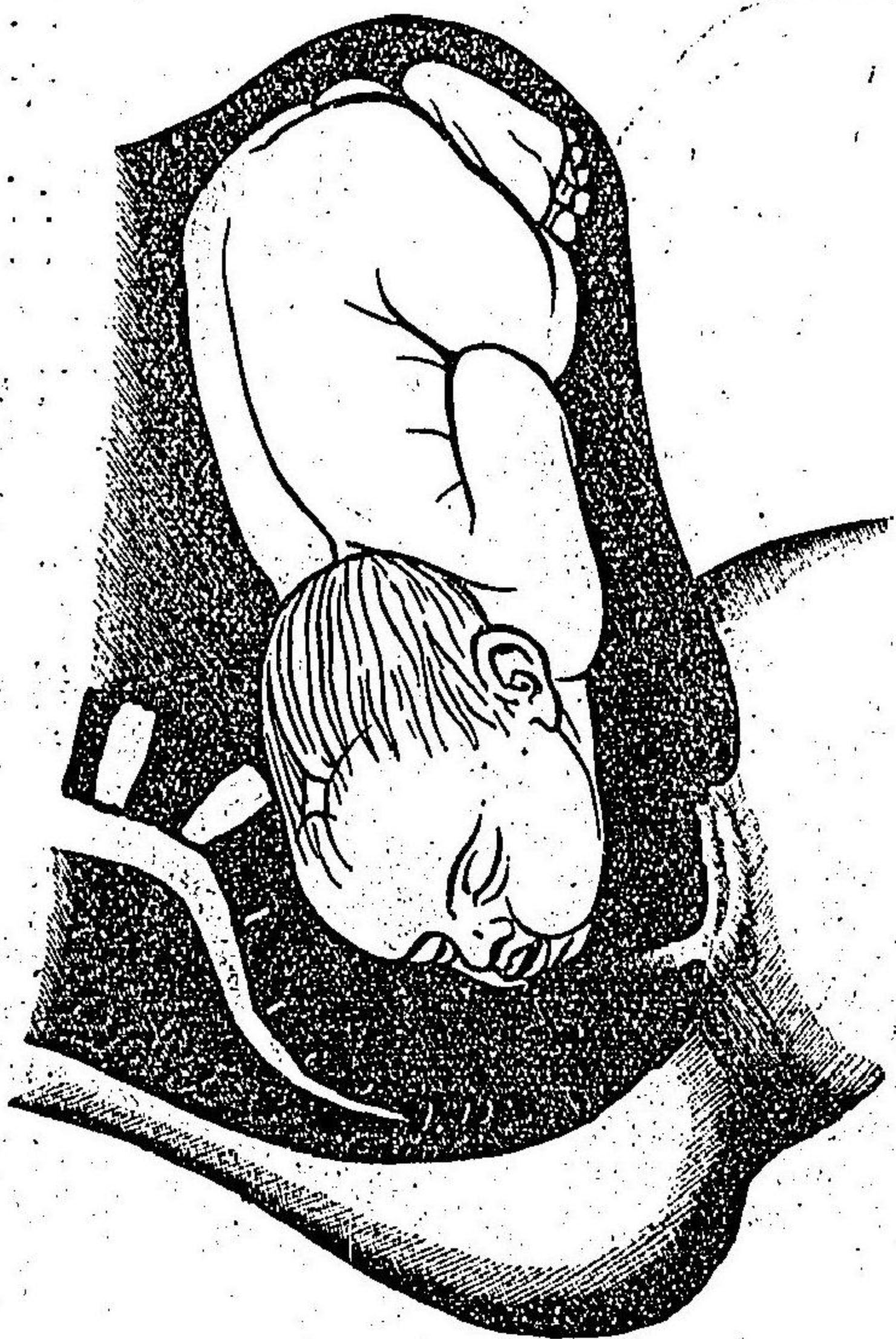


第二顔面位ニ於テ兒頭ノ骨盤内ニ進入スル狀ヲ示ス、  
顔面線ハ横徑ニ走り、腮ハ左側ニ向ヒ、兒背ハ右側ニ向フ



第三十六圖

第二顔面位ニ於ケル内回轉部前方ニ向フ者ヲ示ス  
顔面線ハ第一斜徑ニ走り、腮ハ沈降シテ左前方ニ向ヒ、兒背ハ右側ニ向フ

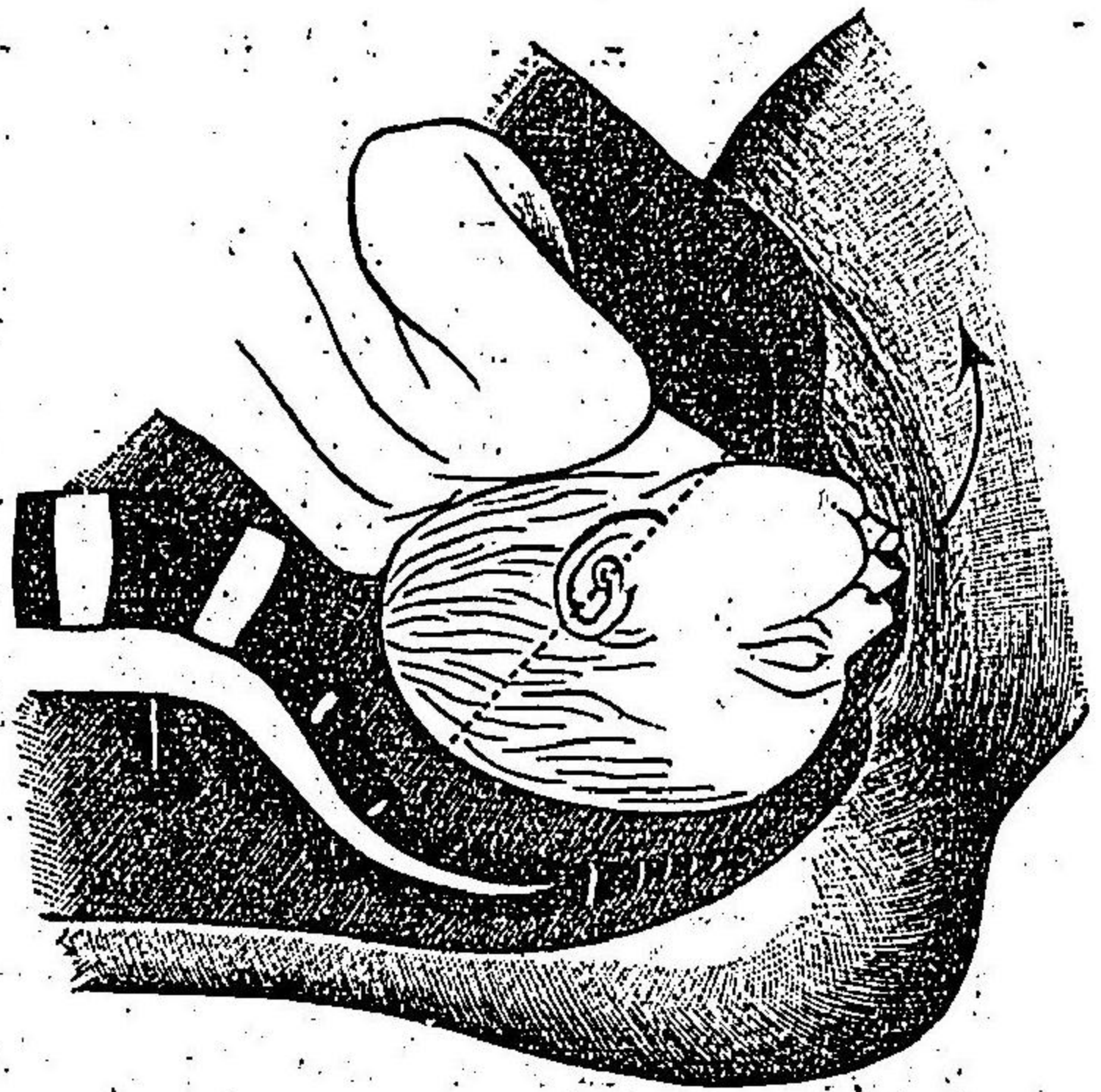


骨盤通過ノ際ニ於ケル内回轉ノ狀況

呈セサルコトアリ、例之兒頭骨盤入口ニ於テ始メテ顔面位ノ伸展状態ニ回轉スルカ如シ、是レ後頭ノ無名線上ニ支撐セラル、カ故ナリ  
骨盤通過ノ際ニ於ケル内回轉ノ狀況ハ兒背右側ニ向フ者、即チ第二顔面位(第三十六圖)ニ在リテハ腮部沈降シテ左前方ニ向ツテ回轉スルカ爲メニ顔面線ハ第一斜徑ニ停留ス  
内回轉全ク了ルトキハ兒頭ハ最強度ノ伸展位ヲ呈シテ骨盤底ニ存シ、腮ハ恥骨縫際下ニ在ルヲ以テ頸下顎隆起ノ陷凹ハ恥骨縫際ノ後壁ニ密接シ、顔面線ハ殆ント前後徑ニ走ル  
兒頭ノ排出ハ最強度ノ伸展ヨリ屈曲ニ轉スルニ因リテ成就ス、此際不良ナルハ狹隘ナル骨盤弓内ニ於テ後方ニ壓縮セラル、頸椎カニ且完全ナル伸展状態ヲ經過シタル後屈曲状態ニ移行セサル可カラサルノ一事トス(カルテンバツ



第三十七圖



第二顔面位ニ於ケル内回轉ノ完成(腮部前方ニ在ル者)ヲ示ス、顔面線ハ殆ント前後徑ニ一致シ、兒頭ハ極度ニ伸展シ、矢ノ方向ニ率學シ、通過面ハ後氣管體壁徑ナリ

ハ(Kaltenbach氏)  
兒頭ノ排出力ハ後頭位ニ於ケルトキト同一ナリ、故ニ前頭位ニ比スレハ廻カニ良性ナリトス、此際恥骨縫隙下ニ回旋點トナリテ支撐スルモノハ頸椎ニシテ腮ニ非ラサルカ故ニ、後氣管體壁徑(第三十七圖)ハ即チ通過面ニシテ、頭蓋位ニ於ケル通過面ヨリハ僅カニ大ナルノミ、故ニ兒頭ノ顔面位ニ於

テ排出スル場合ニハ後頭位ニ於ケル分娩ニ比スレハ毫モ軟部ニ強度ノ擴張ヲ致スコトナシ  
兒頭ノ陰門外ニ排出スル際ニハ腮部先ツ現出シ、口、鼻、額、前



第三十八圖

第二顔面位ニ於ケル兒頭ノ排出運動(腮前方ニ在ル者)ヲ示ス、兒頭ノ屈曲位ニ移行シ、矢ノ方向ニ率學ス



頭之ニ亞キ而シテ後頭又之ニ亞ク

(ロ)不良回轉(腮部後方ニ在ル者)

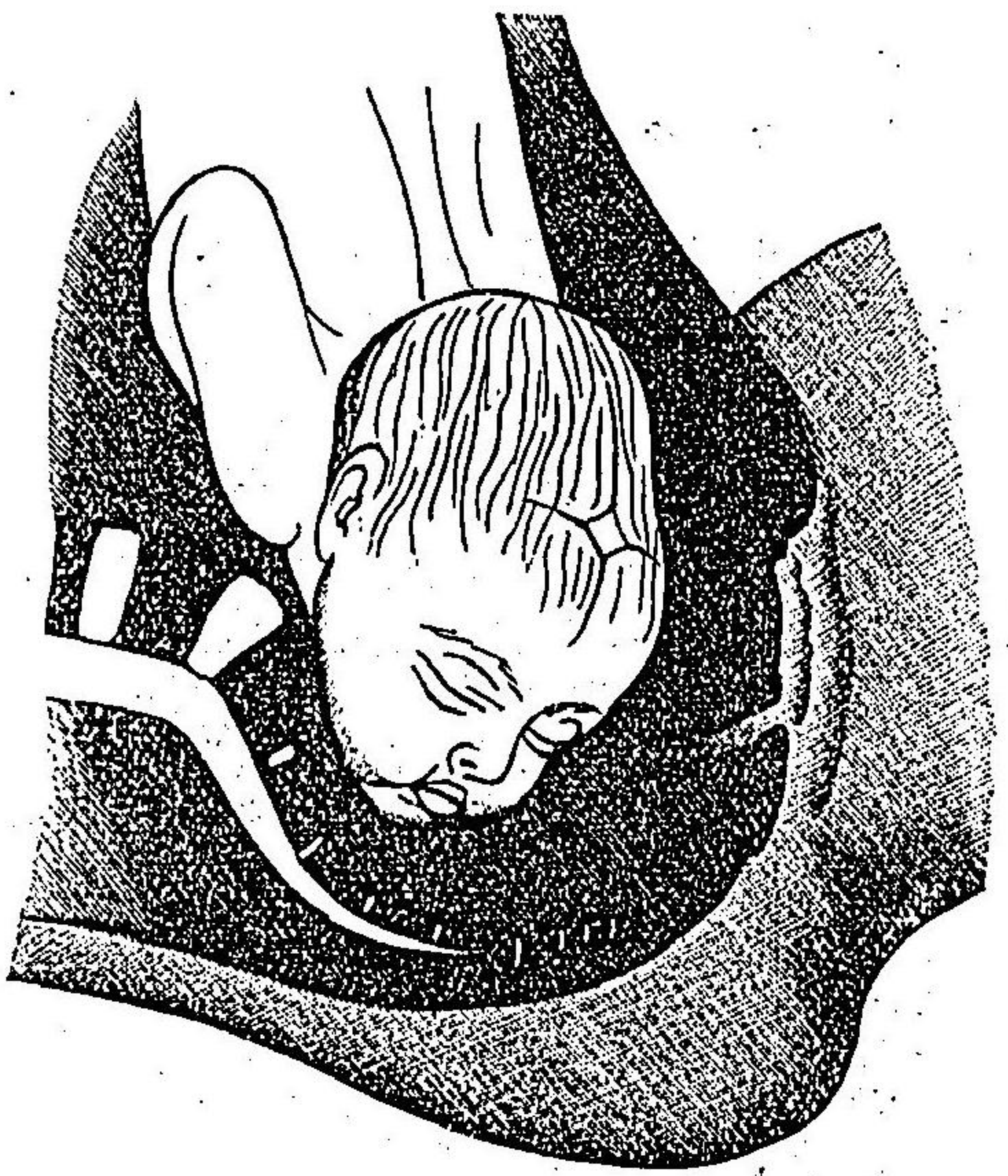
Ungünstige Rotation, Kinu hinten.

顔面位ニ於ケル異常回轉

後頭位ニ於テ異常回轉ヲ來スヤ後頭ハ前方ニ回轉セス、時トシテ後方ニ回轉スルカ如ク、顔面位ニ於テモ亦稀レニ腮部前方ニ向ハス、後方ニ向ツテ回轉スルコトアリ、此ノ如キ場合ニ於テハ通常分娩全ク停滯シ、腮部娩出スルコト能ハサルモノナルカ故ニ、特種ノ名稱ヲ附スルノ要ナシ、只第一及ヒ第二顔面位ノ區別ヲ立テ、腮ノ方向ヲ以テ其位置ヲ示シ、腮部前方若クハ腮部後方ニ向フト謂フノミ

腮部骨盤ヲ通過スルノ際後方ニ向ツテ回轉スルトキ、即チ第二顔面ニ於テハ顔面線ハ第二斜徑ニ走ル

亞テ兒頭ハ骨盤底ニ於テ再ヒ過度ノ伸展ヲ爲シ、顔面線ハ



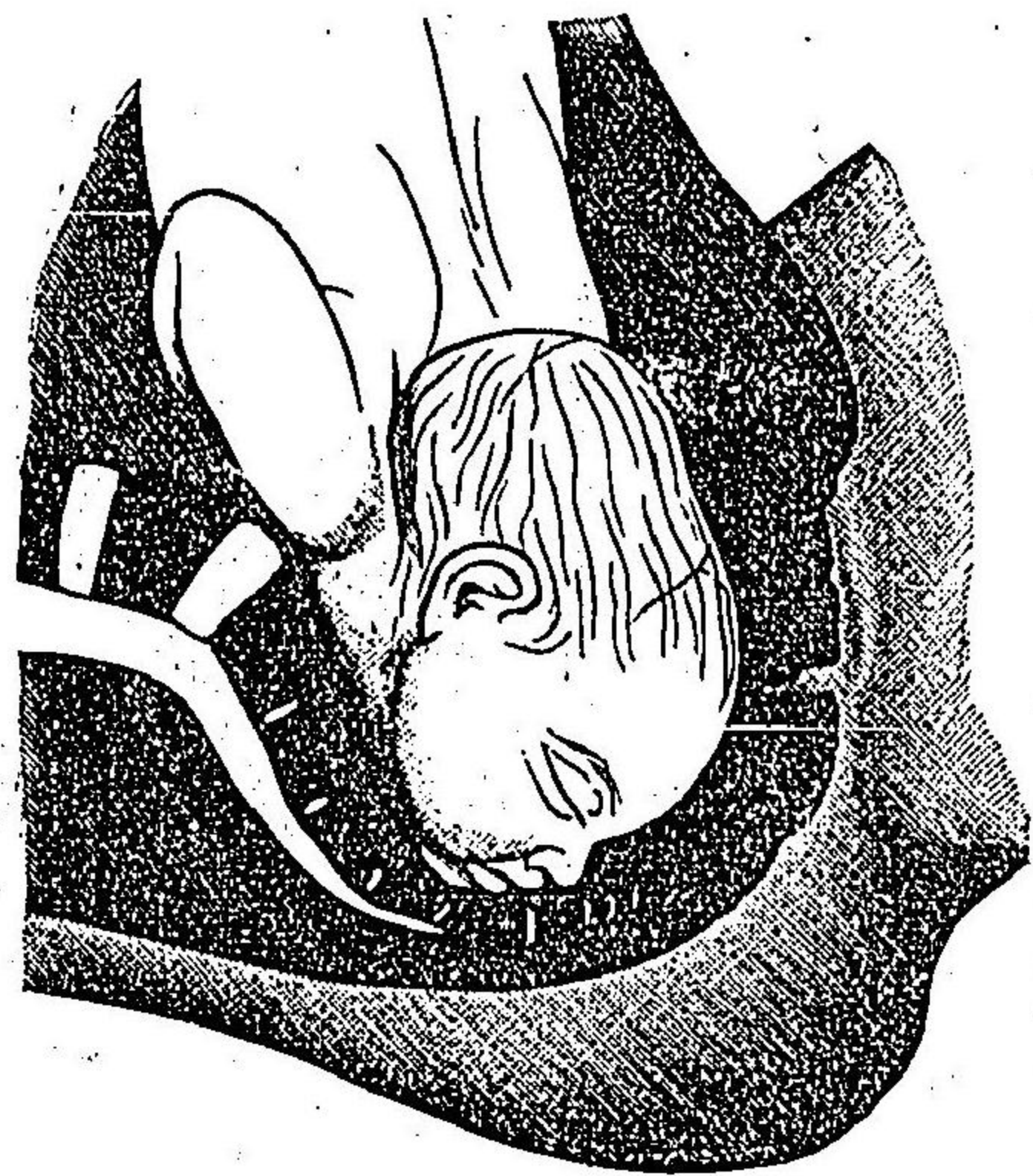
第三十三圖

第二顔面位ニ於テ腮部後方ニ向ヘル不良回轉ヲ示ス  
顔面線ハ第二斜徑ニ走ル

殆ント前後徑ニ一致シ、腮ハ左側ノ薦骨腸骨關節接合ノ部位ニアリ

故ニ排出器械的作用ハ此際全ク不能ナリトス、如何トナレハ此ノ如キ體狀及ヒ胎向ニ於テハ兒頭ト脊柱ハ牽起ノ狀





第十四圖

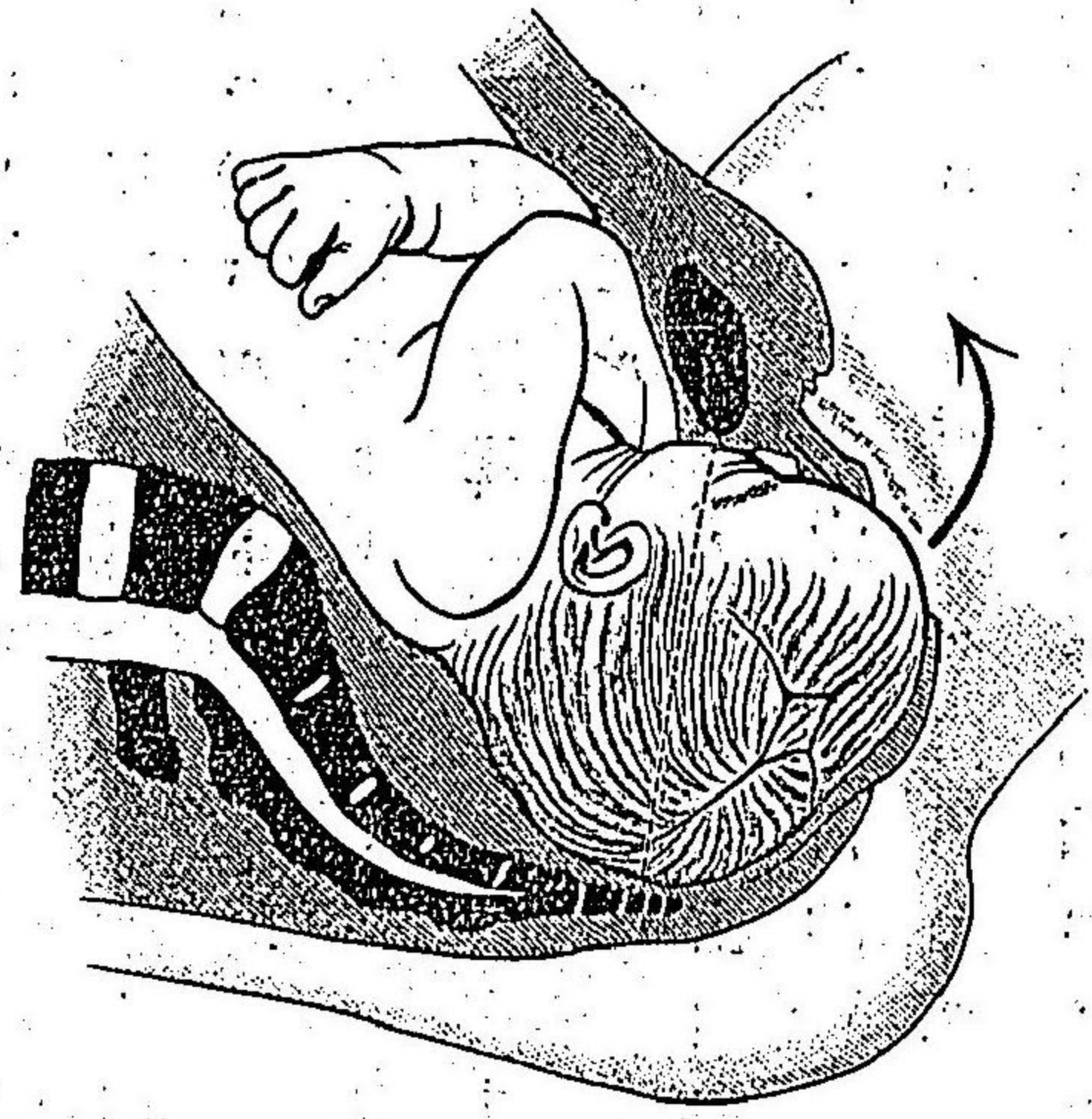
第二顔面位ニ於ケル回  
轉ノ完成臍部後方ニ向  
ヘル不真回轉ヲ示ス  
顔面線ハ殆ト前後徑ニ  
走り兒頭ハ極度ニ伸展  
ス

態ニ於テ恥骨縫際ノ周圍ヲ回轉スルコト能ハサレハナリ、  
臍部復々前方ニ向ツテ回轉セサルトキハ即チ人工介輔ヲ  
藉ルニ非スンハ胎兒ノ排出ヲ完成スルコト能ハサルナリ

### 丁 額位 Stirnlage.

額位ニ於テハ兒頭顔面位及ヒ後頭位ニ於テ取リタル體狀  
ノ殆ント中間ニ位スル伸展位ヲ占ム、往々兒頭前進ノ際、頭  
部ノ伸展若クハ屈曲ニ因リテ額位ノ自ラ顔面位若クハ後  
頭位ニ變スルコトアリ  
兒頭額位ニ於テ止マルドキハ兒頭ハ前頭縫合ヲ横ニ向ケ  
テ骨盤内ニ進入シ、骨盤底ニ至リ始メテ回轉シ、前頭縫合斜  
徑ノ一ニ來ルコトアリ  
陰門ヲ通過スルノ際ニハ上顎ノ一側支點トナリテ恥骨縫  
際ニ支撐ス(第四十一圖)、内腔的ニ佳良ナル場合ニ於テ兒頭  
ノ排出スルヤ、眼及ヒ前額先ツ陰門内ニ現出ス而シテ兒頭  
ノ同時ニ前後左右ニ屈曲スルヤ、頸胸二椎ノ關與ニ因リテ





第四十一圖

第二額位ニ於ケル内回轉ノ完成ヲ示ス  
前頭縫合ハ第一斜徑ニ走り、矢ノ方向ニ牽擧シ、通過面ハ上顎ヨリ後頭ニ達ス

其極度ニ達スルヲ以テ前頭顱頂及ヒ後頭ハ逐次會陰上ニ排出シ、會陰縮退シテ頂部ニ達スルノ後ハ顔面位ニ於ケルカ如ク兒頭伸展スルヲ以テ顔面ノ殘部タル上顎下部、口及

額位ノ排出時ニ於ケルノ不良

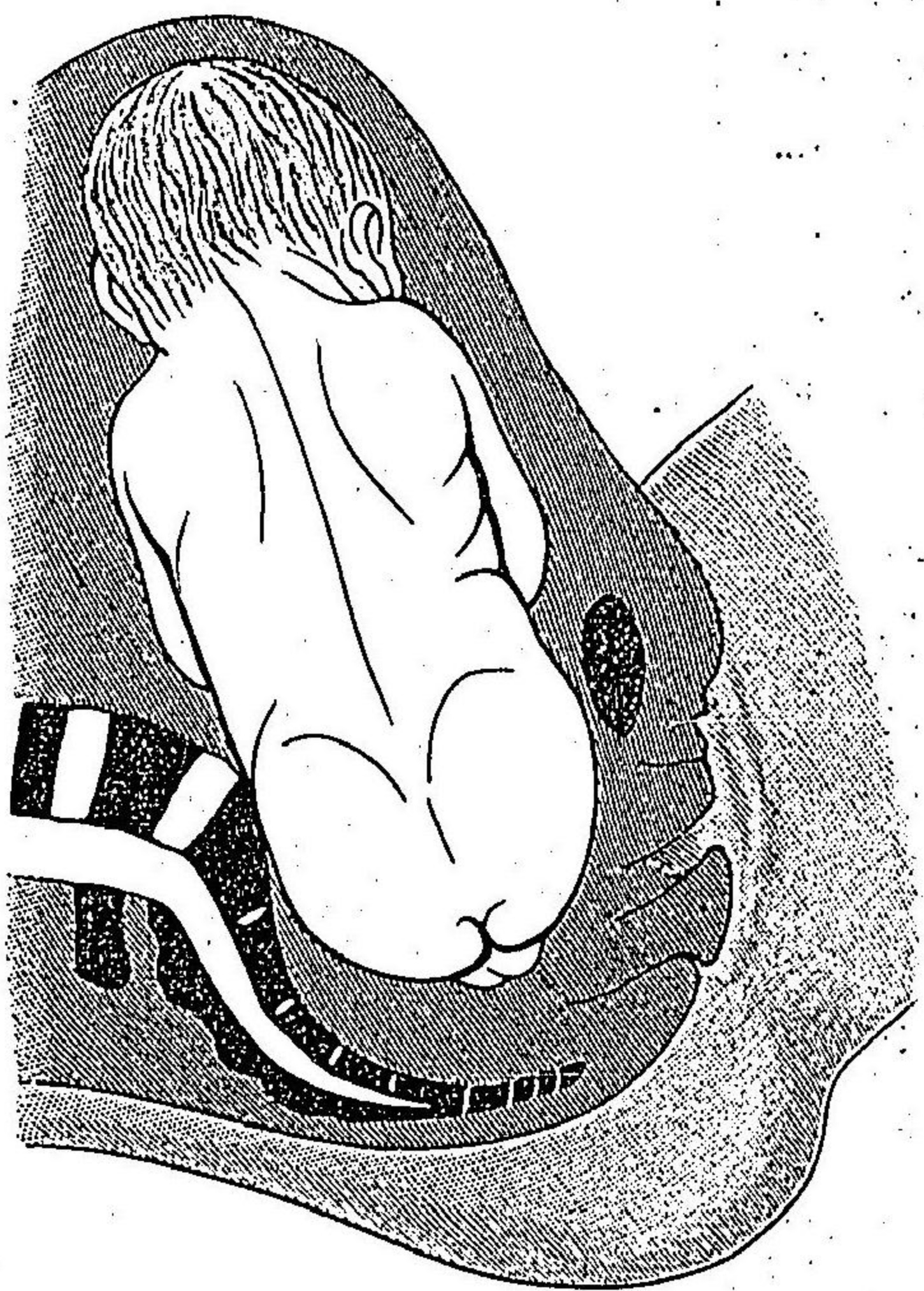
ヒ腮ハ恥骨縫際下ニ現出スヘシ  
故ニ顔面位ノ排出器械的作用ニ對比シ額位ノ排出時ニ於ケルハ不良ハ、兒頭著シキ伸展ヲ呈セス、其排出力モ亦迥カニ微弱ナルニ在リ、況ンヤ尙ホ通過ヲ困難ナラシムル原因トシテ通過面タル上顎ヨリ後頭ニ達スル周徑ノ著シク増大セルモノアルニ於テヤ、是レ此周徑ハ頭蓋ノ最大徑ニ屬スルヲ以テナリ  
故ニ額位ニ於テハ排出極メテ困難ナルモノニシテ、只小胎兒ニアリテ母體ノ方面ヨリスル強大持續性ノ排出力ニ依リテノミ自然ノ分娩ヲ成就シ得ルモノナリ、若シ他ノ良性ナル胎位ヲ成シ得サル限リハ兒頭ノ穿顱縮小ニ依リテ分娩ノ道ヲ造爲スヘキ人工介輔ニ依ルニ非サレハ分娩ヲ完了スルコト能ハサルヲ常トス



戊 骨盤端位 Beckenendlagen.

尾骶位一名臀位 Steisslage.

骨盤端ハ頭顱ノ如ク關節ニ由リテ軀幹ト連結スルモノニ非サルカ故ニ、此際脊柱ノ隣接部タル腰椎ハ頭位ニ於ケルヨリモ一層多ク先進部ノ回轉ニ伴ハサルヘカラス、然レトモ脊柱ノ運動性ハ決シテ關節ノ運動性ニ等比スルモノニ非ス、故ニ此際排出器械的作用ニ於ケル先進部ノ最強運動ハ一層困難ニ且ツ緩慢ニ成就スルノミナラス亦持續性ノ強大ナル分娩力ヲ要スルモノナリ、而シテ臀部ノ骨盤内ニ於ケル進入及ヒ通過ハ頭蓋位ニ於ケルトキト同一ノ法則ニ從ツテ成就ス、即チ先進部ノ大徑タル、膈骨廣部ハ骨盤入口ニ於テ殆ント横徑ニ位シ、骨盤廣部及ヒ骨盤狹部ニ於テ

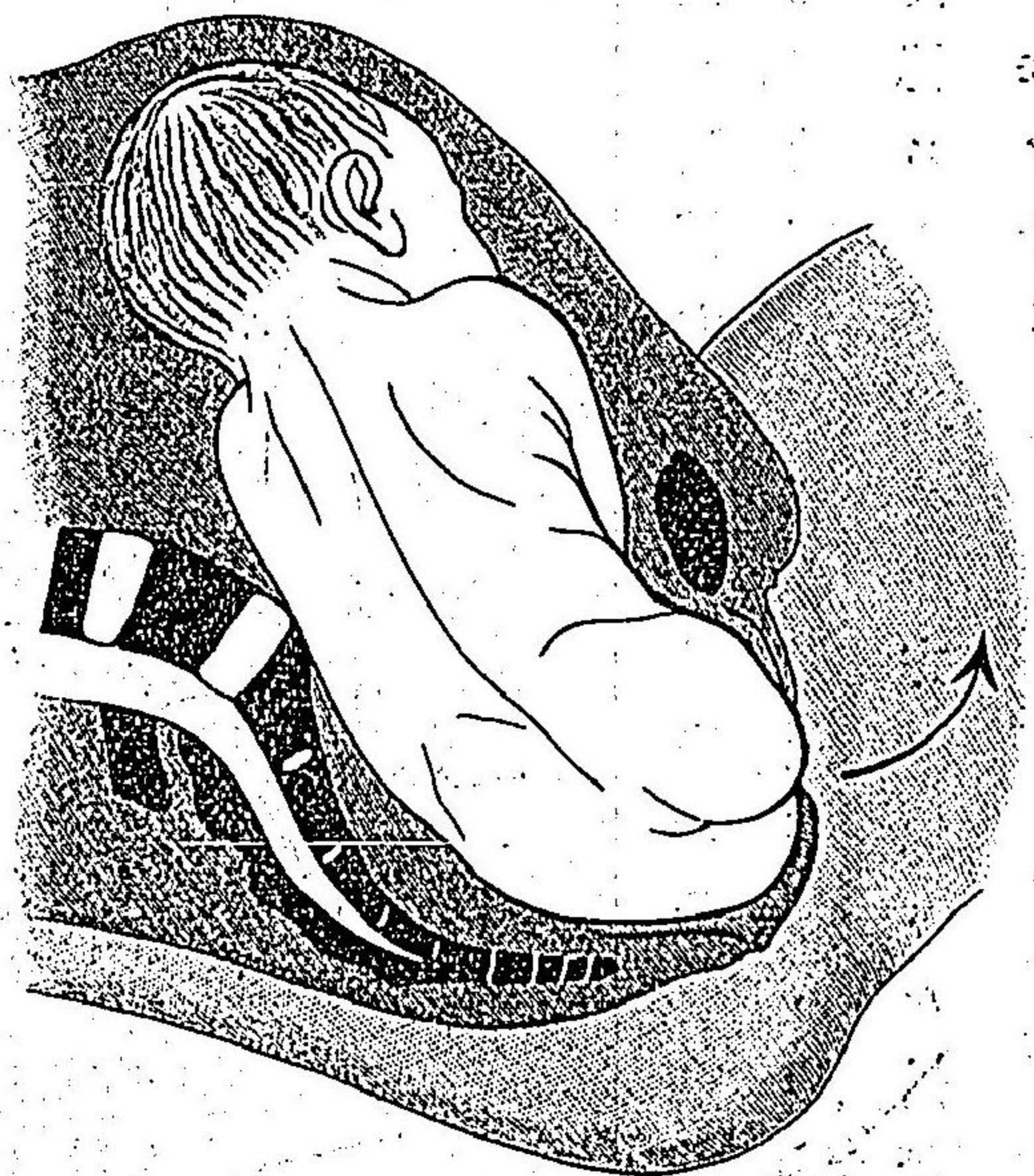


圖二十四第

骨盤廣部ニ於ケル第二尾骶位ヲ示ス

斜徑ニ回轉シ而シテ最後ニ骨盤出口ニ於テ前後徑ニ回轉ス、此際前方ニ位スル尾骶半部ハ胎兒骨盤ノ矢狀軸ニ從ツテ回轉スルヲ以テ後方ニ位スル尾骶半部ヨリモ深ク下降スルモノナリ

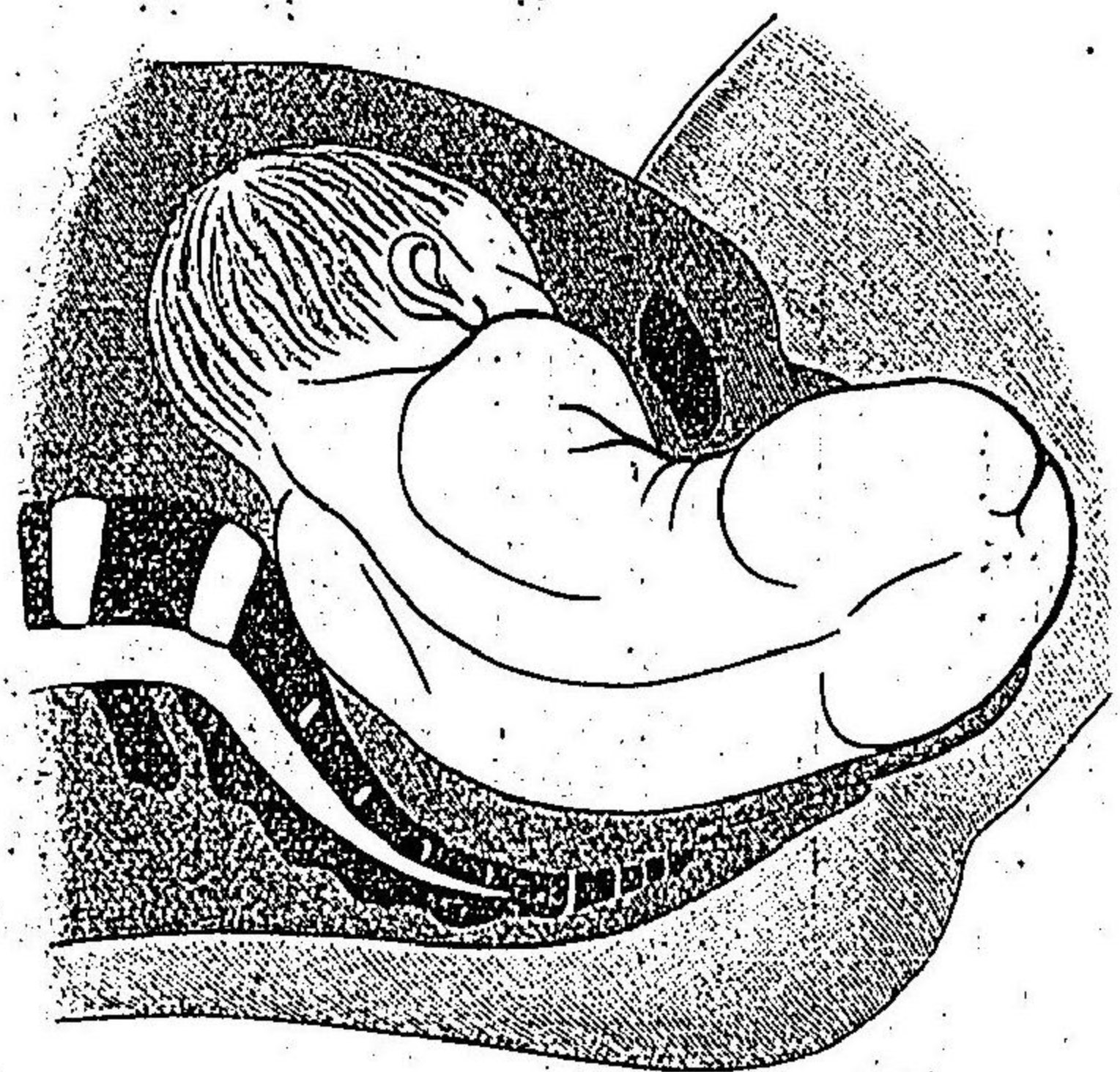




圖三十四第

骨盤出口ニ於ケル第  
二尾骶位  
腰椎ノ側方屈曲、矢ノ  
方向ニ於ケル高舉ノ  
始起ヲ示ス

排出運動ハ腰椎ノ強大ナル側彎(第四十四圖)ニ由リテ完成  
スルモノニシテ、此際臍部ハ恥骨縫際下ニ支撐ス  
今ヤ胎兒ノ體狀ハ全ク正規ニシテ此際殊ニ上肢ハ胸壁前



圖四十四第

第二尾骶位ニ於ケル  
臀部ノ排出運動、極度  
ノ側方屈曲ヲ示ス

ニ於テ屈曲シ、兒頭ハ臍ト共ニ胸壁上ニ沈降シ、下後頭前額  
徑ハ最大徑ヲ成スヲ以テ、次回ノ陣痛ト共ニ尾骶部ノ排出  
スル後、軀幹ノ上部ト頭部ハ自然ニ分娩スルコトヲ得ヘシ



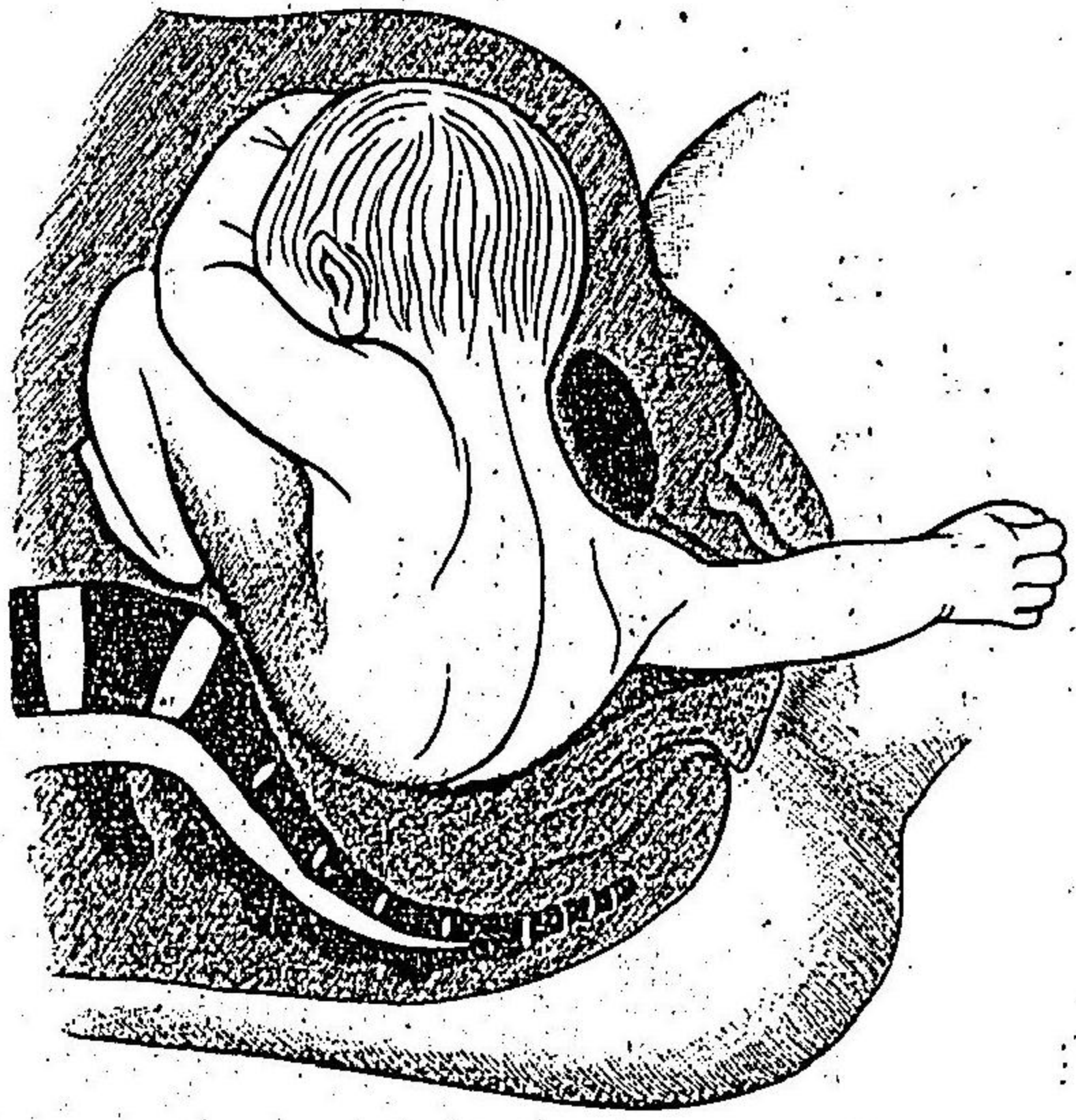
之ニ反シテ胎兒ノ體狀ニ變化ヲ來シ、上肢ハ兒頭ニ沿フテ  
 高ク翻轉シ、兒頭ハ屈曲位ヨリ骨盤通過ニ不良ナル體狀ニ  
 戻歸スルカ、(第三圖ヲ參照スヘシ)或ハ兒頭ノ巨大ナルカ爲  
 メカ、若クハ骨盤狹窄ノ爲メ分娩ニ困難ヲ來ストキハ直チ  
 ニ後文挽出術ノ條下ニ説述スル方法ニ依リテ處置セサル  
 可カラス、如何トナレハ臍部分娩スルノ後、臍帶ノ壓迫ヲ受  
 クルカタメニ胎兒ヲシテ瞬時甚タ危険ニ陥ラシムレハナ  
 リ  
 膝位及ヒ足位ハ臨牀的經過ニ於テモ治療上ニ於テモ尾骶  
 位ト敢テ差等アルコトナシ

己 横位 Querlagen.

自己産出  
 首體複合産出

横位ハ純然タル病的位ニ屬シ、毎常人工介輔ヲ藉ルニ非  
 サレハ自然ノ分娩ヲ遂クルコト能ハサルモノナリ  
 然レトモ稀レニ胎兒ノ自然的娩出ヲ來スヘキ二種ノ現象  
 アリ、自己産出及ヒ首體複合産出ナルモノ是ナリ、此二現象  
 ヲ來スニハ元來獨リ敗死、壓潰セル胎兒若クハ全ク矮小ナ  
 ル胎兒ニノミ見ルカ如ク、全ク異常的ナル全脊柱ノ可動性  
 ヲ存シテ胎兒ヲ護謨狀ニ彎曲セシムル一種ノ特性ヲ要ス  
 ル場合ナリ  
 自己産出(第四十五圖、第四十六圖及ヒ第四十七圖)ノ狀況ヲ  
 觀察スルニ、胎兒ハ先ツ横位ヲ取リテ上肢ヲ脱出シ、而シテ  
 上肢ニ附屬スル肩胛ハ強ク脱延シテ骨盤内ニ進入シ、項部  
 ト頸側部ハ恥骨縫際ノ後縁ニ支抵シ而シテ兒頭ハ恥骨縫  
 際上若クハ其側方ニ在リ  
 骨盤後壁即チ薦骨窩ニ於テハ脊柱ノ全部極度ニ屈曲シテ





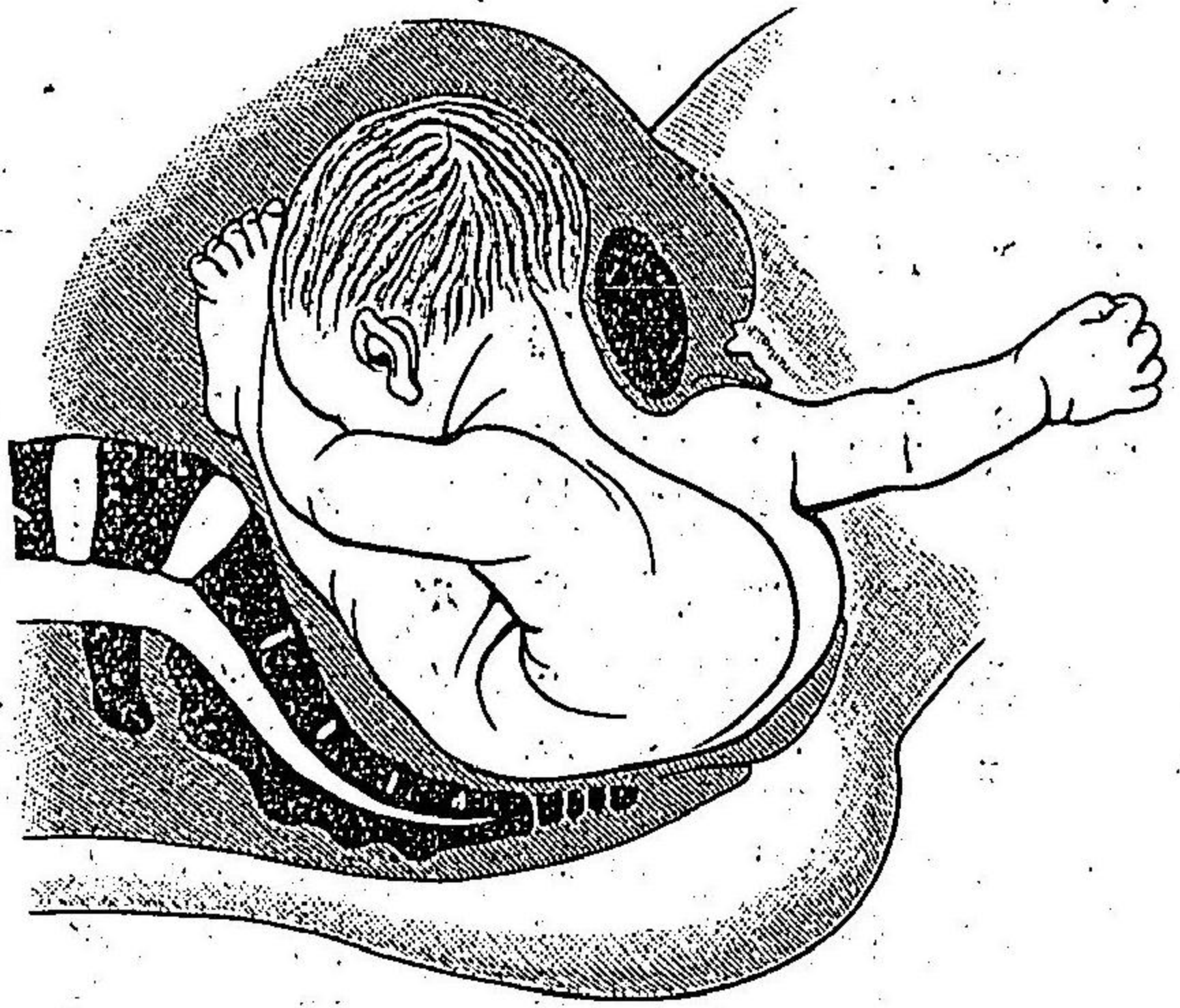
第四十四圖

横位ニ於ケル自己  
 産出ノ第一機轉ヲ  
 示ス(ツワイフェル氏  
 ニ據ル)  
 前進肩胛ハ低位ニ  
 存シ、軀幹ハ壓縮ス

兒背ハ下降ス而シテ胎兒ノ軀幹ハ漸徐ニ轉移シ、骨盤端ハ  
 肩胛ノ側方及ヒ後方ニ於テ深ク前進ス、排出ノ際ニハ先ツ  
 肩胛現出シ、次テ胸部腹部相亞テ現出シ、終リニ尾骶部下肢

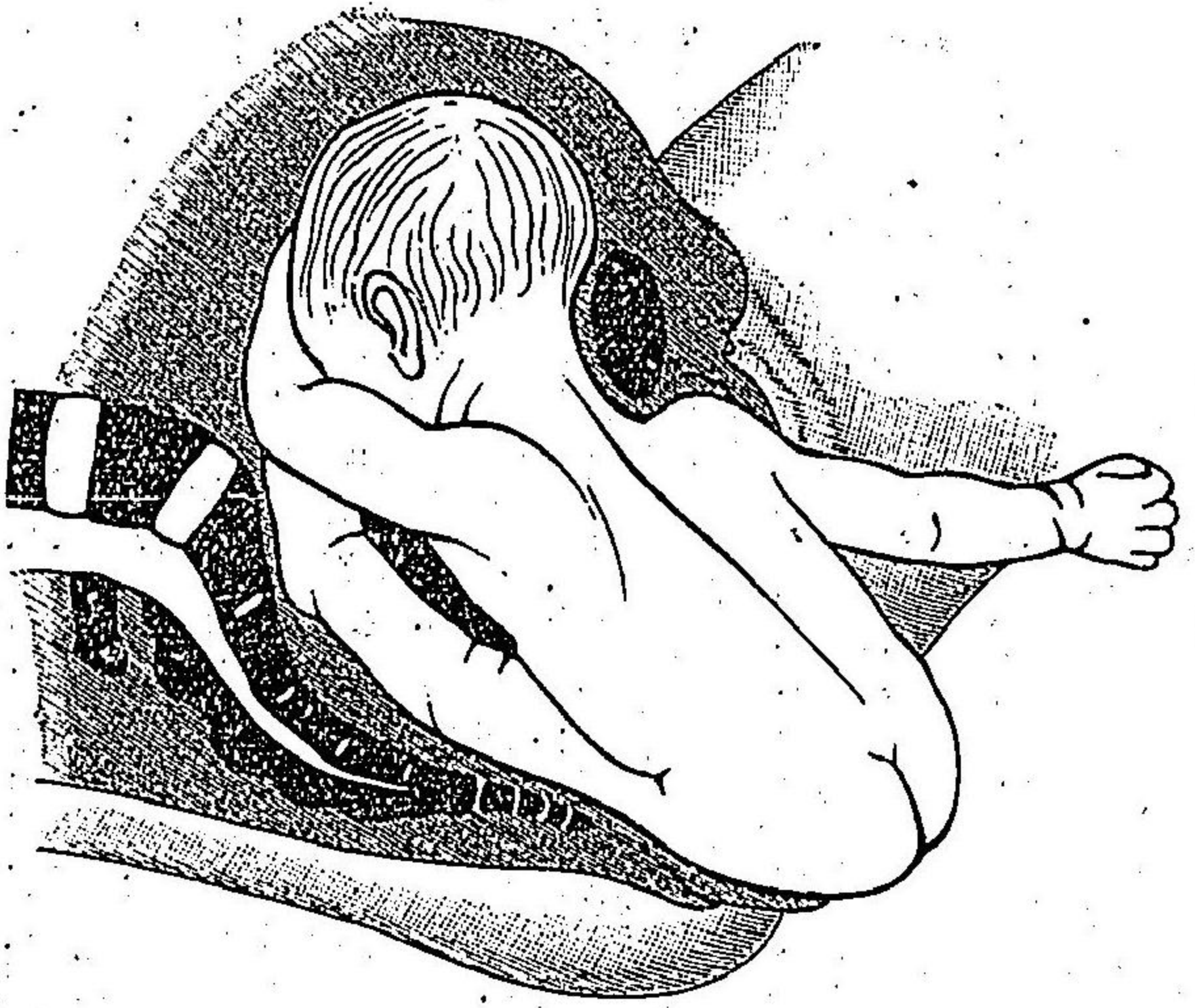
第四十六圖

横位ニ於ケル自己産出機  
 ノ第二機轉ヲ示ス  
 臀部ハ骨盤後壁ニ脱下ス



第四十七圖

横位ニ於ケル第三機轉  
 臀部ノ産出ヲ示ス





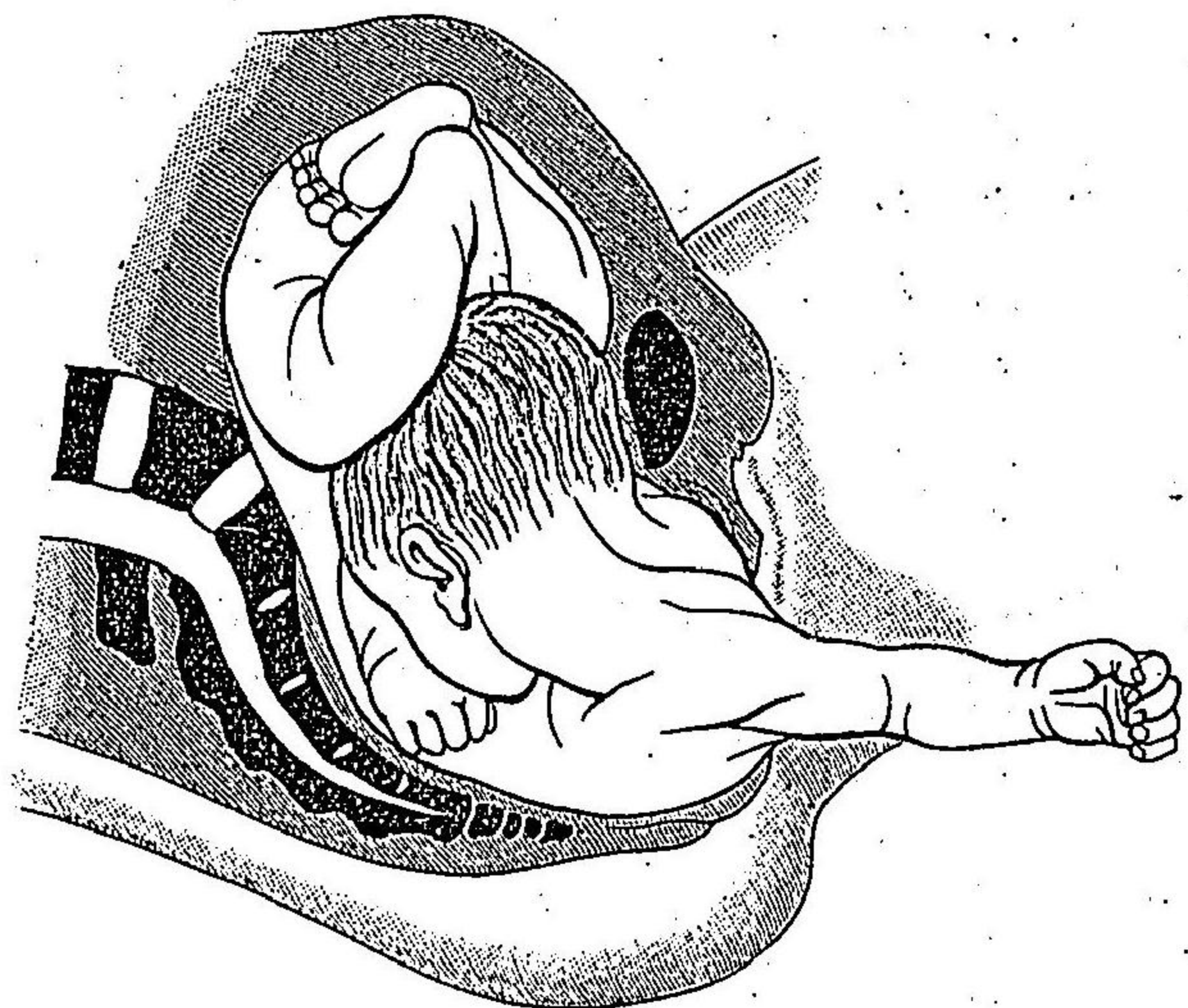
ト共ニ現出シ以テ軀幹ノ分娩ヲ終ル(第四十六圖、第四十七圖)、頭部ハ骨盤端位ニ於ケル如ク後進部トナリテ排出ス。横位ニ於テ首體複合胎兒ノ排出スルヤ胎兒ハ必ス強ク壓縮セラル、モノニシテ、此機轉ハ一層稀少ニ屬シ只未熟胎兒ニ於テ之ヲ見ルノミ。

此種ノ產出ニ於テハ骨盤ヲ通過スルノ際自己產出ニ於ケルカ如キ脊柱ノ轉移ヲ致スコトナシ。

先ツ前方ニ位スル肩胛ハ之ニ附帶スル上肢ノ脱出ヲ伴フテ骨盤内ニ進入ス、然レトモ今ヤ頭顱ハ胎兒ノ腹部ニ壓迫セラル、爲メ、軀幹及ヒ頭部ハ合體シテ同時ニ骨盤ヲ通過ス(第四十八圖)。

横位ニ於テ分娩セントスル胎兒ノ自然產出ヲ來スヘキ第三ノ現象ハ所謂自己回轉ナルモノ是ナリ、此際ニハ骨盤入口上ニ正規ノ器械的作用ヲ發揮スルコトナキモ尙ホ可動

自己回轉



圖八十四第

横位ニ於ケル首體複合產出ヲ示ス

性ナル胎兒ハ自然ニ漸次横位ヨリ頭蓋位或ハ尾骶位ニ移



行スルモノナリ

追加

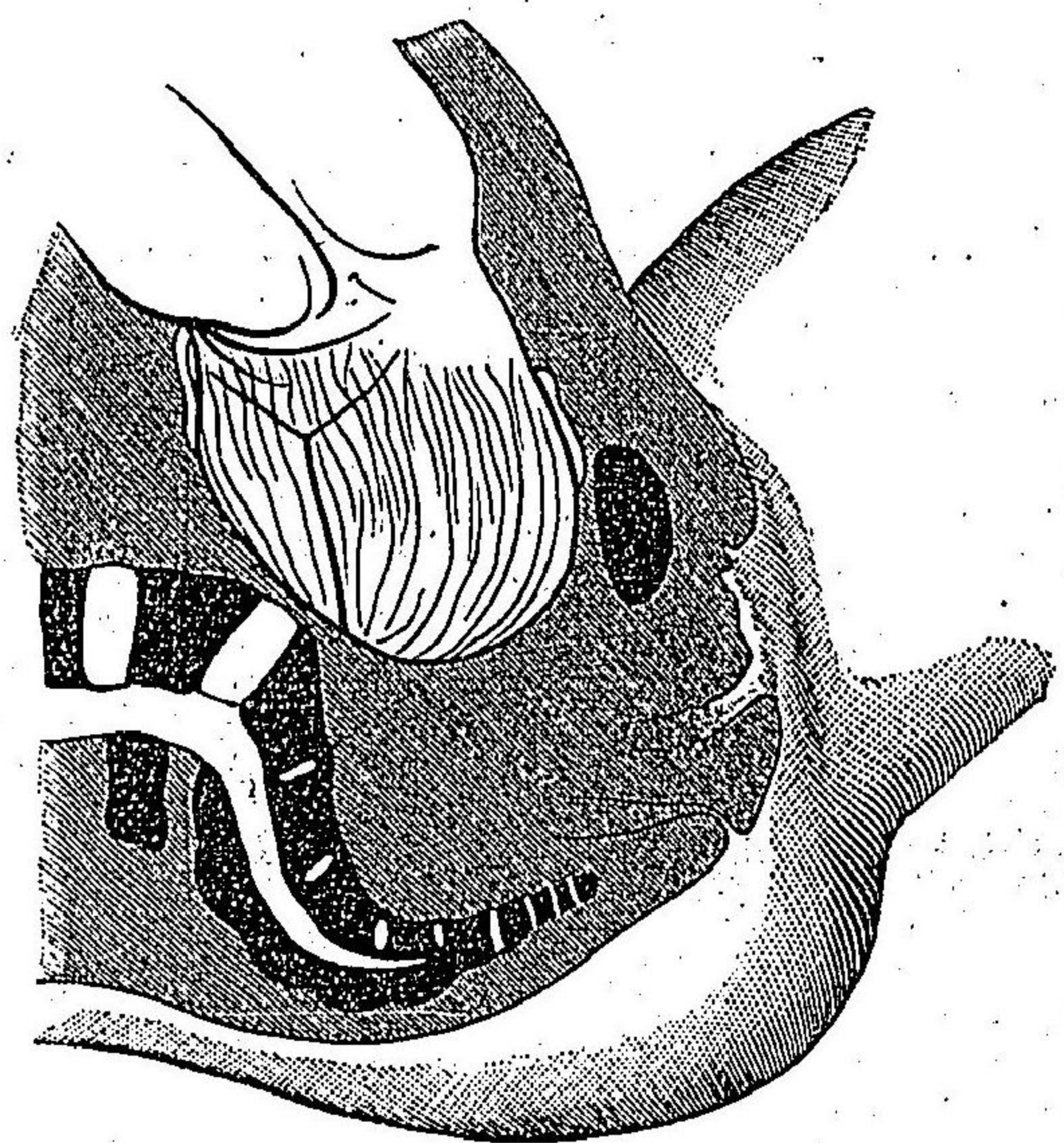
狹窄骨盤ニ於ケル病的分娩器械的作用

Pathologischer Einstellungsmechanismus bei engem Becken.

扁平骨盤  
一般平等狹窄骨盤

扁平骨盤及ヒ一般平等狹窄骨盤ニ於テハ兒頭骨盤入口ニ  
進入スルノ際、正規ノ排臨器械的作用ト全ク特殊ナル定型  
的異常ヲ呈スルモノニシテ、諸他ノ症ニ比スレハ甚タ多キ  
狹窄症ナルカ故ニ之カ研究ハ決シテ忽ニスヘカラサルナ  
リ  
異常定位トハチーゲル氏矢狀縫合斜傾、前或ハ後顛頂骨位

異常定位



圖九十四第

尙使病性扁平骨盤  
ニ於ケル前顛頂位  
ヲ示ス(シユレール  
氏ニ據ル)  
チーゲル氏矢狀縫合  
斜傾ヲ呈ス

及ヒ後頭骨位ヲ總稱スルモノナリ  
チーゲル氏矢狀縫合斜傾ノ成就ハ兒頭カ前額後頭軸ヲ回  
轉スルニ因ルモノニシテ即チ兒頭ハ側方ニ向ツテ屈曲シ、



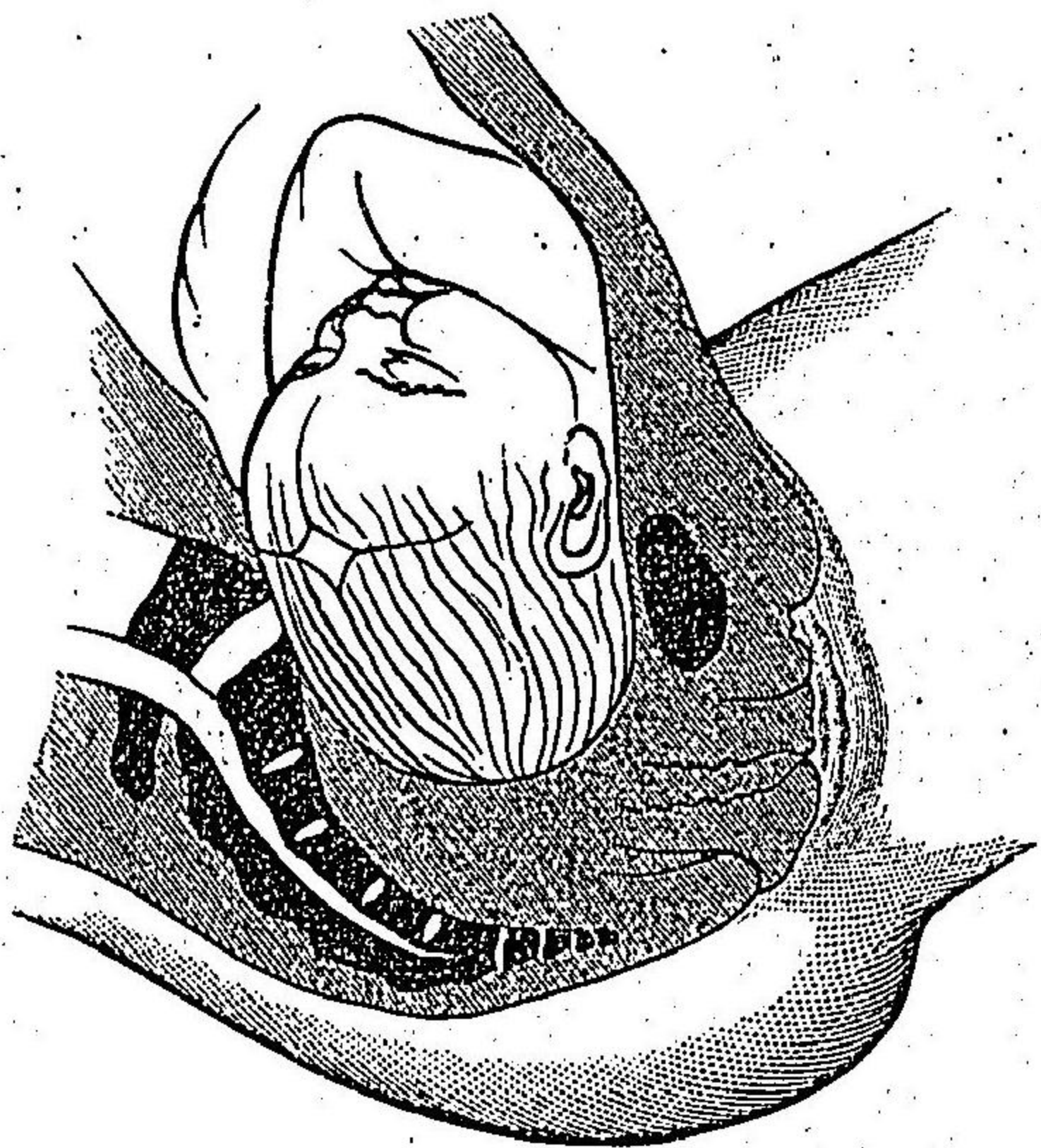
矢狀縫合ハ骨盤ノ中央ニ走ラス、却テ薦骨岬ニ接近スルヲ以テ、兒頭ノ先進部ハ前方ニ位スル部分、即チ第二頭蓋位ニ於テハ左側ノ顱頂部ヨリ成ル(第四十九圖)

嚮キニ述ヘタルカ如ク、輕度ノ矢狀縫合斜傾ハ正規ノ骨盤ニモ之ヲ見ルト雖トモ、扁平骨盤ニ於テハ薦骨岬ノ隆起強キカ爲メ第四十九圖ニ示スカ如ク矢狀縫合ハ後方ニ向ツテ極度ニ回轉スルニ至ル

此矢狀縫合斜傾ヨリモ較稀レニ兒頭ノ前額後頭軸ヲ反對ニ回轉スルコトアルカ爲メ矢狀縫合ハ恥骨縫合ノ近部ニ走リ、先進部ハ顱頂骨ノ後部ヨリ成ル(リッツマン氏)此際回轉ハ甚タ顯著ニシテ、後方ニ位スル耳部ヲ子宮口内ニ觸知スヘシ(耳位)此或ハ後チ顱頂骨位ニ於テ兒頭ハ同時ニ橫軸ヲ回轉シ、前頭ハ後頭ヨリモ低位ニ在リ(第四十九圖)一般狹窄骨盤ニ於テハ兒頭已ニ骨盤入口ニ於テ極度ニ屈

リッツマン氏回轉

後頭骨位



圖十五第

一般平等狹窄骨盤ニ於ケル後頭骨定位ヲ示ス  
兒頭ハ強ク沈降シ小顱門ハ低位ニ在リ

曲シ、小顱門ハ大顱門ヨリモ低位ニ在リテ、兒頭ノ先進部ハ後頭ヨリ成ル、之ヲ後頭骨位トナス(第五十圖)



産科手術ノ概要 Übersicht der geburtshilflichen Operationen.

分娩ヲ分ツテ開口期、排出期及ヒ後産期ノ三期ト爲スカ如ク、亦産科手術ヲ左ノ三大部類ニ分ツ

(第一)準備手術(開口期)

(イ)産道ヲ人工的ニ開擴スル法(子宮口、膈及ヒ外生殖器)

(ロ)卵胞破開法

(ハ)人工早産及ヒ流産ノ催進法

(ニ)回轉術

(ホ)脱出部(臍帶、上肢)ノ整復

(第二)遂娩手術(排出期)

(イ)生活胎兒ヲ天然産道ヨリ遂娩セシムル法

(一)鉗子手術

(二)用手的挽出術

(ロ)縮小胎兒ヲ天然産道ヨリ遂娩セシムル法

(一)碎頭器或ハ「クラニオクラスト」ヲ以テスル穿顱術

(二)斷頭術、截胎術

(ハ)生活胎兒ヲ人工産道ヨリ遂娩セシムル法

(一)帝王截開術

(二)恥骨縫際截開術

(三)子宮外妊娠ニ於ケル腹壁截開術

(第三)壓出法及ヒ後産ノ用手的排除

以下記載スル所ハ特ニ産科模型ニ就テ習得スヘキ手術ノ方式ニ止マルノミ、即チ回轉術、鉗子手術、用手的挽出術、「クラニオクラスト」若クハ碎頭器ヲ以テスル穿顱術及ヒ斷頭術是ナリ



## 第二編

### 第三章 回轉術 Die Wendung.

回轉術

回轉術トハ人工的ニ一ノ胎位ヲ他ノ胎位ニ變更スルヲ謂フ、而シテ其目的ハ最モ屢此術ヲ要スル適應症アルニ方リ、乃チ例セハ横位、顔面位ノ臍部後方ニ向フモノ、額位等ノ如キ、凡テ胎兒ノ分娩ヲ妨クヘキ病的位置タルニ方リテ之ヲ施行スルニ在リ

回轉術ニ依リテ生理的位置ニ回復セハ他ハ状態ニ從ヒ或ハ自然ニ或ハ人工介輔ニ依リテ分娩ヲ完了セシメ得ルモノトス  
 他方ニハ又人工的ニ分娩ヲ速了センカ爲メカ或ハ他方ニ依リ母體又ハ兒體ノ危險ヲ救助スルコト能ハサル場合ニ於テモ回轉術ヲ施行ス



回轉術ニ依レハ胎兒ヲ常ニ其排出ニ最モ適良ナル位置ニ誘致スルモノタルハ言ヲ俟タス、然レトモ此ノ如キ位置ハ只、夫レ後頭位ト骨盤端ニ於テ之ヲ見ルノミ、而シテ骨盤端位ニ在リテハ更ニ其一分種タル足位ヲ以テ手術ニ最モ適應スルモノトス、故ニ回轉術ヲ分ツテ

頭位回轉術ト足位回轉術ト二種トナス

回轉術ノ實行ニ關シテ三種ノ術式アリ

(一) 外回轉術

(二) 双合(介達)回轉術

(三) 内(直達)回轉術

外回轉術ニ於テハ單ニ外手術ニ依リテ胎位ヲ變更スルヲ目的トス

双合同轉術ニ於テハ術者先ツ一指若クハ二指ヲ子宮内ニ送入シ、同時ニ他手ヲ以テ外部ヨリ之ヲ介助ス

外回轉術

双合同轉術

内回轉術

内回轉術ハ双合同轉術ト異ナリ、全手ヲ子宮内ニ挿入シテ胎兒ヲ把握シ、同時ニ他手ヲ以テ外部ヨリ内手ヲ介助スルニ在リ、故ニ内回轉術ニ於テモ双合的ニ施術スルナリ

以上三種ノ方式中孰レヲ各場合ニ應用スヘキカハ術者ノ自由の選擇ニ從フヘカラス、寧ろ現在ノ狀況ニ關係スルモノナリ

外回轉術ハ頭位若クハ臀位回轉ニ應用スルモノニシテ、即チ胎兒移動性ノ存續ナルヘカラス、而シテ此術ハ固ヨリ内生殖器ニハ抵觸セサルヲ以テ、最モ安全ノ法ナリ、然レモ大概醫師ノ應診スル場合ニハ既ニ此胎兒移動スルノ時期ヲ過クルヲ以テ之ヲ實行スルコト甚タ稀ナリ

双合(介達)回轉術ト内(直達)回轉術トハ其孰レヲ適用スヘキヤ、是レ主トシテ子宮口ノ廣狹ト胎兒移動性ノ多少ニ關スルモノトス



頭位回轉術 Wendung in Schädellage.

頭位回轉術

頭位回轉術ヲ要スヘキ場合ハ正規ノ状態ニ於テ兒頭骨盤入口ヨリ偏倚スルトキ、即チ斜位若クハ横位ナルトキニ在リテ卵胞尙ホ存シ、而シテ胎兒能ク移動スルトキハ單ニ産婦ノ體位ヲ適宜ニ變更スルニ因リテ往々豫期ノ頭蓋位ニ復スルコトアリ

此目的ニハ産婦ヲ兒頭ノ偏倚シタル側方ニ向ケテ横臥セシムルヲ可トス、故ニ例之第一頭蓋位ニ於テ兒頭右腸骨上ニ偏倚シ、爲メニ第二横位ヲ來シタルトキハ産婦ヲシテ右側位ヲ取ラシムヘシ、然ルトキハ子宮胎兒ノ軀幹ト共ニ同シク右側ニ轉シ而シテ子宮下部ハ兒頭ト共ニ左側ニ偏スルニ至ルモノナリ、尙ホ外手術ニ依リテ胎兒ヲ押壓スレハ一層兒體ノ移動ヲ補助シ得ルヤ勿論ナリ、其方法ハ一手ヲ

外手術

内手術

以テ臀部ヲ高ク壓上シ、他手ヲ以テ兒頭ヲ骨盤入口ニ向ケテ推移スルニ在リ、若シ母體ノ位置ト外手術ノミニ依リテ目的ヲ達セサルトキハ内手術ニ依リテ兒頭ヲ正中ニ復サシメンコトヲ試ムヘシ

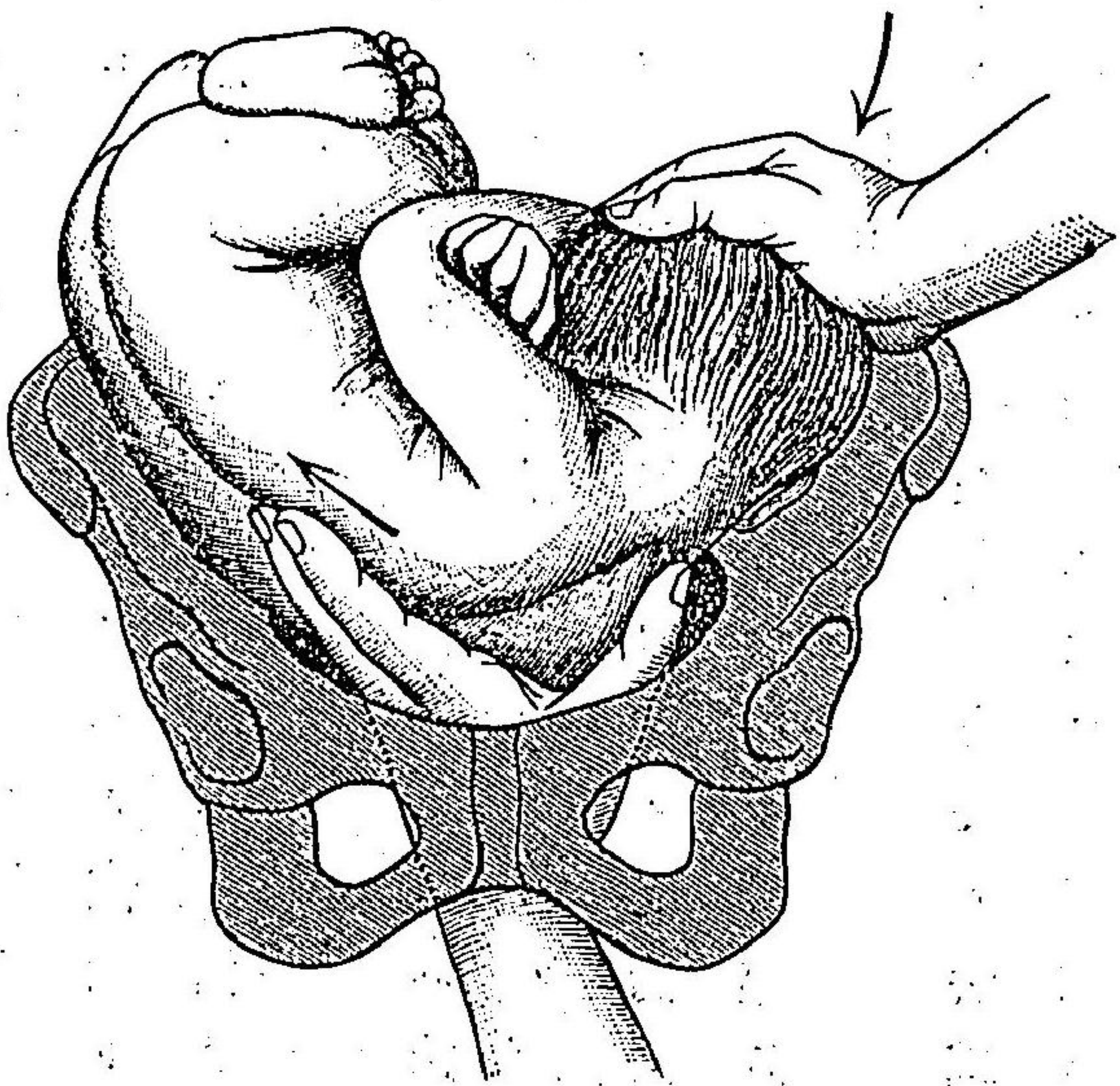
ブラキストン、ヒックス Braxton Hicks 氏ハ此目的ニ一指若クハ二指ヲ子宮口或ハ頸管内ニ送入シテ先進部(例之肩胛部)ニ達セシメ而シテ先進部ヲ兒頭ノ反對側ニ向ケテ壓上シ、同時ニ他手ヲ以テ外部ヨリ兒頭ヲ骨盤入口ニ向ケテ壓送スルノ法ヲ稱用セリ

デ、ライトレポント Dr. Outrepoint 氏ノ法式モ亦同様ニシテ、第五十一圖ニ示スカ如ク、全手ヲ肩胛部ニ接抵シテ之ヲ壓斥シ同時ニ他手ヲ以テ前記ト同一ノ方法ニ依リテ兒頭ヲ正位ニ復スルニアリ

尙ホ稀レニハブツシユ Musch 氏ノ稱用シタル法式ヲ頭位回



轉術ニ應用スル者アリ、其法ハ全手ヲ以テ内部ヨリ兒頭ヲ圓錐球狀ニ抱握シテ骨盤上ニ誘致スルニ在リ



圖一十五第

テ、オートレボン  
ト氏ノ頭位内回  
轉術

頭位回轉術ノ適應症

頭位回轉術ノ適應症ハ左ノ如シ  
(一)兒頭骨盤入口ヨリ甚シク遠隔スヘカラス  
(二)卵胞尙ホ存スルカ或ハ破裂後未タ久時ヲ經過セス、胎兒尙ホ容易ニ移動セサルヘカラス

故ニ最良ノ機會ハ本來只分娩ノ初期ニシテ、尙ホ前記ノ適應症ヲ具フルトキニ在ルモノナリ

禁忌症

禁忌症ハ左ノ如シ  
(一)狹窄骨盤ノ爲メニ先進兒頭ノ進入ヲ妨クルトキ  
(二)即時ニ分娩ノ完成ヲ要スルトキ、例之肢節ノ脱出、前置胎盤ニ於ケル出血

臀位回轉術

臀位回轉術ハ大體頭位回轉術ト其目的ヲ同クスルモノニシテ、即チ横位ニ於テ臀部ノ骨盤入口ニ接近スル場合ニ之ヲ施行ス  
以上ノ二手術ハ獨リ外手術ノミニヨリテ往々胎兒ノ位置



ヲ回復シ得ルノ利アリト雖モ亦二法共ニ胎位ノ固定術者ノ手ニハ甚ク容易ナラス却テ之カ強力ナル陣痛ヲ待タサルヲ得ス且ツ胎兒部骨盤入口ニ來ルモ直ニ之ヲ挽出スルノ支柄ナキカ爲メ容易ニ分娩ヲ完了スヘカラサルノ失アルモノナリ

足位回轉術 Wendung in Fusslage.

足位回轉術

足位回轉術ノ適應症

足位回轉術ハ内手術ニ依リテノミ之ヲ履行シ得ルモノナリ故ニ足位回轉術ニ於テ應用スヘキハ只二種ノ方法ノミ、双合(介達)回轉術及ヒ内(直達)回轉術即チ是ナリ而シテ双合回轉術ハ成ルヘク強劇ニ涉ラサル技術トシテ内回轉術ニ優ルノ利アリ然レトモ双合回轉術ニ於テハ内回轉術ニ於ケルヨリモ大ニ胎兒ノ移動性ヲ具ヘサルヘカラス足位回轉術ノ適應症ハ左ノ如シ

- (一) 横位ニ於テ頭位回轉術ヲ行フヘカラサルカ或ハ他ノ原由、即チ狹窄骨盤等アリテ之ヲ實行スヘカラサルトキ
- (二) 病的頭位例之顔面位ニ於テ腮部後方ニ向フ者、額位ノ類並ニ病的定位例之後顛頂骨位等アルトキ
- (三) 四肢或ハ臍帶ノ脱出
- (四) 前置胎盤 此際回轉術ノ目的ハ胎兒ノ位置ヲ改善スルニ在ラスシテ實ニ胎兒ノ下肢ヲ子宮頸管若クハ子宮口内ニ牽入シ、以テ出血ノ原因タル剝離胎盤ヲ壓抵スルニ在リ、故ニ此際胎兒ハ恰モ栓塞子ノ用ヲナスモノトス
- (五) 母體或ハ兒體ニ危險アルカタメ分娩ノ結了ヲ要シ而シテ先進部タル兒頭挽出術ノ實行ニ適セサル位置ニ在ルトキ
- (六) 第一度ノ骨盤狹窄、即チ眞結合線八、五―九仙迷ニ達スルトキ



第六項ニ掲クル適應症ハ所謂豫防的回轉術ヲ適用スヘキヲ示スモノニシテ、其目的ハ狹窄骨盤ノ爲メ分娩ノ經過中ニ四肢或ハ臍帶ノ脱出、定位ノ異常、骨傷ヲ伴フ兒頭ノ壓迫等ノ如キ合併症ヲ豫防シ又同時ニ兒頭ノ骨盤通過ニ便宜ナル位置ヲ與ヘ以テ兒頭ヲシテ後進部トナリテ骨盤ヲ通過セシムルニ在リ、故ニ先進兒頭ハ骨盤通過ヲ一層速了セシムルコトヲ得ルモノナリ、如何トナレハ頭骨互ニ重疊移動スルヲ以テ兒頭ハ自ラ容易ニ調節スルコトヲ得、且ツ双合的手術ヲ施セハ先進兒頭ノ産出時ニ鉗子ヲ以テスルヨリモ一層兒頭上ニ交換的ナル壓迫作用ト牽引作用ヲ及ホシ得レハナリ

然レトモ豫防的回轉術ハ獨リ經産婦ニ於テ、舊時ノ分娩經過カ頭蓋位ノ際常ニ不良ナリシ時ニノミ施行スルヲ例規トス

足位回轉術ノ禁忌症

但シ第五項ニ掲クル適應症アル場合ニハ回轉術ニ續キテ挽出術ヲ行フヲ要スト雖トモ他人場合ニ於テハ回轉術後一切胎兒ノ娩出ヲ自然ニ任スヲ良トス殊ニ胎兒心音持續的緩徐トナル場合ニ於ケルカ如ク挽出術ヲ要スヘキ一定ノ適應症ヲ具ヘ、分娩ノ完了ヲ要スルコト無キニ於テヤ、故ニ回轉術ハ本來回轉ニ止マル手術ニシテ、第五項ニ掲ケタル適應症アル場合ニ限リ直チニ用手挽出術ノ續行ヲ要スルモノトス

足位回轉術ノ禁忌症ハ左ノ如シ

(一)骨盤狹窄ノ爲メ亦後進兒頭ノ通過ヲ疑ハシメ或ハ全ク最初ヨリ不能ナラシムル狀況アルトキ

(二)子宮強直ニ下子宮部ノ延長ヲ伴ヒ、劇烈ナル子宮破裂ノ危険アルトキ

(三)胎兒ノ移動困難ナル時、殊ニ死胎トナリタル遷延性横位



(四)胎兒矮小ニシテ生活機能ヲ保タサルモノ、即チ二十八週以内ノモノトス、此ノ如キ胎兒ハ何レノ位置ニ於テモ分娩シ得ルモノニシテ敢テ注目スヘキ價値ナキモノナリ

(五)死胎

第五項ニ示シタル禁忌症ハ獨リ回轉術ノ困難ナルモノニ限リ適用ス、是レ此ノ如キ場合ニ在リテハ母體ニ子宮破裂ノ危険ヲ附帶スルモノニシテ寧ロ斷頭術ノ却テ安全ナル途婉法タルニ如カサレハナリ

足位内回轉術或ハ双合回轉術ノ法式

Die Ausführung der inneren oder Kombinierten Wendung auf den Fuss.

足位回轉術

足位回轉術ヲ施行スルニ當リテハ產婦ヲシテ側位ヲ取ラシムルヲ以テ可トス、是レ此ノ如クスレハ假令横位ニ於テ

産婦ノ位置

兒背前方ニ向フカ如キ困難ナル場合ニ於テモ兒足ヲ把握スルコト容易ナルカ故ナリ

此際例規トシテ、産婦ヲ胎兒小部分ノ在ル側方ニ臥セシムルヲ要ス、故ニ第一横位ニ於テ胎兒小部分右侧ニ在リトスレハ即チ産婦ヲシテ右侧ニ横臥セシムヘシ

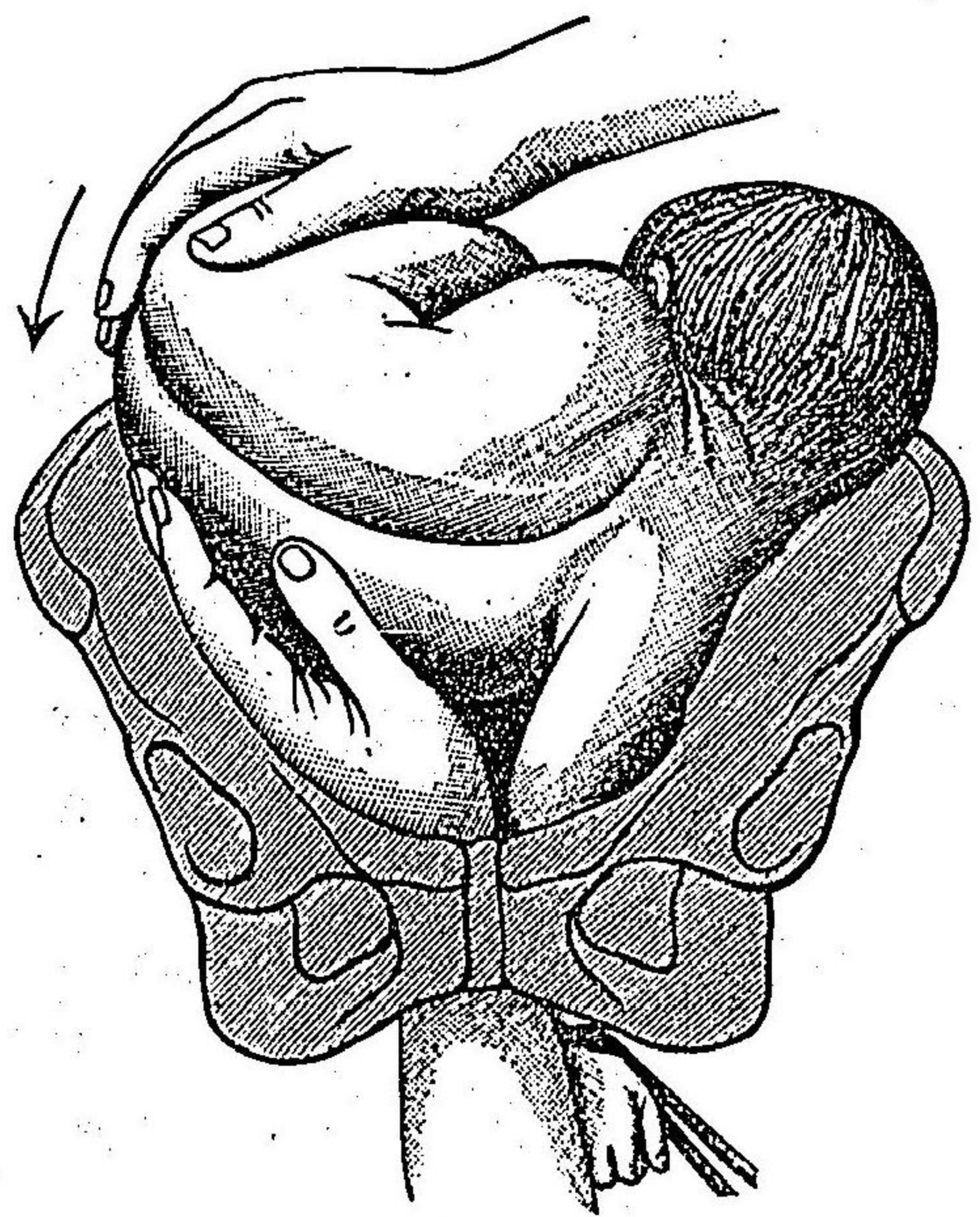
産婦ノ兩脚ハ膝部ニ於テ屈曲セシメ而シテ兩脚ヲ少シク開キ、膝間ニ一個ノ枕ヲ挿入スレハ兒頭ノ生殖器内ニ達スルコト益容易ナルニ至ルヘシ

次ニ術者ハ産婦ノ背後ニ進ミ、産婦ヲ牀縁ニ位置ヲ取ラシムレハ後方ヨリ深ク生殖器内ニ通達シ得ルニ便宜ナリトス、是ニ於テ産婦ノ側位ト異名ナル手ヲ生殖器内ニ送入ス、故ニ産婦右侧ニ横臥スルトキハ常ニ術者ハ臥牀ノ左縁ニ立チ、左手ヲ生殖器内ニ送入スヘシ

今ヤ背側ニ塗油シタル手ヲ圓錐狀ニ壓縮シ他手ヲ以テ排



開シタル陰裂間ヨリ少シク回旋シツ、透入シ、先進部ヲ骨盤入口ヨリ排斥シ而シテ第五十二圖ニ示スカ如ク手ヲ胎兒ノ側部ニ沿フテ兒足ニ達セシムヘシ、但シ此際ニハ成ル



圖二十五第

足位内回轉術ノ第一次トシテ(ツ)アイアエル氏ニ據ル手ヲ胎兒ノ側部ニ沿フテ透入シ、外手ヲ以テ臀部ヲ反對ニ壓斥スルヲ示ス

ヘク手ヲ臍帶ニ衝突セシメサル様注意スヘシ、是レ胎兒ノ腹側ニ接近スルトキハ容易ニ臍帶ヲ傷ケ或ハ壓迫スルコトアレハナリ  
同時ニ他手ヲ以テ外部ヨリ子宮ヲ固定シ、臀部ト足部ヲ内手ニ向ツテ押壓スヘシ  
此トキ内手ハ第一ニ達スヘキ兒足ヲ把握ス、是レ横位ニ於テ下方ニ位シ先進スル兒足ヲ把ルヲ例規トスレハナリ、故ニ第五十二圖ニ示スカ如キ場合ニハ第一横位ノ兒背前方ニ向フモノニ在リテハ右足ヲ把握スヘキモノトス、實ニ兒背前方ニ向フモノニ於テハ上方ニ位スル兒足ヲ把握セサル様注意スヘシ、然ラサル時ハ兒足互ニ交叉シ、爲メニ胎兒ノ軸回轉ヲ來スヘケレハナリ、兒背後方ニ向フモノニ於テハ下方ノ兒足ヲ把握シ直接ニ下前方ニ牽引スルノ際、胎兒恥骨縫際上ニ騎乗スルカ爲メ回轉術ヲ困難ナラシムルコ



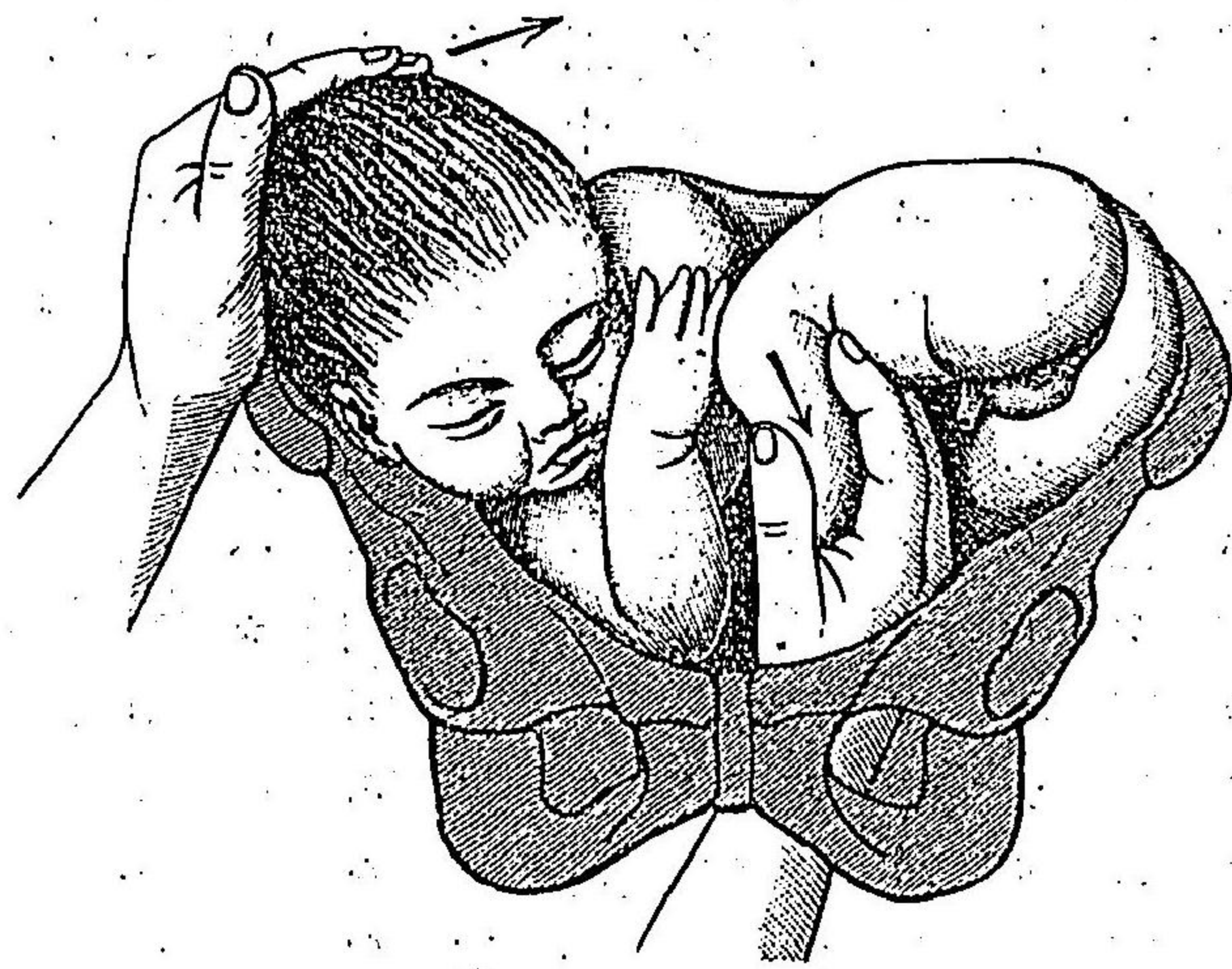


圖 三十五 第

足位内回轉術ヲ示ス  
 (ツライフェル氏ニ據ル)  
 兒背後方ニ向フ横位  
 ニ於テ上方ノ兒足ヲ  
 把握ス

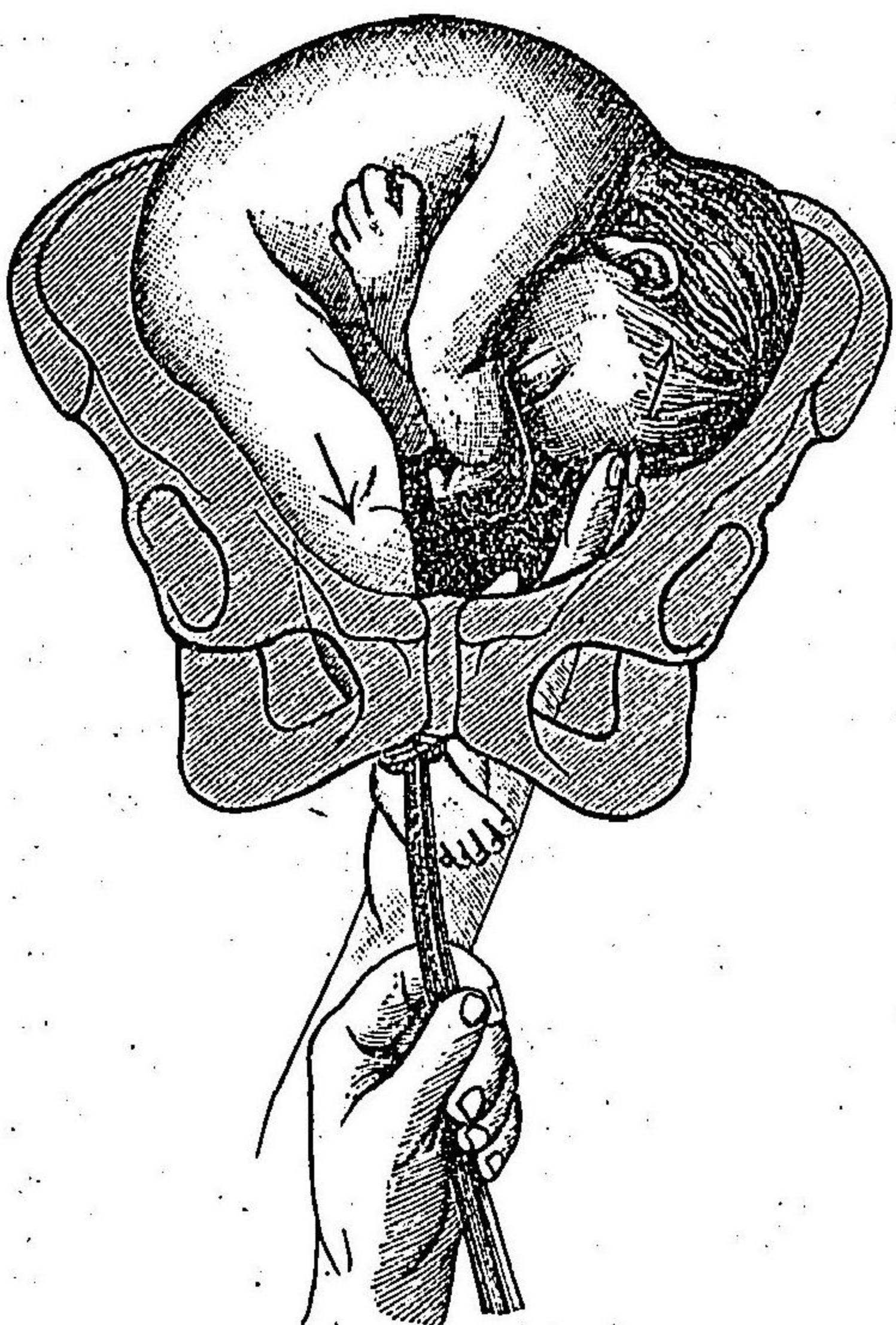
トアリ、故ニ此場合ニ於テハ上方ニ位スル兒足ヲ把握スル

カ或ハ下方ニ位スル兒足ヲ全ク骨盤後壁ニ沿ヒ薦骨窩ニ  
 於テ意ヲ注キ下方ニ牽引スヘシ  
 此際先ツ指ヲ膝關節ニ鉤シ、其骨盤入口上ニ來ルマテ之ヲ  
 牽引シ、然ル後兒足ヲ牽出スヘシ  
 然レトモ亦直チニ下腿ヲ充分ニ把握シテ直接ニ牽引スル  
 モ可ナリ(第五十三圖)  
 胎兒ヲ回轉セシムルカ爲メニ牽引シツ、外手ヲ以テ兒頭  
 ヲ子宮底ニ向ツテ押壓スヘシ  
 殊ニ頭蓋位ヨリ足位ニ回轉スル時ノ如キ回轉ノ困難ナル  
 場合ニハ出來得ル丈ケ兩足ヲ把握シテ完全ナル足位ニ來  
 ラシムヘシ  
 回轉術ハ兒足ノ膝部マテ產出シタル時ニ至リ始メテ其目  
 的ヲ達シタルモノト見做スヘシ、然ルトキハ胎兒ハ縦位ニ  
 在ルコト確實ナリトス、若シ兒足ノ膝部マテ產出スルニ至



第五十四圖

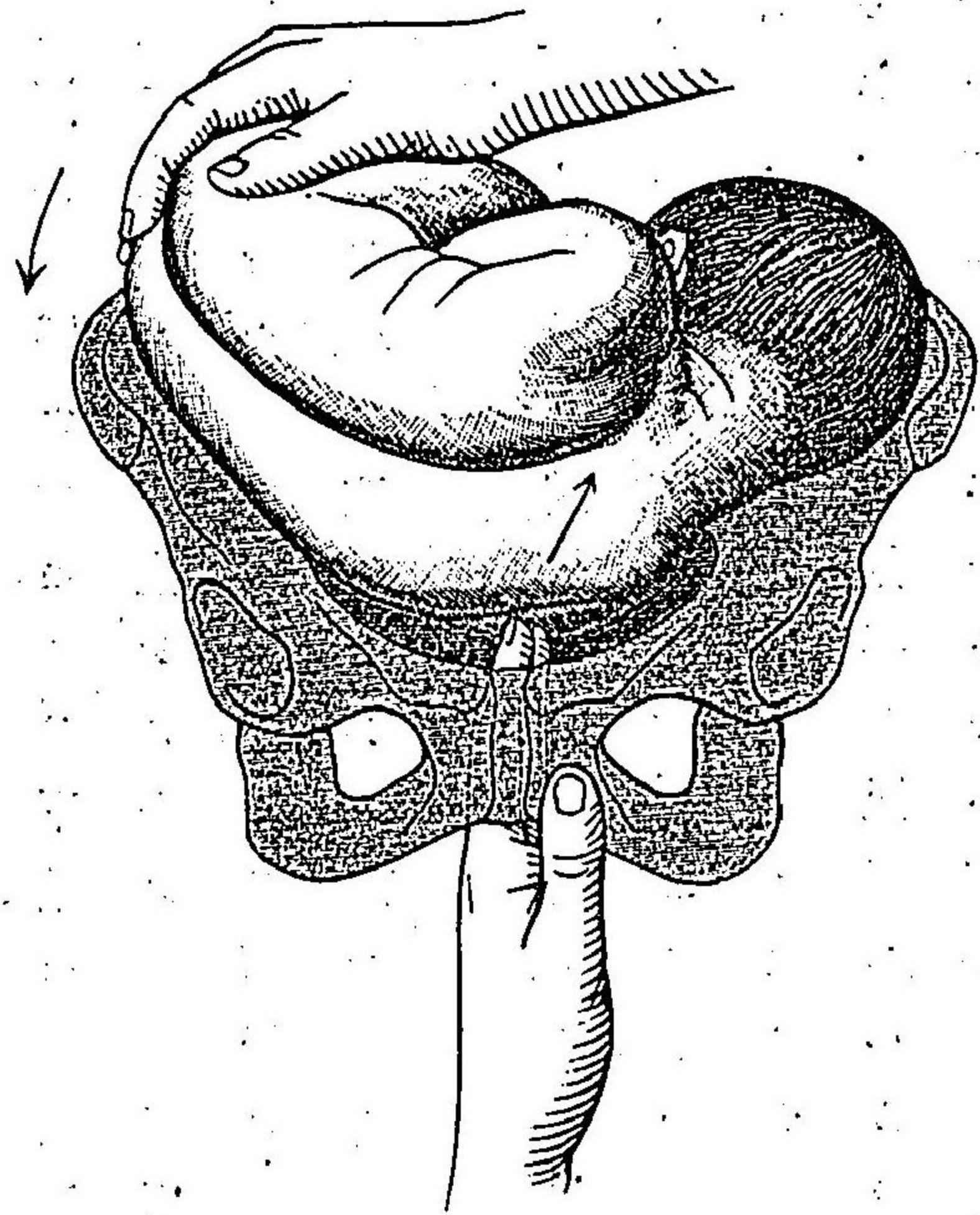
足位不全回轉(ツワイフェル氏ニ據ル) シーゲムンデイン氏重複手術ヲ示ス



シーゲムンデイン氏重複手術

ラサル時ハ是レ回轉術ノ不全ナルモノニシテ、胎兒ハ尙ホ  
 全ク横位ニ在ルモノトス、今ヤ普通ノ方法ニ於テ直チニ其  
 目的ヲ達セサルトキハジーゲムンデイン Segemundia 氏重複  
 手術ニ依リテ回轉術ヲ完成スルヲ可トス  
 其法回轉蹄係ナルモノヲ下垂セル兒足ニ纏絡シ、陣痛間ニ  
 兒頭ヲ内方ヨリ壓上シテ強ク之ヲ牽引ス(第五十四圖)  
 回轉術終ルヤ直チニ挽出術ヲ續行スルノ必要アラサル限  
 リハ産婦ヲ再ヒ仰臥セシメ而シテ終始胎兒心音ノ數ヲ檢  
 スヘシ  
 回轉術ノ際及ヒ其後ニ於テ臍帶ノ血行障礙ヲ豫防シ得タ  
 ルトキハ大概回轉術ノ直後ニ少シク減弱セル胎兒心音ノ  
 數ハ再ヒ速カニ正規ニ復スルモノナリ  
 若シ子宮口ニ未タ全手ヲ通過スヘカラサル場合ニ足位回  
 轉術ヲ要セントスルトキハ双合回轉術ヲ前記ノ内回轉術

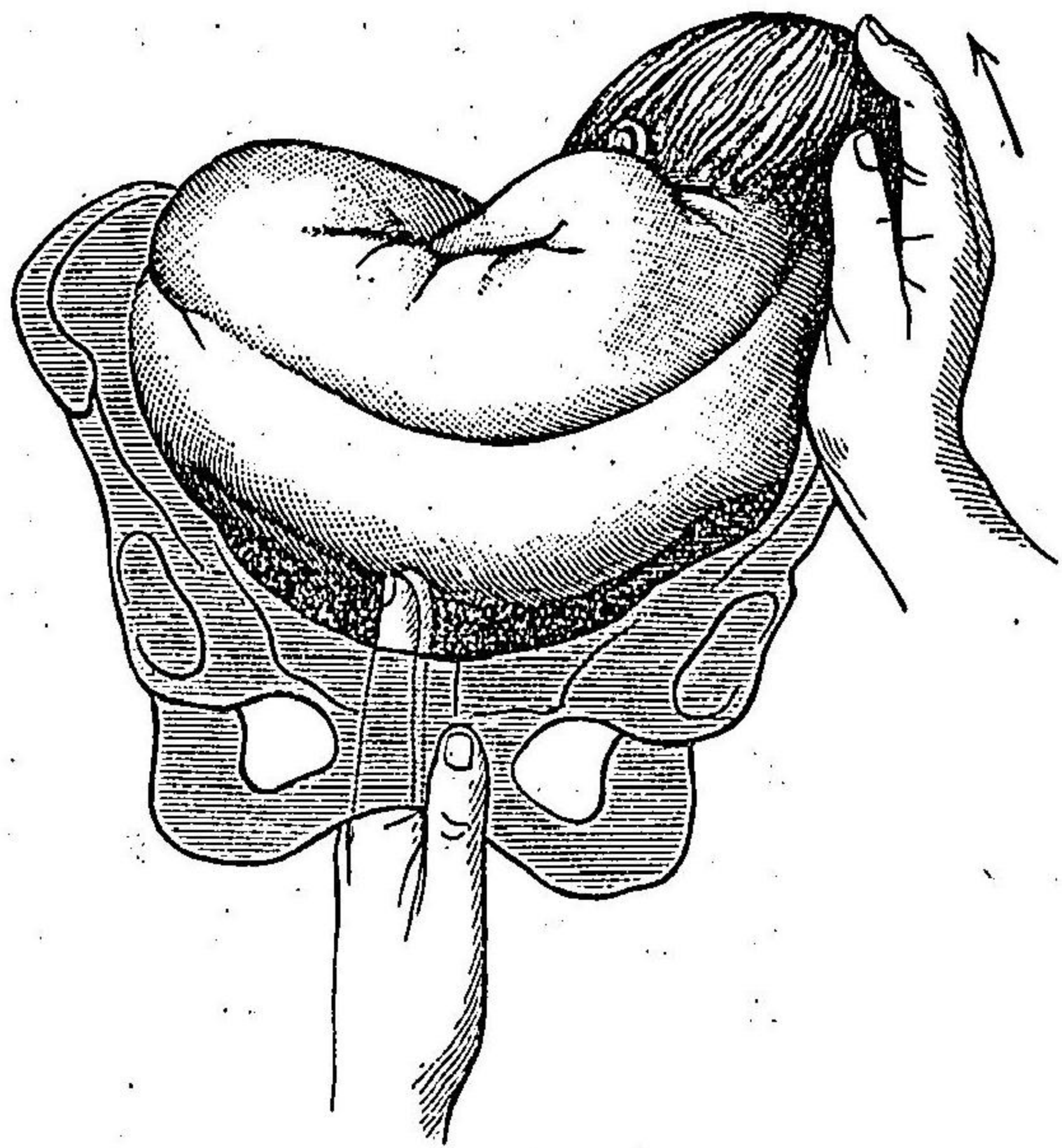




圖五十五第

ブラキストン  
ヒックス氏足位  
双合回轉術ノ  
第一次トシテ、  
肩胛部ヲ壓上  
スルノ狀ヲ示  
ス

ニ代用セサルヘカラス而シテ此際ニ於テモ内回轉術ニ於  
ケルカ如ク側位ニ於テ一手ヲ腔内ニ送入ス、然レトモ頸管  
ハ僅ニ一指若クハ二指ヲ通スルニ過キサルヲ以テ之ニテ



圖六十五第

ブラキストン  
ヒックス氏足位  
双合回轉術ノ  
第二次トシテ、  
内手ヲ膝部ニ  
達スルノ狀

先進肩胛部ヲ高く壓上シ、同時ニ外部ヨリ他手ヲ以テ骨盤  
端ヲ内手ニ向テ押壓スヘシ(第五十五圖)



内手ヲ以テ胎兒ヲ暫ラク移動スルトキハ、遂ニ指ヲ鉤狀ニ足踝ノ上際ニ纏絡シテ、兒足ヲ子宮口内ニ牽下シ得ルニ至ルヘシ

此種ノ回轉術ハ殊ニ前置胎盤ニ有用ナルモノニシテ、即チ分娩ノ始メニ起ルヘキ出血ヲ早期ニ、而カモ頸管ノ尙ホ存在スルニ際シテ、攻治セサルヲ得サルコトアルカ故ナリ

回轉術終リタル後ハ下方ニ伸展セル兒足ヲ牽引シテ之ヲ保持シ以テ終始兒頭ヲ固ク頸管内ニ牽下セサル可カラス

尙シ然ラサル場合ニハ兒足再ヒ頸管内ニ縮退スルカ爲メ兒頭其者ニ依リテ胎盤ヲ持續的附著部ニ壓抵スヘキ回轉術ノ目的ヲ誤ルコトナキヲ保セス

### 第四章 鉗子手術 Die Zangenoperation.

鉗子手術ノ目的ハ生活胎兒ヲ天然產道ニ由リテ、遂婉セシムルニ在リ

鉗子ハ此場合ニ於テ陣痛力ノ代用ヲナスモノナリ、只彼レニ在リテハ上方ヨリ壓迫シ、此ニ在リテハ下方ニ牽引スルノ差アルノミ

鉗子挽出法ハ遂婉手術トシテ分娩ノ排出期ニ之ヲ行フモノナリ

其適應症ハ左ノ如シ

- (一)子宮口ノ全ク開大シ若クハ退縮スルトキ
- (二)卵胞ノ破裂シタルトキ
- (三)兒頭鉗子ノ使用ニ適スル位置ニ在ルトキ
- (四)骨盤ノ甚シク狹隘ナラサルトキ



兒頭鉗子ノ使用ニ適  
スル位置

(五) 兒頭ノ過大又ハ過小ナラサルトキ

(六) 胎兒ノ生活スルトキ

第一子宮口ノ完全ナル開大トハ諸適應症中最モ緊要ナルモノニシテ、若シ子宮口未タ全ク開大セサルノ際ニ鉗子挽出ヲ強行スルトキハ其危險ヤ實ニ兒頭ヲ猛力的ニ牽出スルニ方リ頸管破裂ノ爲メニ甚タ不良ナル出血ヲ誘起スルノ恐レアリ

第二ノ適應症トシテハ卵胞已ニ破裂シ、卵膜兒頭上ニ縮退シタルヤ否ヤニ注意スヘシ、然ラサレハ卵膜ハ鉗子ノ爲メニ把握セラレテ牽裂スルノ恐レアリ

第三兒頭鉗子ノ使用ニ適應セル位置ニ在リトハ概シテ、兒頭小骨盤内ニ進入シ、其最大徑骨盤入口ノ下際ニ在ル場合ヲ謂フ

然レトモ鉗子ヲ以テ兒頭ヲ正シク把握シ得ルハ兒頭ノ内

回轉ヲ成就シタルトキニ在リ然ル下キハ鉗子挽出ノ作用ハ單ニ排出器械的作用、即チ恥骨縫際ヲ周匝スル兒頭ノ回旋運動ニ一致スルノミ

若シ骨盤内ニ於テ正規ノ回轉ヲ經過セサリシ兒頭ニ鉗子ヲ接抵スヘキ必要アルトキハ挽出術ノ前若クハ其際ニ於テ兒頭ヲ縱軸ニ從ツテ回轉セシメサルヘカラス、是レ兒頭ノ位置ニ當該セル分娩器械的作用ニ適應スルモノナリ、此際兒頭ハ前ニ示シタル如ク骨盤内ニ於テ成就スヘキ橫軸回轉ヲ既ニ鉗子内ニ於テ遂行セサルヘカラス、是レ鉗子ニ依リテハ之ニ及ホス作用ノ現ハレサルヲ以テ屢障害ヲ來スノ弊アリトス

腮部後方ニ向フ顔面位或ハ額位ニ於ケルカ如ク、自然ノ分娩器械的作用ノ全ク不能ナルカ或ハ極メテ困難ナル位置ニ於テハ鉗子の挽出モ亦不能ナルカ或ハ困難ナルモノナ



リ、然レトモ此ノ如キ場合ニ於テハ凡テ猛劇ナル回轉等ヲハ嚴禁スヘシ

第四ノ適應症ハ已ニ鉗子ノ目的ニ適ヒ、生活胎兒ヲ天然ノ產道ニ由リテ遂婉セシメ得ルヲ示スモノナリ

過狹ナル骨盤ノ爲メカ或ハ軟部ヨリ發生シタル強實ナル腫瘍ノ爲メニ自然ノ分娩ヲ妨クルモノニ於テハ固ヨリ鉗子ヲ使用スルモ其障礙ヲ排除スルヲ能ハス、是レ鉗子ハ内腔ノ異常ニ於テ毫モ變化スルモノニ非サレハナリ、故ニ鉗子ハ狹窄骨盤ニ於テ那邊マテ應用スルヲ得ヘキモノナルヤニ至リテハ骨盤異常ノ強弱ノ外、殊ニ兒頭ノ位置ニ關スルモノナリ、兒頭先進部トナリテ骨盤ノ狹窄部ヲ通過シタル場合、例之扁平骨盤ニ於テ兒頭其最大徑ヲ以テ已ニ骨盤入口下ニ來リタルモノニ在リテハ、狹窄骨盤モ復タ已ニ分娩ニ關スル所アルナシ、若シ夫レ如何ナル骨盤狹窄ニ至ル

マテ鉗子ヲ應用シ得ヘキカハ固ヨリ之ヲ寸示スルコト能ハス、何トナレハ每常兒頭ノ大小及ヒ硬軟ハ骨盤異常ノ強弱ニ同一ノ關係ヲ有スレハナリ、若シ疑ハシキ場合、即チ中等度ノ骨盤狹窄ニ於テ兒頭尙ホ骨盤上ニ在ルニ方リテ切ニ遂婉ヲ要シ而カモ生活胎兒ヲ分娩セシムル方法ナキトキハ宜シク鉗子ヲ以テ猛劇遷延ニ涉ラサル試驗ヲ行ヒ、尙ホ其目的ヲ達スルコトヲ克クセサルトキハ穿顱術若クハ人工產道ニ由ルノ遂婉法(帝王截開術、恥骨縫際截開術)ヲ續行スヘシ

第五ノ適應症ハ腦水腫ノ如キ病的巨頭或ハ無腦兒ノ如キ異常小頭ニ於ケルカ若クハ至小未熟ノ胎兒ニ於テハ鉗子ヲ使用スルヲ禁忌トスヘシ、就中鉗子ハ此ノ如キ兒頭ニ對シテハ充分ノ支持ヲ存セサルカ爲メ、母兒兩體ニ危險ナル轉動ヲ致スコトアレハナリ



第六ノ適應症タル胎兒ノ生活セル場合ニ於テ母子何レカ危険ナルトキニ限り嚴ニ注意シテ本手術ヲ施スヤウスヘシ、決シテ死胎ニ就テ母體ニ危険ナル手術ヲ施スノ意ニアラス、唯手術ノ目的ハ生活胎兒ヲ天然產道ニ由リテ遂娩セシムルニ在ルノミ、故ニ胎兒ノ死亡ヲ確認シ、從ツテ胎兒ニ留意スヘキ要ナキトキハ危険ナル鉗子手術ノ代リニ母體ニ安全ナル穿顱術ニ兼テ碎頭術又ハ「クラニオクラスト」術ヲ續行スヘシ

凡テ鉗子の挽出術ハ適應症トシテ認定スヘキハ現在ノ適示ニ從ヒ母體或ハ兒體ノ方面ヨリ分娩ノ完了ヲ要スヘキ現象アルトキニ在リトス

夫ノ最モ屢鉗子ノ應用ヲ要スル繼發性陣痛微弱或ハ疲勞性陣痛微弱ハ極論スルニ元來前陳ノ釋義中ニ算入スヘキモノニ非ラス、是レ此ノ如キ陣痛微弱其者ノ爲メニハ母體

或ハ兒體ニ毫モ危険ヲ來スコトアラサレハナリ、此ノ如キ場合ニ鉗子ヲ使用スルニ至リテハ適應症ノ充備スルニ由リテ手術ノ豫後ハ全ク佳良ニシテ、母子兩體ニ對スル成效ハ確ニ之ヲ期スヘキモノナリ、但シ此際ニハ陣痛微弱ノ子宮弛緩トナリテ後產期ニ持續セサルニ注意スヘシ、手術豫メ困難ナレハ其必要ハ愈切ナラサル可ラス

此ノ如キ適應症ハ左ノ如シ(フオン、ウインケル v. Winckel 氏ニ從フ)

- (イ) 母體ノ方面ニ關スルモノ
- (一) 過長ノ勞役ニ因スル脱力
- (二) 攝氏三十八度五分以上ノ熱候
- (三) 強度ノ出血
- (四) 痙攣
- (五) 軟部ノ挫傷

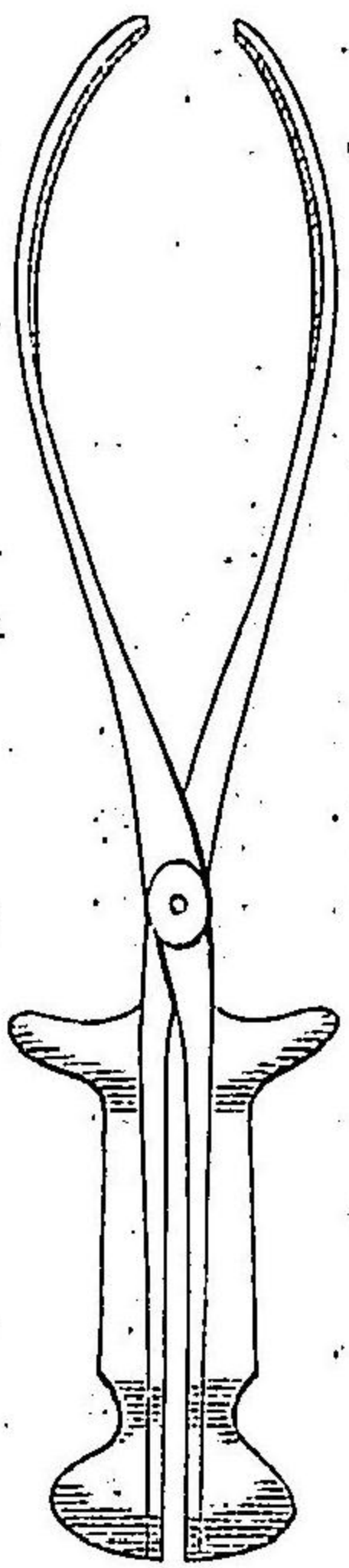


- (六) 急性及ヒ慢性疾患(肺炎、室扶斯、結核、癩癩、虎列拉等)
- (七) 破裂ニ迫ル靜脈瘤
- (ロ) 兒體ノ方面ニ關スルモノ
- (一) 心音ノ百搏以下ニ減却スル者(又陣痛間歇時ニ於テ)
- (二) 心音ノ百六十搏以上ニ達シテ持續的ニ増加シ衰弱ヲ伴ナフ者
- (三) 臍帶脫出(生活胎兒ニ於テノミ)

鉗子ノ構造及ヒ施設 *Bau und Anlegen der Zange.*

鉗子ハ二葉互ニ交叉シテ一ノ鎖部ニ嵌合スルモノヨリ成ル  
 鎖部ノ下際ニ在ル部分ハ鉗子柄ニシテ把握牽引ノ用ニ充ツ、上部ハ鉗子匙ニシテ兒頭ニ接抵スル部分ナリ、柄ハ充實ニシテ牽鉤ヲ具有シ、匙ハ窓孔ヲ存ス、窓孔ノ境界ハ匙ノ肋

骨ヲ構成シ、匙ノ上端ハ尖端ヲ構成ス  
 獨乙國ニ於テ普通使用スルネーゲル *Nägels* 氏鉗子(第五十七圖)ノ頸部ニ存スル鎖ハブリュンジングハウゼン *Brüninghausens* 氏ノ案出ニ係ルモノニシテ、所謂軸關節(第五十八圖)ヲ成ス、是レ英國製鉗子ニ於テ今ニ尙ホ使用セラル、板關節ト異ナル所トス



圖七十五第

ネーゲル氏鉗子頭彎曲ノ狀況ヲ示ス

軸關節ノ構造ヲ有スル鉗子鎖ニ在リテハ一方ノ鉗子葉ニ設備セル切痕ハ他葉ノ釘子ニ挿入シ、軸ヲ有スル匙ハ母體



ノ左側ニ來リ、左手ヲ以テ送入スルカ故ニ之ヲ左匙ト名ツケ右手ヲ以テ送入スヘキ他ノ匙ハ母體ノ右側ニ來ルヲ以テ之ヲ右匙トナス

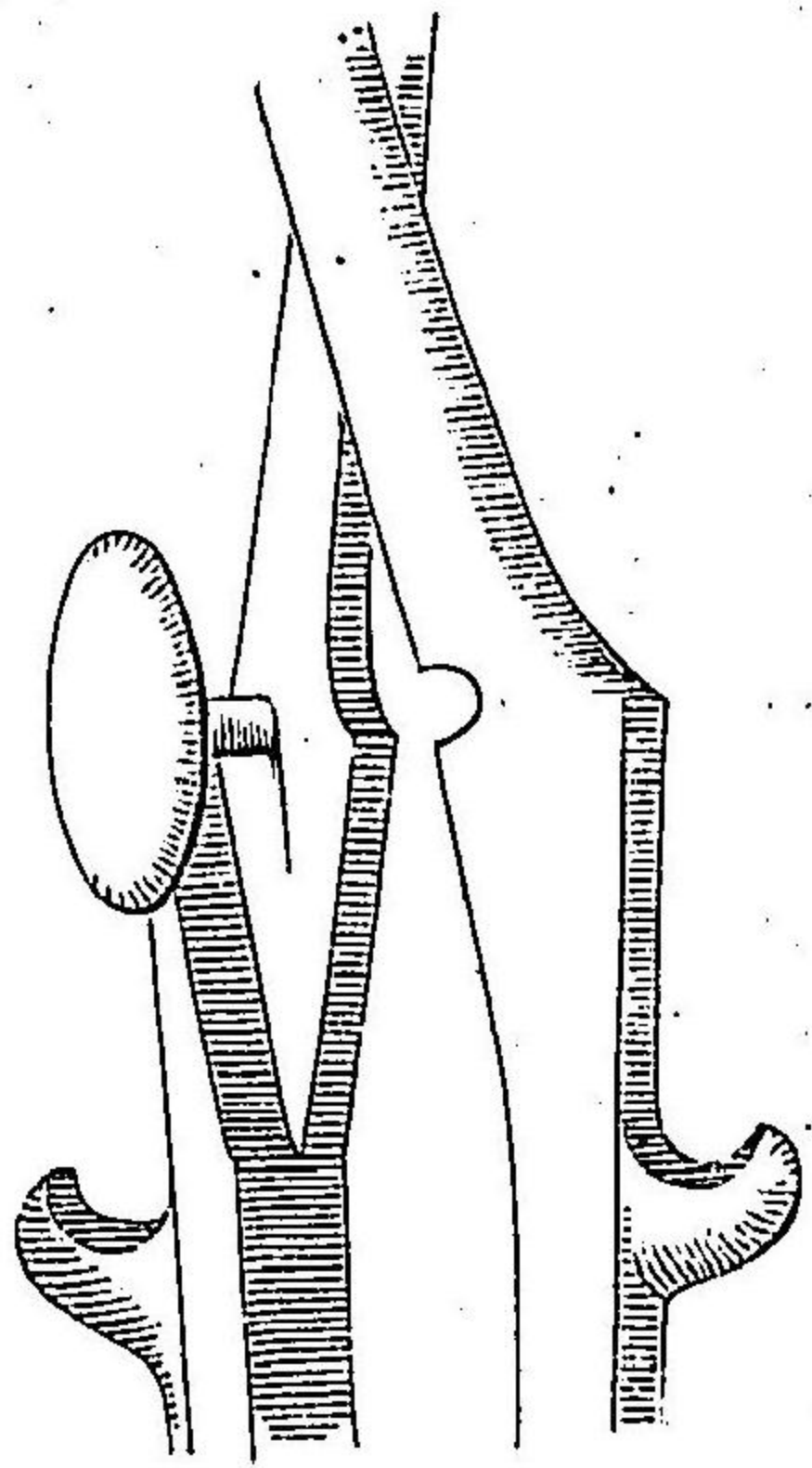
左匙ハ必ス最初ニ送入シ其上ニ右匙ヲ送入ス、故ニ右匙ノ正ニ左匙上ニ在ルトキ鉗子ハ閉鎖セラレ得ルモノナリ

鉗子ハ二個ノ彎曲ヲ有ス

第一ハ頭蓋彎曲(第五十七圖)ニシテ、兒頭ノ顛頂骨部ニ於ケル穹窿ニ適合シ、匙ヲ兒頭ニ強固安全ニ貼接スルヲ得セシム、故ニ鉗子ハ兒頭ヲ成ル可ク兩顛頂徑ニ於テ把握スルヲ要ス

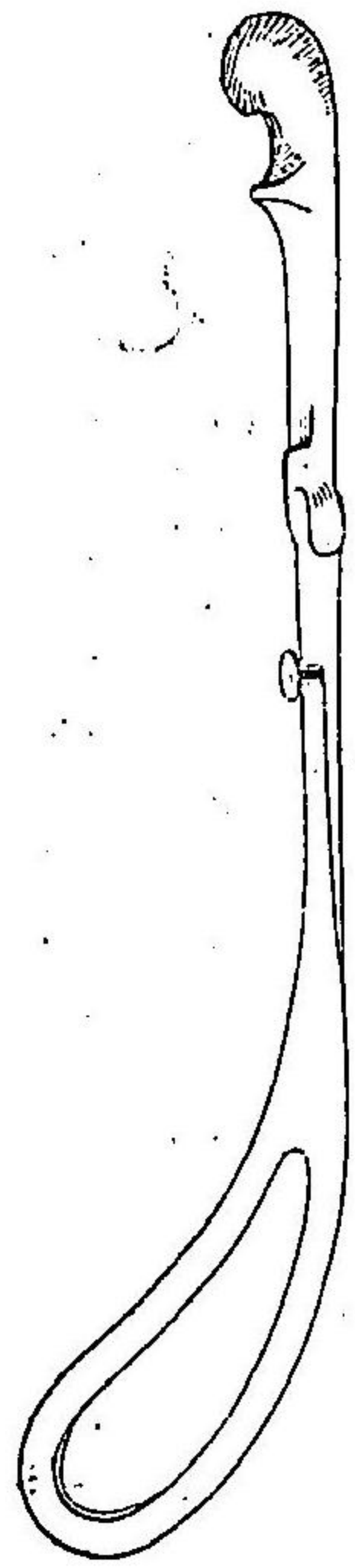
第二ハ骨盤彎曲(第五十九圖)ニシテ、其彎曲半徑ハ骨盤弓線ノ彎曲半徑ニ適合ス、故ニ骨盤彎曲ト送入線ト一致スル爲メ鉗子ヲ骨盤ノ橫徑ニ送入セサルヘカラス

特リ兒頭鉗子ノ使用ニ充分適應シタル位置ニ在ルトキ、例



圖八十五第

子ーゲル氏鉗子  
鎖軸關節  
(シユレーテル氏ニ  
從フ)



圖九十五第

子ーゲル氏鉗子  
ノ側面、  
骨盤彎曲ノ狀況



之後頭位ニ於テ兒頭既ニ完全ナル内回轉ヲ爲シ、矢狀縫合前後徑ニ在ルトキニ限リ、鉗子ヲ其頭彎曲ニ適合セシメ又同時ニ骨盤彎曲ニ適應セシメテ貼スルコトヲ得ルナリ他ノ場合、例之矢狀縫合橫徑ニ在ルカ如キ場合ニ於テハ鉗子ハ變調的ニ兒頭ニ接著シ或ハ變調的ニ骨盤内ニ存在スル手術ヲ施行スルハ際、技術上左ノ數期ヲ區別ス

(一) 鉗子ノ接抵

(二) 鉗子ノ閉鎖

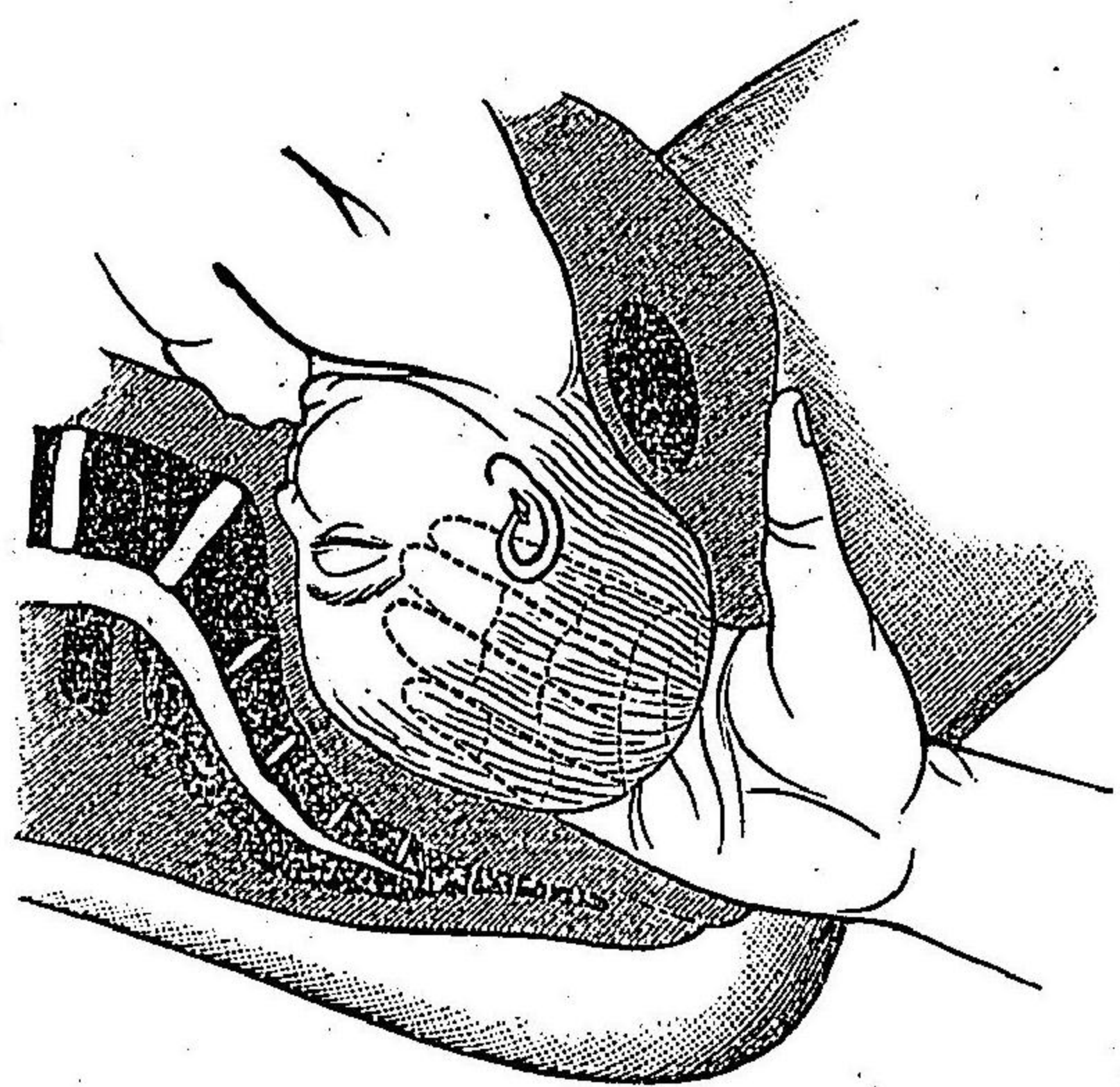
(三) 試驗的牽引

(四) 挽出法

鉗子ノ接抵法ハ左ノ如シ、先ツ鉗子ヲ兩手ニ採リ、各手ニ各柄ヲ持チ鎖ヲ上方ニ向ケ而シテ鉗子ヲ閉鎖スルヲ例規トス、是レ殊ニ初習者ニ對シテ最モ必要ナル件ニシテ兩葉ノ豫示的錯誤ヲ防カシムルニ在リ、此ノ如ク把握スレハ則チ

鉗子接抵法

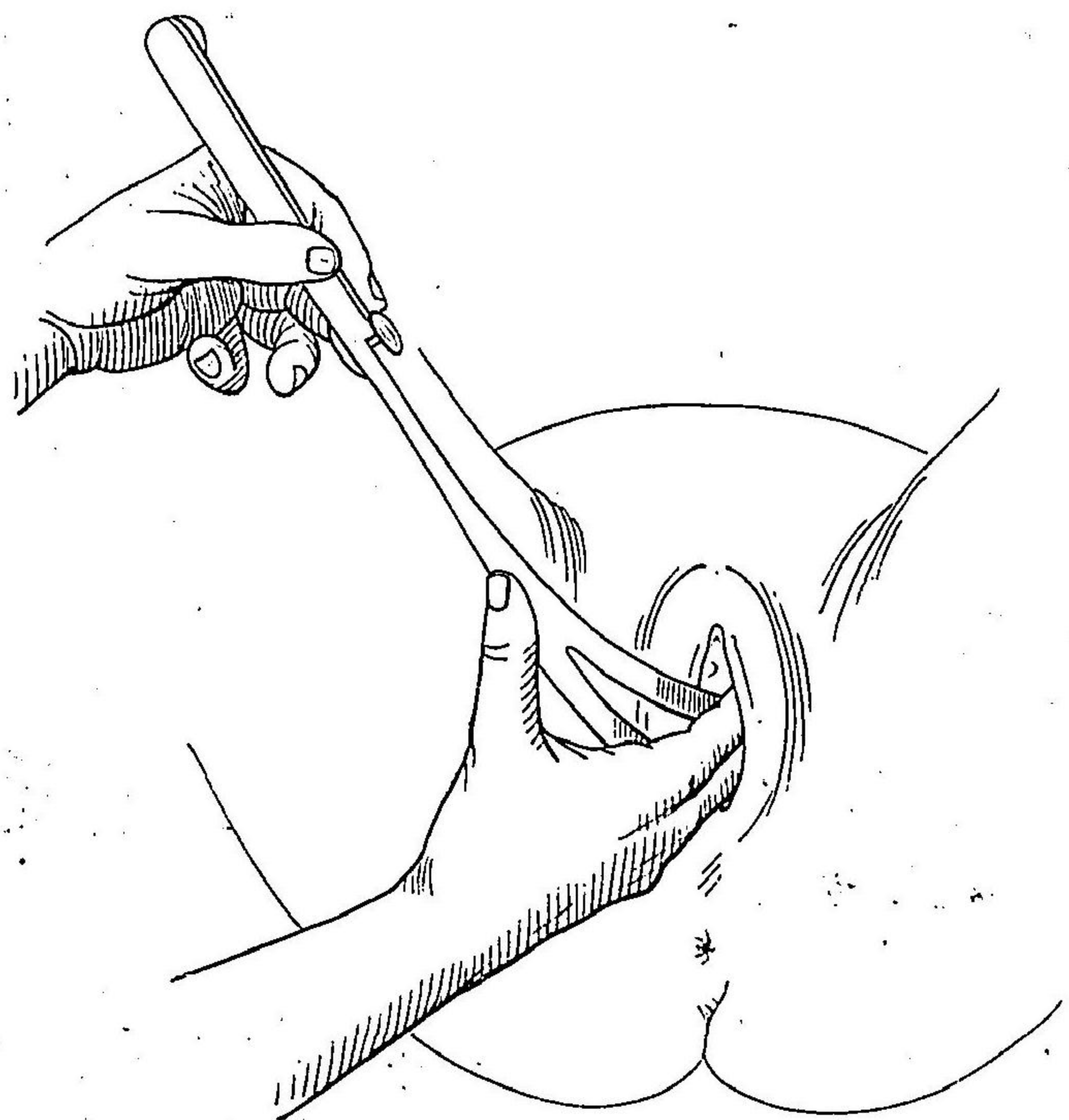
第六十圖



鉗子葉ヲ送入スルノ際軟部ヲ防護スル爲メ手ヲ兒頭ニ接抵スル狀ヲ示スルニヤ、フアラホー氏ニ依ル

左葉ハ左手ニ來リ、右葉ハ右手ニ來ルモノトス  
 今ヤ右匙ハ側方ニ放置シ、左葉ハ第六十一圖ニ示スカ如ク、葉ヲ送入スヘキ  
 三指ノ尖端ヲ牽鉤ニ貼シテ鉛直ノ方向ニ生殖器前ニ保持ス  
 右手ノ二指或ハ困難ナル場合ニハ四指ヲ成ヘク深ク送



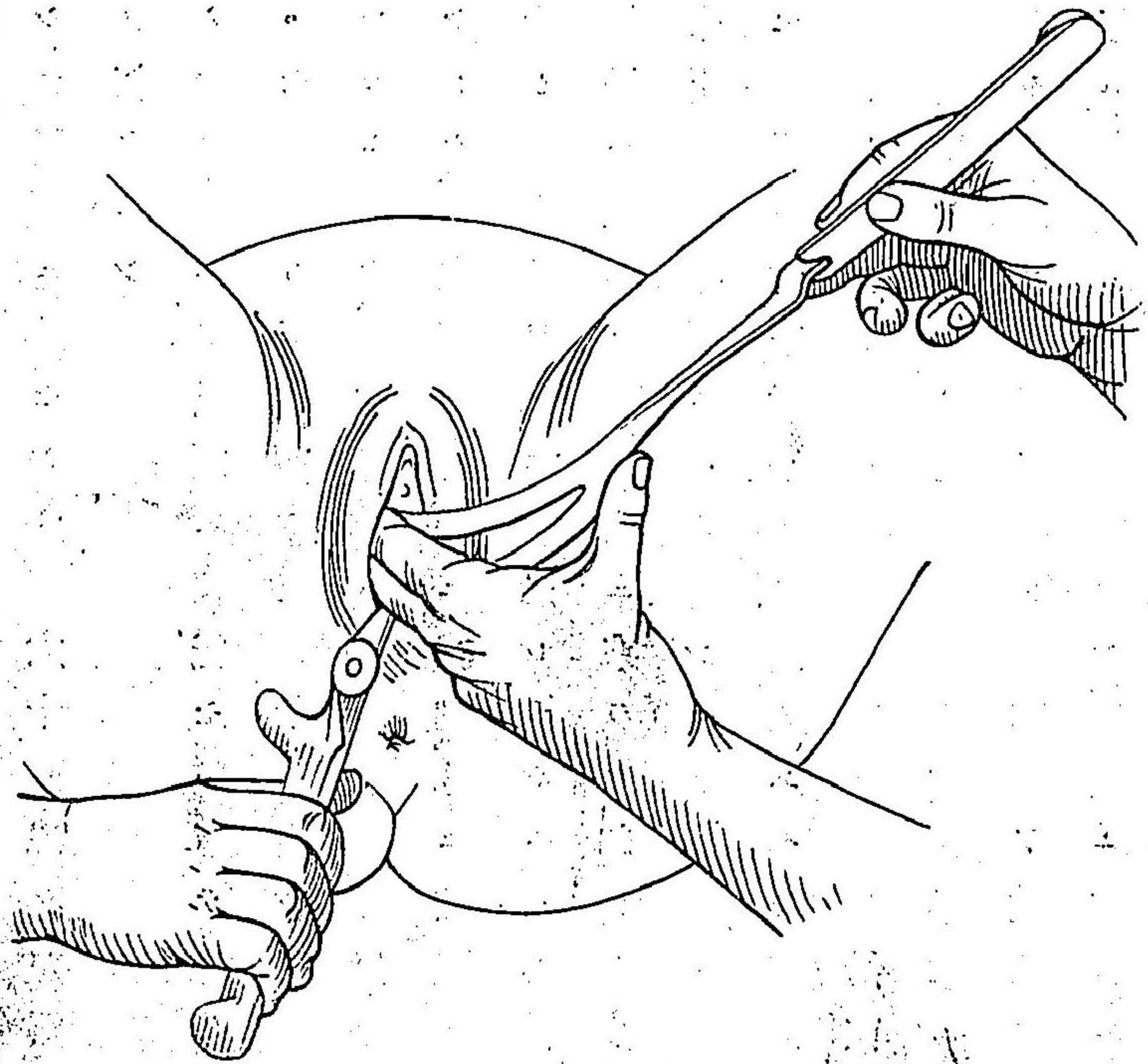


圖一十六第

鉗子左葉ヲ送入スルノ狀

入シテ兒頭ニ達セシメ(第六十圖)以テ左葉ヲ送入スルノ通路ヲ拓クヘシ  
 此ノ如ク右手ヲ兒頭ニ接抵セハ以テ匙尖ノ爲メニ軟部ノ損傷セラル、ヲ防護シ得ルナリ、若シ手ヲ以テ軟部ヲ庇護スルコトナク、換言スレハ監視ナシニ鉗子ヲ生殖器内ニ送入センカ、其尖端ハ容易ニ腔内、殊ニ腔底ニ隆起スル皺襞ニ突衝シテ穿孔ヲ來スノ恐れナシトセス、然リ而シテ閉鎖ノ際鉗子ハ直接ニ兒頭上ニ來ラス、却テ多少ノ軟部ヲ共撮シテ牽引ノ際断裂スルノ恐れアリ  
 今ヤ右手ハ就中鉗子葉ヲ送入スヘキ正方向ニ從ツテ兒頭ニ接抵シタルトキ左匙ノ尖端ハ葉ヲ鉛直ニ保持シテ右手掌ニ接抵シ、右手ノ拇指ヲ以テ匙ヲ手掌ニ壓抵シツ、深ク推送シ、同時ニ左手ヲ以テモ亦葉ヲ送入スルヲ勵ムヘシ  
 鉗子ハ骨盤ノ弓線ニ適應シ、送入ノ際ニハ狹弓ヲ畫カサル





圖二十六第

狀ルス入送ヲ葉子鉗右ノ二第

ヘカラスアルヲ以テ、之ヲ深ク送入スルニ從ツテ沈降シ、終ニ柄ヲ下方ニ來ラシムヘシ

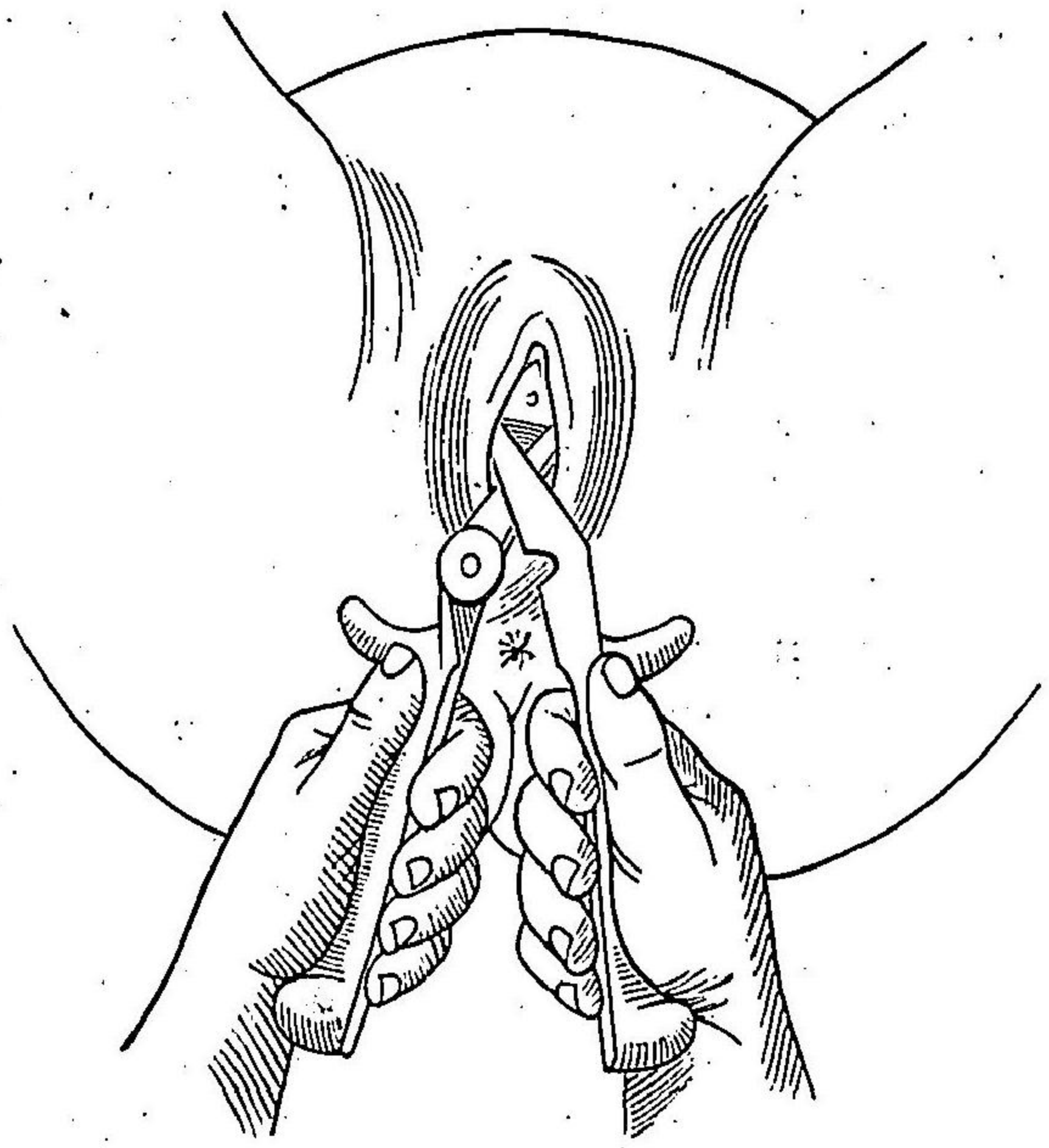
匙ノ殆ント鎖部ニ至ルマテ生殖器内ニ没入スルトキハ、庇護ニ供スル右手ヲ生殖器内ヨリ拔出シ、介者ノ一手ヲシテ左匙ヲ現在ノ位置ニ於テ保持セシメ、術者ハ右匙ヲ右手ニ把リ、左手ヲ送入シテ軟部ヲ庇護シ、右匙ヲ左匙上ニ接抵シテ左匙ト同様ニ送入ス(第六十二圖)

右匙正位ニ來リタルトキ術者ハ各柄ヲ各手ニ把リ鎖部ヲ接合シテ鉗子ヲ懸ニ閉鎖ス(第六十三圖)ヘシ

鉗子ヲ送入スル際ト閉鎖スル際ニハ決シテ猛力ヲ用フヘカラス、些少ノ障礙ハ匙ニ少シク消息運動ヲ與ヘツ、排除セサルヘカラス

匙ヲ閉鎖スル際ニハ決シテ鉗子ヲ高舉スヘカラス、然ラサレハ其位置ニ不良ノ變調ヲ來シ以テ骨盤軸ヲ脱スルニ至





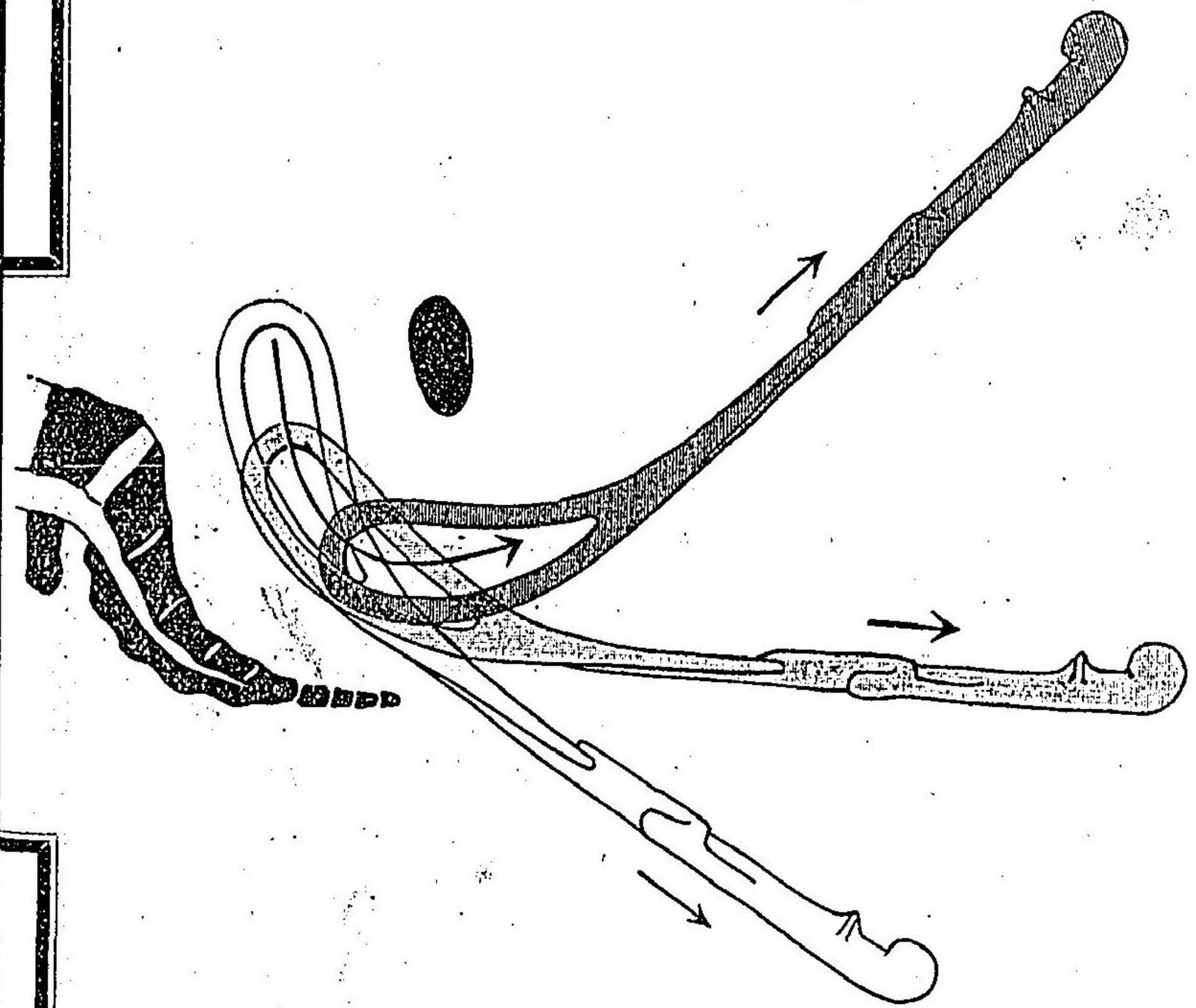
圖三十六第

狀ノルス鎖閉チ子鉗

試験的牽引

ル  
 兩葉モ亦交互密ニ對向セサルヘカラス、否ラサレハ鉗子ハ  
 遂ニ轉動シ、匙ハ不正ノ位置ニ來ルヘシ、而シテ匙ノ位置不  
 正ニ在ルヲ認メタルトキハ之ヲ遊走セシメテ兒頭ヲ正位  
 ニ復スルカ若クハ一旦拔出シテ更ニ貼接セサルヘカラス」  
 鉗子正位ニ在リテ即チ兒頭鉗子ノ使用ニ適シタル位置ニ  
 來リ而シテ骨盤ノ横徑ニ適合シ鉗子良ク閉鎖スルニ至レ  
 ハ術者ハ先ツ内診ニ依リテ軟部ノ毫モ鉗子ノ爲メニ挾撮  
 セラレサルヤヲ檢定シ、然ル後所謂試験的牽引ヲ施シ以テ  
 兒頭、鉗子ノ牽引ニ隨伴スルヤ否ヤヲ檢スヘシ  
 兒頭能ク鉗子ノ牽引ニ隨伴セハ乃チ鉗子ヲ兩手ニ把握シ  
 以テ固有ノ挽出術ヲ始ムヘシ  
 困難ナル場合ニ於テハ所謂間歇性牽引（トラクチオン、Traction）ヲ以テ挽出術ヲ試ムヘシ、即チ是レ恰モ陣痛ト陣痛ノ





圖四十六第

ス示ヲ像想ノ位柄三ルケ於ニ術出挽子鉗

間歇ニ於ルカ如ク、刻期的ニ牽引ノ力ヲ弛張スルノ法ナリ  
 通常牽引ノ方向ニ關シテ三種ノ柄位ヲ區別ス、第一柄位ニ  
 於テハ下方ニ牽引シ、第二柄位ニ於テハ地平ニ牽引シ、第三  
 柄位ニ於テハ上方ニ牽引ス(第六十四圖)此三牽引ノ方向ハ  
 乃チ兒頭產出ノ諸期ヲ示スモノナリ、元來兒頭ノ骨盤及ヒ  
 陰門ヲ通過スルヤ、必ス送入線ノ彎曲ニ適合スル弓線ヲ畫  
 カサルヘカラサルカ故ニ、鉗子挽出術ヲ行フノ際ニモ亦匙  
 ハ恥骨縫際ヲ周匝シテ狹弓ヲ畫カサルヲ得ス、而シテ其目  
 的ハ鉗子柄ヲ諸種ノ方向ニ牽引スルニ由リテ達スルヲ得  
 ヘシ

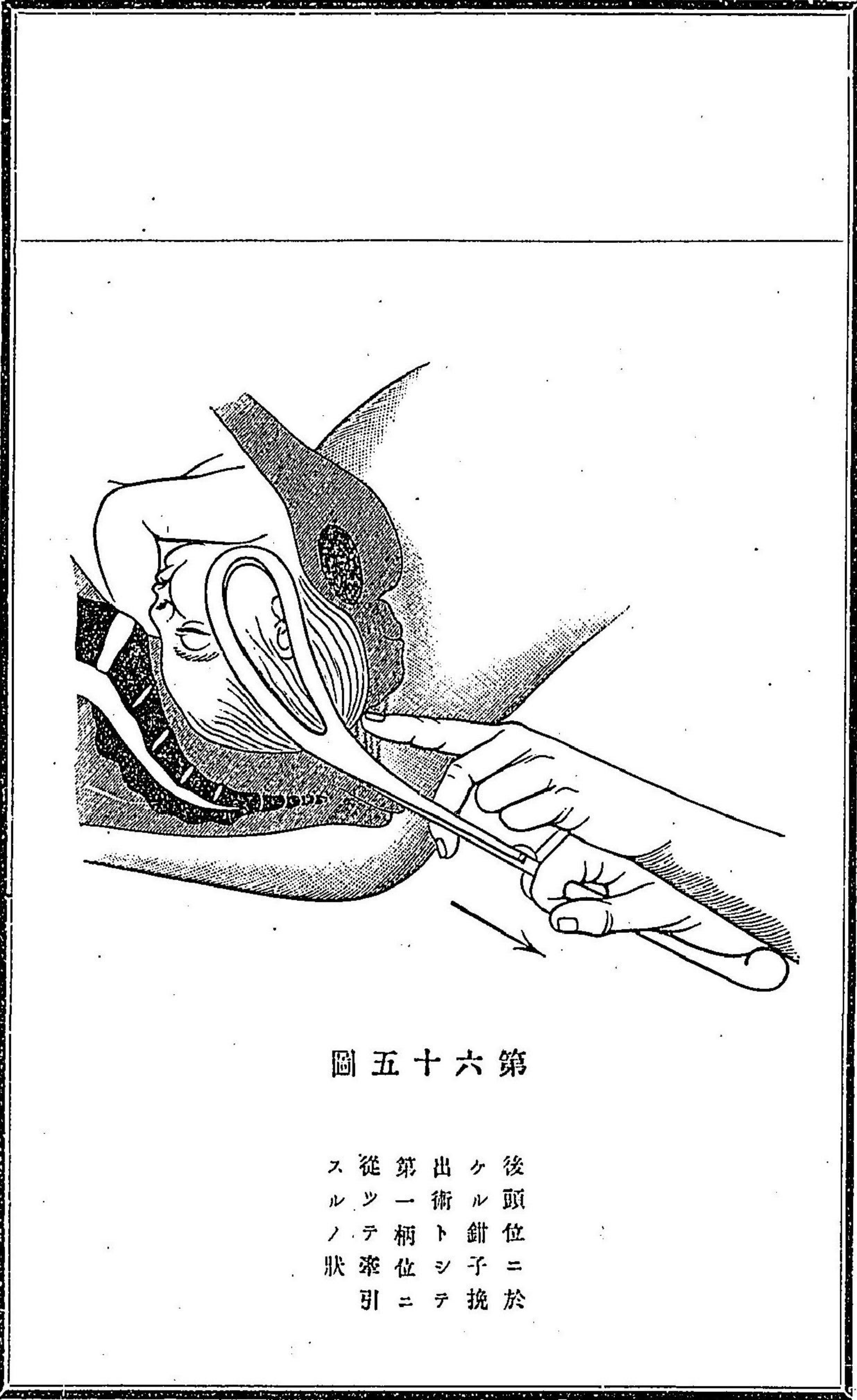
故ニ第一柄位ニ於テハ支點ノ恥骨縫際下ニ來ルマテノ間  
 ハ下方ニ牽引シ、已ニ第二柄位ニ移行スレハ後方ニ向ヘル  
 兒頭ノ部分ハ骨盤ノ後壁ニ轉降シ、第三柄位ニ於テ鉗子柄  
 ヲ高舉スレハ兒頭ハ會陰上ニ來ルヘシ



但シ第三柄位ノ場合ニハ會陰ノ裂傷ヲ招キ易キカ故ニ只、  
 僅ニ力ヲ加ヘ、決シテ固有ノ牽引ヲ要スヘカラス  
 鉗子柄ヲ高舉スル際ニハ單ニ一手ヲ以テ鉗子ヲ把握シ、他  
 手ハ會陰防護ノ用ニ供スルヲ適當トス  
 鉗子ノ除去ハ兒頭已ニ排出シテ後、會陰或ハ直腸ヨリ手ヲ  
 以テ之ヲ支持シ得ルトキニ於テス、此場合ニ於テハ注意シ  
 兩匙ヲ交互ニ除去スヘシ

後頭位ニ於ケル鉗子  
挽出術

以上論述シタル鉗子手術ノ通則ニ準據セハ以テ各胎位ニ  
 切要ナル特殊ノ方法ヲモ應用スルニ難カラサルヘシ  
 先ツ定型ノ例證トシテ適示スヘキモノハ後頭位ニ於ケル  
 鉗子挽出術ニシテ、就中兒頭鉗子手術ニ適應ノ位置ニ在ル  
 モノ是レナリ



圖五十六第

後頭位ニ於  
 ケル鉗子挽  
 出術トシテ  
 第一柄位ニ  
 從ツテ牽引  
 スルノ狀



兒頭ハ骨盤通過ノ際正規ノ回轉ヲ經過シ、後頭ヲ前方ニ向  
 ケ屈曲位ヲ爲シテ骨盤出口ニ在リ、矢狀縫合ハ殆ント前後  
 徑ニ走ル、此際鉗子ハ兒頭ヲ兩顱頂徑ニ於テ把握シ、同時ニ  
 骨盤ノ横徑ニ來ル、故ニ頭彎曲及ヒ骨盤彎曲ニ適合シテ正  
 位ニ貼接セラレ得ルナリ

試験的牽引ノ際兒頭鉗子ノ牽引ニ隨伴スルヲ認ムルトキ  
 ハ第一柄位ニ於テ、言ヲ換フレハ鉗子ノ閉鎖後、柄ノ示スヘ  
 キ方向ニ從ツテ(第六十五圖)牽引シ、以テ臍窩ヲ恥骨弓ノ下  
 隅ニ來ラシム

今ヤ兒頭ハ排出運動ヲ始ムルノ期ニ追レルヲ以テ漸次屈  
 曲位ヨリ伸展位ニ移行セサルヘカラス、是レ鉗子柄ヲ少シ  
 ク擡舉シ第二柄位ニ於テ牽引ヲ試ムルノ期ナリ(第六十六  
 圖)

顔面已ニ骨盤後壁ニ下降シ、前頭會陰ヲ隆起スルニ至レハ

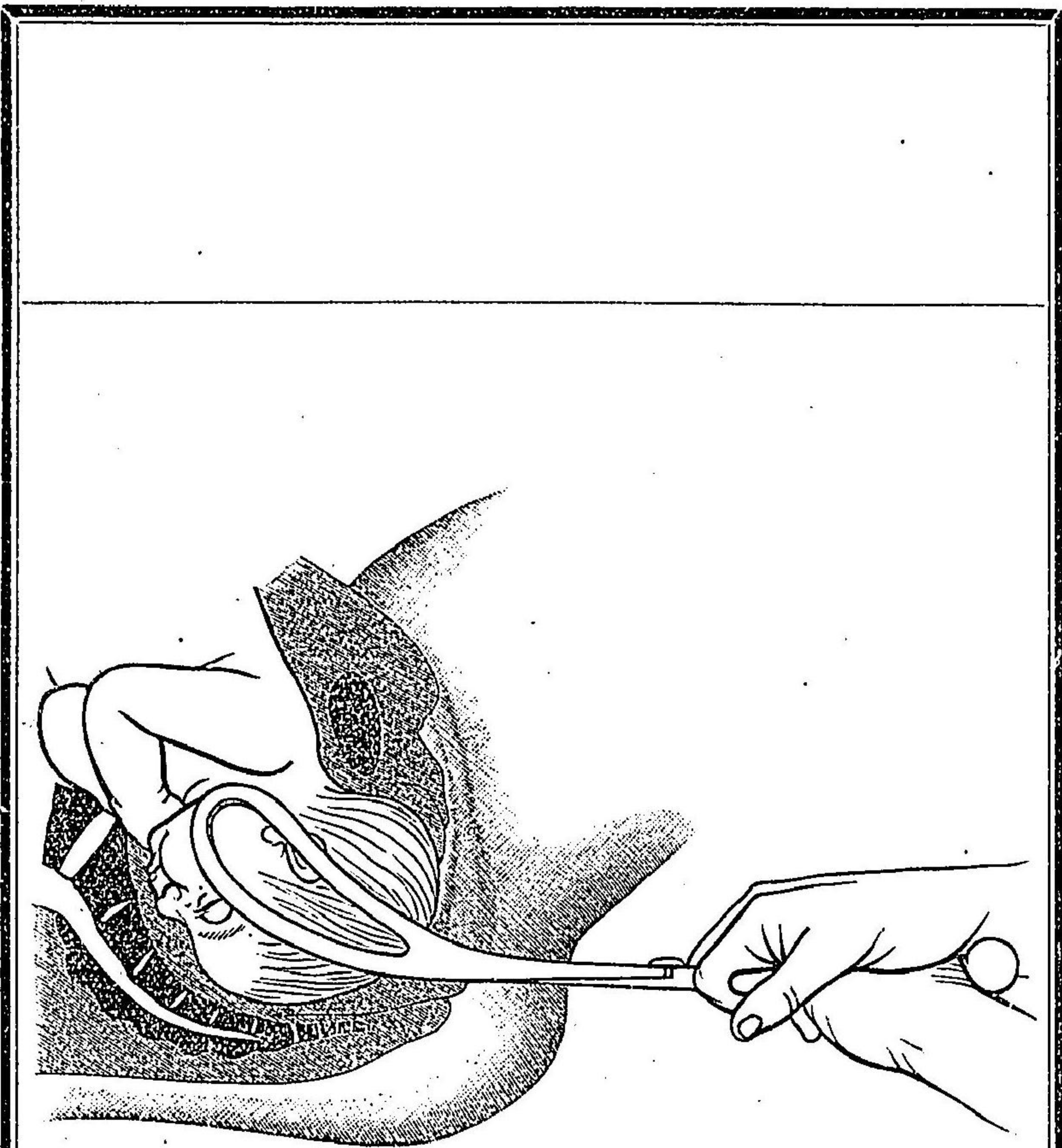


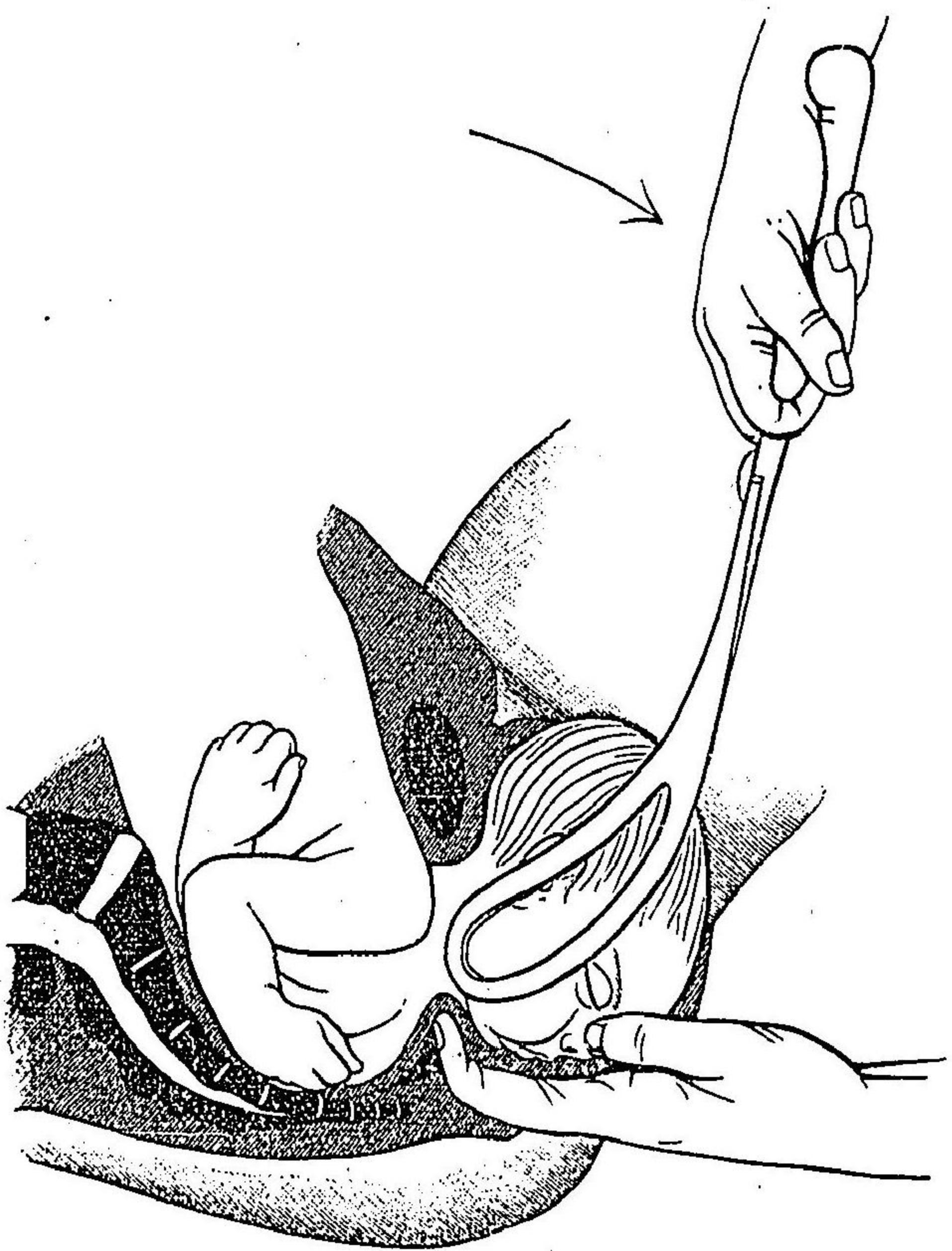
圖 六 十 六 第

後頭位ニ於ケ  
 ル鉗子挽出術  
 ノ際第二柄位  
 ニ從ツテ牽引  
 スルノ狀



第六十七圖

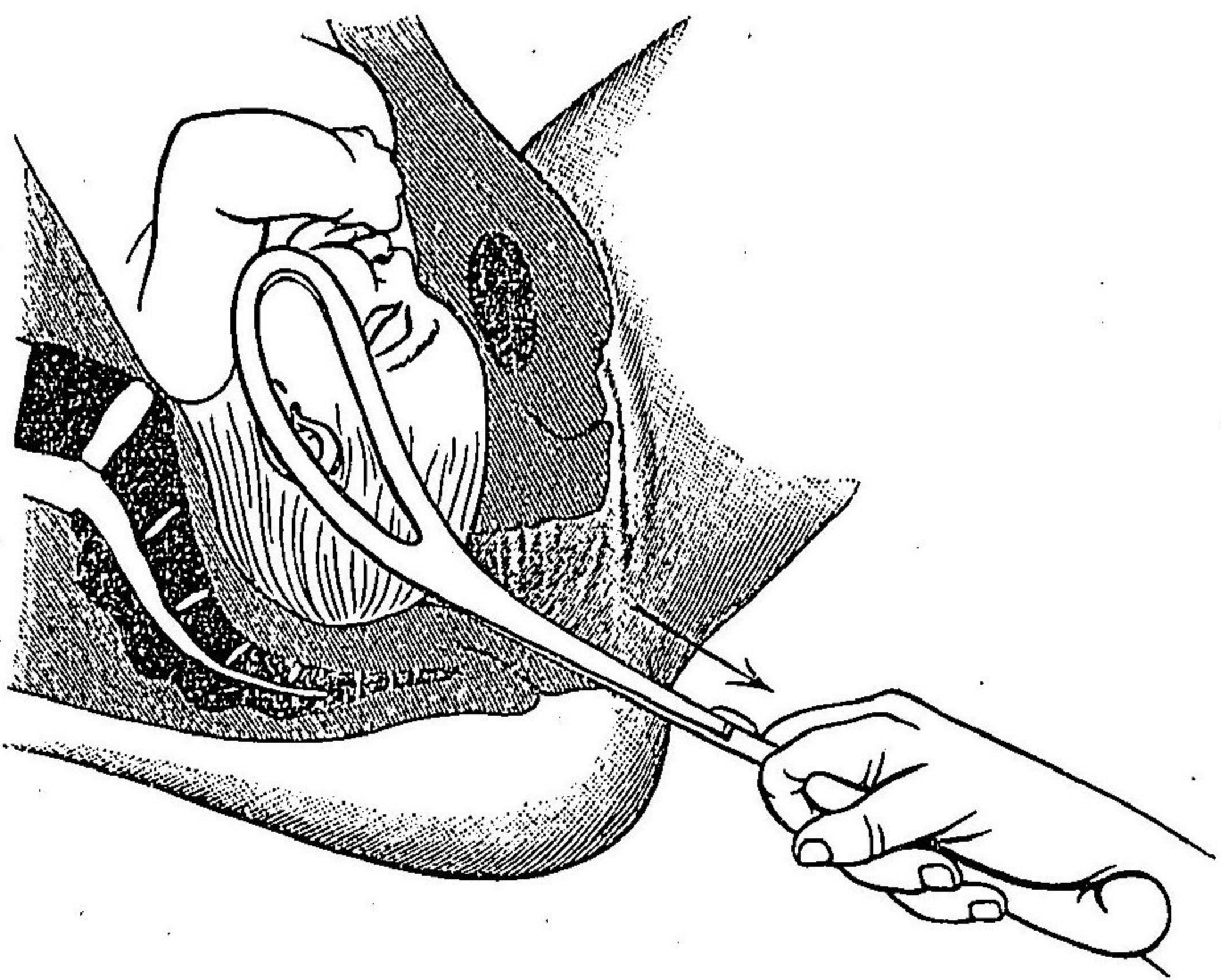
後頭位ニ於ケル鉗子挽出術ノ際第三柄位ニ  
從ツテ鉗子ヲ高舉スルリットゲン氏技術ヲ示  
ス(ツロイフェル氏ニ依ル)



前頭位ニ於ケル兒頭  
ノ鉗子挽出

鉗子柄ヲ漸徐ニ高舉シ、同時ニ細心シテ會陰ノ防護ニ注意  
スルヲ要ス、若シ困難ナル場合ニハ兒頭ノ未タ陰門ヲ全ク  
通過セサルニ先タチ可及的速ニ鉗子ヲ除去スルヲ可トス、  
而シテ左手ノ示指ヲ以テ直腸ヨリ顔面ニ達シ得タルトキ  
ハ兒頭ハ容易ニ臍部ニ於テ固定セラレ、之ヲ押壓スレハ漸  
徐ニ産出スルニ至ルモノナリ(リットゲン Rigen 氏)  
前頭位ニ於ケル兒頭ノ鉗子挽出ハ排出器械的作用ノ異ナ  
ルニ從ヒ前ニ陳ヘタル後頭位ニ對スル方式ト自ラ差別ア  
リ、但シ鉗子ノ接抵及ヒ第一柄位ニ於ケル牽引ハ同一ノ方  
法ニ從フ  
支點恥骨縫際下ニ來レハ直ニ強ク柄ヲ高舉シテ兒頭ヲ屈  
曲セシメ、以テ後頭ヲ會陰上ニ轉動セシム(第六十九圖)  
此動作ハ前頭位ニ在ル兒頭ノ鉗子挽出ヲ遂クルニ最モ困  
難ナルモノニシテ、苟モ不正、不注意ノ方法ニ出ツルトキハ





圖八十六第

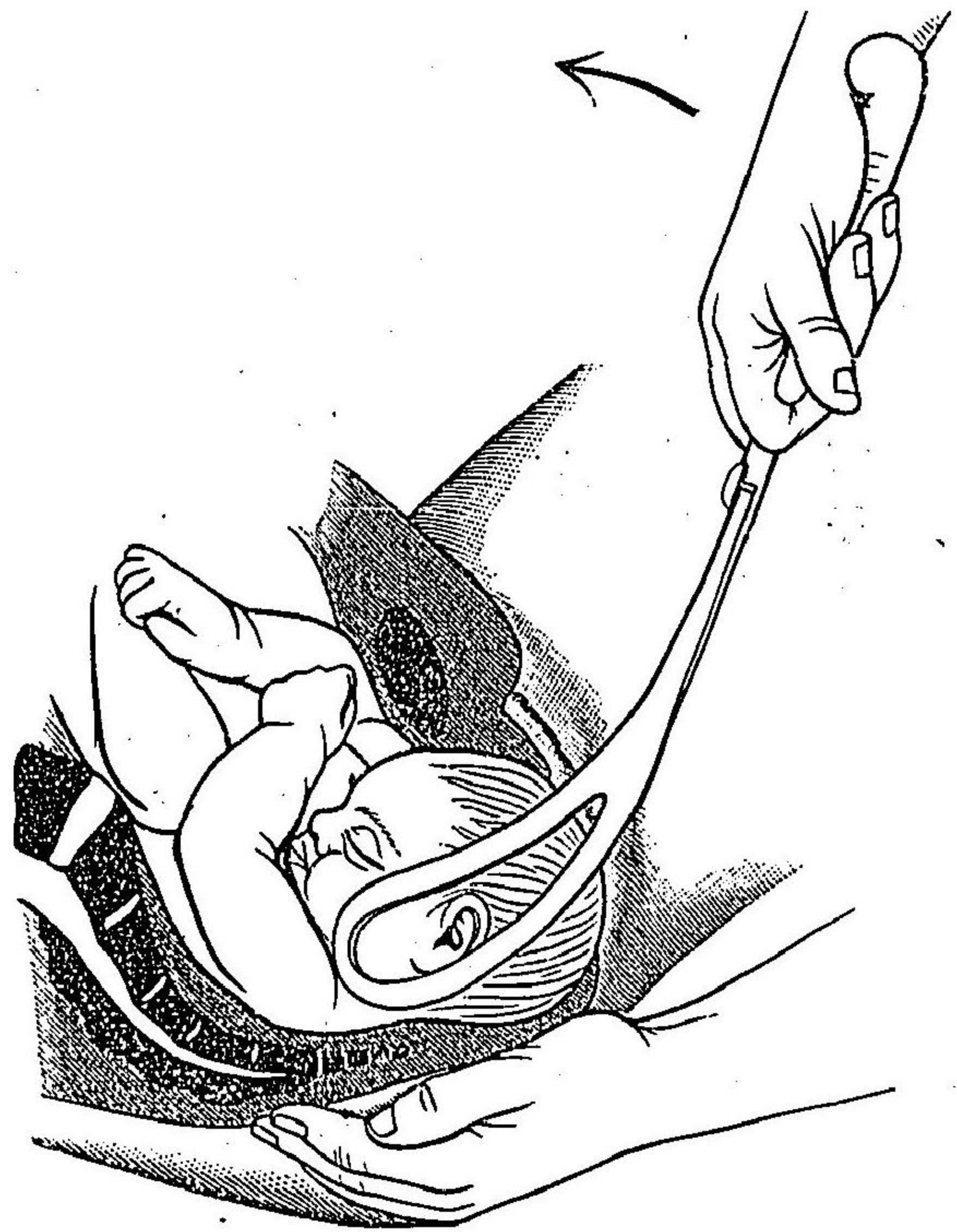
前頭位ニ於ケ  
ル鉗子挽出術  
ノ際第一柄位  
ニ從ツテ牽引  
スルノ狀

容易ニ強大ナル會陰破裂ヲ來ス、故ニ術者ハ專ラ兒頭ニ正當ノ回旋點ヲ擇ムニ注意セサルヘカラス  
前頭位ニ於テ自然分娩ヲ來スノ際ニ現ハルヘキ分娩器械的作用ヲ記述セシ際、通過面ノ大サハ支點ノ撰擇ニ關スルモノナルコトヲ説明セリ、前頭結節ノ上部支點トナルトキハ下後頭前額徑ニ同大ナル周徑ハ通過面トナリ、而シテ帽狀腱膜ノ恥骨縫際下ニ支抵スル際ニハ後頭前額徑、即チ較大ナル周徑ハ通過面トナルヲ以テ一層軟部ヲ斷裂スルノ危險ヲ増スモノナリ  
其他此ノ如ク鉗子柄ヲ強ク高擧シテ第一柄位ヨリ第三柄位ニ及ホス際ニハ鉗子ノ尖端ヲ兒頭以外ニ脫離セサル様注意スヘシ、兒頭以外ニ脫離スルハ爲メニ後脛壁ヲ損傷シ、甚シキハ直腸腔中隔ヲ離斷スルノ恐アリ、若シ鉗子ノ尖端兒頭ヲ脫離シタルトキハ直チニ鉗子ヲ鎖部ニ於テ緩メ



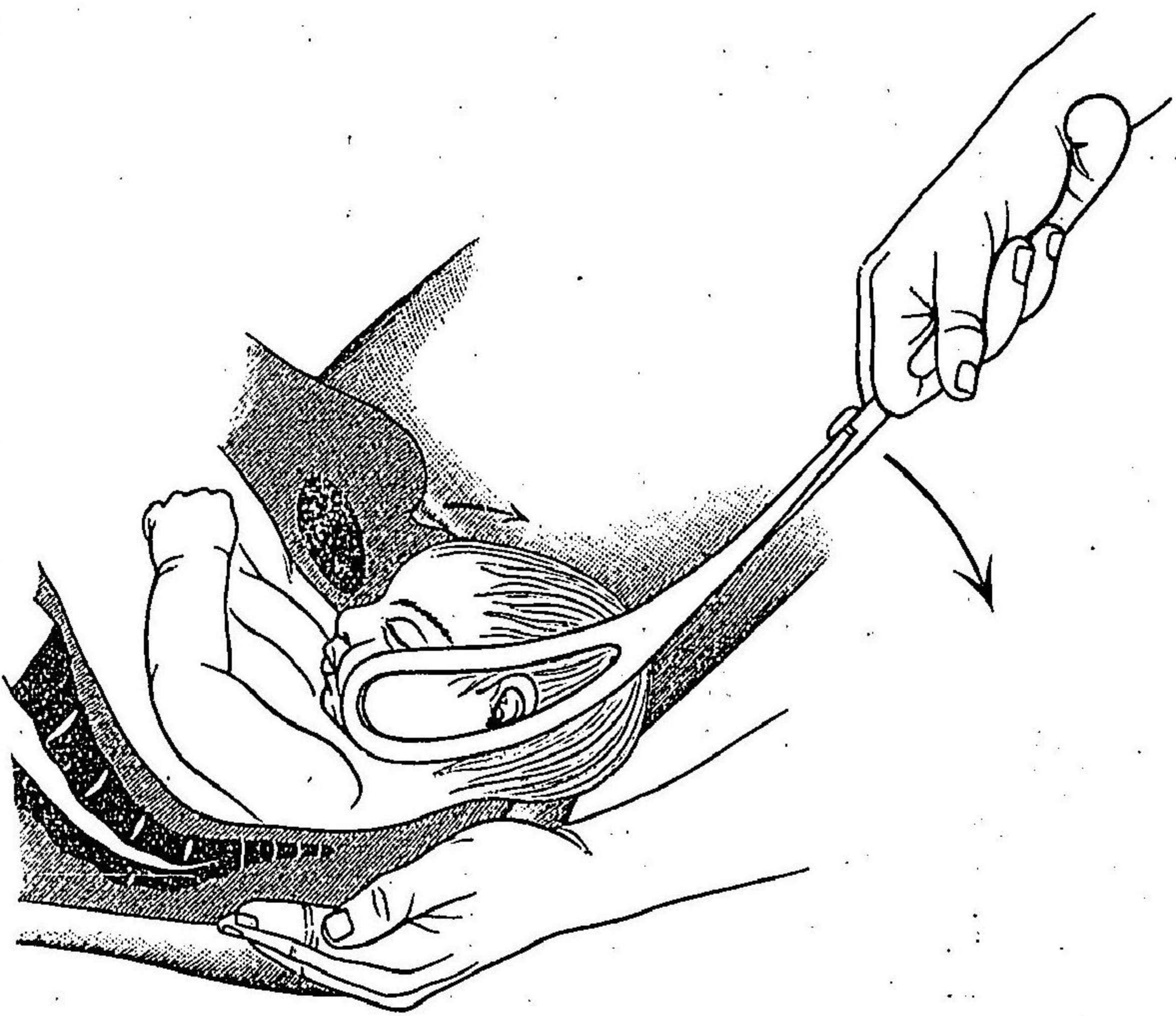
第六十九圖

前頭位ニ於ケル鉗子挽出術ノ第三柄位ニ於ケル柄  
ヲ高舉シ以テ顛頂及ヒ後頭ヲ娩出セシムルノ狀



第七十圖

前頭位ニ於ケル柄子挽出術ノ際柄ヲ第二柄位ニ沈降シテ顔面ヲ娩出セシムル狀





前頭位ヲ鉗子ニテ後頭位ニ變ス

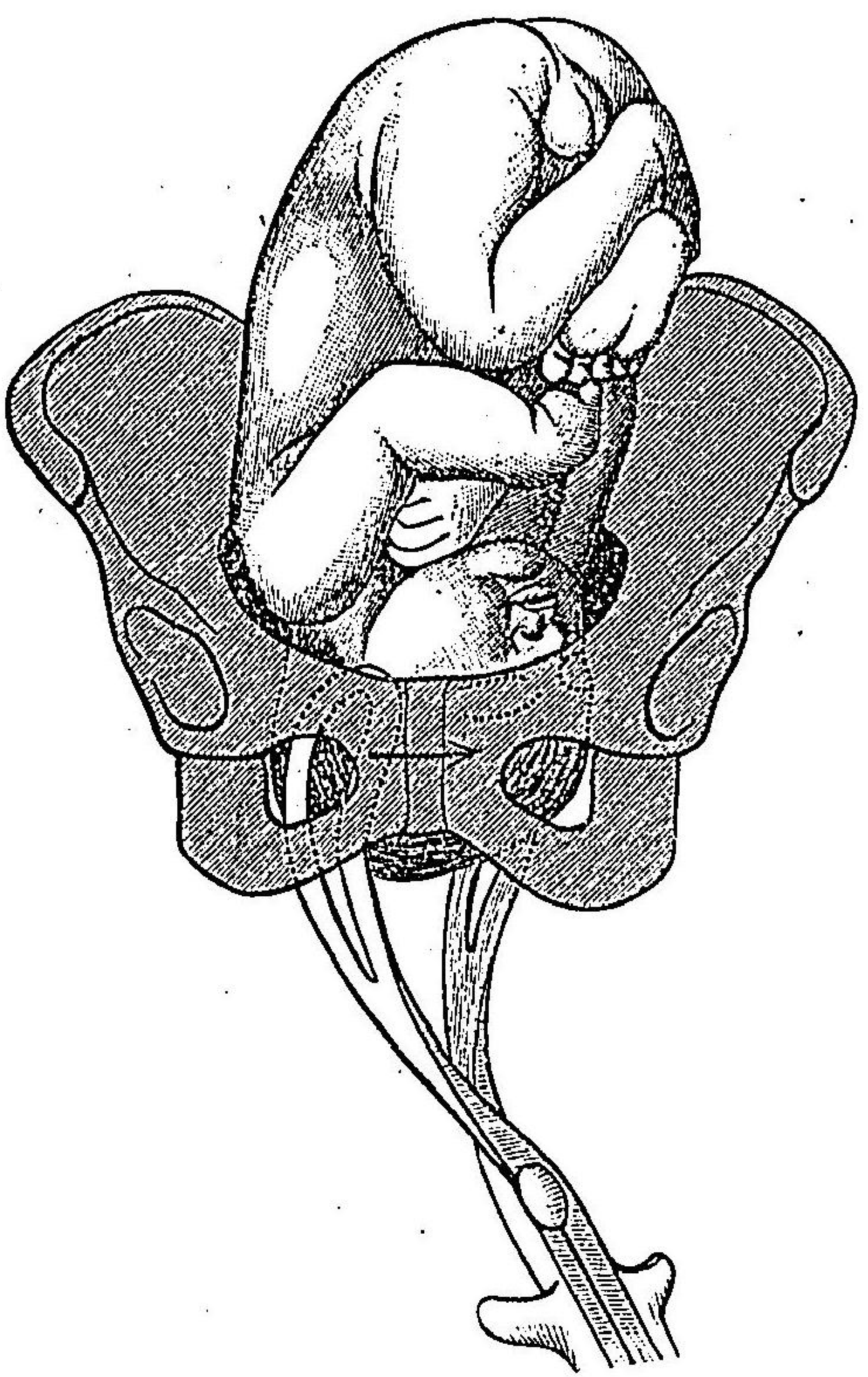
而シテ兒頭ニ沿ヒテ牽引セサルヘカラス  
 已ニ會陰後頭上ヲ縮退スルニ至レハ鉗子柄ヲ第二柄位ニ  
 沈降スヘシ之ニ由リテ兒頭ハ伸展シ、顔面ハ恥骨縫際下ニ  
 前進スルニ至ル(第七十圖)  
 前頭位ニ於ケル兒頭ノ鉗子挽出ハ後頭位ニ於ケルモノニ  
 比スレハ斷シテ不利ナルカ故ニ、スカンゾオニ(Sanzoni)及  
 ヒランゲ(Lange)ノ二氏ハ人工的遂婉ノ必要アル場合ニ前頭  
 位ヲ先ツ鉗子ヲ以テ回轉シテ後頭位ニ變ラシメ、而シテ後  
 始メテ兒頭ヲ挽出スルノ法ヲ推奨セリ  
 スカンゾオニ氏ハ此目的ニ次ノ法式ヲ賞用セリ、即チ矢  
 狀縫合ノ經過ニ於テ鉛直ナル斜徑ニ鉗子ヲ接抵スルニ在  
 リ、故ニ第三頭蓋位ニ於テ矢狀縫合第一斜徑ニ走ルトキハ  
 鉗子ヲ第二斜徑ニ於テ接抵ス、言フ換フレハ右匙ハ右前方  
 ニ貼シ、左匙ハ左後方ニ貼スルナリ(第七十一圖)

今ヤ指時計ノ如ク回旋シテ後頭ヲ右前方ニ來ラシムレハ  
 鉗子ハ第一斜徑ニ來ルヘシ  
 今ヤ右匙ハ左前方ニ、左匙ハ右後方ニ在リ而シテ骨盤彎曲  
 ノ凹面ハ後方ニ來ルカ故ニ、此際鉗子ヲ挽出ノ用ニ供スル  
 ヲ得ス、宜シク鉗子ヲ除去シテ新タニ貼接スヘシ、就中左匙  
 ヲ左前方ニ、右匙ヲ右後方ニ貼スルヲ要ス、他ノ産科醫中ニ  
 ハ鉗子匙ヲ遊走セシメ以テ兒頭ヲ正位ニ來スヲ賞用スル  
 者アリ、而シテ前文ニ記述シタル所ト同意義ニ兒頭ヲ少シ  
 ク回旋スレハ、後頭ハ全ク恥骨縫際下ニ來リ、兒頭ハ後頭位  
 ニ於ケルカ如ク挽出セララル  
 此法ニ附帶スル缺點ハ第一、鉗子ヲ二回貼接セサル可ラサ  
 ルト、第二鉗子ヲ前後徑以外ニ回旋スル際前葉ノ嵌合ヲ致  
 スコトアルカ爲メニ鉗子匙ヲ除去スルニ困難ナルコト是  
 ナリ



第七十一圖

スカンジゾオニ一氏ノ前頭位ヲ回旋スル法  
第二頭蓋位ニ於テ鉗子ヲ第二斜徑ニ貼接スルノ狀



スカンジゾオニ一氏法ハ殆ント一般ニ非難セラレ、モノニシテ、特リ前頭位ニ於ケルノ挽出カ排勝スヘカラサル困難ニ遭遇スルトキニノミ應用スヘキモノトス

此スカンジゾオニ一氏ノ二時的ナル手術法ニ反シランゲ氏法ニ於ケル鉗子貼接ノ方法ハ回旋ヲ完了シタル後ニ於テモ鉗子ハ兒頭挽出ニ適應ノ位置ニ在ルヲ目的トセリ

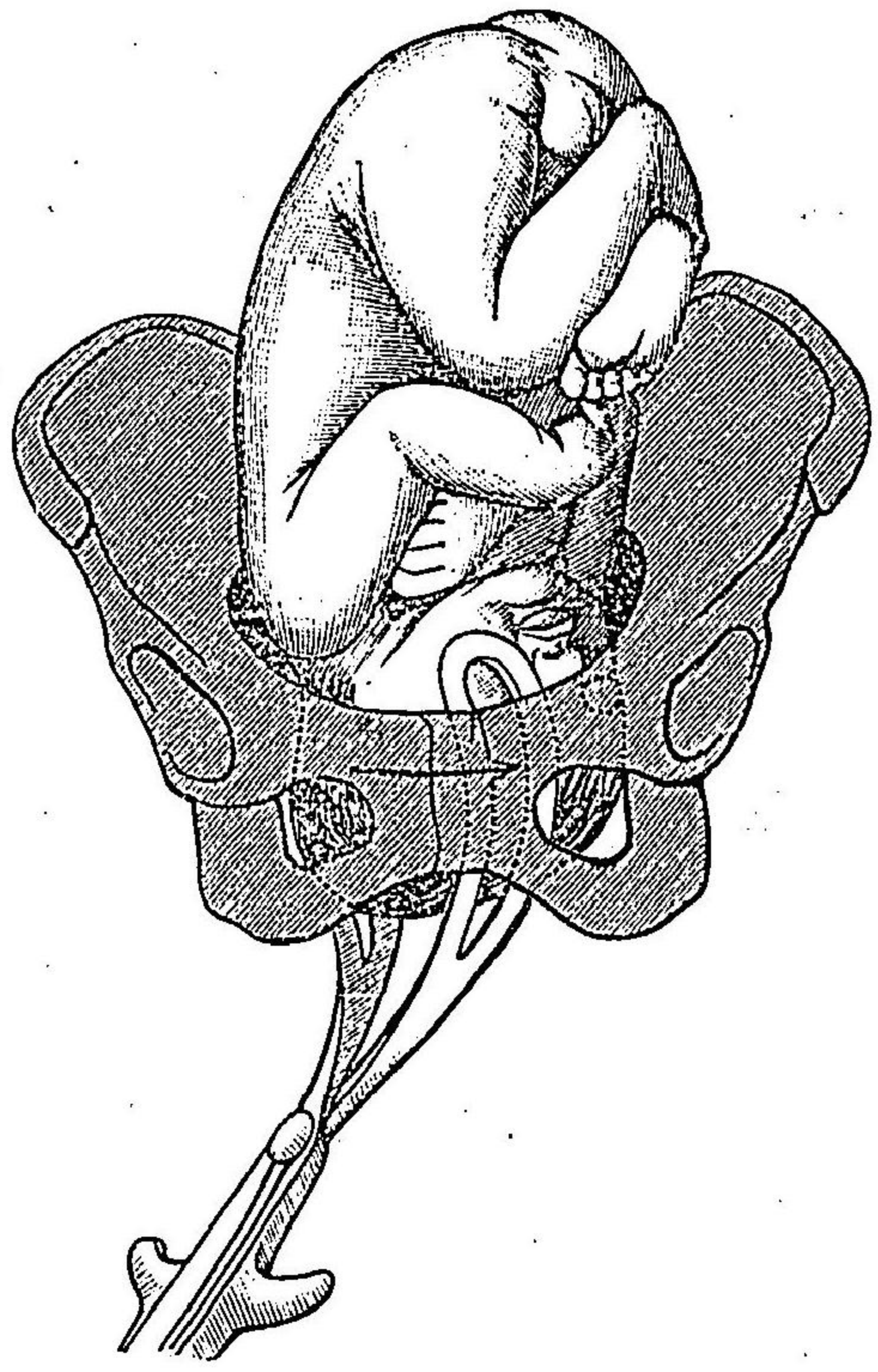
此法式ハ後頭甚シク後方ニ回旋シ、矢狀縫合殆ント前後徑ニ在ル者ニハ適用スヘカラスト雖トモ、骨盤出口ニ於テ兒頭ノ横位ニ在ル者ニハ同時ニ便宜ナル回轉及ヒ挽出ノ狀況ヲ與フルモノトス

此際ニハ後頭ニ貼接スヘキ鉗子匙ヲ全ク骨盤ノ後壁、即チ當該スル薦腸接合ノ部位ニ送入ス、故ニ第二頭蓋位ニ於テハ鉗子匙ヲ骨盤ノ右後壁ニ送りテ後頭ノ右側ニ來ラシム、而シテ左匙ハ骨盤ノ前壁ニ沿ヒ左鎖閉孔ノ下際ニ送りテ



第七十二圖

ランゲ氏ニ從ヒ前頭位或ハ深ク横徑ニ在ル兒頭  
ヲ回旋スル法  
第二頭位ニ於テ鉗子ヲ第一斜徑ニ貼スルノ狀



顔面位ニ於ケル鉗子ノ接抵

前額ノ左半側ニ貼ス、故ニ鉗子ハ第一斜徑ニ在ルナリ、今ヤ  
牽引スルノ際同時ニ鉗子ヲ指時計ノ意義ニ回旋シ以テ後  
頭ヲ右前方ニ回轉セシム(第七十二圖)  
矢狀縫合殆ント前後徑ニ回旋シタルトキ鉗子ハ本來第二  
斜徑ニ在ラサル可ラス、然レトモ通常兒頭ハ鉗子内ニ於テ  
少シク移動スルヲ以テ、鉗子ハ横徑ニ於テノミ退行シ、却テ  
挽出ニ適應ノ位置ヲ取リテ兒頭上及ヒ骨盤内ニ在ルヲ例  
規トス、然リト雖モ鉗子ヲ第二斜徑ニ回旋セザルヘカラサ  
ルトキニモ、亦新ニ鉗子ヲ貼セスシテ挽出ノ目的ヲ遂ケ得  
ルモノナリ、而シテ柄ヲ高舉スル際ニハ之ヲ左側ノ大腿屈  
曲ニ傾歛スヘシ

顔面位ニ於ケル鉗子ノ接抵ハ後頭位ニ於ケル法ト大同小  
異ニシテ、鉗子匙ハ顔面ヲ越エテ前方ヨリ後方ニ兒頭ヲ把



顔面位ニ於ケル鉗正ノ要件

握ス(第七十三圖)、此位置ニ於テモ鉗子ハ同シク便宜且ツ適當ニ兒頭ニ接抵スルモノナリ

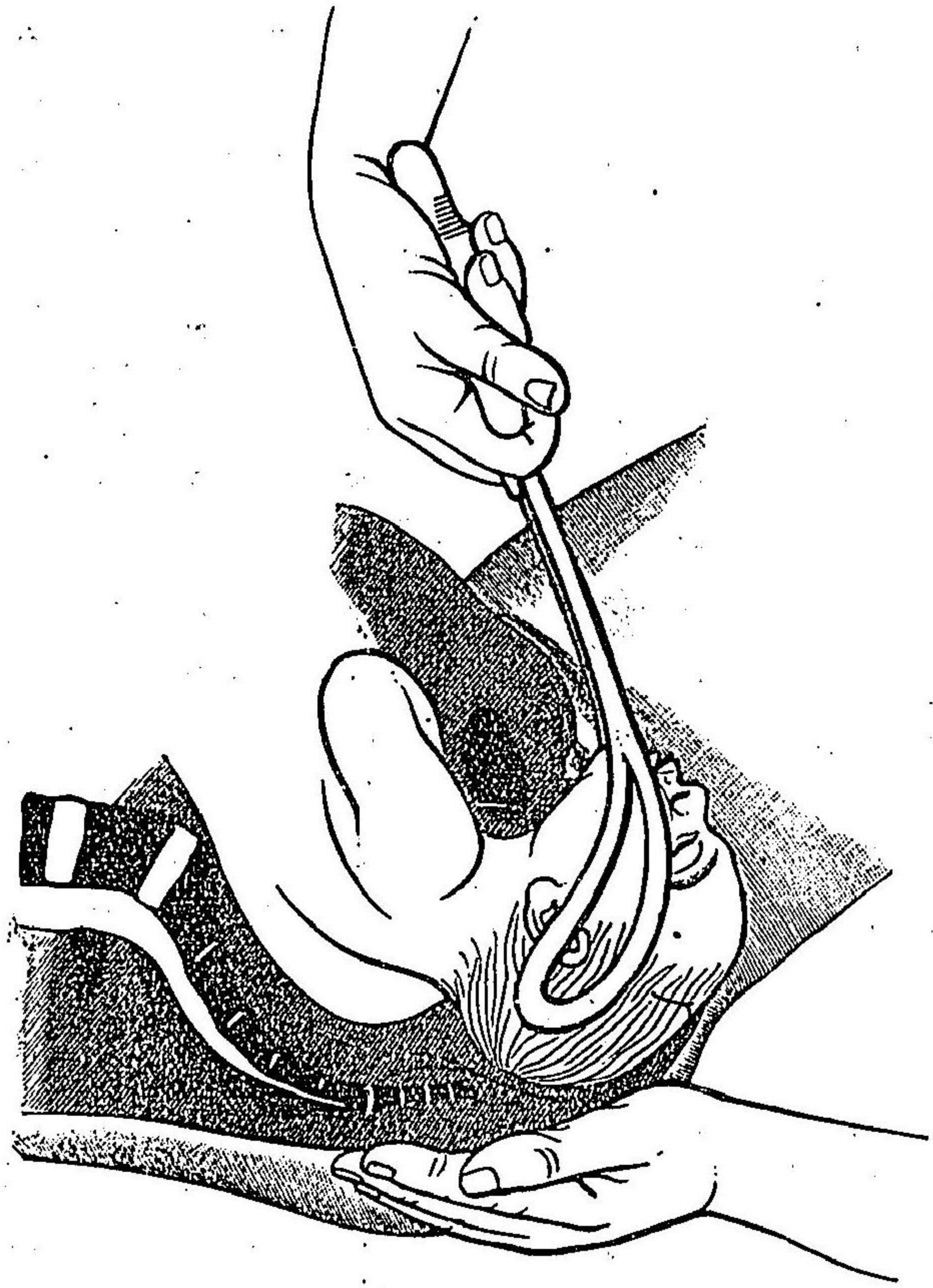
挽出ノ方法モ亦顔面位ニ於テハ後頭位ニ於ケル時ト異ナルコトナシ、即チ第一柄位ニ於テハ腮部ノ恥骨縫際下ニ前進シテ頸椎ノ支點トナルニ至ルマテ牽引シ、次チ第二柄位ニ移行スルニ及ヒ後頭ハ骨盤ノ後壁ニ沿ヒテ牽下シ、終リニ第三柄位ニ於テ鉗子柄ヲ高舉スレハ兒頭ハ産出スルニ至ルナリ

顔面位ニ於ケル鉗子挽出術ノ要件ハ顔面腮部ヲ前方ニ回轉シテ骨盤出口ニ位シ、顔面線ハ殆ント前後徑ニ走ルニ在リトス

顔面位ニ於テ兒頭極度ニ伸展セル状態カ其回轉ヲ困難ナラシムルハ自然産出ノ際ニ分娩ノ遲滯スルニ由リテ明白ナリ、故ニ後頭位ニ於テ矢狀縫合ノ深ク横徑ニ在ルトキ行

第七十三圖

顔面位ニ於ケル鉗子挽出術ヲ示ス





ハル、ガ如ク、鉗子ヲ以テ人工的ニ顔面ヲ回轉スルハ切ニ戒シムヘキ要件トス、是レ殊ニ腮部ヲ後方ニ回轉スルノ不良ナルニ際シ、前頭位ニ於ケル回轉ニ同シク鉗子ヲ以テ顔面ヲ骨盤内ニ回旋セントスル場合ニ適用スヘキ禁戒ナレハナリ

顔面線前後徑ニ在ラサルトキハ鉗子ヲ以テ挽出スルヲ禁忌トス、又額位ニ於テモ同様鉗子挽出術ヲ行ハサルヲ可トス、是レ上文ニ説述シタルカ如ク、此場合ニ於テ分娩器械的作用ニ極メテ不良ノ狀況ヲ存シ、且ツ分娩ノ際母子兩體ニ危険ナル力ヲ要スヘケレハナリ

以上叙述シタル鉗子手術ニ於テ第一義トスヘキハ、兒頭已ニ小骨盤内ニ進入スルカ、或ハ最大徑ヲ以テ骨盤入口ニ在ルトキニ應用スルニ在ルナリ、是等ノ手術ハ凡テ定型的鉗子手術ニ屬スルモノナレトモ、之ニ反シテ所謂非定型的鉗子手術ニ屬スルモノナレトモ、之ニ反シテ所謂非定型的鉗子手術ニ於テハ其適應症、豫後、及ヒ方式、ニ至ルマテ嚴格ニ定型的鉗子挽出術ト區別ヲ立テサルヘカラサルモノアリ

非定型的手術トハ凡テ兒頭最大徑ヲ以テ尙ホ骨盤入口上ニ在ルモノニ鉗子ヲ貼接スルヲ謂フ

凡ソ排出期ニ至リ卵胞破裂後ニ兒頭尙ホ骨盤入口上ニ在ルモノハ必ス兒頭ノ骨盤内進入ヲ妨クル障礙アルノ徴ニシテ、就中兒頭及ヒ骨盤間ノ異常状態ヲ誘起スルハ即チ狹窄骨盤ニ在ルヲ常トス

此ノ如キ場合ニ於テ内腔的異常状態ノ變化ヲ左右スルコト能ハサル鉗子ノ力ニ藉リ兒頭ヲシテ骨盤ノ狹窄部ヲ通過セシメ得ルヤ否ヤハ豫メ之ヲ断定スヘカラサルモノナリ、定型的鉗子手術ニ於テハ鉗子ヲ以テ遂婉ノ完了ヲ豫期シ得ヘシト雖モ、非定型的手術ニ至リテハ決シテ成效ヲ保スヘカラス、而シテ手術ハ却テ一ノ試験ニ過キサルノミ、之

定型的鉗子手術

非定型的鉗子手術

子手術ニ於テハ其適應症、豫後、及ヒ方式、ニ至ルマテ嚴格ニ定型的鉗子挽出術ト區別ヲ立テサルヘカラサルモノアリ

非定型的手術トハ凡テ兒頭最大徑ヲ以テ尙ホ骨盤入口上ニ在ルモノニ鉗子ヲ貼接スルヲ謂フ

凡ソ排出期ニ至リ卵胞破裂後ニ兒頭尙ホ骨盤入口上ニ在ルモノハ必ス兒頭ノ骨盤内進入ヲ妨クル障礙アルノ徴ニシテ、就中兒頭及ヒ骨盤間ノ異常状態ヲ誘起スルハ即チ狹窄骨盤ニ在ルヲ常トス

此ノ如キ場合ニ於テ内腔的異常状態ノ變化ヲ左右スルコト能ハサル鉗子ノ力ニ藉リ兒頭ヲシテ骨盤ノ狹窄部ヲ通過セシメ得ルヤ否ヤハ豫メ之ヲ断定スヘカラサルモノナリ、定型的鉗子手術ニ於テハ鉗子ヲ以テ遂婉ノ完了ヲ豫期シ得ヘシト雖モ、非定型的手術ニ至リテハ決シテ成效ヲ保スヘカラス、而シテ手術ハ却テ一ノ試験ニ過キサルノミ、之



ヲ試ミ其目的ヲ誤ルトキハ他ノ方法ニ依リテ人工的ニ遂  
 婉ヲ完了セサルヘカラス、乃チ穿顱術ニ依リテ遂婉セシム  
 ルヲ例規トス、殊ニ此ノ如キ非定型的鉗子手術ハ最モ嚴格  
 ナル適應症ヲ具フルトキニ限リ施行スヘキヲ忘ルヘカラ  
 ス

兒頭骨盤入口上ニ在リテ尙ホ移動スルモノニハ概シテ鉗  
 子ヲ貼スヘカラス、若シ兒頭此處ニ固定シ、矢狀縫合常ニ骨  
 盤ノ横徑ニ走ルモノニハ鉗子ヲ顔面及ヒ後頭ニ互リテ頭  
 部ニ貼接スヘシ、是レ鉗子ハ其骨盤彎曲ヲ以テ密ニ骨盤軸  
 ニ貼接セサルヘカラサレハナリ、是故ニ鉗子ヲ閉鎖スル際  
 ニハ柄ヲ極度ニ沈降センコトヲ要ス、挽出ノ際ニモ亦可及  
 的下方ニ牽引シ、以テ兒頭ヲ場合ニ因リ恥骨縫際ノ後方ニ  
 來ラシムヘシ

密ニ骨盤軸ニ從ツテ牽引シ得ル爲メ、此ノ如キ手術ニ供ス

應軸牽出鉗子

後進兒頭ニ鉗子ヲ用

ル特殊ノ器械トシテ所謂應軸牽出鉗子ナルモノアリ、是レ  
 柄ノ外、匙自己ニ貼接スル一ノ牽引裝置ヲ設ケタルモノナ  
 リ

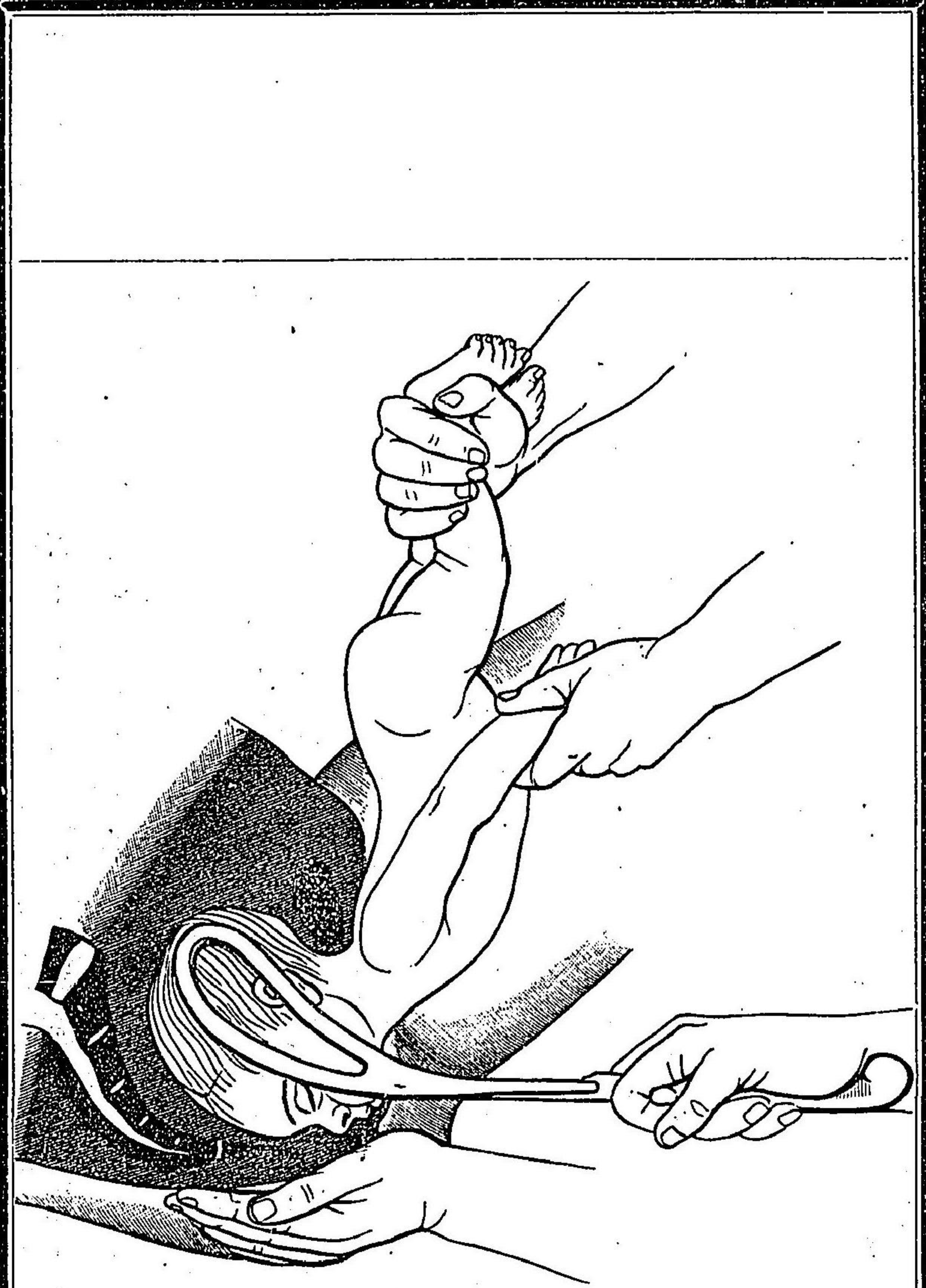
兒頭ヲ骨盤内ニ牽下シタルトキハ鉗子ハ兒頭ノ産出ニ適  
 セサル位置ニ在ルヲ以テ一旦之ヲ拔去シ、而シテ後、兒頭ノ  
 深ク横徑ニ在ル位置ニ適合スル方法ニ從ツテ貼接セサル  
 ヘカラス

又後進兒頭ノ挽出ニモ鉗子ハ多ク賞用セラレタルモノナ  
 リ

然レトモ此ノ如キ挽出ニ就テハ後文用手的挽出術ノ條下  
 ニ論述スヘキ技術中ニ却テ兒頭ヲ骨盤内及ヒ骨盤通過時  
 ニ移動シ得ル一層適良ノ方法アルカ故ニ、鉗子ノ應用ハ益  
 壓斥セラル、ニ至レリ

第七十四圖ハ後進兒頭ニ鉗子ヲ貼用スルノ方法ヲ示スモ





圖四十七第

狀ノ用貼子鉗ルケ於ニ頭兒進後  
(ル據ニ氏ルエフイロツ)

ノニシテ此際殊ニ注目スヘキハ胎兒ノ軀幹ヲ圖式ニ示ス  
カ如クニ把握シテ高ク反轉シ、鉗子ヲ以テ兒頭ヲ下方ヨリ  
把握スルニ在リトス



### 第五章 用手的挽出術 Manuelle Exstruktion.

用手的挽出術

手術ノ目的

用、手、的、挽、出、術、トハ骨盤端位ニ於テ分娩ニ迫レル胎兒ヲ娩  
 出セシムルヲ謂フ

手、術、ノ、目、的、ハ、鉗子の挽出術ニ於ケルト同一ニシテ、胎兒ヲ  
 壞滅セズ天然ノ産道ニ由リ遂婉セシムルニ在リ

此術ニ於テモ胎兒ノ軀幹ヲ把握スル手ニヨリ下方ヨリ促  
 ス牽引ハ自然ノ分娩力ヲ代償スルモノナリ

適應症ハ鉗子ヲ使用スル場合ニ同シ

(一)子宮口ノ全ク開大シタルトキ

(二)卵胞ノ破裂シタルトキ

(三)骨盤ノ過狹ナラサルトキ

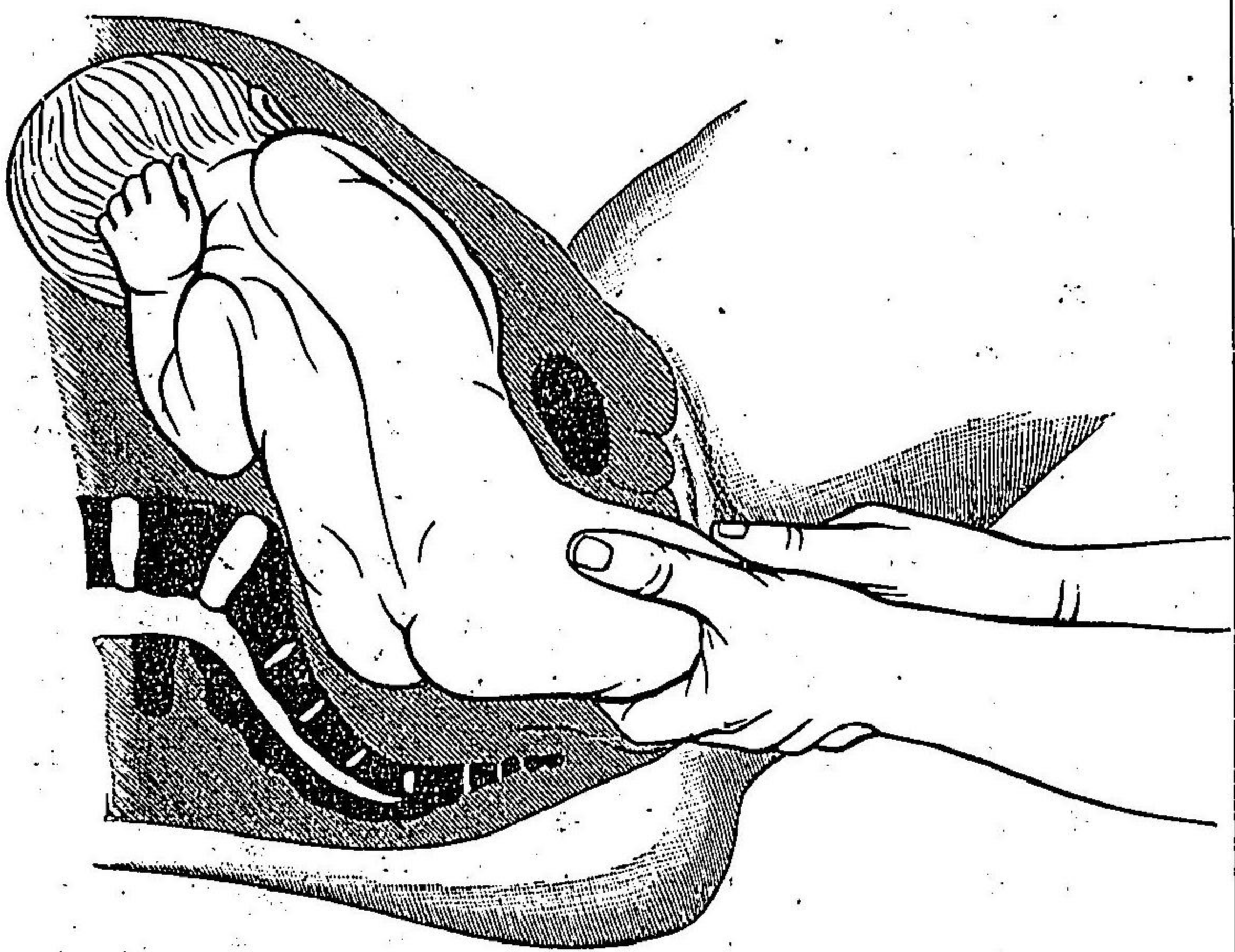
(四)胎兒ノ過大ナラサルトキ

骨盤端位ハ胎兒自然ニ分娩シ得ル所ノ生理的位置ナルカ

故ニ、苟モ母體或ハ兒體ニ關スル特殊ノ適示症アラサル限  
 リハ決シテ人工的遂婉法ヲ行フヘキモノニ非ス

然レトモ是レ只手術ノ第一次タル軀幹ノ娩出ニ適用スヘ  
 キノミ、之ニ反シテ兒膊及ヒ兒頭ノ解除ニ至リテハ毎回必  
 ス其必要アルモノニシテ、軀幹ノ分娩後、屢見ルカ如ク、胎兒  
 上部ノ排出ニ困難ヲ來ストキニ然リトス、已ニ此期ニ至レ  
 ハ毎回胎兒ハ危険ノ極ニ在ルモノトス、是レ臍帶力已ニ産  
 道ノ外部ニ在ル胎兒ノ腹部ヨリ之ニ沿ヒテ骨盤ヲ脱出シ  
 而シテ骨盤内ヲ充填スル胎兒部ノ爲メニ壓迫セラル、ヲ  
 以テナリ、然レトモ臍帶全ク壓迫セラル、ニ至レハ遅クモ  
 十分時ノ後ニハ窒息ニ因リテ胎兒ノ死亡ヲ來スモノナリ、  
 骨盤端位ニ於テ兒腹ノ娩出後、直チニ胎兒ノ上軀幹部及ヒ  
 頭部ヲ排出スルニ至ラサルトキハ胎兒ノ危険ハ頭位ニ於  
 テ臍帶脱出ヲ兼テ、前進兒頭骨盤内ニ進入シタルトキト同



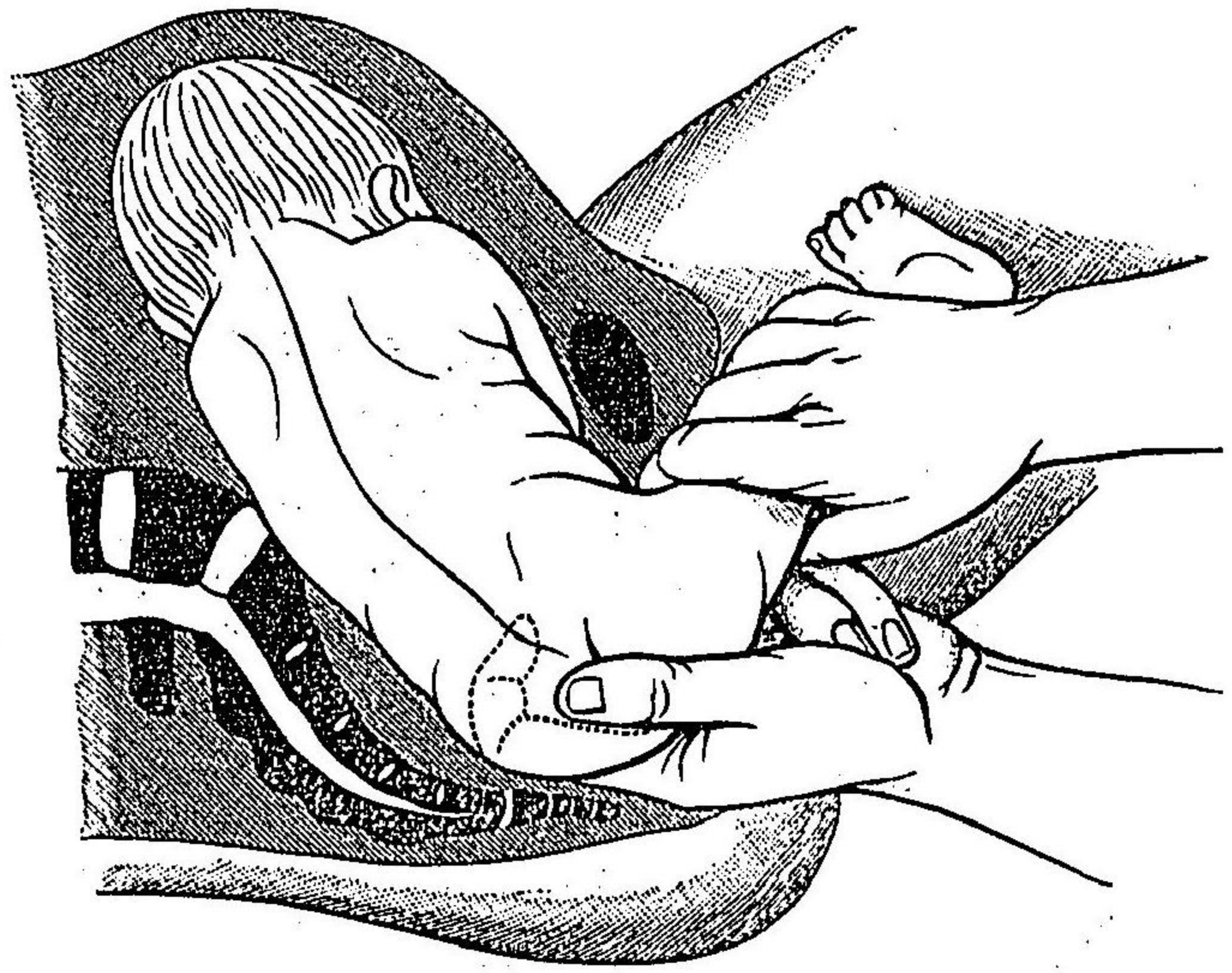


第七十五圖

足位挽出術ノ第一  
 次トシテ兒足ヲ把  
 握スル狀ヲ示ス(回  
 轉後ノ胎兒體狀)

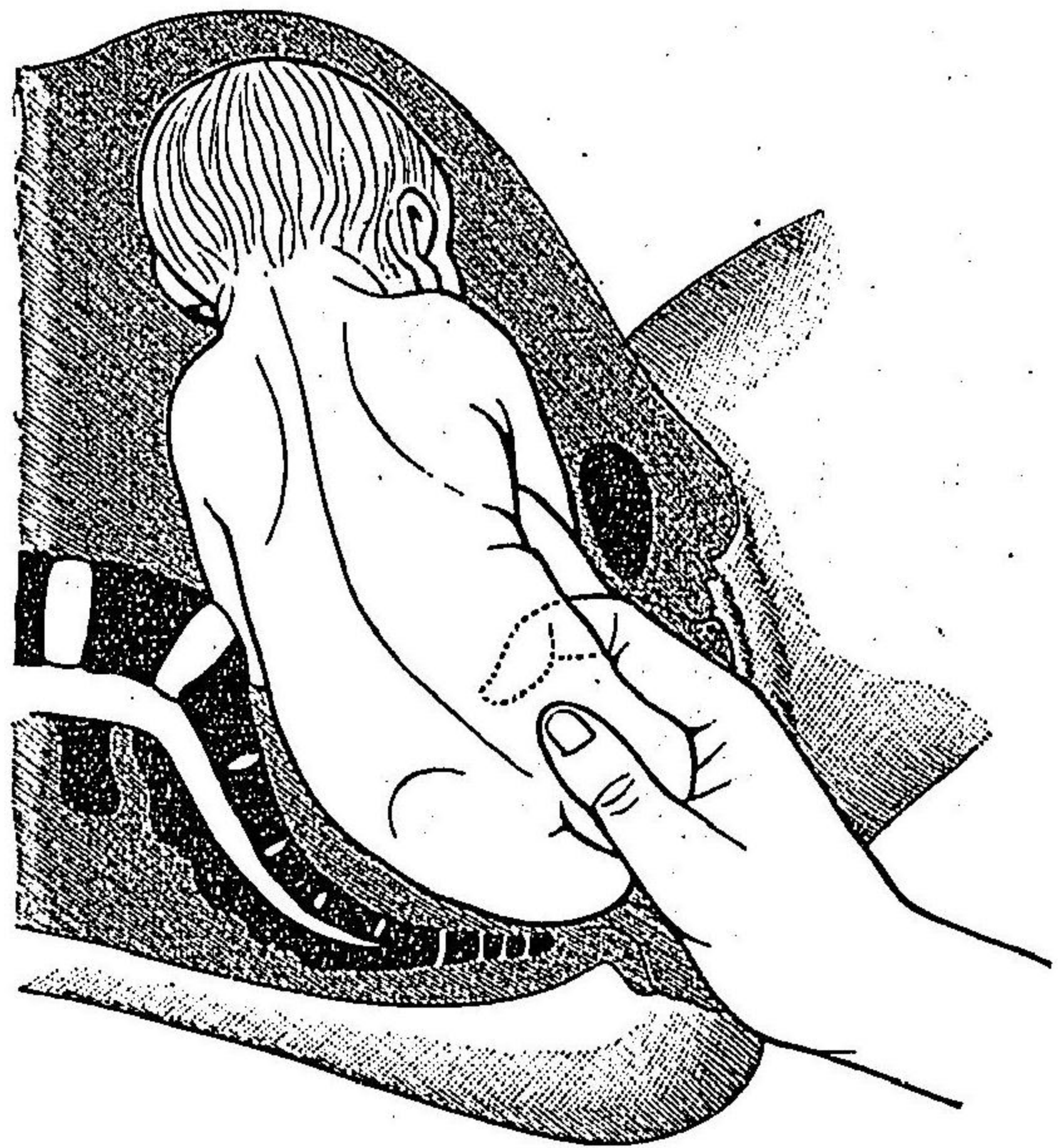
一ナル危険ヲ現ハスモノトス、  
 骨盤端位ノ挽出ニハ特殊ノ器械ヲ應用スルノ必要アルハ  
 甚タ稀レニシテ、毎常術者ノ手ヲ以テ充分ニ兒體ヲ把握シ、  
 産道ヨリ牽出シ得ルモノナリ  
 胎兒ノ下肢竝ニ骨盤ハ正規ノ状態ヲ具フルニ於テハ兒體  
 ニ些ノ危険ヲ與フルコト無ク充分ニ牽引スルヲ得、然レト  
 モ挽出ノ際ニ術手ヲ兒腹ニ接抵セサル様特ニ注意スヘシ、  
 是レ胎兒ノ内臓ハ骨壁ニ因リテ外壓ノ防護ヲナスモノニ  
 非ラサルカ故ニ、輕卒ニ之ヲ把握スレハ殊ニ肝臓ノ破裂ヲ  
 來スノ恐レアレハナリ  
 足位ニ於テハ兩手ヲ以テ、拇指ヲ上方ニ向ケ伸展足ヲ充分  
 ニ把握スヘシ(第七十五圖)臀部ノ深ク牽下セラル、ニ至レ  
 ハ直チニ既産ノ兒足ヲ強ク高舉シ、同時ニ示指ヲ後大腿屈  
 曲ニ貼シテ胎兒ノ骨盤ヲ牽引スヘシ(第七十六圖)但シ決シ





圖六十七第

足位挽出ノ第二次  
トシテ兒足ヲ高舉  
シ後大腿屈曲ニ送  
手スル狀ヲ示ス(フ  
オン、ウインケル氏  
ニ據ル)

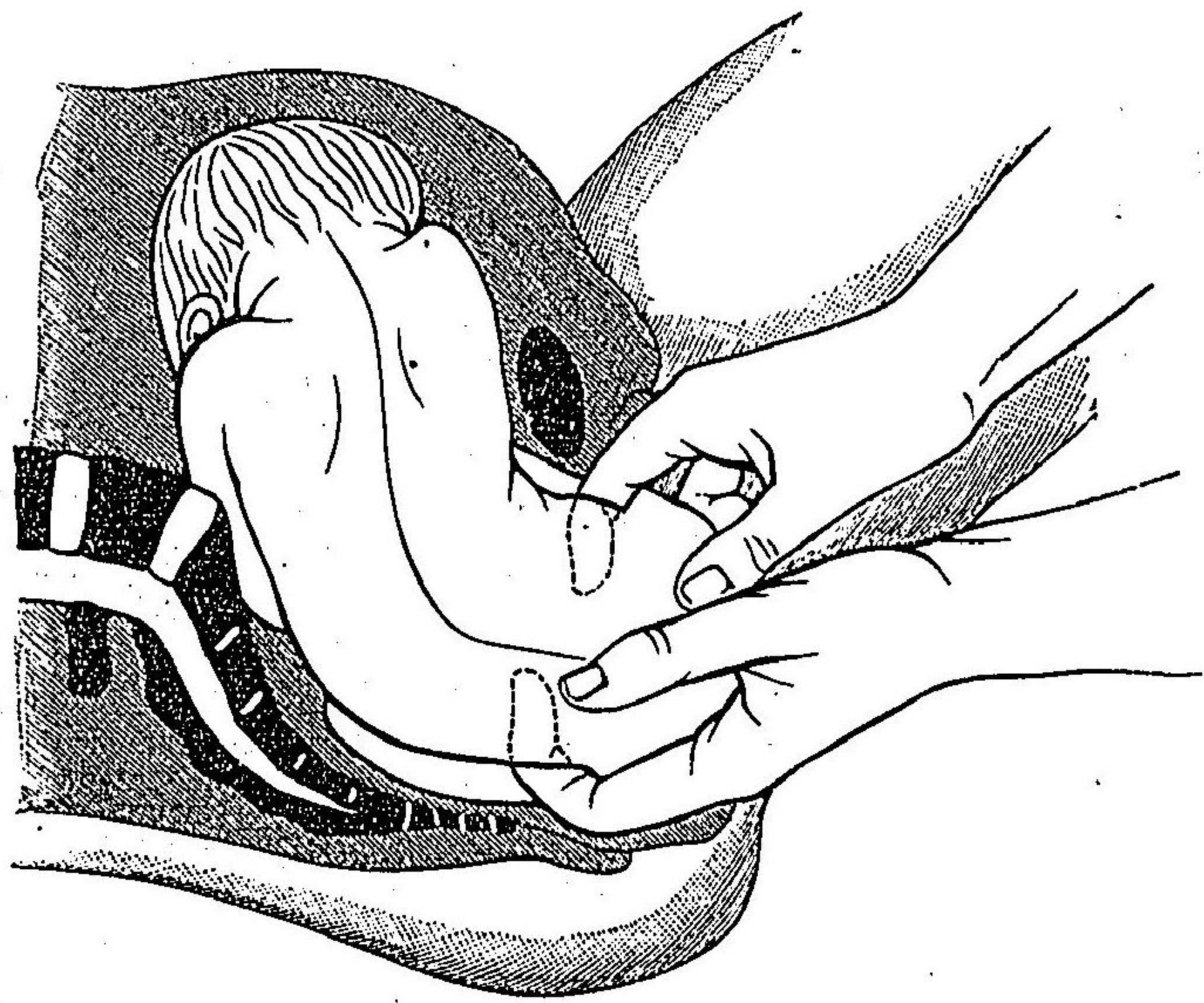


圖七十七第

尾紙位挽出術  
ノ第一次トシ  
テ、示指ヲ前大  
腿屈曲ニ挿入  
スル狀(ワルニ  
ハア、フアラホ  
ーフ氏ニ據ル)

テ臀部深位ニ在ルトキ高く反轉セル兒足ヲ牽下スヘカラ  
ス



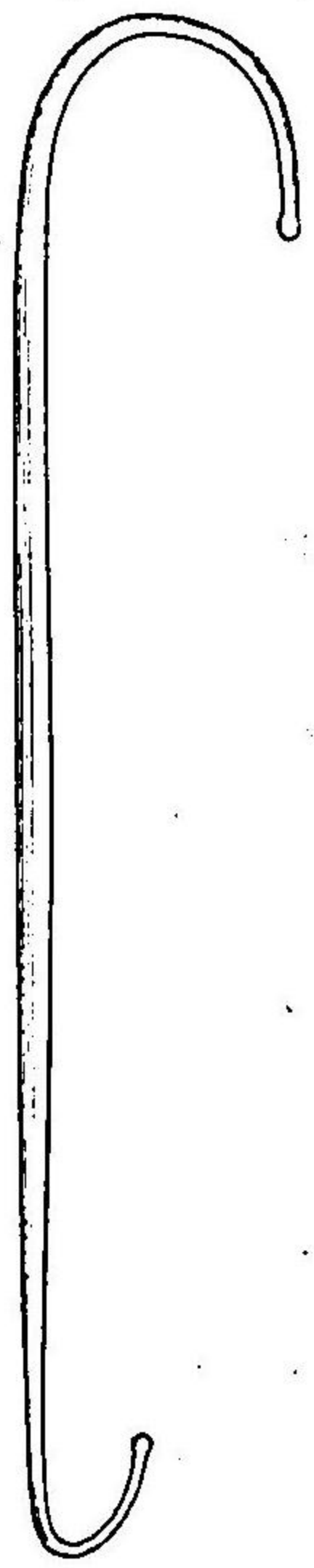


第七十八圖

尾骶位挽出術ノ第  
 二次トシテ、後方ノ  
 大腿屈曲ニ示指ヲ  
 嵌入スル狀(ワルニ  
 ーヤ、フアラゴーフ  
 氏ニ據ル)

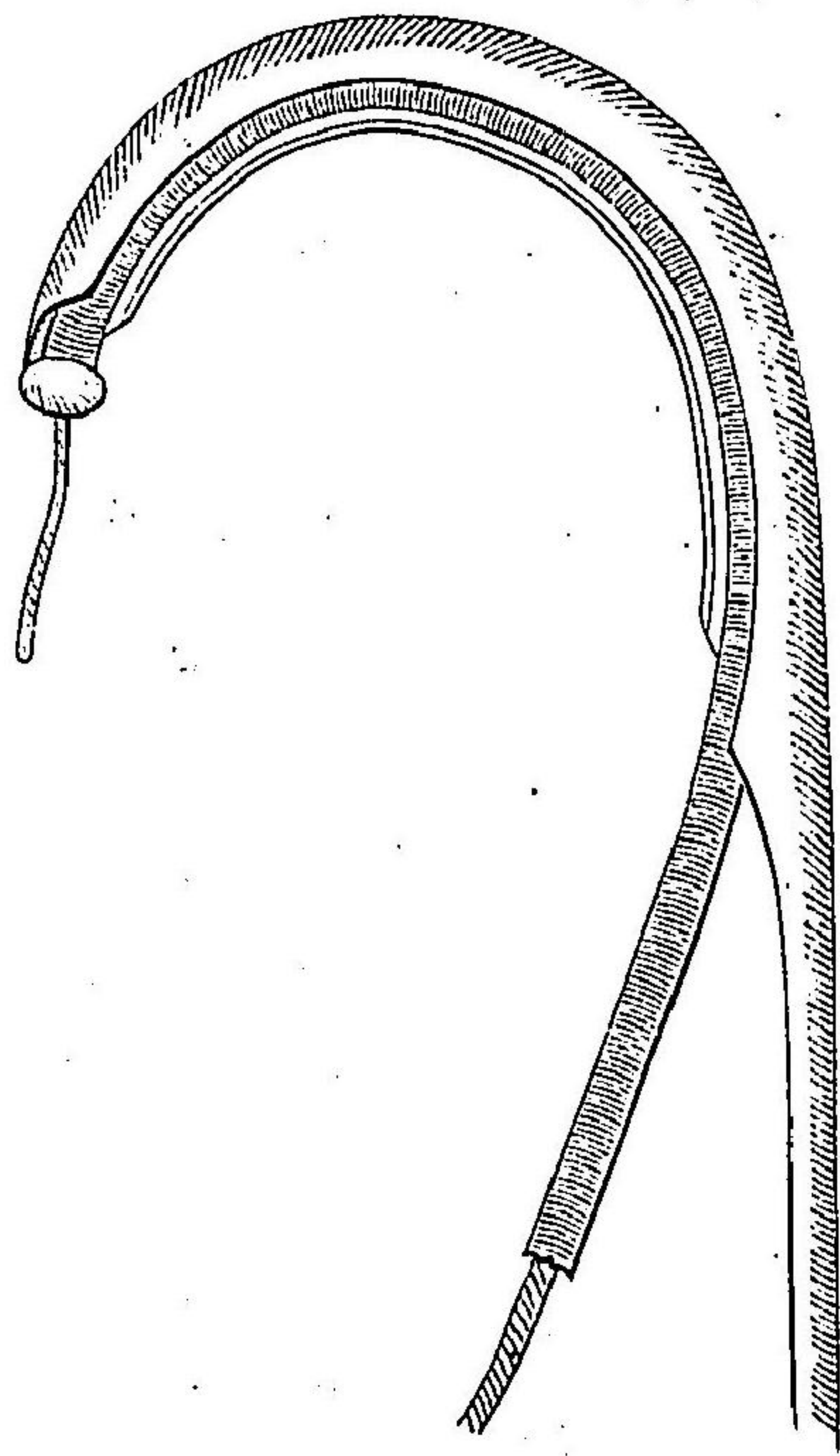
之ニ反シ臀位ニ於テ軀幹ノ下端已ニ骨盤底ニ來リ、過大ノ  
 力ヲ要セサルトキニ限リ、單ニ手ヲ以テ其產出ヲ成就セシ  
 ムルヲ得、此ノ如キ場合ニハ一指ヲ前方ニ在ル大腿屈曲或  
 ハ後方ニ位スル大腿屈曲ニ貼接シテ臀部ヲ會陰上ニ產出  
 セシムルヲ例規トス  
 此際ニモ可及的迅速ニ他手ノ示指ヲ後方ノ大腿屈曲ニ送  
 入シテ臀部ノ高舉ヲ容易ナラシムルヲ可トス(第七十八圖)  
 然レトモ此ノ如キ方法ヲ以テハ終始強大ナル力ヲ發揮セ  
 シムルコト能ハサルモノニシテ、鉤狀ニ彎曲セル指ハ容易  
 ニ疲勞シ、遂ニ器械ノ介助ヲ藉ラサルヘカラサルニ至ルヘ  
 シ  
 此目的ニ供スルカ爲メニ一ノ鐵鉤アリ、彎曲シタル指ノ形  
 狀ニ模造シタルモノシテ、指ニ代ヘテ大腿屈曲ニ貼ス  
 然レトモ鈍鉤或ハ股鉤ハ古來已ニ大腿ノ骨折ヲ起シ易キ





圖九十七第

臂位挽出ニ  
供スル股鉤



圖十八第

臂位挽出ニ供  
スルアング氏  
蹄係送子

アング氏ノ蹄係送子

悪評アルモノナルヲ以テ、特ニ胎兒ノ死亡ヲ確認シタルト  
 キニ限り應用セラル、ノミ  
 生活胎兒ニ於テハ指ノ代用トシテ前方ノ大腿屈曲ニ送入  
 スヘキ蹄係ヲ以テス、其貼接ハ敢テ困難ナルモノニアラス、  
 而シテ此目的ニハ普通ノ回轉蹄係ヲ使用ス、其法之ヲ外科  
 用卷軸帶ノ如クニ捲縮シ、卷軸頭ヲ上方ニ向ケ前方ヨリ大  
 腿屈曲ニ壓抵シ而シテ後方ニ向ツテ纏絡スルニ在リ  
 殊ニ臂部ノ高位ニ在ル場合ニ於テ、蹄係ノ纏絡ヲ容易ナラ  
 シムルカ爲メ、各種ノ蹄係送子ヲ製作セルモノアリ、就中ブ  
 ング(Bunge)氏ノ案出ニ係ルモノハ近來多ク賞用セラル、モ  
 ノナリ(第八十圖)

此器械ハ股鉤ノ如キ構造ヲ有シ其彎曲部ハ空溝ヨリ成リ  
 溝中ニ牽引ノ用ニ供スル護謨管ヲ緩ク挿入シタルモノナ  
 リ、第八十圖ハ送入時ノ装置トシテ器械ノ上部ヲ示スモノ



ニテ、之ヲ大腿屈曲ニ纏絡シタルトキハ上端ニ存スル球頭  
 ヲ把リ護謨管ヲ牽引シテ蹄係送子ヨリ除去シ、然ル後、器械  
 自己ヲ除去スルナリ  
 但シ蹄係ヲ以テ挽出ヲ試ムル際ニハ宜シク注意シテ鋸使  
 狀運動ヲ避クヘシ、然ラサレハ爲メニ軟部ノ損傷ヲ來スコ  
 トアリ  
 臀部尙ホ骨盤入口上ニ在リテ移動スルノ際、挽出ヲ要スル  
 トキハ一足ヲ牽下シテ以テ持柄ヲ得ンコトヲ試ムヘシ  
 臀部已ニ娩出スルモ下肢尙ホ上方ニ向ツテ反轉スル場合  
 ニハ兩手ヲ以テ臀部ヲ充分ニ把握シ、左右ノ拇指ヲ併列シ  
 テ胎兒ノ薦骨部ニ貼スヘシ  
 然レトモ尙ホ牽引ヲ進ムルニ先タテ、注目スヘキ要件ハ胎  
 兒臍帶上ニ乗駕シ在ラサルヤヲ檢スルニ在リ、此ニ注意セ  
 スシテ牽引スルトキハ臍帶ノ断裂等恐ルヘキ轉歸ヲ來ス

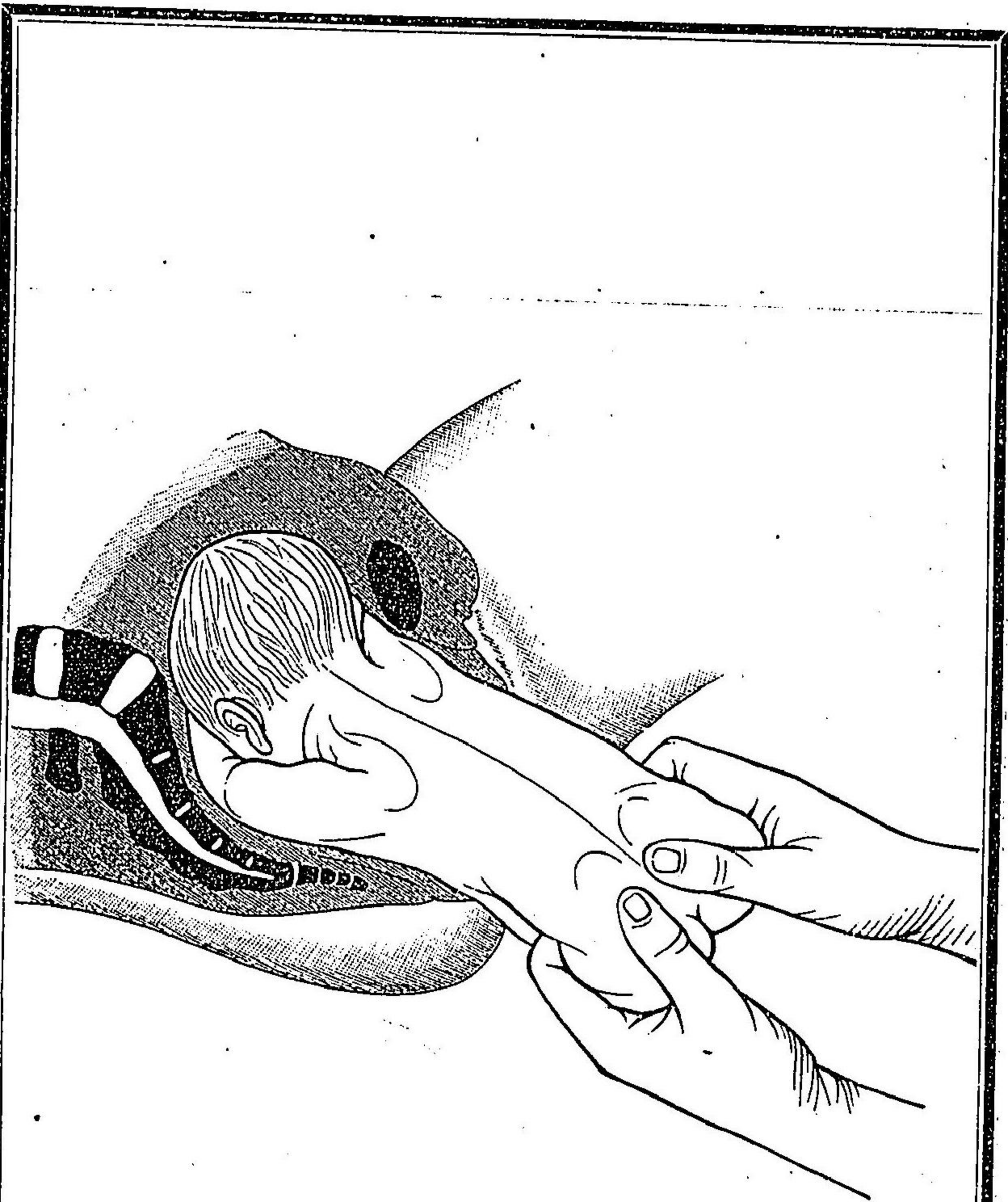


圖 一 十 八 第

尾 骶 位 挽 出  
 術 ニ 於 テ 産  
 出 臀 部 ナ 牽  
 出 ス ル ノ 狀



コトアルカ故ナリ斯ノ如キ場合ニ遭遇セハ須ラク臍帶ヲ後方ノ臀部ニ沿ヒテ脱却セシムルヲ良トス然レトモ若シ、此目的ヲ達スルコト能ハサルトキニ於テハ臍帶ヲ二重ニ結紮シテ之ヲ離斷シ、胎兒ヲ速ニ産出セシメサルヘカラス、而シテ此際下方ニ牽引シ以テ前方ニ位スル肩胛骨ノ下隅ヲ恥骨縫際下ニ來ラシムルヲ要ス

此瞬間ノ動作ハ用手挽出術ニ於テ最モ緊切ナル要目ナリ、何トナレハ今ヤ手術ノ最モ至難ニシテ且ツ最モ危険ナル一部分タル兒膊ノ解離ヲ行フ可キ時期ニ在レハナリ、今夫レ胎兒ノ軀幹ヲ益々牽出センカ、殊ニ回轉術後ニ屢見ルカ如ク兒膊頭首ニ沿ヒテ上方ニ反轉シ在ルトキハ(第三圖及ヒ第七十五圖ニ示ス胎兒ノ體狀ヲ參照スヘシ)兒頭ト兒膊ハ共ニ固ク小骨盤内ニ牽入セラレ、兒膊ノ移動ノ甚シク減弱セラル、カ爲メ、膊ノ離解ハ大ニ困難トナリ或ハ全ク不能

挽出ヲ始ムル際注目  
ヘスキ要件

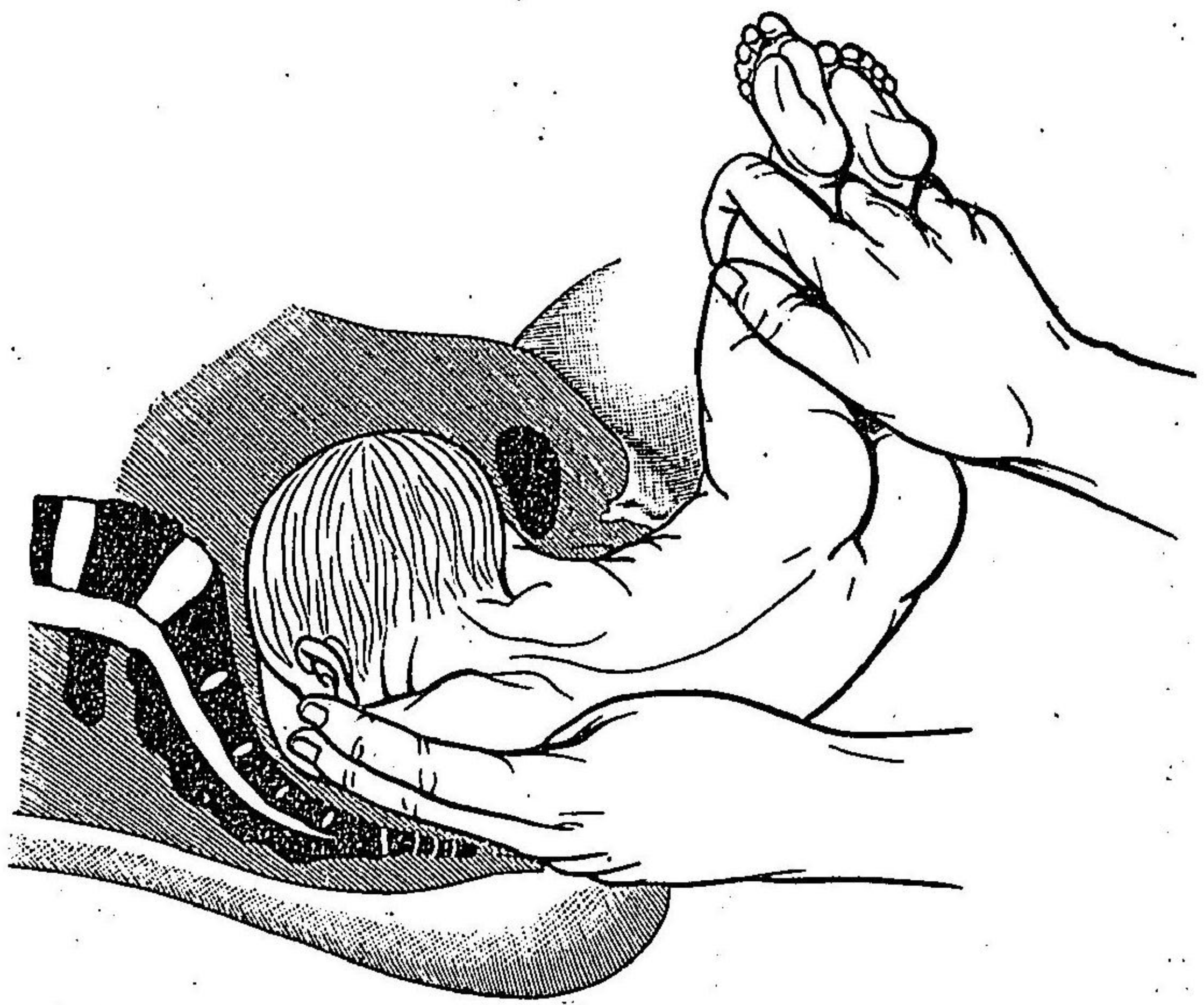
トナルニ至ルヘシ

前方ニ在ル肩胛骨ノ下隅恥骨縫際ノ下縁ニ在ルトキ兒膊ハ兒頭ニ沿ヒテ尙ホ移動スヘシ此時ニ於テヤ、必ス先ツ後方ニ在ル兒膊ヲ常ニ同名ノ手ヲ以テ牽下スルヲ要ス、是レ薦骨彎曲部ハ骨盤前壁ヨリモ多ク空地ヲ有スレハナリ、挽出ヲ始ムル際注目スヘキ要件トシテ、兒背ハ前方或ハ後方ニ向ハス、密ニ一側ニ向ヒ、一方ノ兒膊ハ薦骨彎曲部ニ來ラサル可ラス

故ニ例之、第二骨盤位ニ於テ後方ニ在ル左膊ヲ解離スルトキニハ右手ヲ以テ兒足ヲ握リ軀幹ヲ母體ノ左大腿屈曲ニ向ツテ扛舉シ、以テ後方ニ位スル肩胛ヲ可及的低位ニ來ラシメ、左手ヲ軀幹ニ沿ヒテ生殖器内ニ送入シ得ル様試ムハ

今ヤ左手ヲ左側ノ肩胛ニ沿ヒテ送入シ、示指ト中指ヲ後方





圖二十八第

用  
手  
挽  
出  
術  
ニ  
於  
テ  
后  
方  
ニ  
在  
ル  
第  
一  
兒  
膊  
ヲ  
解  
離  
ス  
ル  
ノ  
狀

娩出ノ際兒膊ヲ解離スル法

ヨリ并行シテ上膊ニ接抵シ、指尖ヲ胎兒ノ肘關節ニ達セシメ、拇指ヲ以テ上膊ヲ下方ヨリ支抵シ、三指ヲ以テ上膊ヲ被覆スルヲ適當トス、是ニ於テ兒膊ヲ胎兒ノ前側、即チ顔面及ヒ胸壁ニ沿ヒ恰モ面部ヲ擦拭スルカ如ク、ニ牽下スヘシ此ノ如クスルトキハ兒膊其關節ニ於テ運動シ、之ニ要スル壓力ハ平等ニ上膊ノ全體ニ配布セラル、是レ即チ上膊ノ骨折ヲ避クルニ切要ナル動作トス

後方ニ在ル兒膊ヲ解離シタルトキハ軀幹ヲ再ヒ沈降セシメ、術者ハ兩手ヲ以テ兒胸ヲ充分ニ把握シ兒腹ノ壓迫ヲ避クルニ注意シテ兩拇指ヲ固ク肩胛ニ接抵シ、尙ホ生殖器内ニ在ル兒頭及ヒ兒膊ヲ推送シテ少シク緩粗ナラシメ、是ニ於テ肩胛ヲ固持シ軀幹ヲ回轉スレハ前方ノ兒膊ハ同シク薦骨彎曲部ニ來ルヘシ(第八十三圖)

右膊ノ解離モ左膊ト同一ノ方法ニ從フモノニシテ、即チ術



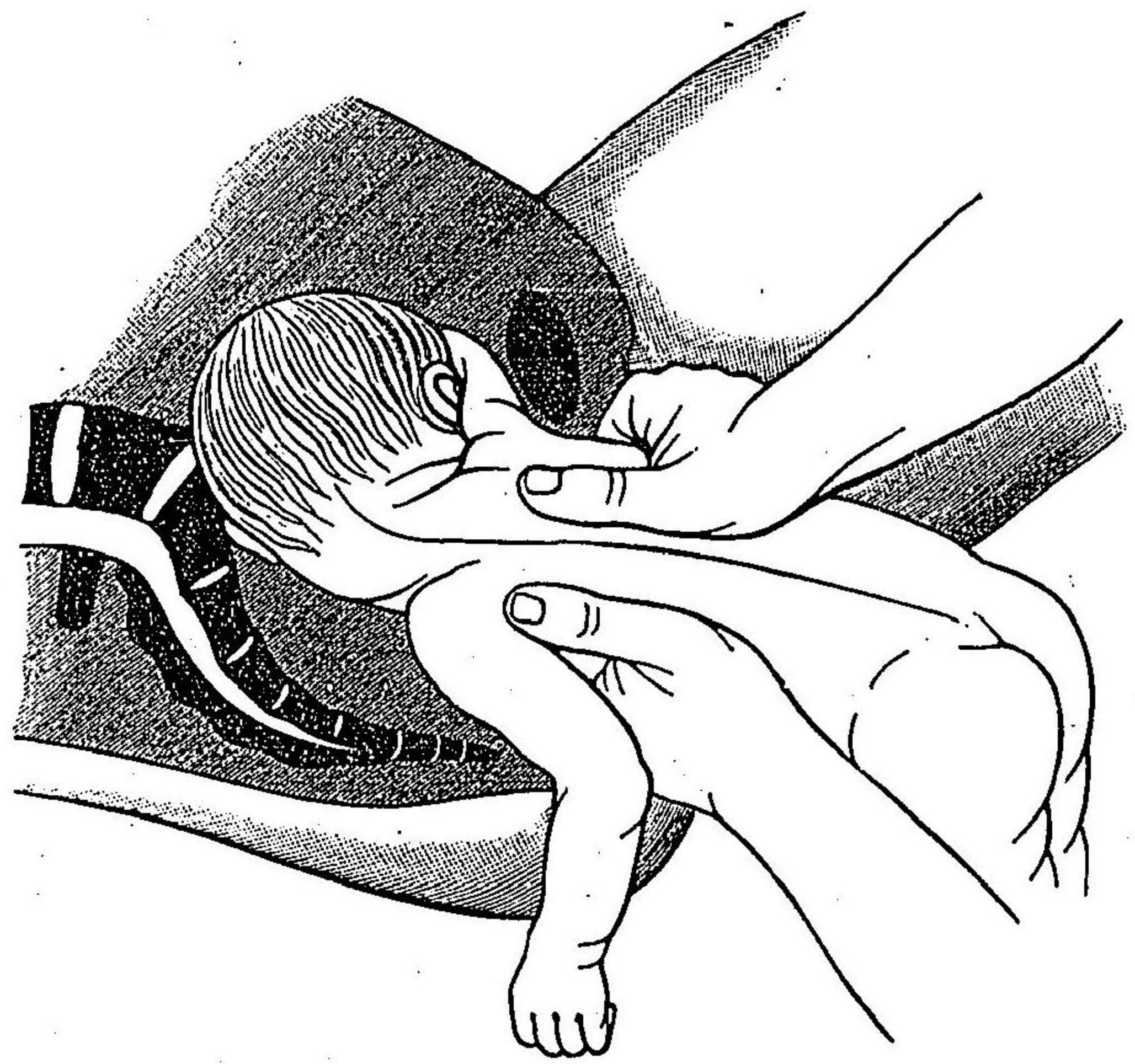


圖 三 十 八 第

兒胸ヲ回轉シ  
 テ前方ノ兒膊  
 ナ後方ニ來ラ  
 シムルノ狀

者ノ左手ヲ以テ兒足ヲ取り之ヲ母體ノ右大腿屈曲ニ向ツ  
 テ扛舉シ、右手ヲ胎兒ノ右膊ニ送ルナリ  
 最後ニ於テ兒頭ノ娩出ヲナスニハ器械ヲ用ヒス一定ノ技  
 術ニ依ルヲ例規トス  
 此目的ニテ案出セル數多ノ技術中普通ニ用ヒラル、モノ  
 ハ當時フアイト、スメリー Veit Smellie 氏(マウリカウ、レウレ  
 ト Mauricau Levet 氏) 技術及ヒウイীগアンド、アー、マルチン  
 Wiegand A. Martin 氏 技術トス  
 甲法ハ兒頭已ニ小骨盤内ニ進入シタルノ際、故ラニ骨盤狹  
 窄ノ爲メニ其分娩ヲ妨ケラレサルモノニ應用シ、乙法ハ尙  
 ホ骨盤入口上ニ在ル兒頭ヲ壓入スル場合ニ適用ス  
 フアイト、スメリー氏 技術ニ於テハ最後ノ兒膊ヲ解離スル  
 ニ使用シタル手ノ示指ヲ胎兒ノ口腔ニ入レ顔面ヲ後方ニ  
 回旋シテ矢狀縫合ヲ前後徑ニ來ラシメ而シテ腮部ヲ胸壁





圖 四 十 八 第

フ  
ア  
イ  
ト  
ス  
メ  
リ  
ー  
氏  
技  
術  
ニ  
依  
リ  
テ  
後  
進  
兒  
頭  
ヲ  
挽  
出  
セ  
シ  
ム  
ル  
ノ  
狀

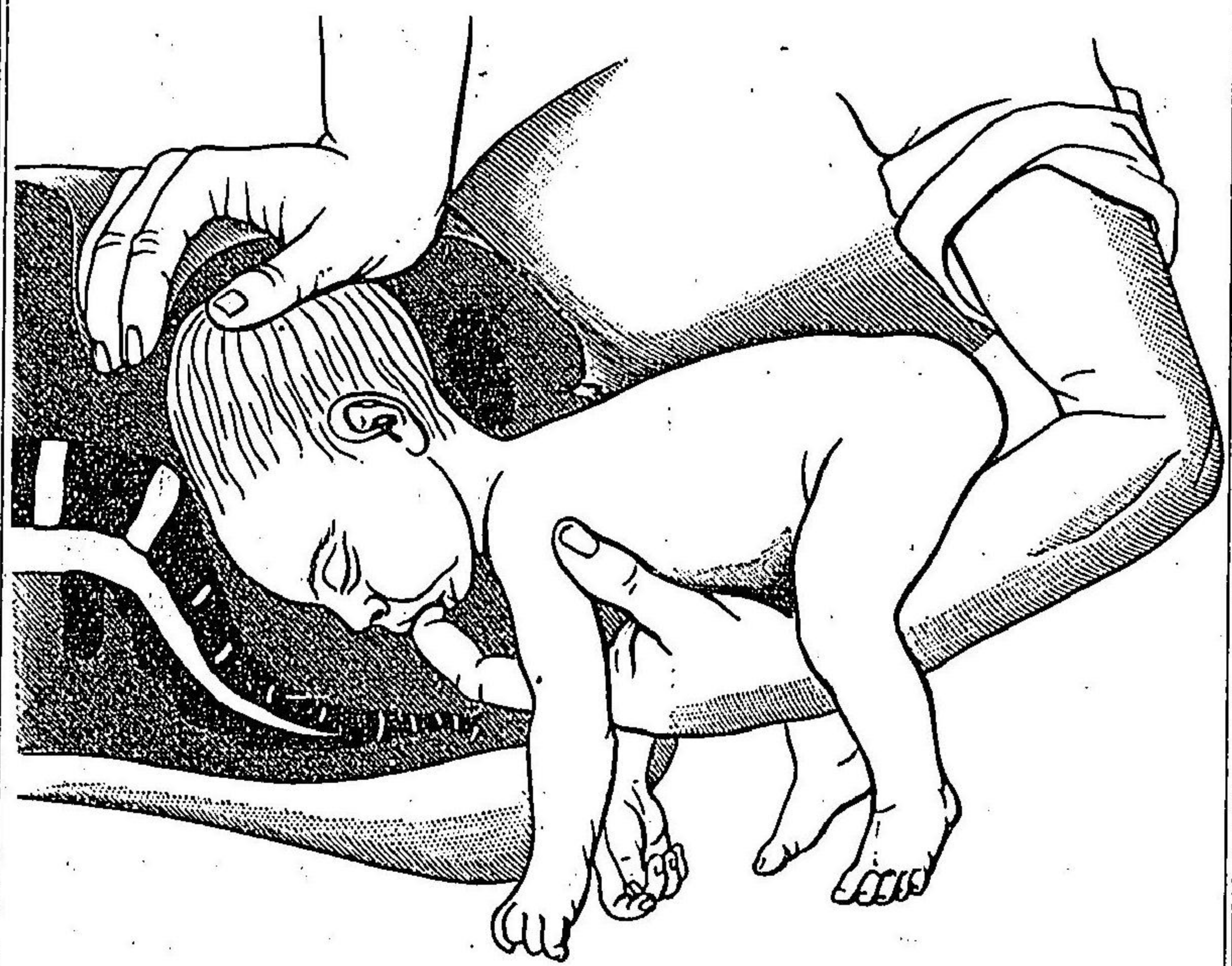
上ニ下スヘシ、此際胎兒ノ軀幹ハ術者ノ前膊ニ乗駕スヘシ  
術者ノ他手ハ示指ト中指ヲ以テ肉叉狀ニ胎兒ノ項部ニ貼  
ス

斯ノ如ク下方ニ牽引シテ項部ノ恥骨縫際下ニ來ルヤ、軀幹  
ヲ母體ノ腹部ニ向ケテ扛擧スレハ兒頭ハ恥骨縫際ノ周圍  
ヲ回轉シテ娩出シ、顔面、前頭及ヒ後頭ハ順次相踵テ會陰上  
ニ現出ス

ウイーガンド、アー、マルチン氏技術ニ於テハ同シク示指ヲ  
胎兒ノ口腔ニ入レ、兒體ヲ下シテ兒頭ヲ正規ノ屈曲位ニ來  
ラシム

術者ハ更ニ他手ヲ以テ兒頭ヲ上方ヨリ骨盤内ニ壓入ス、兒  
頭未タ最大徑ヲ以テ小骨盤内ニ進入セサル間ハ其前額後  
頭徑ヲ骨盤ノ横徑ニ來ラシメ、即チ顔面ヲ骨盤ノ一側ニ、後  
頭ヲ其他側ニ來ラシメサルヘカラス、兒頭此ノ如キ向位ヲ





圖五十八第

ワイーガント、ア  
ル、マルチン氏技  
術ニ依リテ後進  
兒頭ヲ娩出セシ  
ムルノ狀

取ルトキハ其小ナル兩顱顱徑ハ眞結合線ニ來ル、兒頭已ニ  
骨盤内ニ入レハ顔面ヲ後方ニ回轉シ、フアイト、スメリー氏技  
術ヲ以テ兒頭ヲ全ク娩出セシムルヲ得ヘシ  
關係ノ異常稍、強大ニシテ甚シキ困難ヲ來シ、此技術ノ成效  
ヲ誤マル場合ニハ宜シク兒頭ヲ下方ヨリ牽引シ、上方ヨリ  
壓迫シテ骨盤内ニ送入センコトヲ試ムヘシ、此際術者ハフ  
アイト、スメリー氏技術ノ方式ニ從ツテ把握シ、下方ニ牽引  
スルト同時ニ介者ノ手ヲ以テ兒頭ヲ腹壁上ヨリ産道ニ向  
テ押壓セシムヘシ  
往時ハ此場合即チ後進兒頭ノ娩出ニ鉗子ヲ賞用シタレト  
モ輓近ニ至リ鉗子ノ應用ハ双手的或ハ三手的技術ノ優等  
ナル進捗ノ爲メニ益、排斥セラル、ニ至レリ、若シ此技術ニ  
依リテ目的ヲ誤マルトキハ則チ是レ兒頭ト骨盤ノ間ニ至  
大ノ關係異常アルニ因ルモノナレハ、兒頭ヲ縮小スルニ非



ラサレハ天然ノ産道ニ由リテ分娩ヲ遂クルコト能ハサル  
ナリ、后後兒頭ニ鉗子ヲ貼スル技術ハ第七十四圖ヲ參考ス  
ヘシ

穿顱術

義シユレーデル氏ノ釋

### 第六章 破壊手術 Die zerstückelnden Operationen.

穿顱術一名頭顱截割術ハ截割或ハ穿開器械ヲ以テ胎兒ノ  
頭蓋ヲ一箇處ニ於テ穿開スルノ法ニシテ、其目的ハ毎常人  
工的ニ頭蓋ヲ縮小スル場合ニ内容物タル腦ヲ排泄セシム  
ルニ在リ、只夫レ腦ヲ排泄セシムルヲ得テ始メテ有效ナル  
頭蓋縮小ノ成功ヲ期スヘキモノナリ

義シユレーデル氏ハ穿顱術ヲ釋義シテ穿顱、破壊及ヒ縮  
小頭蓋ノ挽出ヲ總括セシメリ、而シテ穿顱術ハ骨盤狹窄ニ  
因リテ内腔的異常ヲ生シ、頭蓋ヲ破壊セサレハ胎兒ヲ天然  
産道ニ由リテ遂娩セシムルコト能ハサル場合ニ適用ス  
胎兒此場合ニ際シ、既ニ死亡セルトキハ穿顱術ヲ措キテ他  
ニ一モ好手術アルコトナシ、然レトモ胎兒尙ホ生存スルト  
キハ帝王截開術、恥骨縫際截開術及ヒ穿顱術ハ互ニ競争場



絶對的過狹ノ骨盤

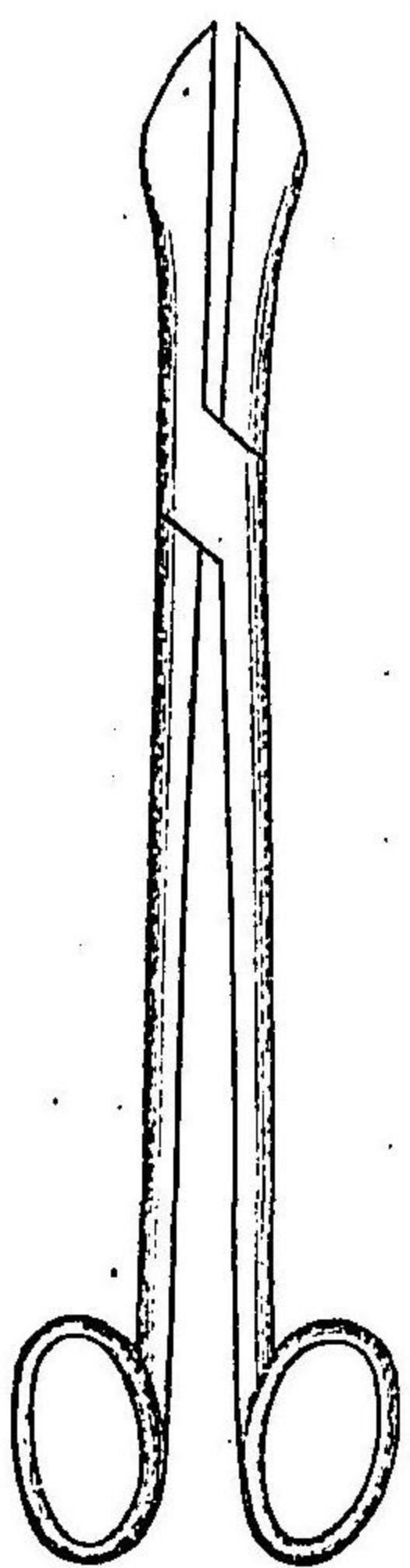
穿顱術ノ適應症

有效ナル二三ノ穿顱器

裡ニ在ルモノナリ  
 絶對的過狹ノ骨盤言フ換フレハ眞結合線六仙迷以下ノ骨盤ニハ穿顱術ヲ禁忌トス、巨大ノ兒頭ハ穿顱術ヲ行ヒタル後ニ在リテモ此ノ如キ狹隘ナル骨盤ヲ通過スルコト能ハサルヲ以テ、只帝王截開術ニ依リテ遂婉セシメ得ルノミ  
 穿顱術ノ適應症トシテ切要ナル事項ハ卵ノ破開、即チ卵胞ノ破裂ト子宮口ノ開大トニシテ、器械ヲ容易ニ通過セシメ得ルニ在リ  
 穿顱シタル兒頭ノ挽出ハ子宮口ノ殆ント全ク開大シタルトキニノミ行フモノニシテ場合ニ因リテハ頸管切開ヲ以テ開大ニ代用セサルヘカラス  
 穿顱術ニ供用スル數多ノ器械中、信憑スヘキ形式ノモノニ種アリ、即チ圓鋸狀穿顱器及ヒ剪子狀或ハ短劍狀穿顱器是ナリ

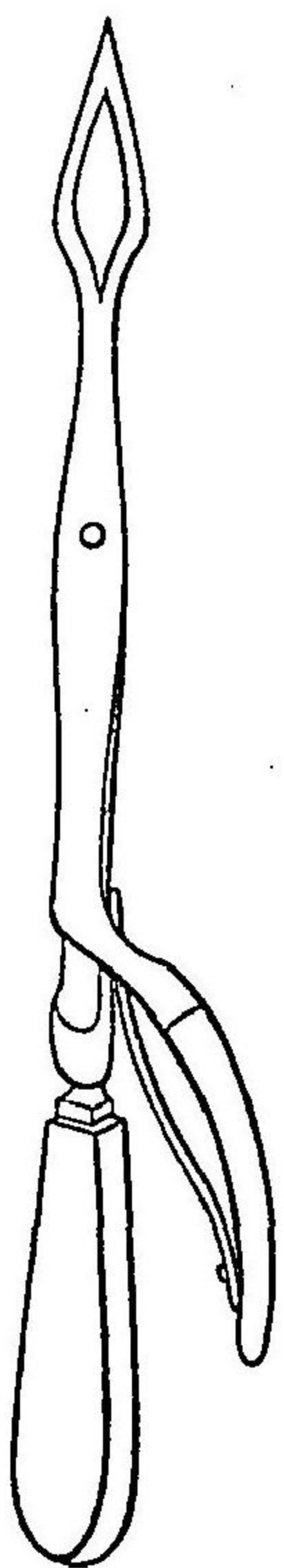
第八十六圖

レウレット氏穿顱鉗



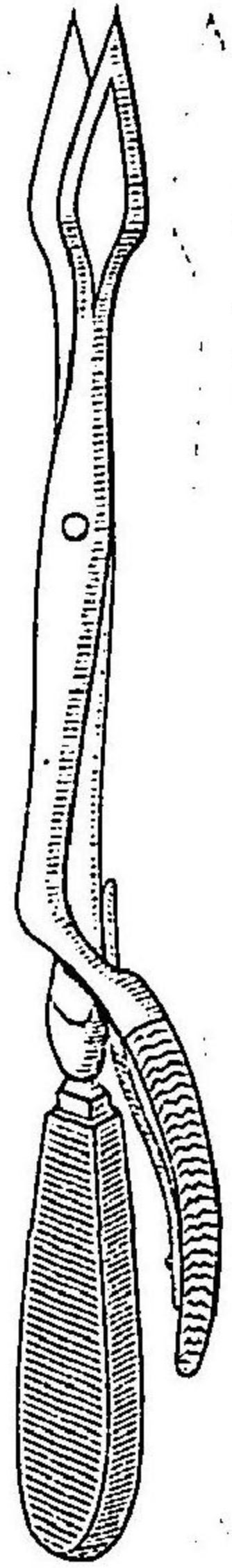
第八十七圖

ブロート氏短劍狀穿顱器 閉鎖セル狀

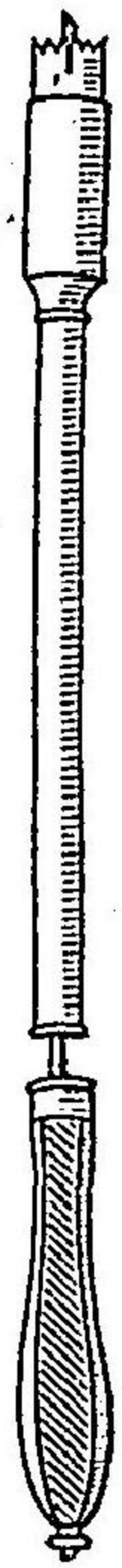




第八十八圖 同上 開放セル状



第八十九圖 マルチン氏圓鋸状穿顱器



レウレト Level 氏穿顱鉗(第八十六圖)或ハチーゲル Nagels 氏穿顱鉗ハ方今専ラ賞用セラル、モノニシテ、ブロート Plot 氏短劔状穿顱器(第八十七圖及第八十八圖)モ同様ノ作用ア



第九十圖

穿顱鉗ヲ蓋頭ニ穿入シテノ状



穿顱術ヲ施行スル法

ルモノナリ、圓鋸狀穿顱器中賞用セラレ、モノハマルチン Martin 氏(第八十九圖)、ライスニヒ、キーウイシユ Leisner-Kiwisch 氏或ハカル、ブラウン Karl Braun 氏圓鋸狀穿顱器ニシテ、孰レモ大同小異ノ器械ナリ

剪子狀穿顱器ヲ以テ穿顱術ヲ施行スルノ方法ハ(第九十圖)先ツ器械ヲ手中ニ被覆シテ兒頭ニ送り、然ル後之レヲ成ル可ク額門ニ接シ穿開運動ヲ與ヘテ頭蓋内ニ穿入スルニ在リ

器械ノ兒頭ヨリ脱離スルヲ避クルニハ、第一穿顱器ヲ鉛直ニ兒頭ニ貼シ、兒頭高位ニ在ルトキハ器械ノ柄子ヲ會陰ニ向ケ強ク沈降セサルヘカラス、第二ニハ兒頭固定シ在ルカ若クハ外部ヨリ精確ナル壓力ヲ與ヘテ固定セサルヘカラス、又時宜ニ由リテハ鉗子ヲ以テ兒頭ヲ固定シ、鉗子内ニ於テ穿顱スルコトアリ

生活胎兒ニ穿顱術ヲ要スルトキ

穿顱器已ニ頭蓋ノ内腔ニ穿入シタルトキハ剪葉ヲ披開シ、就中十字形ニ切割シテ穿入口ヲ開大ス

顔面位ニ於テハ前額ヲ穿刺部トシテ選ムヲ例規トス、後進兒頭ニ於テハ穿顱器ヲ大圓孔ヨリ刺入スルカ或ハ頸椎ヲ離斷シタル後、脊髓管ヨリ腦ニ達シ而シテ之ヲ破壊シテ除去ス

圓鋸狀穿顱器ヲ以テスルトキニモ同シク圓鋸ヲ一手ニ被フテ鉛直ニ兒頭ニ貼シ、固ク壓抵シテ圓鋸ヲ回旋シツ、前進シテ一ノ圓孔ヲ穿開ス

穿顱術施行前ニ胎兒ノ死亡ヲ認メタルトキハ其直後ニ「ク」ラニオクラスト「術」及ヒ挽出術ヲ續行スヘシ、然レトモ胎兒尙ホ生活スルニ方リテ穿顱術ヲ要スルトキハ穿顱後、腦質ハ勿論、成ル可ク延髓ヲモ根本的ニ破壊シ、以テ半死半生ノ胎兒ヲ挽出セシメサル様注意セサル可ラス、此目的ニハ一



個ノ金屬製男子用「カテーテル」ヲ穿刺口ヨリ送入シテ腦ヲ攪拌シ、更ニ「カテーテル」ニ連結セル「イルリガートル」ヲ以テ腦質ヲ洗除シ、然ル後挽出術ヲ行フヘシ

穿顱術ノ第二動作ハ胎兒頭蓋ノ縮小ニシテ、穿顱ハ乃チ其準備ト適示タルニ過キス

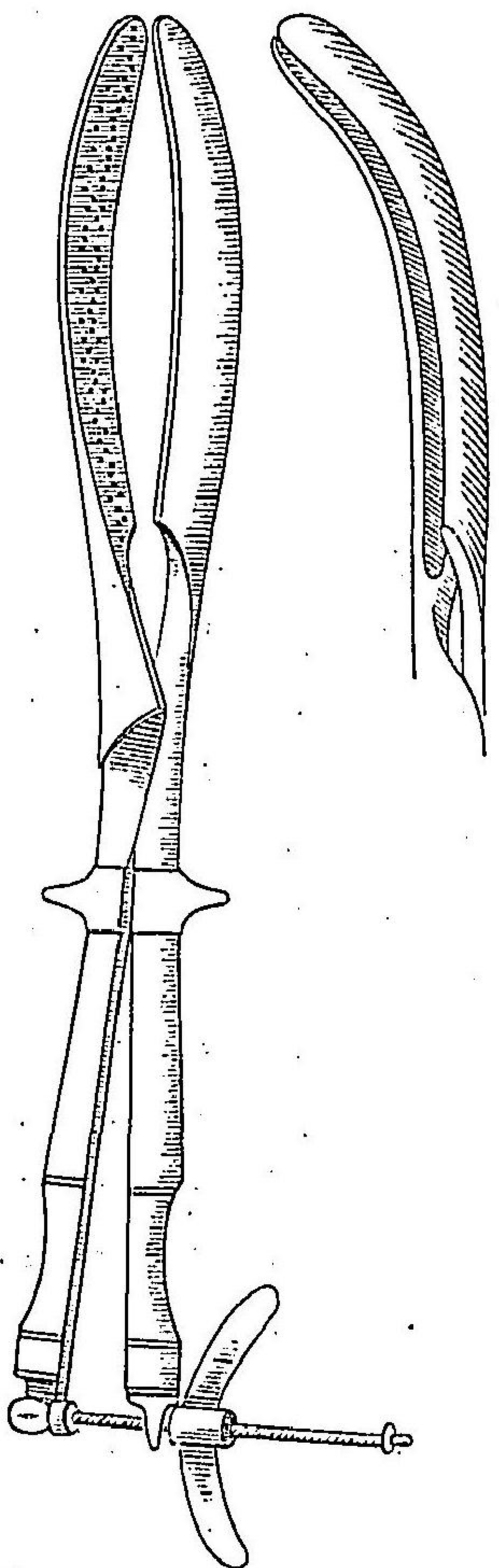
穿顱シタル兒頭ヲ壓縮スルニハ別ニ器械ヲ要スルモノニシテ、是レ頭蓋ハ固ト硬壁ニシテ容易ク壓縮スルモノニ非ラサルヲ以テナリ、只腦水腫ニ於テハ腦脊髓液ヲ排除スルノミニテ内腔ノ異常ヲ除去スルニ足レリトス、是レ此症ニ於テハ過度ニ擴張セル兒頭ハ皮膜ヲ有シ、其巨大ハ單ニ内容ニ基因スルモノナレハナリ

穿顱シタル頭蓋ノ破壊ニ最モ適切ナルモノハ「ブッシュ」Busch氏ノ碎頭器(第九十一圖)トス、此器械ハ鉗子ノ如キ構造ヲ有スルモノニシテ、只鉗子ヨリモ長形ニシテ、頭彎曲ハ大ニ狹

隘ナルノ差アルノミ、其長キヲ要スル所以ハ此碎頭器ハ主トシテ高位ニ在ル兒頭ニ貼セサル可ラサルニ在リ、而シテ頭彎曲ノ狹隘ナルト構造ノ強實ナルトハ兒頭ヲ破碎スルノ趣旨ニ基クモノナリ

第九十一圖

ブッシュ氏碎頭器ヲ前面(頭彎曲)及ヒ側面(骨盤彎曲)ヨリ見タル狀





碎頭器送入法

ブッシュ氏碎頭器ハ壓縮セシ兒頭ノ挽出ニモ適切ナルモノニシテ、之ヲ兒頭ニ貼シテ大ナル支持ヲ得ンカ爲メ窓孔ヲ有セサル匙ノ内面ヲ擦子ノ如ク粗糙ニナシタルモノナリ碎頭器ノ送入法ハ鉗子ヲ貼スルトキニ同シ、碎頭器ハ高位ニ在ル兒頭ニ骨盤ノ横徑ニ從ツテ貼ス、此際器械ヲ充分ニ高ク送入シテ兒頭ニ貼スルヲ要ス、然ラサレハ僅ニ兒頭ノ一小部ヲ把握シテ壓縮スルノミニテ、殘餘ノ部分、殊ニ頭蓋底ヲ縮小スルニ至ラサルヲ以テナリ、又器械ヲ閉鎖スル際ニハ強ク會陰ニ向ケテ之ヲ沈降セシメサル可ラス、是レ其骨盤彎曲ヲ骨盤軸ニ來ラシメ、殆ント頭蓋ノ中央ヲ把握シテ壓縮セシメンカ爲メナリ、碎頭器ヲ閉鎖シタルトキハ之ヲ固ク螺定シ、以テ兒頭ヲ器械ノ兩匙間ニ把握シタル直径ニ從ヒ殆ント器械ノ頭彎曲ニ從ツテ壓縮スヘシ、然ルトキハ腦質流出シテ頭蓋腔ノ縮小ヲ致スモノナリ

今ヤ器械ハ直ニ挽出ノ用ニ供ス、然レトモ器械ハ骨盤ノ横徑ニ貼シテ螺定シアルヲ以テ兒頭ノ縮小セル直径ハ常ニ骨盤入口ノ最狭部タル真結合線ニ存セサルナリ、此關係異常ヲ排除スルニハ器械ヲ回旋シテ以テ骨盤ノ前後徑ニ來ラシメサルヘカラス、其骨盤前後徑ニ來ルヤ之ヲ牽引シテ兒頭ノ骨盤出口ニ達シタル後、器械ヲ旋戻シテ舊ノ如ク骨盤彎曲ノ凹面ヲ横ニ恥骨縫際ニ向ハシムヘシ、爾後ノ挽出法ハ鉗子挽出ノ法ニ模行スヘシ

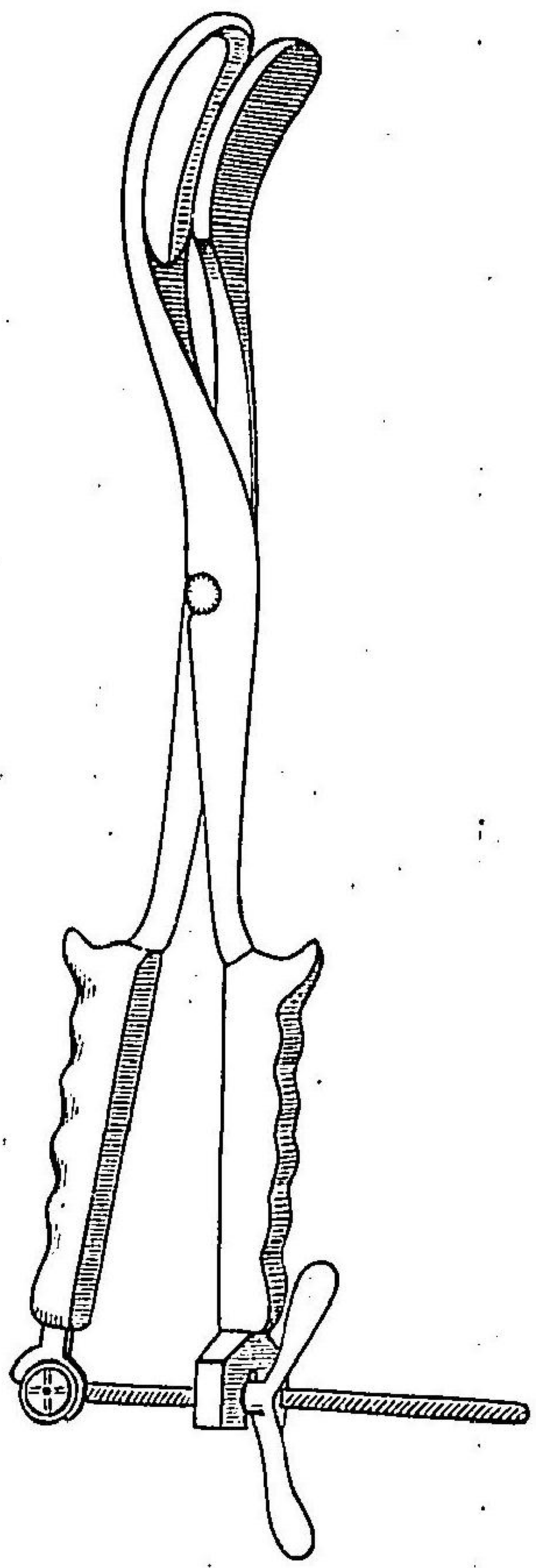
穿顱兒頭ノ挽出ニ賞用セララル、第二ノ器械ハジムブソン Simpson 氏或ハカル、ブラウン Kai Braun 氏ノ「クラニオクラスト」ナリ(第九十二圖)

此器械ハ二葉ヨリ成リ、一ハ穿刺孔ヨリ頭蓋ノ内部ニ送入スヘキ充實ナル部分ニシテ、一ハ兒頭ノ外面上ニ就キ成ル可ク顔面上ニ貼スヘキ有窓ノ匙ナリ、碎頭器ノ如ク柄子ノ

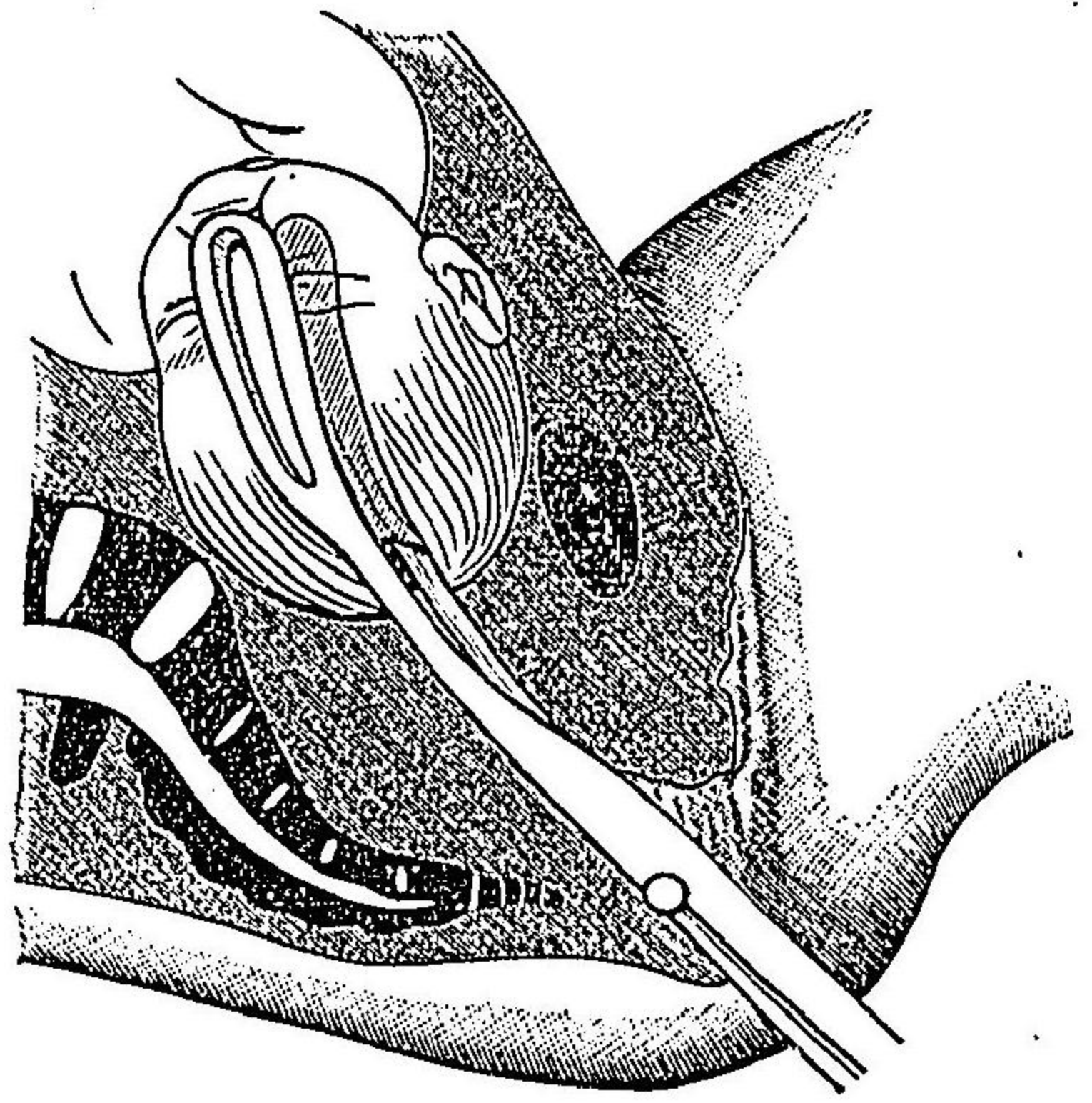


第九十二圖

カル、アラウン、氏、ケ、ラ、ニ、オ、ク、ラ、ス、ト



末端ニ附シタル壓抵器ヲ螺定スレハ兒頭ノ該部ハ此器械ノ兩葉間ニ固定セラル、場合ニ由リテハ頭骨ノ破碎ヲ見ルコトアリ  
然レトモ此器械ヲ以テハ決シテ碎頭器ニ於ケルカ如キ實效アル頭蓋ノ縮小ヲ得ヘカラス、只僅ニ頭蓋ノ一小部ヲ把



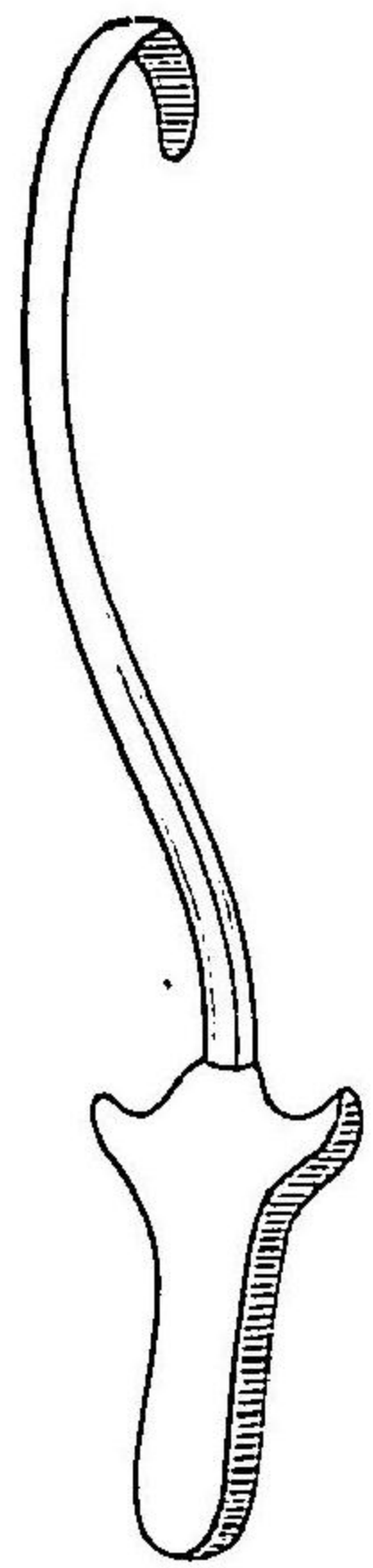
第三十九圖

アラウン、氏、ケ、ラ、ニ、オ、ク、ラ、ス、ト  
ヲ、以、テ、兒、頭、ノ、頭、蓋、骨、ヲ、互、ニ、嵌、合、セ、シ、テ、壓、縮、ス、ル、ノ、際、ニ、適、用、ス、ヘ、キ、反、對、壓、ヲ、加、ヘ、テ、頭、蓋、骨、ヲ、互、ニ、嵌、合、セ、シ、

握シテ壓縮スルニ過キサレハナリ、而シテ兒頭ヲ必要ノ程度ニマテ縮小スルニハ狹窄骨盤ノ故ヲ以テ挽出術ヲ施スノ際ニ適用スヘキ反對壓ヲ加ヘテ頭蓋骨ヲ互ニ嵌合セシ

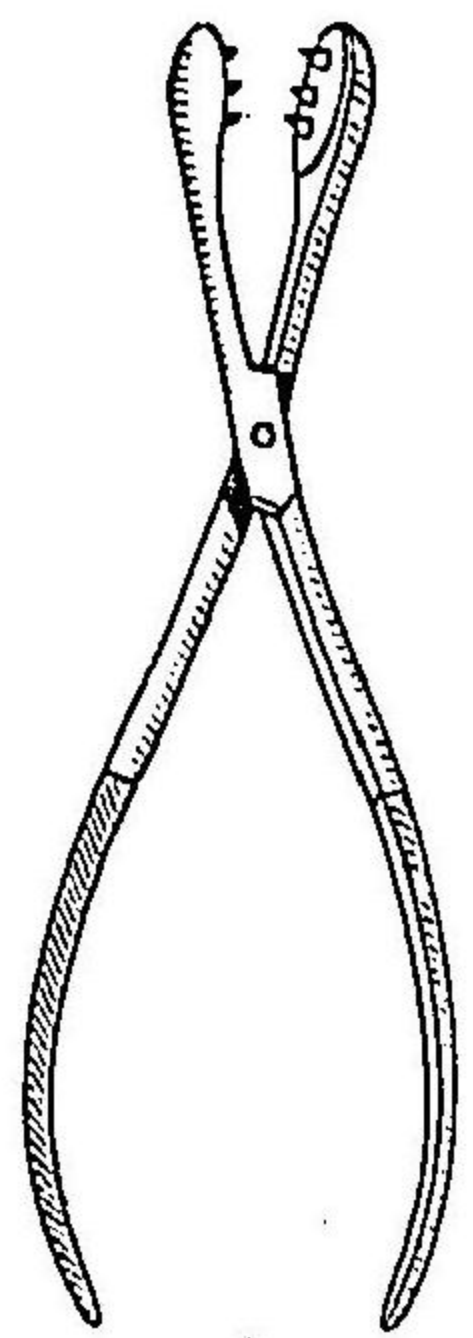


ムルヲ要ス、故ニ此器械ハ只挽出ノ用ニ供シ、而シテ碎頭器ニ比スレハ骨盤内ニ在ル兒頭ニ適用スヘキノミ  
 穿顱兒頭ノ挽出ニ供スル爾餘ノ器械ハレウレット氏ノ銳鉤トス(第九十四圖)



第九十四圖

レウレット氏鉤



第九十五圖

ボーエル氏骨鑷子

此器械ハ穿孔孔ニ挿入シ、尖端ハ頭蓋ノ内部ニ於テ支抵セシメ、突出スル尖端ヲ注意シテ被掩シ兩手ヲ以テ之ヲ牽引スヘシ

銳鉤ハ拔出ノ際動モスレハ重大ナル軟部ノ損傷ヲ招クノ危険アルヲ以テ一般ニ廢棄セラレタルハ當然ノ理ト云フヘシ

然レトモ稀ニハ銳鉤モ他ノ器械ヲ以テ代用シ能ハサル場合ナキニアラス、例之顔面位ニ於テ後方ニ向ヘル腮部ヲ、勿論死胎ニ就テ、深ク前方ニ牽出セントスルカ、或ハ穿顱術ヲ施シタル後、頭蓋ノ剝除セラレタル場合ニ基底ヲ邊隅ニ鉤出セントスルカ、或ハ又軀幹ヨリ分離セル兒頭ヲ挽出セントスル場合等ニ於ケルカ如シ

尙ホ第九十五圖ニ掲クルボーエル Boer 氏骨鑷子モ適當ナル器械ニシテ、其頭蓋ニ貼スル方法ハ「クラニオクラスト」ニ



同シ、而シテ殊ニ各頭蓋骨ノ剝除ニハ甚タ有用ナルモノト  
ス

斷頭術 除臟術 截胎術

Decapitation. Evisceration, Dissectio foetus.

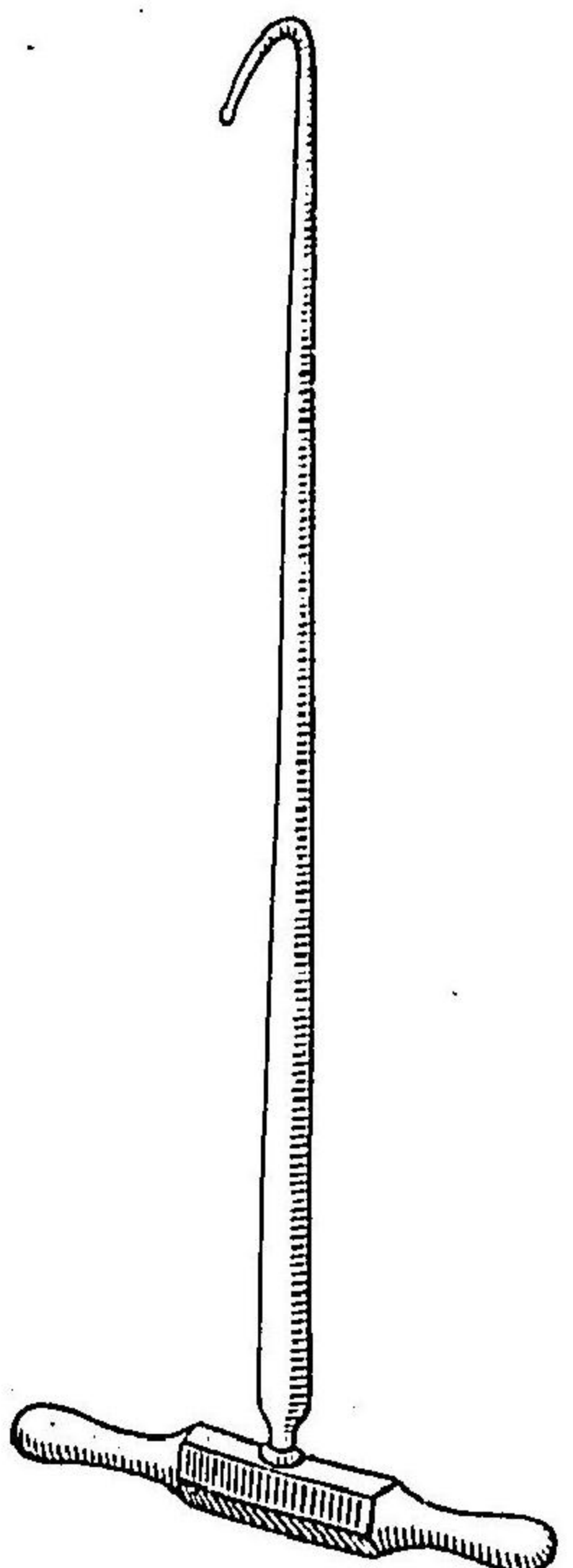
斷頭術  
除臟術  
截胎術

斷頭術トハ人工的ニ兒頭ヲ軀幹ヨリ離斷スルヲ謂ヒ、除臟  
術トハ胸腔及ヒ腹腔ヨリ臟器ヲ除去スルヲ指シ、截胎術ト  
ハ胎兒ヲ子宮口上ニ在ル軀幹部ニ於テ兩斷スルヲ釋ス  
此手術ハ遷延性横位ニ於テ胎兒ノ回轉術不能ニ歸了スル  
カ或ハ却テ母體ニ危險ナル場合ニ要スルモノニシテ、其他  
胎兒ノ畸形、殊ニ複胎畸形ニ之ヲ用フ

斷頭術ノ器械トシテ當時賞用セララル、モノハ  
カール、ブラウソ *Karl Braun* 氏鑷鉤(第九十六圖)及ヒ  
ペー、エス、シュ *B. S. Schultze* 氏鎌狀刀(第九十七圖)等ナリトス

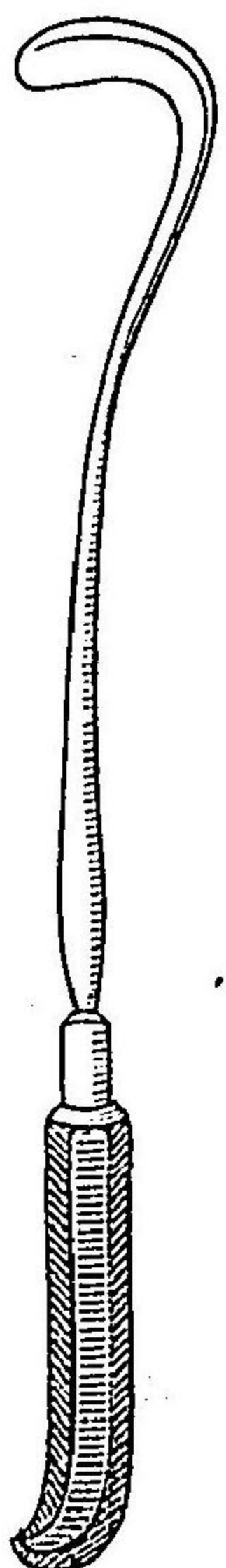
第九十六圖

カール、ブラウソ氏鑷鉤



第九十七圖

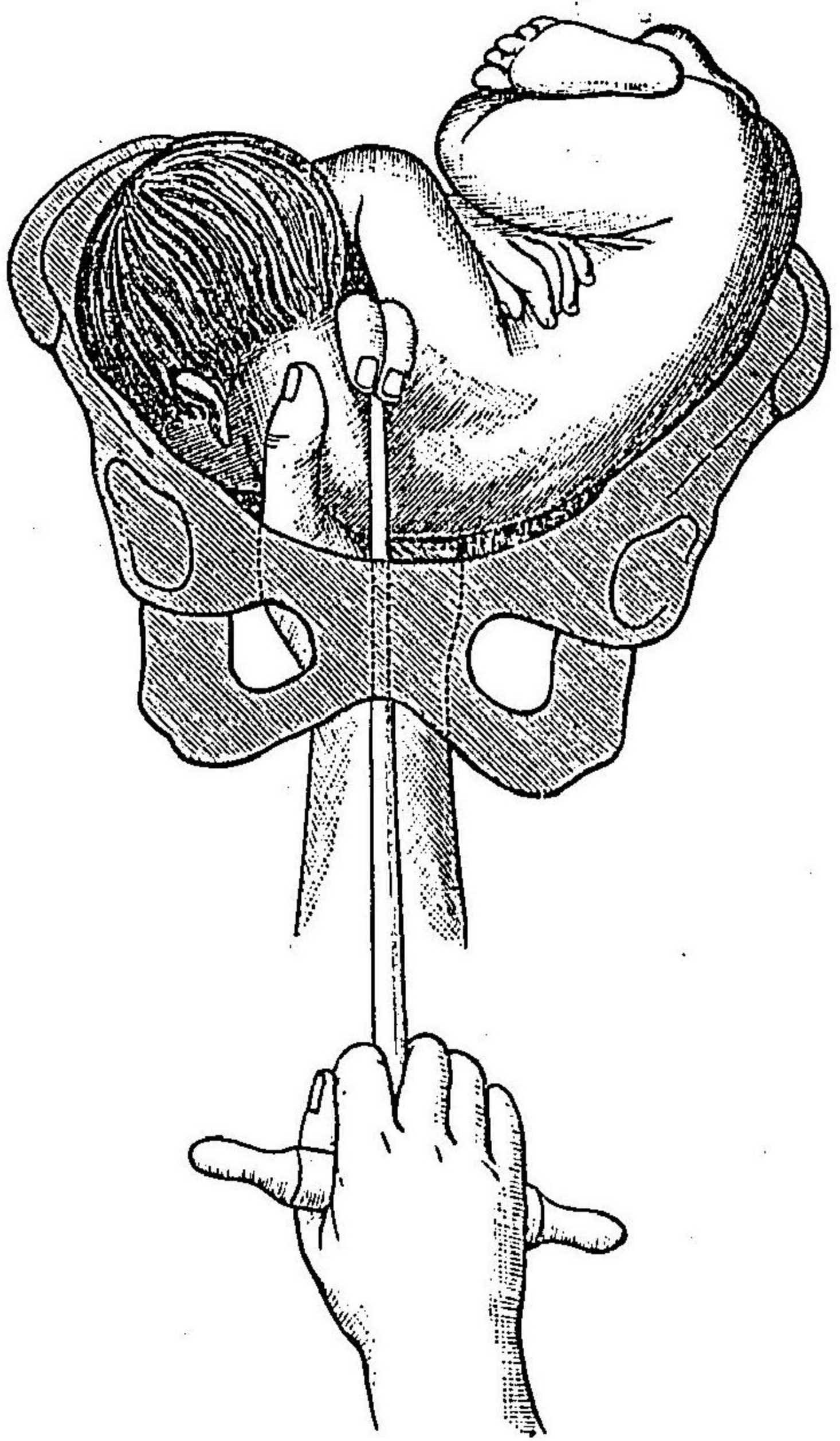
シュルツェ氏鎌狀刀





第九十八圖

アラウン氏鉤ヲ以テ斷頭術ヲ行フノ狀  
(フエーリンガ氏ニ據ル)



鉤ノ用法ハ第九十八圖ニ示スカ如ク  
術者ハ一手ヲ後方ヨリ送入シテ兒頭ヲ握取シ、器械ヲ前方

ヨリ送リテ兒頭ニ貼ス、次テ後方ニ在ル手ヲ以テ器械ノ球  
頭ヲ被ヒ、器械ヲ固ク牽接ス  
今ヤ横柄ヲ旋回スレハ鉤頭ハ此際常ニ兒頭ニ向ツテ回旋  
スルヲ以テ兒頭ハ鉤ノ爲メニ振轉セラル、モノトス  
通常兒頭全部ヲ離斷スルニハ頻回器械ヲ貼スルヲ要ス  
シュルツニ氏鎌狀刀ハアラウン氏鉤ノ如クニ送入シテ  
兒頭ニ貼ス、而シテ鋸使運動ヲ以テ之ヲ離斷ス  
フリッチ Fritsch 氏等ハ強大ナル長鋏ヲ以テ斷頭スルノ法  
ヲ用フ  
斷頭後ハ先ツ軀幹ヲ挽出ス、時宜ニ由リテハ脱出セル兒膊  
ヲ牽引シテ挽出シ、然ル後兒頭ヲ排除ス、但、輕易ナル場合ニ  
ハ一指ヲ口内或ハ下顎ニ貼シテ挽出シ、困難ナル場合ニハ  
銳鉤、クラニコラスト、或ハ碎頭器ヲ以テ挽出スルヲ勤ム  
譯者曰斷頭術ヲ施シタル後子宮内ニ殘留セル離頭ヲ



擲頭網結構及用法

挽出スルニハ碎頭器及ヒ鉗子等種々ノ用法アリト雖  
 モ奏功實ニ困難ナリ余ハ多年苦心ノ結果擲頭網(第九  
 十九圖(甲))ヲ創製セシカ之ヲ用ヒルトキハ本術ノ目的  
 ヲ達スル甚タ容易ナルヲ覺ユ故ニ今茲ニ附記シテ識  
 者ノ批評ヲ乞ハント欲ス  
 此擲頭網ハ馬尾毛ヲ以テ稍長方形ノ網ヲ作り其兩端  
 ニ細キ絲ヲ貫通シ柄絲ト爲ス此網器ハ放約自在ニシ  
 テ消毒液中ニ貯フルモ變質スルコトナク又強力ニ逢  
 フモ斷切セス且ツ子宮内ニ於ケルモ其固有ノ彈力ハ  
 少シモ減損セラレサルカ故ニ操縦至テ便ナリ  
 用法ハ此網器ヲ術者ノ掌中ニ把藏シテ子宮内ニ挿入  
 シ、他手ハ腹壁上ヨリ子宮内ニ遊離セル兒頭ヲ固定介  
 補シ以テ網器ノ包括ニ便ナラシム、而シテ充分ニ包括  
 シタル後、腹壁上ノ手ハ轉シテ會陰外ノ柄絲ヲ把持シ

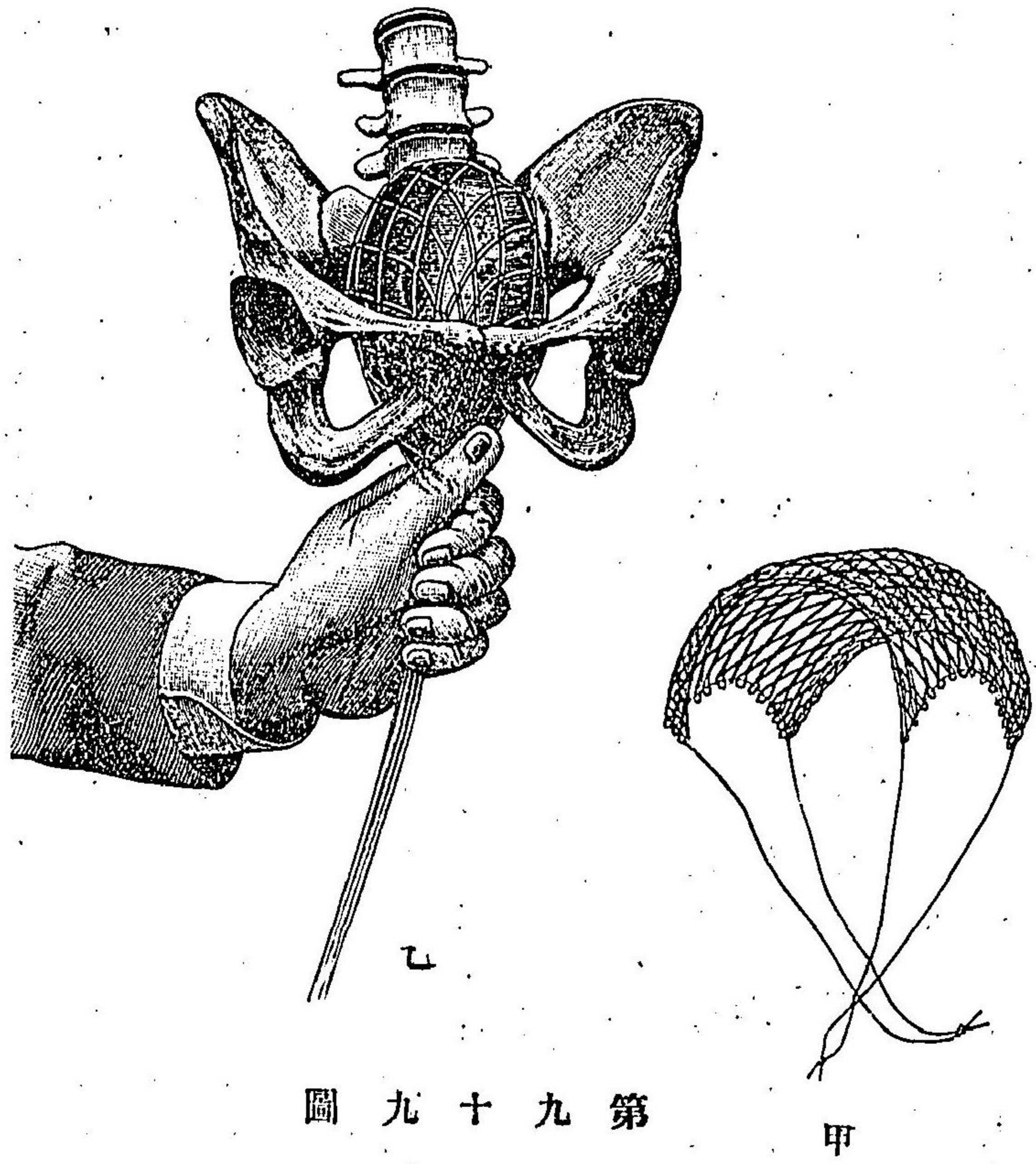


圖 九 十 九 第

網 頭 擲 氏 井 新



除臟術

少シク下方ニ牽引シ此時子宮内ノ手ハ兒頭ノ斷截口ヲ成ヘク產道ノ中軸ニ向ハシメ然ル後兩手ヲ以テ徐々ニ牽挽(第九十九圖(乙))スヘシ但シ離頭ヲ產道ノ中軸ニ向ハシムルハ其牽出ノ際產道軟部ノ損傷ヲ防クニアリ

遷延性横位ニ於テ斷頭術ヲ企行スルモ兒頸ニ達スルコト能ハサルトキハ除臟術若クハ截胎術ヲ代用セサルヘカラス

除臟術ヲ行フノ法ハ左ノ如シ即チ剪子狀穿顱術ヲ兒胸ニ穿刺シ以テ助骨間ニ二指ヲ通シ得ル程ノ孔ヲ穿テ而シテ之ヨリ胸腔ノ臟器ヲ除去シ亞テ横隔膜管ヲ穿テテ之ヨリ腹腔ノ臟器ヲ片々排除シ然ル後胎兒ヲ首體複合的ニ挽出スルカ或ハ自己產出ノ機轉ヲ模倣セシム

時宜ニ由リ爾後容易ニ臀位回轉術ヲ行ヒ股鉤ヲ以テ挽出

截胎術

シ得ルコトアリ

截胎術即チ胎兒軀幹ノ兩斷ヲ行フニハシルツ<sup>h</sup> Schulze 氏鎌狀刀或ハ強大ナルジール<sup>h</sup> Siebold 氏剪刀ヲ以テス而シテ兩軀幹半部ヲ挽出スルニハ銳鉤或ハ「クラニオクラスト」ヲ使用スルヲ以テ良法トス



產科手術學終

明治三十二年六月十九日印刷  
同年同月二十三日發行

正價金壹圓拾錢

版權所有

發行者兼  
譯者

東京市日本橋區濱町一丁目三番地

新井古芳

印刷者

東京市京橋區築地三丁目十五番地

野村宗十郎

印刷所

東京市京橋區築地二丁目十七番地

株式會社東京築地活版製造所

東京市神田區鍛冶町貳拾貳番地

發兌所 朝香屋書店

產科手術學與附



24R28

産科手術學奥附

肆 書 捌 賣

東京市日本橋區通三丁目	九善書店
同 本郷區湯嶋切通坂町	南江書堂
同 同 春木町三丁目	半田屋書店
同 同 湯嶋切通坂町	文祥堂
同 同 同	金原書店
同 同 龍岡町	吐鳳堂
同 同 春木町三丁目	南江堂支店
同 同 同	積運堂
大阪市心齋橋筋一丁目	松村九兵衛
同 同 北久寶寺町	丸善出張店
京都市寺町通二條下ル	若林茂一郎
長崎市引地町	安中集榮堂
名古屋市京町一丁目	野崎覺次郎
岡山市中ノ町	渡邊宗次郎
福岡市博多中嶋町	積善館支店



